Minakami, Takitarō (pseud.)
Minakami Takitarō zenshū



水上瀧太郎全集

六巻



昭和八年二月二十一日撮影

小說六・隨筆

目次

倫敦の宿

第一部　英京雜記

少佐の家

千九百十四年の秋柘植(つげ)は倫敦に着いた。

友だちの泊つてゐる家の主婦の世話で、ウエスト・ケンシントンの軍人の家に置いて貰ふ事になつた。最初紹介されて、室を見に行つた時は、四十を半分以上は確に越(こ)えた夫人が扉口に迎へて客間に通した。火の氣の無い、寒い椅子に差向ひで、言葉の不自由な爲めに、雙方共屢々手持無沙汰に惱んだ。脊も勝れて高く、充分肉附のいい夫人は、貴夫人らしい容體を持つてゐた。黑目勝のまあるい目と、かなり厚ぼつたい癖に、横幅の狹い爲めちひさく見える紅い唇が、どうかした拍子に娘らしい氣持を浮かばせた。異國の人と見れば必ず出る質問――例之(たとへば)、何の目的で此の國には來たのか、幾年位居るつもりか、如何(どう)いふ生活をする氣なのか、親は、兄弟は、姉妹は、友達は――夫人の極端な早口が、矢つぎばやに來て相手を困らせた。語學の才能の無い、口の重い柘植の英語も、夫人にとつては難解だつた。

「貴方のその亞米利加のアクセントが聽取りにくいのですね。」

のです。」

「亜米利加には二年ゐましたから爲方がないと思ひます。けれども私は貴方の早口に驚いてゐる

遠慮の無い柘植の返事に、夫人は上半身を搖つて笑つた。

二階の室は往來に向いた二間續で、壁紙や絨毯は汚なくよごれてゐたが、彼にとつては贅澤過ぎる位だつた。主人は陸軍工兵少佐で、田舍の兵營に行つてゐて留守だといふ事だつた。二十二、十九、十六の三人の娘と、十四になる男の子がゐるから、友達があつて賑やかでいい、語學の勉強をするならば上の娘が喜んで敎へるといふ夫人の話だつた。柘植は滿足して、その家に置いて貰ふ事にきめた。

三人の娘があるといふ事は、流石にあだには聞かなかつた。その娘達の美しい事を希望して、勝手な想像から、種々の場面を胸に描いた。

約束の日に、假の旅舍から、少佐の家に引越した。地下鐵道の停車場を出て、白楊の並木の下を、鞄を提げて歩いて行つた。同じやうな構造の古びた煉瓦造の家の並んでゐる一廓で、霜にうたれた落葉が、ぴつたり敷石にへばりついて、腐つて行く匂ひがあたりに漂つてゐた。

入口の呼鈴を押すと、夫人によく似た娘が出て來た。

「お待ちしてゐました。どうぞお入り下さい。」

と氣輕に口をきいて、いきなり柘植の手から鞄をとつた。

「こちらへ。」

導かれるままに二階に上つた。運送屋に托して出した大鞄は夙に來てゐた。此間はなかつた寢臺も、机も、本箱も備へてあつた。その机の上に、ちひさい鉢に植ゑた淡紅色のヘザアが咲いてゐた。

「今日はお母さんは留守ですが、外の者はみんな居ますから御用が濟んだら階下にいらつしやいまし。突當りの客間です。御存じでせう。」

早口迄も母親似の娘は、いひ殘して出て行つた。

黒い袴に、紫の毛絲の短衣を着て、ひつつめた髮を結つた頬邊の赤い娘は、柘植の期待を裏切つた。男のやうな口のきき方で、氣取氣の無い物ごしは氣持がよかつたが、密かに描いてゐた小說的想像の如何なる場面にもふさはしくないものであつた。柘植は自分の虫のよさに、人知れず苦笑した。

手廻りの物を整理してしまふと、折角降りて來いと云はれたのに、一人で寒い室に殘つてゐる

のも變だし、さうかと云つて、まだ知らない人間の集つてゐるところに、のこのこ入つて行くのも氣になつた。

暫時は躊躇したが、結局はおづおづ階段を下りて行つた。足音を聞いて、客間から顔を出したのは先刻の娘だつた。

一歩踏入つた時、室の中には暗い程豫期しない人數が居た。その人々の緊張した視線が、一時に自分の全身にそそがれた氣持で柘植は佇んだ。

「此の方は……」

娘はみんなに紹介するつもりで口を開いたが、彼の名前は知らなかつた。

「貴方のお名前は。」

「柘植。」

「柘植さんです。これは私の姉。これは私の妹。これは私の弟……」

順々に引合されて、雙方が固くなつて握手した。外には若い軍人と、一層若い美少年の客が居た。

煖爐には火が燃え、飲み荒された紅茶茶碗や、喰べかけた麪麭の切端がちらかつて、かへつて

家庭らしい景色だつた。長い間下宿住居ばかりしてゐた柘植には珍しかつた。
「さあ音樂は如何なつたのです。」
と今迄の話に戻つたらしく、軍人が姉娘を促した。
「でも私は駄目だわ。それよりも、此頃はジョオジのバンヂョオが大變進步したんですよ。」
「それでは合奏しよう。」
ひよろひよろ脊の高い、また半短袴の弟は、惡びれもしずに、傍の樂器を取つて膝にかかへた。
「何を合せるの。」
姉娘も別段拒まずに、洋琴の前に構へた。
「『今宵隊商は何處に宿る』がいゝ。」
「あゝ、あれはジョオジのおはこだわ。」
末の娘は弟をからかふやうに註釋した。直に二人は彈き始めた。それは、柘植が亞米利加にゐた時、素人下宿の娘がよく彈いた曲であつた。亞米利加から英吉利に、大西洋を横切る船の中で知合になつた娘も彈いた曲であつた。
次女は新しくお茶を入れて柘植にすすめた。

「貴方は音樂お好き。」

「えゝ、よくはわからないけれど大好きです。殊に此の曲は私には懐しい氣がします。」

彼はその話をしながら、つい一週間しかたたないうちに、全く違ふ世界に見出した自分自身を新鮮に感じた。

合奏が終ると一同拍手した。柘植も一緒になつて手をうつた。次女と末娘がかはるがはる洋琴を弾いた。美少年の客は娘達にしつつこくすすめられて歌をうたつた。往來で兵隊のうたふ軍歌だつた。

騒ぎ疲れて座が白けかゝつた頃、夕暮は霧と共に窓の外に迫つて來た。燈火(あかり)がつくと、軍人は歸ると云ひ出した。みんなと握手して客間を出て行つたが、姉娘だけが見送りに立つた。

暫時(しばらく)して又顔を出して、

「お母さんは今日はほんとに遅いの。」

と弟妹達の誰にともなく訊いた。

「遅いつて云つててよ。」

末の娘が一番先に答へた。

「さう、そんならね、私Aさんと一緒に行くわ。」
「何處に行くの。」
「何處だか知らないけれど。たぶん晩の御飯は濟んで來るわ。」
云ひ捨てて、姉娘は室の外に出た。外出の支度をしに行くのであらう、階段を驅上る音がして、やがて客間にゐる者の頭の上の二階に、微かな靴の音が聞えた。次女と若者は目を見合せて笑つた。
「吾々も活動寫眞にでも行かうかしら。僕はチャアリイ・チャプリンが好きなんだ。」
「ほんとに行く。私をつれて行かない。」
次女は自分の方から促して直に立上つた。
「けれどもねえ、今から出かけると晩めしは如何なるんだらう。僕はこれつきりお小遣が無いんだ。」
内懐(うちぶところ)から蟇口を出して、銀金具の口を割つて見せた。
「晩の御飯なんか喰べなくたつていいわ。それにお金なら、私のとこにもちつとはあつてよ。」
「よし、行かう。ララララララララ。」

若者は美しい顔にわざと變な皺を寄せて、此の頃しきりに人氣の出たチヤプリンの身ぶりで室の中を歩き廻つた。

入口の扉が音高くしまつたのは姉娘が軍人と一緒に出て行つたのであらう。次女も身支度をして來ると、若者と肩を並べて遊びに行つてしまつた。黒つぽい外套に、男のやうな釜形の飾りのない帽子を目深にかぶつた無雜作な風が面白かつた。

末の娘と弟は、ちらかしつぱなしにして出て行かれて、ぶつぶつこぼしながら茶道具を片附けてゐたが、やがて二人とも何處かに行つてしまつた。煖爐の側の長椅子に、柘植は一人殘された。彼は此の家の人々の姿を、回想してゐた。

しなやかな體つきの姉娘は綺麗に見えた。母親には何處も似てゐなかつた。病身らしい胸の薄いのが、立つても坐つても少し前屈(かが)みに見えた。近眼らしい、目ばたきの頻繁な、瞳の碧い目と、心持上齒の出過(すぎ)てゐるちひさい口元が、赤坊の面(おも)ざしを殘してゐた。他の弟妹達と違つて、物ごしの柔かいのが一番心をひいた。しかし、最初から距(へだて)なく口のきき易いのは次女だつた。母親を二廻り位ちひさくしたばかりで、肉附のいいまるまるした體格から、大きい目や、尖端のまあるい鼻や、厚ぼつたい癖にちひさく締つた紅い脣がそつくりだつた。ただ、ゆつたりと構へた母親

とは反對に、見榮も嬌姿も無い、男のやうな様子が、きびきびして氣持がよかつた。末の娘は脊の低い、出尻の、不格好な女だつた。膝つきりの袴の下からむき出しになつてゐる脚は、此の年齡頃の女性に特有の生理的變化が、近いうちにはどうしても袴の丈を長くさせなければ置かないといふやうに見えた。顏の生地も脂肪で汚れて、細かい面皰が吹出してゐた。そのかはり、會話の時の聲の美しさは珍しかつた。まるみのある笑聲は殊に可愛らしかつた。男の子は、まだ發育し切らないうぶな體で、しかも大人よりも脊が高いので、肩にも腰にも締りが無く、自分自身の頭を支へ兼てゐるやうにぐにやぐにやしてゐた。一番上の姉に似たところのある女性的の顏だちで、色白の頰邊に深い靨があつた。

　夜食の用意が出來たとジョオジが呼びに來た。壁一重隣が食堂だつた。何時もは母親の坐る場席を占めた末の娘は、薄汚ない女中の運ぶ肉汁をよそつたり、大きい燒肉の塊を薄く切つてとりわけながら、今宵の食卓の主人らしく振舞つた。日本人の珍しさは、その白眼勝の目にもありあり見えた。此の頃は小間使が居つかないで料理番ばかりだから、諸事不行屆で困るなどと、母親のいひさうな事も口にした。

「それはお母さんがやかまし過るからさ。」

と弟が相槌を打つた。

何處から連れて來たのか、老齢の爲めに毛艶のなくなつた茶色の犬を、自分の隣の椅子の上に坐らせて、目の前の皿の底に殘つた肉汁をなめさせたり、喰べかけの馬鈴薯を肉叉(フオオク)のまま口に入れてやつたり、その肉叉を洗ひもしずに、又自分の口に運んだりしながら喰べてゐた。時々鼻をすする癖が、頭腦(あたま)のよくない子供らしかつた。

「ジョオジ。」

娘は、弟が鼻をすする度に、怖い顏をしてとがめた。

「ヂャックはもう十二三年うちに居るのですが、此の頃は老いぼれて吠える事も出來なくなりました。」

と娘のいふ通り、老犬は目やにのたまつた目から涙をこぼしながら、氣力の無い居睡をして居た。

食後は又客間で、ジョオジはしきりにバンヂョオを彈き、娘は編物をしながら、もてなすつもりで柘植に話しかけた。上の姉の名はクリスティンで、次の姉はヂン――ヂンは蘇格蘭(スコツトランド)の名前で珍しい、自分はカザリン、弟はジョオジだが、父親もジョオジだから、うちでは弟の事を、單に

ボオイと呼んでゐるなどと云つた。

「先刻の人達は貴方がたのお友達？」

上の姉妹とその男達の親しさに輕い疑をかけて訊いてみた。

「若い方のはうちのお父さんの同僚の子で、先にはうちで預かつてゐたのです。今は保險會社に勤めてゐますけれど、もう直き兵隊になるつて云つてゐます。もう一人の人も、先から知つてる人です。」

銀針のぴかぴか光る手を止めて一寸ためらつたが、

「たぶん姉さんと結婚するんでせう――私の想像ですけれど。」

いひ足して目元と口元で笑つた。弟は、ふと此方に目をつかつたが、子供の關與してはならない話だと思つた風で、自分の方がどぎまぎして、又せはしなくバンヂョオを鳴らしつづけた。

姉娘が歸つて來た頃は、流石にジョオジも音樂に疲れて、椅子の背によつかゝつて居睡をしてゐた。

「ジョオジ、もうおやすみなさい。」

姉は外套も帽子も身につけたまゝで、弟を搖振り起した。

「何處に行つたの。」

「御飯を喰べて散歩しただけ。寒かつたわ。」

無關心らしく妹の問に答へながら煖爐の側に行つた。

「ヂンは？」

「ウイリイと一緒に活動に行つたの。」

「そんな事して又お母さんに叱られるに違ひ無いわ。」

姉は自分の事には頓着なく、妹の事を考へて眉をひそめた。

「さうすると今日はうちは三人きり？　如何でした御馳走はありましたか。」

柘植の方に話を向けて、空いてゐる椅子に掛けた。何から話を始めてい丶のか見當の付かない様子で、旅人の目に映る英吉利並に英吉利人は如何だとか、英米二國の比較をしてみろとか、存外知識的な質問をした。さうして、自分自身も長い間歐羅巴大陸を旅行してゐたと云つて、獨乙や佛蘭西の文化についても、多少批評がましい言葉さへもらした。

二年前に日本を出た時から、柄のちひさい爲めか、言葉の不自由の爲めか、何時も子供扱ばかりされ勝だつた柘植にとつて、初對面の其の日から、大人らしい話をしかけられた事は、すくな

からず嬉しかつた。兎角通じ兼る拙劣な會話を氣にしながらも、それからそれと話してゐた。

次女の歸つて來たのは大分遲かつた。

「お母さんは？　まだ？」

入つて來ると直ぐ心配さうに訊いて、まだだと確めると胸を撫で下して見せた。

「活動は面白かつたの。」

「面白いつていへば面白かつたし、つまらないつていへばつまらなかつたわ。ただ私は戸外に出るのが好きなんだわねえ。」

「さうねえ。うちはほんとに氣がくさくさするんですもの。」

上の姉妹は暫時の間、家庭のつまらなさと、母親に對する不平をこぼし合つてゐた。

「ああ、お腹が空いた。」

次女は突然大きな聲を出してみんなを笑はせた。

「御飯は？」

「喰べやしないわ。ウイリイも私も懷が寒いのに、一等席に入つちやつたでしよ。あとは愈々心細くなつちやつて、お茶を一杯飲んだきりだわ。」

さういひながら室の外に出て行つたが、間も無く麪麭のかたまりに牛酪(バタ)をなすりつけたのを持つて來て、細かい粉をぼろぼろ胸にこぼしながら嚙つてゐた。

「ジョオジ、おやすみなさい。」

姉は又居睡をしてゐる弟を呼起して促した。

「では私達も寢ませう。貴方は未だ起きてゐらつしやるの。」

「私は宵張りなんです。これから故鄕の親に手紙でも書きませう。」

「それではおやすみ。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

居睡に疲れて體の自由を失つた弟を取圍んで、やがて姉妹は二階の寢室に上つて行つた。

煖爐の火はまだ燃えてゐた。柘植は一人其處に殘つて手紙を書いてゐた。宿所の變つた事を先づ知らせなければならなかつた。

此の度は陸軍少佐の家にて、主人は兵營に起居して留守に候得共、夫人も三人の娘も、一人の男の子も、みなよき人にて親切に致しくれ候……

お前は人好きが惡いから、西洋に行つたら殊に氣をつけなくてはいけないと、繰返して心配してゐた母を安心させる爲めに、彼は何時でも、外國人の親切な事を書く事にきめてゐた。紐育にゐた時、宿の主婦は猶太人だつたが、日本譯の沙翁全集を愛讀してゐた母は、シャイロックから想ひ浮べて、心配して來た事があつた。今度は軍人の家庭だから、父も母も滿足するに違ひ無いと考へた。

乍然(しかしながら)室も二間つゞきにて、小子には分に過(すぎ)るやう被思(おもはれ)、宿料もこれ迄よりは高く候間、月々銀行より受取る金子も多少は嵩む事と被存候(ぞんぜられ)……

機會さへあれば小遣の足り無い事を兩親に知らせようとするさもしい心持を、彼はぬけ目なく手紙の文句に入れた。

玄關の扉の開く氣配がしたと思ふと、厚ぼつたい毛皮の外套に着ぶくれ、眞黑な獸の皮の襟巻に顏を埋め、同じ手套に兩手を差入れた夫人が、流行のつば廣の帽子を斜にかぶつたまま室內に入つて來た。何處から見ても立派な貴夫人だつた。

「おや、貴方お一人。」

驚いた表情をしたが、つかつか進んで手を差延した。禮儀正しい挨拶をした後で、自分が留守

にした事を詫び、留守中不行屆が多かつたらうと氣づかつて、
「此の頃は將校夫人會の役員として、毎日毎日戸別訪問をして歩くのです。夫のある者は夫を、子供のある者は子供を、國家の爲めに戰場に送らなければならないのですから……」
主として家庭の主婦を說いて、あらゆる壯年の男子を兵隊にしようとする運動だと云ふ事だつた。步き疲れた樣子で、充血した眼に淚を浮べて、暫時の間椅子の背に倚りかかつてゐた。
「あああ、すつかり疲れてしまつた。」
と著しい努力で立上つて、
「少し頭痛がするやうです。明日ゆつくりお目にかかりますから――おやすみなさい。」
云ひ殘して、疲れた足を引擦つて出て行つた。
家中の者が寢靜まつた後で、柘植も二階の自分の室に退いた。玻璃戸の外は一面の濃い霧で、果て知らずむらむらと動めいてゐる氣配が、まだよく知らない世界の大都に對する不安を一層深くした。
彼は賴り無い心持で、冷い寢床にもぐり込んだが、頭に馴染の無い枕が氣になつて、なかなか眠る事が出來なかつた。

翌日

朝は早くから、娘達は客間と食堂の掃除をした。姉は水色、次女は紫、末娘は眞紅の毛糸の短衣を着て、なりふりも構はずに雜巾で拭いて廻つた。椅子の脚の金具を磨粉で磨く時は、床の上に膝をついて、まるまると肥つたお尻の形をあからさまに、精を出してゐた。夫人は短衣のかくしに兩手をつつ込んだ儘、客間の眞中に立つて、口やかましく小言を云つてゐた。

「デン、そんな拭方つてありますか。キテイ、もつと磨粉をどつさりつけて、指の尖に力を入れて。」

早調子の甲高い聲が、壁に響いて聞えてゐた。

柘植が階下に下りて行くと、

「お早う。」

「お早う。どうぞ食堂の方に居て下さい。こちらは掃除ですから。新聞もあちらにあります。」

夫人は一寸振かへつたばかりで、又娘達に小言を云ふのであつた。

「早くしないといけませんよ。柘植さんも起きて來たし、ボオイの學校の時間にも間が無いんだ

から。」

娘達は一齊に顏をあからめて栢植に會釋したが、叉せつせと働いた。

食堂には火が燃えて、その火の前に老犬がうつつなく寢そべつてゐた。窓の外には今日も亦陰鬱な霧が大都の空を押包んでゐた。

食卓の上の新聞を開いても、聯合軍には不利な戰報ばかり出てゐる時であつた。一時は巴里に迫つた獨軍も、マルヌの激戰に大敗して退いたが、直に叉西部白耳義海岸地帶に攻勢を取つて、英軍は始終壓迫されてゐた。今日も亦、賴みに思ふ東部の露軍が、折角占領したガリシヤ、ブコヴイナを敗退した記事が地圖入りで出てゐた。

夫人を先に、娘達も掃除を終つて食卓についた。地下室から女中の運んで來た燕麥羹（オオトミル）がむらむら湯氣を立昇らせた。

「ボオイはまだ起きないの。誰か呼んでらつしやい。」

機嫌の惡い母親の顏を、輕蔑した横目で見ながら次女が立上つた。

「ボオイ、早く起きないと學校に遲れます。」

母親の聲を眞似して、廊下の階段の下あたりで、二階の弟をたしなめる聲が聞えた。

男の子が、睡さうなはれぼつたい顏を袖でこすりながら、ひよろ長い姿を現はした時は、旣にみんなは食事を始めてゐた。話は戰爭に外ならなかつた。

「貴方はどつちが勝と思ひます。勿論聯合國側とは思ひますけれど。」

夫人は柘植の英語を試みる樣子で、しきりに話かけた。

「それは左樣です。しかし軍事上の意味で敵を打破るといふ事は不可能ではないかと思ひます。私一個の意見ですけれど。」

「そんな事はありません。絕對に。」

夫人はおそろしく機嫌を惡くした。子供をたしなめるのと同じ調子だつた。

「來年の春迄にはキツチナア元帥の大軍が編成されて、占領された土地を取返し、東部の露西亞と挾擊して、伯林迄も進擊するに違ひないのです。」

自分達將校夫人會の會員達が、今せつせと壯丁を勸誘して軍隊に入れようと努力してゐるのもその目的の爲めである。遲くとも明年の耶蘇降誕祭迄には、獨乙皇帝はセント・ヘレナ島に配流の身になるに違ひ無いと、確信を以て斷言した。

「私の夫もさう云つてゐました。御存じでせう、夫は陸軍少佐です。」

夫人は正面から說服したつもりで昂然とした。

食事が濟むと男の子は學校に行つた。夫人も他所行の衣服に着換へて、將校夫人會の本部に出かけた。三人の姉妹は、煖爐の側に椅子を並べて、一齊に編物を始めた。

柘植は二階の自分の室の整理をした。荷物といつても、少しばかりの衣類の外は本ばかりだつた。亞米利加をたつ時に、それ迄に買集めた本は、殆んど悉皆日本へ送つてしまつたが、倫敦に來てからの僅かばかりの間にも、部厚な本の數は直に殖えた。大きな、頑丈一方の古い書棚に、一册々々並べる事が、年中紙虫のやうな生活をしてゐる彼にとつては、何にも增して愛着があつた。買つたばかりで、まだ挿繪も見ないトルストイ全集の二十四册並んだ背皮の金文字が、殊に心を躍らせた。暫時の間、彼は書棚の前の椅子にかけて、ぼんやり烟草をふかしてゐた。

午後、銀行に金を受取りに行つたついでに、その近くの服屋に此間あつらへた着物の假縫の爲めに寄つた。店頭に二人の日本人がゐて、主人と話をしてゐた。主人は柘植を見ると、直に二人を紹介した。山高帽子をかぶつて、無理に肩肱を張つてゐる姿から想像した通り、役人と軍人だつた。

「恰度いいところでした。只今此の方々を御案內して裁判所を御目にかけようと思つてゐたので

す。御忙しくなかつたら、おつきあひになつては如何です。」

猶太人の主人は、日本の商人に似たわざとらしい追従笑を浮べて、揉手をしながらいふのだつた。

「如何です、御一緒に御出でになりませんか。」

日本人も勸めるので、柘植も好奇心に誘はれてついて行く事に同意した。

塵埃の多い往來を、服屋の主人は、椋鳥扱にして、自動車や馬車の來る度に注意の聲をかけながら先に立つて歩いた。二人の人は、戰爭の爲めに獨乙から逃げて來たのだつた。事毎に獨乙を讃美して、伯林の賣笑婦の思ひ出迄も話して聞かせた。

眞黒に煤びた石造の大きな建築物の石段を上つて、暗い內部に入つて行つた。服屋の主人は看守に何か訊いてゐたが、

「今日はダグラス卿の公判ださうです。」

といひながら、廣い梯子段を二階に導いた。ダグラス卿といふのは誰の事なのかわからなかつたが、間も無く法廷の傍聽席の中に入つた時、其の場の景色よりも先に耳に入つたのは、オスカア・ワイルドの名前だつた。柘植は自分の耳を疑ふ程驚いた。

芝居で見る通り、赤羅紗の正服を着て、白髮の鬘をかぶつた法官を正面にして、被告席に佇立してゐるのが、曾てワイルドと惡名をうたはれたアルフレツド・ダグラス卿だつた。まだ讀みはしなかつたが、つい二三日前に買つた「オスカア・ワイルドと自分」の著者を、柘植は目のあたりに見たのである。その本の口繪にあるやうな、美少年ではなく、既に白髮まじりの年配で、酒落者らしい綺麗に剃つた顔や、注意の屆いた衣服の着こなしは目立つたが、鼻の尖端の少し上を向いた容貌が、全く意外だつた。

何にしても、一昔近い以前に愛讀したワイルドと、親し過ぎる程親しかつた人間を、しかもそのワイルドにも關係のある事件の裁判所で見るといふのは、現實の事とは思へなかつた。

原告か、證人か、ダグラスに反對してしきりに何か申立ててゐるのは、ワイルド全集の出版者、ロバアト・ロスに違ひ無かつた。まるまる肥つた禿頭が、法廷に對する一種の脅怖に、聲は少しく震へを帶びてゐた。オスカア・ワイルドといふ名前を、最初に聞いたのは、即ち彼の口からであつた。

事件は、罪を得てワイルドが獄屋の中で書いたといはれる「De Profundis」のダグラスに關する條を種にして、ロスが脅嚇をたくましくしたと被告が誹謗したものらしかつた。ロスは、沈着

を失つた態度で、しきりに身の潔白を陳述した。

ワイルドが牢獄を出ると直に、「De Profundis」の原稿は彼に手渡しされたものである。其後ワイルドが、ナポリにゐる時も、巴里にゐる時も、彼は常に往來し、一千九百年の秋、巴里の旅舍にワイルドが死んだ時も、彼は其の枕頭に在つた。而してその後、ワイルドの二人の遺兒の爲めに、その著作出版に盡したのである。

繰返し繰返し、ロスは自分の儲け仕事ではなかつた事を說いた。その間相手のダグラスは、箱のやうな被告席の枠に頰杖をついて、退屈さうにうそぶいてゐた。

裁判官は、ロスの陳述の終るのを待つて口を切つた。ダグラスがロスに對して送つた手紙の中に、鞭を以てなぐるといふ一言のあつた事に關係して、そんな暴行にあつたかどうかを訊いた。

「貴下は實際に、鞭打たれた事がありますか。」

「いゝえ、只今迄のところでは、幸に無事でした。」

ロスは震へた聲ながら、諧謔を弄ぶ餘裕を以て言下に答へた。傍聽人の笑聲が、四方の壁に波を打つて響き渡つた。

「出ませうか。英吉利の裁判所も、まあこれで見物したわけです。」

役人は何の興味もなささうに促し立てた。もともとその人々が主で、栢植は偶然ついて來る事になつたのであつたから、さもつまらなさうな樣子を見ると、強ゐて反對する事も出來ないで、彼も法廷の外の廊下に出た。

「一體何の事件なんでせう。」

と役人と軍人は、皆目見當が付かなかつたらしい樣子で首を傾けてゐた。

「オスカア・ワイルドの著作出版權についての爭が原因らしく思はれますね。」

「オスカア・ワイルドつていふのは何ですか。」

軍人は栢植の言葉を遮つて訊いた。

「文士です。」

栢植は相手を侮蔑する心持を、かくす事が出來なかつた。オスカア・ワイルドを知らない人間に對して、何かしら憤懣の念に堪へないやうな昂奮した心持だつた。

戸外に出ると、一時は薄靑い空もところどころに見えてゐたのが、又しても黃色く濁つた霧になつて、濕つぽい風が敷石の上を甞ふやうに流れて來た。

「どうです、これから珈琲店にでも行つて別嬪を冷かさうぢやありませんか。」

役人は町角で立止つて、寒さうに外套の襟を立てながら云つた。服屋の主人にも、一杯飲ませるから一緒に來いと勸めた。

「難有う。難有う御座いますが、私は店に用事が殘つてゐますから、此處で失禮させて頂きませう。では皆さん左樣なら。」

老人は輕く帽子を取つて、愛嬌笑を振まいて別れて行つた。直に車馬の往來のはげしい中に、づんぐり肥つた後姿は見えなくなつてしまつた。

「失禮ですが、私も今日は先約がありますから……」

出たらめな口實を設けて、柘植も其場で別れる事にした。物わかりの惡さうな、且つ助平らしい同胞と、賣女の出入する珈琲店に行く事は羞しかつた。あらゆる點から、その人々に對して親しみを持つ事は出來なかつた。

「それは殘念ですなあ。」

二人とも一通りは引留めたが、柘植は先約のある事を繰返して斷つた。

「では何れ又御目にかかりませう。」

「左樣なら。」

「左様なら。」

挨拶をすると直に、彼はその人々と反對の横町に曲つた。

霧の密度は次第に濃くなつて、今にも雨になりさうな模樣に見えた。並木の木の葉の、落ちて腐つた匂ひのする、寂しい町を歩いてゐた。大輪の向日葵の花を胸にかざして、倫敦市中を氣取つて歩いてゐたワイルドの姿を想像しながら、數奇な短い生涯を終つた天才の一生をしきりに考へた。

家に歸つたのは夕方だつた。日の暮の早い上に、霧に包まれてゐるので、夙(とつ)くにあかりがついてゐた。

「どちらに行つていらつしやつたの。」

客間に入つて行くと、姉娘が直に訊いた。午後のお茶の後で、家中の者が其處に集つてゐた。

「今日は裁判所を見て來ました。」

「裁判所？　面白い事件でもありましたか。」

他所(よそ)行のまゝで、まだ帽子も取らずに、疲れた風で椅子の背に全身を投げかけるやうにぐつたり掛けてゐた夫人が訊いた。

「ダグラス卿の誹謗事件でした。」
「ダグラス卿？　アルフレッド・ダグラスですか。」
夫人は吃驚（びつくり）した風で、狼狽（あわただ）しく身を起した。
「えゝ左様です。オスカア・ワイルドの著作出版者との爭ひでせう。」
栢植は、自分自身に興味の深い事件を見た昂奮狀態から、一座の人達も同じ興味を持つかのやうな心持さへした。
「ダグラスはうちのお母さんの從兄なんです。」
次女は、さういふ身分の高い人間を母の親類に持つのが、多少は誇らしいやうな心持もあるらしく横から口を出した。
「恥です。幾度裁判所に引張り出されるんだらう。」
夫人は顏面の筋肉を震はせて、次女の方を睨みながら、唾棄するやうにつぶやいた。一座は息をひそめて、お互に、めいめいの顏を盜み見て白けかへつた。
「ほんとに恥です。あの人のお母さんのクインスベリイ侯爵夫人は、隨分偉い人だつたけれど、息子の爲めには年中苦勞して、後々迄もおもひにして死んでしまつたぢやないの。」

憤りに堪へないやうに、舌の乾いた様子でつぶやきながら夫人は嘆息した。大きな目にいつぱい涙をためてゐた。

晩餐の食卓についても、柘植は手持無沙汰に悩まされた。ダグラス卿の裁判を目撃した事も意外だつたが、そのダグラスと此の家の夫人が従兄妹同志だつたのは一層意外だつた。うつかり知らずに口にしたその事の爲めに、夫人の機嫌は悪くなつたやうに思はれて、居たたまれない氣持をしつゞけながら、やうやく食事を終つた。

食後は客間で珈琲を飲む事になつてゐて、娘達は食卓を片附けると直に、その支度に忙しかつた。

「あゝあ、私は又M夫人のところに行かなければならないのか。」

疲れ切つた様子で夫人は欠伸をしながら立上つた。

「では、みんな早く寝るんですよ。寝る前にはすつかり燈火(あかり)を消してね。」

いひ捨てて、力の入らない足取りで出て行つた。玄關の扉のしまる音がすると、姉弟は俄に元氣付いてはしやぎ出した。

「そんなにくたびれてるのなら行かなければいゝのに。M夫人のところなら又賭事(かけごと)に違ひ無いわ。

馬鹿らしい。」

次女は母親の出て行つた戸口の方に向つて、罵つた。

「栢植さん。ダグラスの裁判はどんなでしたの。又何か悪い事をしたのですか。」

姉は、隣室に母親でもゐるやうに、あたりを憚る聲で訊き出した。近眼の、まばたきの度數の人一倍頻繁なのが、青い瞳を好奇心に輝かしてゐた。栢植は晝間見た法廷の光景を、拙劣な言葉に難澁しながら、ぽつりぽつり話した。

一方では弟が、今日も亦バンヂョオを持出して、自分自身聞き惚れながら、休みなく彈き續けた。

「ジョオジ、お休みなさい。又明日學校に遲れてよ。」

珈琲が濟んで一時間位たつと、姉達は弟に寢床に行けと促し始めた。さうして八時半頃になると、みんな二階に上つて行つてしまつた。

「何卒寢る前に燈火を消して行つて下さい。お母さんがやかましいのですから。」

姉は最後にいひ殘して行つた。

火の氣の無い自分の室に引込むよりも、暖い客間の方がいゝと思つて、栢植は二階から本を持

つて來て、煖爐の前で讀み始めた。ダグラスの新著「オヽカア・ワイルドと自分」と題するものであつた。紙小刀で一頁々々切る新しい本の匂ひが、堪らなくよかつた。別段面白い本ではなかつたが、何時迄も好奇心に力強く引張られて行つた。宵張りの彼は、ちつとも睡くならなかつた。夜更けて霧は雨になつた。裏庭の木立に降る靜な音が、わびしく聞えて來た。

夫人の歸つて來たのは遲かつた。扉のあく音に續いて、廊下を歩いて來る小刻の靴の音が聞えたと思ふと、とげとげしい聲が室の外でつぶやいた。

「えヽ、又燈火を消すのを忘れたんだよ。爲方が無いつたらありやあしない。」

同時に荒々しく室内に入つて來た。

「おや、栢植さん、貴方まだ起きてゐたんですか。こんな夜更けまで。」

雨に降られて、毛皮の外套から雫をたらし、寒さうに唇を震はしてゐる夫人は、血走つた險しい目付で彼を見た。

「もともと宵張りなんですが、讀みかけた本が面白くて、手放せなくなつてしまつたのです。」

「ですけれど、一體何時頃だと思つてらつしやるの。」

あく迄もとがめるやうな相手の語氣に、栢植は自然と懷中の時計を引出して見た。何時の間に

か、一時を少し廻つてゐた。
「おやおや、こんなにならうとは思ひませんでした。」
彼は苦笑して本を閉ぢた。
「いゝ加減におやすみなさい。身體の爲めによくありませんよ。」
不機嫌にいひ捨てて室の外に出て行つたが、直に又引かへして來て、
「それから寢る前には忘れないで燈火を消して下さい。」
と荒々しくいひ足して、どういふつもりなのか廊下で大きな吐息を聞かせた。
柘植は輕く舌うちして、燈火を消して寢床に行つた。夫人の言葉のひとつひとつが、自分をたしなめる爲めのものだつたやうに考へられて、甚しく不愉快だつた。

オスカア・ワイルドと鍵

翌日も夫人の不機嫌はなほらなかつた。終日歩き廻つた肉體の疲勞の上に、夜更しをして勝負を爭つた根氣疲れが加つて、顔面筋肉はぴくぴくひきつつてゐた。
「お母さんは又骨牌(かるた)に負けてお金をとられたのよ。」

「ええ屹度さうよ。だもんだから私達に八當りしてるんだわ。」
姉妹は事毎に口喧しく叱られる不平を、小聲でつぶやき合ひながら、室の掃除をした。苛々してゐる夫人と、その夫人を憚かる人々の心持から、家中の空氣が重苦しかつた。
誰一人滿足には口もきかない食事の後で、夫人は柘植を呼止めて、他の者の居ない客間に連れて行つた。まだ火の氣の無い煖爐の側の椅子にぐつたり腰掛けて、頭痛に惱む人のやうに、額に手を當てて嘆息した。
「柘植さん。何卒氣にかけないで下さい。私はかくさずに、思つたまゝをいひますから。」
暫時して、夫人は姿勢を正して、威儀を示すやうな、多少高壓的な調子で口を切つた。
「此の頃は女中が居ないものですから、實は今、私が自分で貴方の室の掃除に行つたのです。机の上に本が一冊ありました。あゝいふ本は此の家の內では讀まないやうにして頂き度いのです。」
「本とは『オスカア・ワイルドと自分』の事ですか。」
柘植は意外な話に驚いて反問した。
「左樣です。あれは、尊敬すべき家庭で讀む事を許される本では無いのです。」
夫人はきつぱりと云ひ放つたが、自分自身の心持から昂奮して、唇を震はせた。

「貴方は外國人だから御存じ無いのでせう。けれども、英吉利では、紳士淑女の目に觸れる可きものではありません。」

「何故でせう。つまりオスカア・ワイルドの事が書いてあるからですか。私は、ワイルドは、近代英吉利の生んだ最もほこるべき僅少な作家の一人だと思つてゐるのです。」

栢植の持つてゐる自信と、高飛車に出られると必ず湧いて來る反抗心が、相手のいふ意味はわかつてゐながらも、のめのめ沈默を守る事は許さなかつた。

「何故ですつて。私は其の理由を口にする事さへ恥ぢます。」

まんまるい夫人の目は憤りの涙に光つて來た。

「たとへば、生前ワイルドの行爲に道德上非難すべき事があつたとしても、彼は夙に死んでしまつたのではありませんか。しかもその死後に近代英文學のほこりとなる不朽の作品を殘してゐるのです。許してやつてもいゝと思ひます。少なくとも、その作品を稱讚する事は差支へない筈です。」

何時の間にか彼の熱情は、自ら聲を高めて來た。

「わかりました。」

夫人は強く相手の言葉を受けて、
「貴方は此の國の事を知らないのです。私は昨日貴方が從兄のダグラスの裁判を傍聽して來たと云つた時に、直にその話を止めようと思つたのです。けれども子供達がゐたので、わざとその儘にして置いたのでした。兎に角、私は此の家の主婦として、ワイルドの本や、ワイルドにかゝはる本は、一切此の家の内で讀む事を禁じます。斷じて禁じます。」
蒼くなつて、甲高い聲の抑揚を失ふ程息ぜはしくたゝみかけた。
心の制御を完全に忘れてしまつた相手に對して、栢植は寧ろおちつきを取返した。ふふんと鼻のさきで笑つてやり度いやうな氣持だつた。けれども矢張り不愉快には違ひなかつた。何かしら事態の切迫した、息の詰まるやうな、その癖所在ない數分間を、二人は睨み合つたまゝ、甚だ長い時間の如く感じてゐた。
ふと扉をあけて、末の娘が入つて來た。
「お母さん、女中がお目見榮に來ましたよ。新聞の廣告を見たのですつて。」
「待たして置いて頂戴。直に行つて逢ふから。」
目のやり場にさへ困つてゐた場合だつたが、誰彼を選ばずに叱りつけ度い氣分から、娘に答へ

く末娘の後姿が消えると、夫人は改めて舌打ちした。

「柘植さん。私の云つた事はよくおわかりでせうね。決して貴方をとがめるのではありませんよ。まだ此の國の事を御存じないから無理は無いのです。何卒氣にしないで下さい。」

云ひながら大儀さうに身を起すと、そのまゝさつさと廊下に出て行つてしまつた。

「馬鹿にしてやがら。」

おもはず知らず故郷の言葉を吐出すやうに口にして、柘植は密かに苦笑した。額に不愉快な皺を刻んで、彼は二階の自分の室に引上げた。

机の上の問題の本を手に取つたが、別段讀みつゞける氣にはならなかつた。その本が引起したいざこざの方が、心に殘つてゐた。如何にも英吉利人らしい、世間的な考へで、しかもそれには世間的である爲めの淺薄よりも、そんな反省をも持たない自負心の強い國民性に根ざす頑固の強味が、最も色濃く滲み出てゐるのであつた。女性に特有の、冷靜には人と言葉を交はす事の出來ない弱さもあるにはあつた。さう考へて來ると、柘植は自分の方が、遥に優者の地位にゐる事を感じて、相手を憐れむ心持にもなつて來た。社會的に劃一された道德と禮儀を持つ英吉利の中流

階級の母親として、無理の無いいひ分だとも思はれる。言葉の不自由な爲めに、相手をいくらか買かぶるので癪にも障るのだが、日本の事にして見れば、あんな母親はとるに足りないものなのだと考へて、彼は心にゆとりが出來ると、たつた今經過した場面を想ひ出して微笑さへ浮んで來た。

晝の食事の時には、夫人は努めて愛想よく話しかけた。朝の出來事をとりなす爲めの心づかひが氣の毒な位だつた。柘植も、無理にも笑顔を見せなければ濟まない氣持で、實は面白くもない世間話の相槌を打つた。

けれども、午後になつて、彼は又しても意外な事に出あはなければならなかつた。

その日は郊外に廣い邸宅を構へてゐる先輩のところに、同窓の友達四五人と一緒によばれてゐたので、雨の上つた夕方から、柘植は外出する事になつてゐた。どうせ夜は遲くなるだらうと思つて、まだ此の家に來てから受取らなかつた玄關の鍵を請求した。

「鍵ですつて。何處の鍵です。」

夫人は合點の行かない顏附で問ひかへした。

「入口の鍵です。どうしても今晩は歸りが遲くなるに違ひないと思ふのです。」

止宿人には必ず鍵を與へる下宿屋の習慣から、當然の事として繰かへした。
「失禮ですが、それは必要がないと思ひます。」
夫人は面白くない樣子で、すげなく答へた。
「遲くなつても私が起きてゐてあけてあげます。」
「けれども時間が全くわからないのですから。」
「構ひません。何時でも。」
言下にそれを打消して、夫人は首を横に振つた。
又してもふふんと笑ふ外に、柘植は面目を立てる事を知らなかつた。
「ではよろしく。行つて來ます。」
何の爲めに、鍵を呉れないのかわからなかつたが、何しろ要求した事を拒まれたのは不愉快だつた。おもはずしらず荒々しく扉をあけ立てして、彼は暮れ初めた往來に出た。
郊外に住む先輩といふのは、二十餘年倫敦にゐる實業家で、凡そ此の國に來る日本人のすべて、役人も、軍人も、商人も、學者も、書生も必ず世話になる紳士であつた。その年齡の人に似ず、自由な心を持つて、廣く知識を求める性來の欲求から、殊に書生を可愛がつた。平生極めて繁忙

な地位にゐるにも拘らず、旺んな讀書力で、政治經濟文學美術——あらゆる方面の新しい研究を忘れなかつた。

恰度その頃、獨乙佛蘭西から戰爭に追はれて來た學生が、時折その家に集つては、互の研究を發表しあふ事になつてゐた。亞米利加から來た栢植も、誘はれて仲間に入る事になつたのだつた。

その晩も、學校時代から親しい友達や、特別の交際はなかつたにしてもお互に見知合ひの連中で、經濟學史專攻の和泉、社會學の岡村、教育學の長野などが集つて、食後は美術史の高樹が希臘藝術に關する講話をした。それについての質問、質問に對する說明——それからそれと話題が變つて、しまひには何時もの通り雜談に移つて行つた。

「時に君の新居は如何だい。」

と栢植にきいたのは和泉だつた。

「どうと云つて、兎に角驚いたよ。僕は元來家庭つてものが嫌ひなんだが、英吉利の家庭は就中厄介なものぢやあないかしら。オスカア・ワイルドはいけない、鍵はくれないつていふんだからね。」

待ちかまへてゐた不平のはけ口を見付けたやうに、栢植は自分でも氣になる程滑かに、事の始

末を物語つた。
「そいつは非道いな。僕なら直に出てしまふ。」
他人事ではないやうな語氣で高樹が云つた。
「けれども三人も娘がゐては出られまい。」
先輩の諧謔にみんな笑ひ出したが、誰も彼も少佐夫人の振舞を面憎く思つて、しきりに柘植に強硬の態度を取るやうに勸めた。
「だが、それはいゝ家庭だからやかましいので、外の連中のゐるやうな下宿馴れた家とは違ふのかもしれない。」
「それにしても僕ならいやだ。」
先輩はおだやかに云つたけれど、高樹はあく迄も唾棄する調子だつた。
夜が更けて、散會して、めいめい別れ別れになつてからも、柘植はこれから歸つてゆく家の事ばかり考へてゐた。珍しく星の出た寒空の下を、人通りもなくなつた時刻を氣にしながら、彼が自分の住む町に着いたのは、既に十二時を過ぎてゐた。敷石を踏む靴の踵の堅い音が、恥しい程冴えて響いた。

家の中は眞暗で、一條の燈光も洩れては來なかつた。暫時は躊躇したけれど、思ひ切つて呼鈴を押した。海の底に沈んで行くやうな、妙に鈍い反響が遠く聞えた。なかなか人が出て來て呉れない。二度三度、心細いやうな、苛々した心持で呼鈴を鳴らした。それでも應じる者が無い。柘植は、自分の息の凍るやうな夜の空を仰いで途方にくれた。

もう一度押して見ようと、これを最後に呼鈴に指頭を觸れた時、目の前の玄關の扉が靜にあけられた。

「濟みません。大變遲くなつてしまひまして。」

屹度夫人に違ひ無いと思つて、叮嚀に帽子さへとつて云つた。

「誰です、お前さんは。」

おもひもかけない突けんどんな聲が、多少震へを帶びて、扉の隙間から詰つた。

「僕です。――柘植です。」

「誰ですつて。」

「君こそ誰です。」

柘植は一瞬間、自分の意識を疑つた。確に自分の止宿してゐる家に違ひ無いのだが、若しかす

ると、隣の家と間違へたかしら——そんな疑念も胸を打つた。
「私は此處の家の召使ですが、お前さんは一體誰なんです。」
太い女の聲は疳癪を起してゐるやうな調子だつた。
「僕は此の家の二階にゐる日本人なんだが……」
柘植は當惑して、周圍の夜の景色を見廻した。すべてが見覺えのある景色だつた。
「ちえつ、どうしたんだ、こいつは。」
彼はさうつぶやきながら、肱にかけた杖を振上げて、足下の石段をなぐりつけた。
「メリイ、どうかしたの。何を云つてるの。」
不意に暗い二階から、聞覺えのある夫人の聲がした。
「柘植さんぢやないの。」
いひながら階段を下りて來た。
「あゝ矢張り柘植さんだつた。御免なさい。メリイは今日來たばかりなものですから、貴方を知らなかつたのです。——いゝよ、此の方はうちにゐる方なんだから。」
新參の女中は、それでもまだうさん臭さうに、柘植をぢろぢろ見ながら、地下室の女中部屋に

下りて行つた。

「どうも御氣の毒さま。」

「いゝえ私こそ遲くなつて濟みません。」

夫人の態度がものやはらかなので、柘植も自分の遲かつた事を詫びるばかりだつた。

「おやすみなさい。」

「おやすみ。」

寢靜まつた家の内に氣兼してか、夫人は口數も少なく、直に先に立つて、寢衣の上に羽織つたガウンの裾を引擦りながら二階に上つた。柘植もその後について、自分の室に入つた。と思ふと、壁一重隣の夫人の室から、あたりを憚らぬ聞えよがしの欠伸が聞えた。

次の日の朝、柘植は昨夜の女中を見た。年配の見當のつかない、醜い田舍者だつた。今朝は夫人も上機嫌で、その女中と柘植の前夜の問答を、子供達に話して、みんなと一緒に腹を抱へて笑つた。女中も澁い顏の相好を崩して笑つた。柘植も苦笑した。

彼はその日から日課として、大英博物館附屬の圖書館に通ふ事にきめてゐたが、それにしても外出勝になれば、愈々鍵が欲しかつた。その必要を說いて夫人に請求した。

「それは不必要です。」

晴々した顔附で、自分が先立で、客間から續く溫室の鉢物の埃を拂つてゐたのが、忽ち機嫌を惡くして拒んだ。

「ですが、それがないと、又昨夜のやうな事になりますから……」

「早く歸つていらつしやればいゝのです。」

夫人は威壓する態度で彼の言ひ分を中斷した。柘植は額に疳癪のうづくのを感じながら、何時迄も相手の顏を見詰めてゐた。

「兎に角、私の家には、あんなに夜遲く迄外で遊んでゐる者は今日迄なかつたのです。」

暫時して夫人は辯解とも、訓戒ともつかない調子でいつた。

「用事のある時は爲方がありません。鍵を下さらなければ私は轉宿する外に道がありません。」

柘植は度胸をきめて、落ついた聲で應じた。

「それは夫の許可を得ないうちは許されない事です。」

夫人は怒を押靜める努力に惱みながらも、存外柘植が強く出たので、無理に笑顏をつくつて見せた。

「ではその許可を得て下さい。大急ぎで。」
柘植は人を馬鹿にした調子でいつた。
「馬鹿々々しい。」
さう思ひながら、彼はノオトを抱へて、圖書館に出かけた。

金蘭簿

柘植は毎日圖書館に通つた。近代文學の研究に沒頭してゐたのである。何時も其處で高樹と落合つた。机を並べて、朝から夕方迄、お互に相手の勉強と、心持とを妨げまいとして、殆んど口も利かないで本を讀んだ。晝になると、別段誘ひあふ事もなく、食堂で簡單な食事をして、暫時は廣い歩廊に夥しく並んでゐる希臘羅馬埃及亞西里亞等の彫像を見ながら散歩して、又机に戻るのである。

流石に夕方は疲れてしまふ。一人が、借りた本を返し、ノオトを閉ぢて立上ると、片方もやうやく椅子を離れた。

「もう歸るの。一緒に行かう。」

二人はその日の仕事を終つた安樂な氣持で、アイオニア式の巨大な圓柱のたつ出入口から、吐出されるやうに戸外に出る。

日の暮の早い晩秋の、しめつぽい霧に濡れて、漁火のやうな燈火がきらめいてゐる。銀行も會社も商店も店をしまつて、勤人は一齊に家路へ急ぐ頃である。誰の顏にも、煖爐には火が燃えさかり、妻子はかへりを待兼ねてゐる家で、溫い肉汁をすする景色を胸に描いてゐる事が、はつきりと浮んでゐた。けれども、他人の家に、異邦人として取扱はれてゐる者にとつては、晩餐の卓も左迄に戀しくはなかつた。寧ろ時には、面白くもない會話に難澁しながら、きまりきつた手料理を喰はされる事が堪へ難く思はれる事もあつた。さういふ時は、どつちから誘ふともなく、リヂェント街の佛蘭西カフェーに行つて、夜更け迄話しあつた。

其處は、日本人がよく行く怪しい女の客を引張りに行くやうな家ではなかつた。一杯のアブサンを前にして、終日將棋をさしてゐる者や、何時も同じ顏ぶれで骨牌の勝負を爭つてゐる者や、聲高く藝術を論じてあきない者の慰樂の場所だつた。客の多くは歐羅巴大陸から來た者が多く、巴里にゐた事のある高樹は、それが佛蘭西式のカフェーなのだと說明した。

或時柘植は、オスカア・ワイルドの傳記の中に、そのカフェーの名を見出した。ワイルドが、

美少年ダグラスをつれて、耽美派の理想を說きながら、夥しくウヰスキイ曹達を飲んだといふのが此の家だつた。そんな些細な事さへ、その家の親しさをました。

少佐の家に馴れるに從つて、いゝ所も惡い所もはつきりして來た。夫人は不相變将校夫人會に出かけて、募兵に努めてゐた。夜遲く歸つて來る時は、貴夫人仲間の骨牌の連中に誘はれた時で、些少ながら金錢を賭けて勝負を爭ふのであつた。何時も手許の不如意勝な夫人は、負けて歸つた翌日は全く不機嫌だつた。誰彼となく八當りに叱りちらした。目は血走り、その大きな目のふちには青黑い隈が出來て、すつかり面相が變つた。折角來た女中も、夫人の癇癪に居たゝまれなくなつて、逃げてしまつた。

さうかと思ふと、おそろしく機嫌のいゝ時は、子供達の中にまじつて、若々しい聲ではしやいでゐる事もあつた。柘植にとつても、しつつこい程親切を盡し、全くの身內の者のやうに、何から何迄世話を燒いて吳れた。單純で我儘で、正直で癇癪持の夫人の性質を、柘植は直に見拔いてしまつた。

或朝、食事の時、卓に着く柘植を見ると、

「私は貴方にお詫びしなければなりません。何卒かんにんして下さい。」

夫人は改まつた顔をして云ひ出した。柘植は勿論、其場にゐた子供達は何れも驚きの視線を夫人に注いで、何事が起つたのかと怪しんだ。

「實は入口の鍵ですねえ、あれについて夫に問合せたのです。貴方のお歸りの遲い時もあるし、第一不便には違ひ無いのですから――けれども私の家では、今日迄子供達に鍵を渡した事が無いので、如何したらいゝか解らなかつたのでした。ところが今朝夫から手紙で、それは當然御渡ししなくてはならないのだと云つて來ました。御免なさい、私の考へ違ひでしたから……」

云ひながら、夫人は衣囊から鍵を出して、食卓の上に置いた。

「これが貴方の鍵です。」

さう云つて晴々した聲で笑つた。

「難有う。これで私も安心して夜更しが出來ます。」

柘植は相手の單純な心持を喜んで、古びて光を失つた鍵にも感謝する氣持で受取つた。

「その爲めに夜更しをされては困りますねえ。」

夫人も子供達も一齊に笑つた。珍しく樂しい朝の食事であつた。

食事の後で、夫人は柘植を引止めて親しい調子でしきりに話した。自分は貴族の分家の生れで、

祖母に當る或る侯爵夫人の家で育つた。貴夫人として恥しくない教養を受ける爲めに、巴里にも行つてゐた。夫の少佐の家柄も惡くはなく、以前は贅澤な生活をしてゐたのだが、戰爭の無い平和の日の軍人の所在なさから、ふと手を出した投機に祟られて無一物になつてしまつた。上の娘には相當の教育も施せたが、次の娘以下には手が及ばなくなつた。生活の足しに、空間(あきま)を貸しては如何かと知人に勸められて、初めて柘植を置いたのであつた。娘達は他所行の着物にも困るので、此の頃は何處にも口のある女事務員になつて、自分達で勝手に働くと云ふけれど、それは自分としては許せ無い。

「いくら落ぶれても、娘達にそんな眞似はさせられません。」

力強くいひ切りはしたものの、夫人の聲は震へて、目にはいつぱい涙がたまつてゐた。

そんなやうな身の上話の末に、若しも娘達の爲めに、一時間いくらといふ約束で每朝英語の稽古を受けて吳れゝば大變難有いと申出した。相手のしんみりした調子に氣をよくしてゐた柘植は、卽座にそれを承知した。

「では今日からでも、明日からでも、貴方の御都合のいゝ時に始めて下さい。――難有う。」

心から嬉しさうに、若々しい顏中に微笑を湛へて、幾度も禮を云つた。平生の傲慢な態度は全

く見られなかつた。
「ア、さうさう、私は明日から夫に逢ひに營舍に行つて來ます。たぶん一週間は彼方で暮らして來るでせう。留守中は娘達にどんな用事でも御遠慮無くいひつけて下さい。」
話を切上げてその部屋を出ようとした柘植を呼止めて云つた。戀人と逢ふ約束の日を待兼てゐる少女のやうな、喜びに輝いた目をして、暫時別れて住む夫を想像してゐる樣子だつた。
「それはお樂しみですね。まだお目にかゝつた事はありませんが、何卒よろしく。」
「難有う。」
二人は全くへだての無い心持で別れた。
翌朝、柘植が目を覺ました時は、夫人は夫の營舍のある郊外に向つて出立した後だつた。娘達は、母親の留守に雀躍して、毎朝の日課の拭掃除もそつちのけにしてはしやぎ廻つた。
「さあ來い。」
「行くぞ。」
男の聲色を使ひながら、次女と末娘は、椅子の上のクッションを振りあげて、力任せに打ち合つた。頭も、顔も、ところきらはず叩きつけるので、中に詰めてある鳥の毛が、窓からさし込む

朝日の中を、白く光つて飛散した。しまひには取組合つて角力になつた。長椅子の上に押倒され、上からぎゆうぎゆう押へつけられてもがいてゐる末娘の短い袴(スカアト)の下から、大人になりかゝつた二本の脚があからさまに露はれ、下ばきの白いレエスも波を打つて見えた。

「あらあら、爲様が無い人。まるで室中ごみだらけになつちやふぢやないの。」

何も知らないで入つて來た姉は、入口に立つて驚いた聲を出した。

「今日から柘植さんの英語のお稽古をするのですから靜にして頂だい。」

さう云つて、少し氣まりが惡さうに、柘植の方を見て笑つた。

「お母さんから聞いたのですが、今日から始めませうか。」

「えゝ何時からでも。」

柘植は、英語の稽古にはちつとも興味を持たなかつたが、若い女とさしむかひで話をする事には心が動いてゐた。

「へえゝ、英語のお稽古ですつて。お弟子の方が餘程學者らしいわ。」

次女は憎まれ口をききながら格鬪の手を放して立上つた。

「おゝ苦しい。ヂンたら胸の上をぐいぐい押しつけるんですもの。」

亂れた髮を掻上げながら、末の娘はあはあ云つてゐた。二人とも汗ばんだ顏を眞赤にして、運動の後のかゞやいた顏が、いつもよりも遙かに美しかつた。まだ騷ぎ足りない風で、追かけ合つて二階に驅上つて行つた。

「英語のお稽古つて如何いふ風にしたらいゝんでせう。」

姉娘は愈々きまりの惡い樣子で、柘植と向ひあつて腰かけて、近視眼の目をしばだたいた。

「如何するつて、貴方の方が先生ぢやありませんか。」

柘植は多少からかふ心持があつた。年齡から云つても、學問から云つても、世界を知つてゐる點から云つても、男と女とが向ひ合つた時の態度に就ての經驗から云つても、彼は相手よりも遙かに優越の地位にゐる事を承知してゐた。たつた一つ自分の方が劣つてゐるのは、英語だけだと思つてゐた。しかもその英語も、會話が出來ないといふばかりで、學問として此の娘から學ぶ可き何物も無い事は明瞭だつた。

「だつて私は英吉利人でせう。自然と英語を覺えてしまつたので、英語を敎へたり敎はつたりする事は、別段考へた事さへありませんもの。」

さも當惑した樣子で、頰邊を薄紅く染めてゐた。

「それでは今朝の新聞でも讀みませうか。兎に角先生として見れば、私に不得手な事をさせるのが一番樂でもあり面白くもありませうから……」

柘植は傍の小卓の上の新聞を取つて、下手な發音で朗讀し始めた。日本人には極めて難かしいLとRの區別、TとHの結び付いてゐる時の舌の動かし方などは、如何に或る他國人にとつては容易ならぬものであるかを、朗讀者自身が說明してきかせた。先生は、初めてさういふ知識を得る事を面白がつてゐる風だつた。

二つ三つ文法上の疑問を出して見たけれど、組織立つた知識の無い女には答へる事が出來なかつた。如何にして此の日本人の變則な英語の力が得られたかは、クリスティンには了解出來なかつた。思ひもかけない難かしい事を知つてゐて、しかも日常の會話にさへ差支へるのが不思議だつたのだ。

「不思議ですねえ。貴方には本に書いてある事は何でも解るでせう。それでゐてお話が出來ないんですか。うちの料理人のドラなんか、本てつたら一頁も讀めないのに、話にはちつとも差支へないんですよ。」

子供らしい好奇心にまばたきの頻繁な目をみはる相手を見ると、柘植はほゝ笑まずにはゐられ

なかつた。子供のお相手をしてゐるやうな他愛の無い情味が、旅なればこそ彼の心に柔かく觸れるのであつた。

　それでも娘は責任を感じてか、その日の稽古を終る時に、明日迄に諳記して置けと云つて、前の晩栢植が置き忘れて行つた青い表紙の詩集の、煖爐の上の棚にあるのを取つて、いゝ加減の處を開いてさしつけた。

　人われに問ひていへるは
　何處にか紅寶石（ルビイ）は生る、
　何事もわれはいらへず
　しかはあれ我が小指（および）もて
　指（ゆび）さしぬデュリアの唇（くち）を。

　人われに問ひていへるは
　何處にか眞珠は生る、
　われは我が少女の唇（くち）を

開かしめ指して示しぬ
其處にこそ眞珠はありと。
（正しき譯にあらず、都合よく手を入れたり――水上）

柘植は二度三度短詩を口誦んだ。
「もう大丈夫です。明日の朝、屹度忘れずにゐますから。」
「まあ何んて可愛らしい詩なんでせう。」
目を細くして、ちひさい、つまんだやうな眞赤な唇を細かく動かして、クリスティンもその詩を繰返した。
「いゝわねえ。――けれどヘルリツクつてどういふ人なんです。」
「十七世紀の此の國の有名な詩人ですよ。」
「さう、左樣いへば聞いたやうな名には違ひ無いわ。」
柘植に說明されて小首をひねつたが、矢張り知らない名前だつたらしい。
「詩人ていへば、柘植さんにも書いて頂かう。」
授業をおしまひにして立上つたのが、何か思ひ付いて小走りに室を出て行つた。暫時して戻つ

て來た時は、一冊の金蘭簿を持つて來た。
開けて見ると、大半はもう白紙を殘さなかつたが、一頁々々數項に欄がわかれてゐて、好きな色彩、好きな花、好きな動物、好きな作者などゝいふ間が出てゐた。
「これはね、うちのドラが書いたのですよ。」
娘が開いて見せたところには、おそろしい惡筆で記入してあつた。好きな色は紅、好きな花は薔薇、好きな動物は馬、好きな作者は沙翁とあつた。沙翁の綴は出たらめだつた。栢植は思はず失笑した。年中鼻の下の赤くたゞれた眇月(すがめ)の愛蘭土生れの女中の、汚れ切つた姿を想像した。兵隊の情人があつて、夜の食事の濟んだ頃、表の戸口で二人は語合つてゐた。寒い頃なのに、入口の石段に腰かけて、雙方からしつかり抱きつきながら、長い間接吻をしてゐるのを、家中の者が知つてゐた。その女が沙翁を好きな作家と書いたのが面白かつた。勿論讀んだ事はないであらう。或はそれが、彼女の知つてる作者の唯一人だつたのかもしれなかつた。
「面白いでせう。貴方も是非書いて下さい。記念の爲めに。」
つきつけられて栢植は洋筆(ペン)を持つた。
（一）　好きな色彩　　倫敦には珍しく晴れた日の青空の色

（二）好きな花　我が部屋の机の上の花
（三）好きな動物　此の家の老犬
（四）好きな作者　…………

「さあ誰にしませう。オスカア・ワイルドと書くと、夫人に叱られるでせうし……」

柘植はほんとに迷つた。英吉利の作家でなくては面白くないと思つたが、とつさには一人を撰ぶ事は難かしかつた。結局彼は他の三つの問に答へたやうな洒落とは違つて、現在耽讀してゐる作者トルストイの名を記した。

「露西亞のトルストイですか。そんなにいゝのですか。私はつい未だ讀んだ事が無いのですけれど。」

「それは是非讀まなくてはいけません。」

恰もトルストイの偉大なる藝術に感激して、その全集を買込んで、夢中になつてゐた彼は、最上級の言葉で推稱した。

「今は佛蘭西小說を讀み始めた所ですから、それが濟んだら借して下さい。」

「佛蘭西の何ていふ小說です。」

「デュマの『椿姫』です。面白いんですよ。」
クリスティンは、その小説の中の豐麗な場景を想ひ描くやうな、何かしら遠方に憧れるやうなうつとりした樣子で、窓の外の空を見詰めてゐた。倫敦には珍しい晴れた靑空を、輕氣球がゆらゆらとゆらいで遠く行くのであつた。

留守

夫人の留守の一週間は樂しかつた。自分達の思ふが儘に振舞ふ事の出來る子供達は、のびのびした心持で、家中を驅廻つた。妹や弟をたしなめながら、姉も一緒になつてはしやいだ。
朝の食事が濟むと、近所の聖ポオル校に通ふジョオジを、三人の姉妹は追ひ立てるやうに出してやつた。學校嫌の少年は、追ひ立てられない限りは、何時迄も、老犬の首玉を抱きしめて、頰擦りをしたり接吻したりして、愚圖々々時間を費してゐる。ひよろ長い身體の上半身を、不格好に左右に振りながら、漸々戸口を出て行くのを見送り果てゝ、
「あれは確かに、それ程悧巧ではないと思ふわ。」
姉娘の一人は、柘植の方を振向いて笑ふのだつた。

「そんな事があるもんですか。」

「いゝえ、ほんとよ。だつて數學なんかまるつきり出來ないんですもの。」

他の一人も、弟は悧巧でないといふ例を擧げて、柘植を納得させなければ承知しなかつた。

妹二人が女中と手分けして拭掃除をしてゐる間に、クリスティンは柘植と差向ひで、英語の稽古をした。詩の諳誦も、新聞の朗讀も、二日三日で、雙方とも倦きてしまつた。語學の拙劣と、見かけの若々しさから、多少は甘く見てゐた相手の方が、遙かに學問も識見もある事を知ると、先生の方は教へる事が面はゆくなつて來た。同時に生徒の方も、殆んどからかふやうな調子で稽古をしてゐる馬鹿々々しさを、續ける根氣がなくなつた。どつちから云ひ出すともなく、稽古の時間は、差向ひの話の一時間となつてしまつた。しかもその話も、主として娘の知らない事を柘植が說明してやるやうな風になつてしまつた。

「貴方は學者なんですつてねえ。姉さんがさう云つてゐましたよ。あれでもうちでは姉が一番學者なんですけれど。」

或時次女は、持前の率直な態度で云つた。

「それぢやあ柘植さんの方が、うちのお母さんより學問があるかしら。」

傍にゐたジョオジが眞顔で訊いた。
「何をいつてるの。お母さんなんか學問なんかありはしないわ。」
次女は平生母親といがみあふ時の憤懣その儘の語氣だつた。
「でもお母さんは自分では悧巧だつて云つてるねえ。」
「自分で悧巧がつてるのなら、ジョオジだつて悧巧がれるわ、フム。」
まるまると肥つた肩を搖つて辛辣な口をきいた。
「それぢやあお父さんは悧巧かしら。」
弟はまだ思ひ切りの惡い態度で云つてゐた。
「お母さんよりは悧巧だわ。少なくとも。」
末の娘が、編物の手を休めて口を入れた。
「貴方達に何がわかるもんですか。お父さんが悧巧なら、うちはこんなに貧乏しないで濟んだんぢやないの。」
「でもお父さんはいゝ人だわ。」
つけつけとものを言ふ次女の言葉を訂正するやうに、おだやかな姉が辯護した。

「いゝ人？　そりやあ私だつて疑はないのよ。けれどもいゝ人で悧巧でないのは始末が悪いわ。」
きやうだいは、長い間、自分の父母を、恰も他人の噂をするやうに批評して、無邪氣な笑聲を立てゝゐた。
距てが無くなると同時に、柘植に對する親しさは增して來た。むつつりした、愛想の無い彼を變人扱にはしかねなかつたが、決して他人にはしなかつた。一週間の母の留守に、完全なる友達で、家族の一員で、且信頼すべき叔父さんのやうに祭り上げてしまつた。
夕方彼が圖書館から歸つて來るのを待兼て、その日一日の出來事を報告し、意見を徴した。食事が濟むと客間に集つて、骨牌やドミノをして遊んだ。兎もすれば姉達に叱られたり、馬鹿にされたり、除外され勝ちのジョオジの外は、口小言の酷しい、むら氣な、怒りつぽい母親の不在に、聲も身のこなしもいきいきして、平生は見られなかつた美しささへ增したのである。
午後のお茶の時分か、夜食の後の珈琲の出る頃、姉娘に好意を持つてゐる軍人Aや、矢張り柘植が此の家に來た最初の日に見た美少年の客の來る事もあつた。人の好ささうな、誰に對しても笑顔で調子を合せるAは、確かにクリスティンに戀してゐた。けれども女の方では、進んでそれを受ける程心を動かしてはゐないらしかつた。妹達は、それとなく姉にからかつたり、末は夫婦

になるのだらうと陰口をきく程だつたが、事實は其處迄進行してゐないらしかつた。
　或日、霧の深い冷い午後、カアキイ色の軍服姿のAは姉娘を誘ひ出した。灯ともし頃、降出した雨に濡れて歸つて來た姉は、戸口迄送つて來た男と別れると、客間の煖爐の前の絨毯の上に直接に坐つて、疲れた足を横に投げて沈んだ顔をしてゐた。
「何處に行つたの？」
　お茶の後で、獨骨牌（ひとりかるた）をしてゐた次女は、多少からかふ調子で訊いた。
「何處つて、たゞ他所でお茶を飲んで來ただけなの。」
　姉は振向きもしずに答へて、ちらちら燃える火を涙組（ぐ）んだ目で見詰めてゐた。その場の様子が妙に息苦しく取付場の無いものになつて、暗い窓の硝子にあたる雨の音ばかり微かに聞えた。
「あの人ねえ、もう直（ち）き戰地にやられるんですつて。」
　暫時して、クリスティンは力の無い聲で云つた。
「さう。私あの人嫌ひだわ。貴方はどう思ふかしらないけれど。」
　ヂンはわざとらしい程無頓着な口をきいた。
「でも親切は親切よ。別段偉い人ではないでせうけれど。」

「なんだか男らしくないのが嫌ひ。」

姉妹はそぐはない心持で互の口をつぐんだ。

「お母さんも好きではないらしいわ。」

餘程たつてから、嘆息するやうに姉はつぶやいた。

一週間たつて夫人は歸つて來た。久しぶりで夫に逢つて來た喜悅に上機嫌で、子供達にも柘植にも、兵營の話をした。倫敦には雨の降る日に、霰まじりの雪の積つた岡の上で、塹壕を掘つたり鐵條網を敷設してゐる少佐の姿を、女らしい誇張した感激の言葉で、英雄化して話すのだつた。何時迄も何時迄も、夫を中心にした軍隊の描寫は盡きさうもなかつたが、ふと聲をひそめて、俄に暗い顏附で嘆息した。

「けれどもねえ、お父さんも近々に戰線に行かなくてはならないらしいんですつて。」

突然語尾がかすれたと思ふと、感情の激越し易い夫人の顏面筋肉は震へて、涙は早くも頰邊を傳つて流れた。柘植も子供達も驚いて一齊に見守つた。止度なく涙は目蓋をあふれて來た。

「そりやあ當前の事だわ。軍人なんですもの。軍人で無い者迄、無理に勸めて兵隊にして戰地に送つてゐて、現にお母さんなんか毎日毎日幾人の人を兵隊にしたかしれやあしないぢやありませ

んか。」

次女は、母の涙を非難する調子で、憚らず云ひ切つた。

「なんですつて……」

夫人は相手の言葉を中斷するつもりで咎めたが、唇が痙攣して何も云へなかつた。眞靑に顏色を變へて、氣に喰はない娘を睨んだ。涙はもう流れず、乾いた頰邊も石のやうに固くなつて、胸の動悸ばかり激しく波打つてゐた。誰も口をきく事が出來なかつた。ジョオジの足下に寢てゐた老犬が、むつくり起上ると、よたよたした足取りで不安らしく室内をぐるぐる廻り始めた。柔い四足のあしのうらの、床を踏む音が、みんなの耳について爲方が無かつた。

翌日から、夫人は又募兵に努めて居た。東西の戰線とも、敵軍が優勢で、何時になつたら聯合國が攻勢をとる事が出來るか、見込みもたゝない時代だつた。ハイド・パアクはいふに及ばず、到る處の空地で、身につかない軍服を着た新兵が不器用な足附で調練してゐた。

十二月の始、北の海岸の二三の町が、獨乙の艦隊に砲擊された。九十九人の死者と、二百三十二人の傷者を出した事實は、太平に馴れ、自國の強大をほこり、殊にその海軍の絕大の力を信じてゐた國民を震駭した。

歸宅

主人の少佐が休暇を貰つて、家に歸つて來たのもその頃だつた。半白の頭髮の薄いのを油でかためて、きちんと櫛の目を入れ、ふち無しの鼻眼鏡をかけた、一見おしやれな好々爺だつた。大人の大兵とはうらはらの小柄で、瘦せて筋張つた背中の少しばかり曲つてゐるのも、強ゐても威嚴を保たうと努める夫人と比べて、輕い皮肉とさへ思はれた。

夫人や子供達と抱合つて、一々接吻した後で、柘植の手を握つて親しさうに挨拶した。老犬の首を抱へてこれにも愛嬌を振まいてゐた。

晩餐の卓には三鞭をぬいて、柘植にも杯をすゝめながら、少佐は忽ち陶然となつた。獨乙の憎む可き蠻行、獨乙皇帝の野望の罰せらるべき事、さうしてその敵を取ひしぐのは卽ちキッチナア元帥の編成する英軍に外ならない事を、平俗な愛國者の昂奮した狀態で、繰返し繰返し話した。餘りに軍事上の知識の無いのに、柘植は只管驚かされた。少佐は、女子供と同樣に、來年の春の雪解と共に、英佛聯合軍は總攻擊を開始して、忽ち伯林を包圍し、獨乙皇帝を捕虜にする事を確信してゐた。

「近頃は日本の海軍も日本人を士官に採用するやうになつたかしら。」

などと眞顔で云つた。そんな事は昔からだと云つても承知しなかつた。少佐の說に從へば、日露戰爭當時の艦隊の、司令長官から士官迄、すべて英吉利人だつたといふのである。

「そんな事があるものですか。」

柘植は愛國的情熱をさへ催して打消したが相手は頓着しなかつた。

「そりやあ列國には祕密になつてゐるんだが事實なんだ。現に私の友達にも旅順口の閉塞に參加したのがあつたからね。」

此の若い日本人が何を知るものかといふ樣子で、妻や子供の方に向つて、自分の知識を自慢さうに話した。

陸軍の事についても、何故日本は宣戰を布告しながら軍隊を西部戰線に輸送しないかなどゝ、それが聯合國からいへばもつともな要求であり、又日本としてはしなければならない義務だといふ口吻で云つた。

「しかしそれは不可能な事ではないでせうか。」

「なあに日本さへうんといへば、英吉利が軍艦を送つて、直に運んでしまふからわけは無いさ。」

飽迄もその可能を信じて、樂天的な自分の心持をさかなに、何時迄も杯を手から放さなかつた。食事の後は、客間で骨牌を始めた子供達と一緒に珈琲を飲んだが、直に二階の寝室に引上げてしまつた。夫人も後からついて行つた。遠く別れて住んでゐる夫婦の心持を、あまり露骨に見せられたやうに感じて、拓植は人知れず微笑した。

「拓植さん、貴方うちのお父さんを如何お考へになつて。」

クリスティンは自分の愛する父親に對して、彼が好意を持つてゐるか、或は輕蔑してゐるか、懸念に堪へ無い風だつた。

「貴方の云つた通り、確にいゝ人に違ひありませんねえ。」

「さう。難有う。」

いゝ返事に喜んで、近眼の目をしばだゝいて感謝した。

「ですけれど、私の云つた通り、それ程悧巧には見えないでせう。」

天の邪鬼の次女はすかさず横から口を出した。

骨牌の勝負を爭ひながらも、拓植は少佐の云つた事や、その物腰をおもひかへしてゐた。敢て少佐には限らずに、此の世界の大強國程、個人として呑氣に無智な俗衆の集つてゐる國は無いや

うに思はれた。政治も、軍事も、藝術も、すべて各方面の事を、夫々少數の勝れた才能の人間に任せて、大多數の國民は、安逸に金儲を樂しみ、安心して午後五時のお茶を享樂してゐるのであらう。それが羨しくも思はれ、同時に又、さげすむ氣も起るのであつた。

その晩は、何時迄騷いでゐても、夫人は小言をいひに來なかつた。完全に枕を並べて眠つてしまつたのであらう。骨牌にあきると、洋琴を彈き、バンヂョオを鳴らし、歌をうたひ、しまひには組打もして、夜更け迄騷いで騷ぎあきなかつた。

翌朝早く、霧雨に濡れながら、少佐は兵營に歸つて行つた。猫背の後姿の、町角に消える迄夫人は戸口に延び上つて見送つてゐた。

戰時の都

降るかと思ふと降りもしずに、重たい霧につゝまれて、その霧の底から湧いて來るやうに、倫敦の冬は次第に寒くなつた。立並ぶ家々の屋根も壁も、町の敷石も、公園も、空地の土も、何も彼も濕つぽく、人の心も沈み勝だつた。

踏めばじとじと水の滲み出るその空地を踏荒して、着馴れない軍服のだぶだぶしたのを着た新

兵が、到る處で調練してゐた。勢のいゝ壯年者は少なく、足腰の重たくなつた四十男や、まだ中學を出たか出ないか位に見えるひよろ／＼した若者が、默々として動いてゐた。戰時の昂奮も、熱狂も、彼等の顏には現はれてゐなかつた。たゞ習慣的に、それが國民の義務だと確信し切つてゐるやうな鈍重の力強さを背景にして、歩調を揃へて訓練を受けてゐた。その頭の上を、飛行機や輕氣球が無關心に過ぎて行つた。足を止めて仰ぎ見ても、見てゐるうちに霧の空に消えて行くのであつた。

町中の群集の中にも、著しくカアキイ色が殖えて來た。眞新しい軍服軍帽の小粋な士官と腕を組んで歩く得意さうな女達と、これも夥しく目について來た喪服の婦人の姿が、戰爭の意識を強めるものであつた。

さういふ切迫した景色が否應無しに目前に迫つて來た時、少佐の家の知人の多くは、相次いで戰地に送られて行つた。

「Aさんも遂々戰場に立たなければならなくなつたのですつて。」

姉娘は、或朝の稽古の時間に、おもひあまつたやうな口調で柘植に話した。前の晩、彼は芝居に行つて留守だつたが、Aは別れを告げに來たのだつた。

「明日にも出發するやうな話でしたが、行先は知らして貰へないのですつて。」

あからさまに嘆息しながら、やうやく燃え初めた煖爐の火に、涙組んだ目をしばだたいた。頼りになる相談相手の欲しさうな、力の抜けた姿が、豫々栢植が聞き度いと思つてゐた事を躊躇無く切出させた。

「貴方はあの人と婚約でもしたのですか。」

「婚約ですつて？」

思ひがけない問ひに、近眼の目をみはつて驚いたが、氣が付いて眞赤に頰を染めた。

「さういふわけでも無いのですけれど……。彼の人は大變私に親切なんです。人つてものは、親切にされると、如何してもほだされてしまふものらしいんですのねえ。」

思ひ切つて云ひ切つて、一層顏が赤くなつたが、暫時沈默の續いた後で、Aに對する自分の立場を說明した。

二人は未だ婚約はしてゐなかつたが、男がそれを求めてゐるのは明かだつた。出來る事ならば、戰地へ行く前に、話をきめ度いと迫いひ出した。けれども、女には判斷の餘裕があつた。男の生活の樂で無い事、自分の兩親の思惑――それよりも、若しも戰場で萬一の事があつたら如何なる

かといふ心配が、相手の切望を拒ませた。

「世の中つて、みんな思ふやうにはならないのねえ。その癖私はつい近頃迄、あの人と結婚しようなんて考へた事はなかつたんですよ。」

少し出齒のちひさい唇に、寂しい笑を浮べて話した。

此の頃の新聞によく論じられてゐる問題が、目前にあるのを栢植は知つた。祖國の爲めに戰場へ行く若者は、生死の別れ目に、何れも異性に對して犧牲を要求する。女の方も、死を賭して行く愛人の爲めに感激して、身を任す事は拒め無いといふのである。さうして男は戰死し、女は身持になつて殘る悲慘を、力をつくして新聞は論じてゐた。栢植は、男の要求も、女の態度も是認し度かつた。その癖、今、クリスティンが、Aの申出を肯じなかつたのを、どんなに滿足して聞いたかわからなかつた。

二三日後に、Aはほんとに行先の示され無い戰線に送られて行つた。

その頃は、誰も彼も、少佐の家に出入する者は、みんな何時の間にか軍服を着て來た。銀行員も會社員も、軍人になつてしまつた。夫人の遠緣に當るといふ牧師志願の青年も、甘んじて銃を執つた。よく遊びに來る美少年も、きやしやな體にだぶだぶのカアキイ服を着始めた。ジョオジ

の通ふ學校の生徒も、一様に軍人の姿になつて、調練に日を暮した。ひよろ長い背中に背嚢をしよつて、竹の鞭を士官らしく小腋にかゝへて行くジョオジのカアキイ姿は、母親が何よりの自慢になつた。學校から歸つて來ると、その鞭を銃の代りにして、自分で自分に號令をかけながら、男の子は家中を、踏み鳴して歩き廻つた。

「あゝ私達も看護婦にでもなり度いわ。」

と姉妹は口々にいひ合つた。

侵入者

或る雨の日の暮方であつた。夫人も姉妹達も揃つて留守で、珍しく圖書館にも行かない柘植は、ジョオジと二人客間にゐた。彼は本を讀んでゐた。ジョオジは、板切(いたきれ)を削つて、提琴(バイオリン)をつくるのだと、せつせと小刀を動かして居た。もとよりいたづらのおもちやに過ぎ無いのだが、遊び事にかけては丹念な方で、不格好な提琴型に削つた一枚板にバンヂョオの絃を張り、これも手づくりの提琴弓を添へて、貧しい音を出す樂器を仕上げた。それ迄に費した苦心と工夫を、得意になつて柘植に説明した後で、大工道具も木屑もそのままにして、木目のあらい樂器の上に、靑んぶく

れの顔を押つけて、夢中になつて彈き出した。輕く床の上で拍子を取つてゐる足の下には、寢そべつた老犬が、何時迄たつても晝寢から覺めなかつた。

ふと、玄關の呼鈴がけたたましく鳴り響いた。ジョオジは音樂に熱中してゐて立上らうともしない。その何事にも無關心な樣子が小じれつたく、栢植は輕く舌打ちして、椅子の上に本を投出して立上つた。

扉をあけると、音をたてて降る雨の中に、雨外套の頭巾をかぶつた大男が、づぶ濡れになつて立つて居た。

「奧さんはお出でですか。」

見馴れない男は頭巾をはねのけて、力のある太い聲で訊いた。眞赤に日に燒けた廣い額と、思ひ切つて凹んだ鋭い眼と、猶太(ユダヤ)型の鉤形の鼻が、威壓するやうに現はれた。

「留守です。」

「では誰かうちの人は居ませんか。」

「ジョオジがゐる丈です。」

「難有い。私はMです。」

名を名のりながらづかづか入つて來て、雫のしたたる外套を手早く脫いだ。
「久しく御無沙汰してゐたので、最初貴方が出て來た時は、うちを間違へたかと思ひました。日本の方ですね、君は。支那人ではありますまい。」
力のある聲の持主は、せはしなく一人でしやべりながら、物馴れた態度で、先に立つて客間に入つて行つた。
「ハロオ、ジョオジ。」
手製の提琴を彈き止めて、びつくりして立上つたジョオジの兩肩に、毛もくじやらの太い手をかけて叫んだ。
「驚いた、驚いた。これが自分の知つてるジョオジだとは信じられない。大きくなつたものだねえ、もう僕と同じ位だ。」
ひよろ長い少年の額と、自分の額とをくつつけて、彼は寸法をはかりながら、高々と笑つた。
「お父さんは兵營の方に行つてるさうだね。僕も吾々の國家と吾々の國王の爲めに、海軍に志願して出ようと思つて歸つて來た。」
口の重い少年をつかまへて、半分は傍の柘植に話をふり分けながら、馴々しい口調で云ふのだ

つた。

Mは此の家の古い馴染で、以前は始終出入してゐたが、商船の乘組員になつて、久しい間南洋方面を航海してゐた。それが今度の戰爭で、國家の爲めに働かうと、俄に歸つて來たのだと云つた。如何にかして海軍に採用になれば、どんな役でも勤める。最も苦しい仕事とされて居る敷設水雷を取除く掃海の勞役さへ厭はないと、愛國者らしい熱情をこめて云つた。そのあげくが、此の頃此の國の男女に常に聞かされる通り、獨乙の暴虐、英國の正義を、長々と演說口調でやられて、柘植は應答も出來ずに、ただただ頷いてばかり居た。最初に、銳い眼附と鼻の格好から受けた心よくない印象が、相手の激越した言葉のほとばしり出る口元を見てゐると、一層強くなるのであつた。且つ此の惡い印象は、しつつこく心に絡みついて、Mの存在と共に消えたくなつた。何時の間にか、話の相手は柘植一人になつて、ジョオジは又しても手づくりの提琴の音色に夢中になつてゐた。

夜食の頃、姉妹三人と母親は、前後して歸つて來た。Mは、誰に對しても、親しさに堪へないやうに、久し振りで逢つた喜悅を熱心に繰返した。さうして又、先刻から柘植とジョオジにきかせてゐた愛國心から出た彼の今回の意圖を、前よりも一層雄辯に喋るのであつた。

夫人はMの思ひがけない出現を甚だ歡迎した。そのさかんな意氣を口を極めて稱讚した。海軍の方にも當路の人に知己があるから、自分も口添をして、如何にかして、直にも士官に取立てて貰はうなどと、事もなげに云つてきかせた。

「貴方がたは來年中に、動物園の檻の中に獨乙皇帝を見出すに違ひ無い。」

などゝ、食卓の賑かな話の中で、Mは數杯のウヰスキイ曹達に、一際滑かになつた舌を休めず、一同にむかつて、自分の勇氣と、英吉利の強大をほこつて止度が無かつた。

その晩からMは此の家に泊る事になつた。二日たつても、三日たつても、彼は矢張り泊つてゐた。朝の食事が濟むと、忙しさうに出て行つた。海軍に入る爲めに、方々驅廻つてゐるのだつた。夕方栢植が圖書館から歸つて來る頃には、婦人會から夫人も歸つて來、Mも何處からか歸つて來た。疲れた顏を客間に合せる中で、M一人が其場を賑かにする爲めに努めた。如何して斯う迄此の男には出來事が多いのかと思はれる程、毎日何かしら驚く可き事件に遭遇した話をした。彼の乘つてゐた乘合自動車が衝突しさうになつたとか、衝突したとすれば命はなくなり、今宵の溫い肉汁(スウプ)にはありつけなかつたに違ひ無いとか、今朝町角で見た男は確かに獨乙の軍事探偵だつたとか、若しその男を捕へれば、敵國の驚く可き密偵組織は暴露されたに違ひ無いとか――さういふ

類の話だつた。しかも夫人は、何の疑も無く、面白さうに聞いてゐた。こども達は、明白にMに對して好意を持つてゐないので、彼の話術が巧妙を極める程、一層鼻であしらふ態度を見せた。Mも確かにそれに氣がついてゐた。知つて知らないふりをしてゐた。

或朝、柘植が客間へ下りて行くと、掃除の手を止めて、夫人と次女とが何か爭つてゐた。惡いところに入つて來たなと思ひながら、後戻りしようとすると、夫人は後から呼止めた。

「柘植さん、それには及びません。何でも無いのです。ヂンがあんまりわからない事をいふので……」

「お母さん、私はわからない事なんか云つてやしないんですよ。當り前の事を云つてゐたんだわ。」

「お默んなさい。柘植さんに聞かれても恥かしいぢやありませんか。そんな得手勝手な事を云つてるひまに、さつさと掃除をしておしまひなさい。」

痞癪持の夫人は、柘植の見る前では殊更母親の威厳を示し度いといふ樣子で、聲を震はせて叱りつけた。

「さあ、そつちの窓際の椅子は綺麗ですからお掛けなさい。新聞も其處に來てゐます。」

無理に優しい顔を夫人は栢植の方へ振向けた。ヂンは口の中でぶつぶつ不平をいひながら、ふてくされた格好で、手にした雜巾で椅子や卓子を引ぱたいて廻つた。

「をかしな人なんです。着物を買つて貰へないと云つて怒り散らしてゐるのですよ。」

夫人はてれかくしに笑ひながら、捨ぜりふを殘して出て行きかけた。

「お母さん。」

鋭い上ずつた聲で次女が呼止めた。

「何を云つてるの。私は貴方に着物を買つて貰ひ度いなんて云やあしないぢやありませんか。うちにお金が無くて困つてる事は知つてゐます。だから自分で働くから、働きに出してくれといふんぢやありませんか。」

「お默り。」

夫人は顔色を變へて振返つた。

「いゝえ。」

娘は棒立に立つたまゝ、胸に波を打たせてまくし立てた。

「自分で働かうといへば、やれ平民の娘の眞似はさせられないとか、家柄がどうだとか、愚にも

つかない事ばかり云つてゐて許して呉れないんぢやありませんか。たまにお友達に呼ばれても、着て行く着物も無いし、先方から遊びに來てくれても、あんまり多勢來てはいけないなんていふ癖に、自分のお氣に入りだと、お父さんのお留守だといふのに、三晩も四晩も泊り込んで……」

「お默んなさい。」

夫人は何か云はうとしたが、何もいふ事は出來なかつた。いきなり娘の肩口をつかむと、力任せに突飛ばした。

「Mさんはお父さんの親友です。お留守中だつて泊めてあげなくてはならないんです。泊めてあげなければ叱られるでせう。自分の職業を捨てて迄、海軍に志願して出ようといふ人なんです。」

「職業を捨てたんですつて。地中海に獨乙の潛航艇が出る爲めに、商船の航海は危なくなつたんぢやありませんか。馬鹿らしい。」

適度の抑揚を失つて、無闇に甲高くなつた聲に咽喉がつまつてしまつた。激しい昂奮に眞青になり、目には涙があふれて來て、手に持つ雜巾もぶるぶる震へたが、いきなりその雜巾を力の限り床に叩きつけると、俄に堪性が無くなつて、兩手で顔を押へたまゝ、むせかへつて泣きながら、ヂンは戸の外に驅出して行つた。

「デン、デン。」

これも聲さへ出せない程激昂した夫人は、娘の後から叫びながら追かけて行つた。前後して、二階へ上つて行く足音が、騷々しい中に寂しさを殘して響きわたつた。

輕氣球

母と娘が、はげしく罵り合つた後の、妙にひつそりした客間の椅子に、柘植は所在無く殘された。新聞を開いて見たが、面白い記事はなかつた。繪圖で示した戰線は、何時迄たつても變化が無く、時たま變化があるとすれば、それは矢張り部分的に、獨乙側が進出するばかりだつた。彼はぼんやり窓の外に目をうつした。うす日のさしてゐる裏庭の木立に、寒さにふくらんだ雀の群が、夥しく、枝から枝に渡り歩いてゐた。囀りかはしてゐるのであらう、ちひさい嘴の動くのは見えるが、たて切つた窓の硝子にさへぎられて、聲はちつとも聞えなかつた。遥の空に、今朝も輕氣球が上つてゐた。下の方は、靜かにしめつぽく、土に落ちる落葉も音を立てなかつたが、高い處には風があるのであらう、見てゐるうちに、だんだん西に流れて行つた。

「お早う。柘植さん。」

不意に聲をかけられて、ふりむかうとした肩の上に、Mの大きな手が乘つた。

「何を見てゐるんです、一心に。」

持前の馴々しい態度で、身を屈めて遠くを仰ぎ見た。

「あゝ輕氣球か。」

目標がきまると、姿勢を正してみつめた。半面に朝日を受けて輝いてゐる氣球は、ところどころにくつきり見える青空と、その上に流れる白い雲の中に突進むやうに、ちひさくちひさくなつてしまつた。

柘植はうつとり見とれてゐた。子供の時分、赤や紫の繪具で塗られたごむ風船の糸を握つて、驅廻つてゐた姿が想ひ出された。ふとしたはずみで糸が切れて、あれあれといふひまも無く、大空の藍の中に消えてしまつた、子供心をいたましめた幾つかの風船が、しつとりと心の中に浮び出して來た。

「來た來た。又ひとつ來た。」

Mが叫びながら指さす空に、やがて限界を去らうとする以前のものを追かける姿で、新しいのが現はれて來た。

「あゝ、なんといふ壯大な景色だらう。此の英吉利を守る爲めに、無際限の空に昇つて行く……」

Mは昂奮して、力強い聲で、芝居の獨白のやうな調子で云つた。

「さうだ。氣球隊だ。氣球隊を志願しよう。」

彼は自分の腕を――右の拳で左の腕を、左の拳で右の腕を――たゝきながら大跨に床を踏んで歩いた。

その朝は、食卓には、夫人もヂンも出て來なかつた。誰の顔にも、一家の內に爭があり、はしたなく罵り合つた事を恥る色が見えた。こころよく話をする者も無かつた。僅かにMが、クリスティンにむかつて、氣球隊に入る決心をした事を、一大事らしく話しただけで、それさへも今の先、大空を仰いで昂奮した時の、緊張した心持は失はれてゐた。彼は自分が此の家に居る事の氣まづさを、此の頃ははつきり意識してゐるらしかつた。

ショオジは學校に行き、Mはクリスタル・パレスの氣球隊に行くのだと云つて出て行つた。餘りに無雜作なその段取が、芝居がかりでをかしかつた。

「さ、お稽古を始めませうか。」

クリスティンは、夙に稽古らしい稽古でなくなつてはゐるものゝ、惰性で朝の一時間を費す習慣に柘植を促した。その癖、客間の椅子に向ひ合ふと、何もする事の無い手持無沙汰を、てれかくしの微笑にまぎらす外には爲方が無かつた。

「貴方は知つてらつしやるの。今朝の騷動。」

しほしほした近視眼をまあるくみはつて、聲をひそめた。

「知つてるどころぢやあない、唯一の目撃者です。」

「貴方の事だから、皮肉な目附で見てたんでせう。わるい人。」

「そんな事をいふ人の方が皮肉ぢやありませんか。」

クリスティンは睨む眞似をして、側にあつた新聞をとると、くるくるまるめて棒にして、柘植をぶつふりをした。

「私は二階にゐたんでしよ。大變な勢でヂンが驅上つて來て、床の上につつぷして泣いてるんぢやありませんか。どうしたのかと思つてると、お母さんはお母さんで、眞靑な顏をして入つて來て、いつ迄もいつ迄も、泣いてるヂンを睨みつけてゐるんです。」

話をしてゐるうちに、その時の動悸が蘇生して來たやうに、うすい胸に波を打たせた。

「一體如何したんです。何が原因なんです。」

「さあ、よくはわからないけれど、着物が出來ないとかなんとか云つてたやうですよ。働きに行き度いといふのに、お許しが出ないので、愚圖々々云つたのかしら。」

「隨分見つともないわねえ。」

一寸眉をひそめたが、

「けれどもデンの云ふのももつともだと思ふわ。お母さんなんか、全く無理解なんですからね。二言目には平民の娘とは違ふつて云ひながら、その平民の娘よりもみつともないなりをさせて置かなくちやあならないんでしよ。それに、自分で働いて着物をこしらへるつて事は、ちつとも恥る事では無いと思ふんですけれど……」

全然妹の側に同情を持つて、諄々と姉は話した。父親が如何に善人で、幾度人にだまかされたか、骨牌好きで、おまけに下手で、倶樂部で夜を更かしてはお金をとられてしまふ事、あげくの果が投機に失敗して一文無しになつてしまつた事、母親の機嫌の非道く悪くなつたのも、ひとつには其の爲めで、もともとむら氣には違ひ無かつたが、根は正直な人だといふ事、自分丈は相當の教育を受け、獨乙にも佛蘭西にも勉強に行つて居たが、外の妹はそんな事さへ不充分で氣の毒

だといふ事、――それからそれと、ままにならない一家の事情を話して居るうちに、何時の間にか、涙組んでさへ來るのであつた。

「あゝあ、女はいやだいやだ。」

あんまり話し過ぎたと思ひ返したのであらう、うつちやるやうに云ひ捨てて、其の時のいろんな心持を、笑ひにまぎらしてしまつた。

「どうして。男だつていゝ事はありやあしない。私は來世は女に生れ度いと思つてゐますよ。」

男の社會の醜惡な事、矢張り女と同樣に、媚も賣らなければならず、噓もつかなければならない、心のまゝにはならない世の中を見て來た柘植は、寧ろあからさまに、弱いものときめられてゐる女の方が、遙かに幸福ではないかと思つてゐた。

「そんな事があるもんですか。男なら何でもやらうと思へば出來るぢやありませんか。仕事をしようと思へば好きな道で働けるし、結婚しようと思へばそれも出來るでせう。」

「そんなら貴方がたも結婚すればいゝぢやありませんか。」

ふとした事から話がそれたのであらう、結婚の事をいひ出したのが、何となく娘達の本心だつたやうに思はれて面白かつた。女にとつて、結婚以外に何があるものかと考へた。柘植は冗談ら

しくも、眞面目らしくも見せながら、卽座に言葉尻を捉へたのであつた。此の國の、此の年配の女が、この問題を如何考へて居るかといふ事も興味だつた。

「結婚ですつて。それがなかなか難かしいんですもの。」

相手は少し顔を赤くしたが、存外おちついて答へた。

「立派に暮らしてゐる家の娘なら、あつちからも此方からも候補者が現はれて來て、自由に選擇する事も出來るでせうけれど、今の私達のやうな者は駄目です。そりやあ、なかには何とか云ふ男の人もあるでせうけれど、あつたところで、それがきまつて暮しの立た無い同志なんです。つまり男の方も、いゝところの娘は到底も物にならないとあきらめて、あきらめたあげくの事なんでしよ。……日本では如何なんです。」

又しても話に乘り過ぎたと氣がついた風で、あべこべに質問して來た。

「日本ですか。日本では年頃になると、男の方にも、女の方にも、物好きや世話燒が群つて來て、なんでもかんでも夫婦にしてしまふのです。」

「まあ、なんて便利な制度なんでせう。」

柘植の言葉の調子も、その習慣の細かい實狀も、まるつきり理解しなかつたには違ひ無いが、

容易に男と女が結婚するといふ事柄は、悪意なく眞面目に受け入れたらしかつた。

かねがね、柘植は、日本の人、殊に近頃の若い女が、因習的な自國の結婚制度を嫌ふ心持には無理も無いと思ひながら、同時に、外國のは甚だいゝと思ひきめて居るのは、大間違ひだと思つて居た。物の理解の悪い爲めか、嘘つきか、それとも手段としてか、新しがりの女に媚びる男や、亞米利加歸りの女書生などが、無闇に、外國の結婚は自由だと云ふやうに吹聽するのが片腹痛かつた。一人々々の特殊の場合としては無理も起るには違ひ無いが、親や親類の勸める儘に結婚の出來る方が、結婚したくてうづうづしながら、しかも容易に結婚の出來ない外國人よりは幸福なのではあるまいかと考へて居た。

「寧ろ日本が羨しいわ。」

クリステインは、矢張り生眞面目な顔附でつぶやいた。

「何が？　結婚ですか。」

柘植の調子がからかふやうだつたので、娘は目もとや口もとに笑を忍びながら、默つてうなづいた。

「そんなら日本に行つて結婚なさいな。」

たゝみかけて、輕い冗談の氣分がそゝのかして來た。
「たつて突然行つても相手が見付からないでしよ。柘植さんが引うけて下さる？」
明かに先方もふざけ始めたと承知しながら、流石に柘植の胸も鼓動が高くなつた。
「えゝ喜んで。」
どんな場合にも、困つた樣子を見せ度がらない性質なので、平氣らしく受け流したつもりだつたが、あかるい朝の室の中に、顏の火照るのはかくせなかつた。彼は、うつむいて微笑しながら、先刻まるめた新聞を、膝の上に開いて讀んでゐる相手から目をそらして、ほつとして窓の外を見た。木立に騷ぐ雀も居なくなつた。輕氣球は何處迄行つたらう、靑空に浮ぶ雲ばかりが、今朝のままに、ゆるくゆるく流れて行つた。
「あゝあ、私も夙から働く口を探してゐるんだけれど……」
クリスティンは、此の頃の朝の日課にしてゐる、新聞の求職欄を、始からしまひ迄讀んでゐた。
「柘植さん、柘植さん。これ如何でせう。」
突然仰々しい聲を立てて、新聞のひと處を指さして、彼の注意を促した。
「郊外、宏大なる莊園に住む老貴夫人のお相手役。身分卑しからず、相當教育ある婦人、年齡を

不問。至急。」

廣告文を讀んで聞かせて、

「ね、いゝでせう。猶太人の商賣人の祕書役や、活動寫眞の會計書記よりもましでせう。上品な、白髮の伯爵夫人のお相手……」

半分は冗談らしくもあつたが、ふだんから家の內の息苦しさにあき果てて、何處かに行つて自活の道を開き度いと、口癖にして云つて居たので、柘植も本氣になつて、一度讀んで聞かされた廣告に、自分自身目を通した。

「ね、いゝでせう。至急とあるからには、方々から申込みがあるに違ひ無いわ。私、直ぐに手紙を出して見よう。」

勢よく立上ると、室の隅の小机にむかつて、氣忙しさうに洋筆を取りあげた。

「御免なさい。今朝のお稽古はこれつきりなのよ。どうせ柘植さんに敎へる何物も持合せがないんですもの。」

子供らしい顏を振りむけて、輕くしなをして笑つて見せたが、短衣のかくしから近眼鏡を出してかけると、そのまゝ一心に手紙を書き始めた。

「さあて、また圖書館に行つて、貴方がたの所謂無益の讀書でもして來ようかな。」

栢植は、さういひながら、重たい體を起して伸をした。おもはずしらずあくびが出た。

夕方迄、彼は圖書館の中で過した。此の頃は、曾て亞米利加で夢中になり、つい先頃も此の地で見た、愛蘭土劇團の研究に沒頭してゐた。地方色や國民性を超越した藝術の偉大な事は勿論であるが、其處迄に至らないものを價値づける要素として、土地と歴史に根を据ゑた藝術の魅力は消し難いものであつた。彼はその論據から、イェーツ、シンジ、グレゴリイ等の戯曲と、それを演じる一座について、一篇の論文を組立てようとしてゐた。せんさく好きの性來とて、何時の間にか材料を集める興味に耽つてしまつた。彼は毎日、うづ高く積んだ本を前にして、雜記帖に筋立てをしてゐたのだつた。

それなのに、其の日は妙に氣が散つて、長い時間を圖書館にゐながら、頭は散漫に他の事を想ひ浮べてゐた。少佐の家の有樣が、しつつこく目前に迫つて來た。自分の力で、一家の者を、すべて幸福にしてやる事も考へた。勿論よりどころの無い空想だつた。近頃際立つて自分に親しさを増して來た姉娘の事は、羨しい程心の中を往來した。手を組んで、日本へ連れて行く景色迄想像した。

歸途には、行きつけのカフエで、一杯のアプサンに小一時間も休息して、又しても立て込めた霧のむせつぽい中を、何かしら樂しい晩が待つてゐて吳れるやうな氣持だつた。
みんなは、旣に食卓の用意も出來てゐて、柘植のかへりを待つてゐた。夫人もヂンも、席に着いた。母親は黑つぽい他所行に着換へて、薄化粧さへしてゐたが、娘の方は未だに泣きはらした靑い顏をして、むつつりと坐つてゐた。
「柘植さん、僕は愈々氣球隊に編入されましたよ。士官の中に、昔知つてゐた男がゐて、偶然受附のところで出逢つたのです。その男が萬事口をきいて吳れて、卽座に採用されました。」
彼の隣席のMは、今迄家の者に話してゐたらしい出來事を、特有の熱情をこめたといふ調子できかせた。しかもその言葉に從へば、直にも士官にとり立ててくれるかもしれないといふのだつた。
「ほんとにお目出度いぢやありませんか。」
夫人は、自分から進んで、葡萄酒の杯を口につけながら、今朝怒號した時とはうつて變つた上機嫌で、Mの話に相槌を打つのだつた。
一切が、柘植にとつては意外だつた。ついその朝、ふと客間の窓越に、空を飛ぶ輕氣球を見て

思ひ付いた事が、その日のうちに實現されようとは信じられない事だつた。いくら英吉利が大國でも、そんなに容易に人を信じて、軍人に採用するだらうか。

「貴方は輕氣球には乘つた經驗があるのですか。」

どうしても信用しかねてきいて見た。

「否、ありません。しかし船には長い間乘つてゐました。」

何の躊躇する事も無く相手は答へた。一つの事に熟練してゐれば、他の事も容易だと確信して疑はない態度だつた。おもはずしらず吹出しさうになつたが我慢した。何となく、それが英吉利人の特徴だとさへ考へられた。

子供達の顏には、俄に勇士になり切つたMに對する尊敬の色が明かだつた。Mと夫人の話聲は、いつにもまして陽氣に、珍しく賑かな晩餐だつた。

葡萄酒の溫い醉に陶然とした柘植は、見る限り眞靑に晴れた大空に昇つて行く輕氣球の雄姿が、何よりも羨しく思はれた。

長女

翌日、Mは此の家を去つて氣球隊に加つた。來た時のまゝの着物で、何一つ荷物も無く、雨外套を腕にかけて、彼の偉大な姿は戸の外に出て行つた。
「今度の日曜にはみんなで隊に遊びに來て下さい。御案内しますから。」
夙に軍人になり切つたやうな言葉を、一同に殘して行つた。
「あゝ、彼の人はもう一人前の氣球乘になつたつもりなんだわ。」
見送つた姉娘は妹をかへりみて笑つた。
「Mさんは萬事があの調子よ。出たらめつたらありやあしない。」
唾棄するやうに云ひ捨てたが、怖い顏をして睨んで居る母親を見ると、首をすくめて、自分で自分の口邊をつねつた。
「何ていふ眞似をするんです。」
今にも叱りつけさうな氣勢だつた母親も、笑ふまいとしながら吹出してしまつた。けれども直に眞面目になつて、
「兎に角あの人は手柄を立てるに違ひ無い。強い人です。勤勉で、正直で――多少子供らしい處はあるけれど。」

持前の早口で、自分の確信を、熱心に主張した。

「クリスティンは如何思つて。私はお母さんとは反對だわ。」

母親の稱讃の言葉の力強さに、むらむらと反抗心を起したらしく、ヂンはたちどころに口を切つた。

「私にはあゝいふ人こそ信用出來ないわ。口先ばかりお上手で、その場限りで、無責任で……」

「お默り。いゝ加減にしないと承知しませんよ。」

母親は娘の言葉を中斷して、見る見るうちに顏色迄變つた。自分の信じてゐる人間の事を、我子の爲めに思ふさま罵られた憤りに堪へられなかつたのだ。ふだんは年齡に似合はない若々しい顏なのだが、怒つた時は暗い陰影が出來て、俄に老けて見えるのがおきまりだつた。

その母親の、こは張つて睨みつけながら、なほはしたなさを抑へようと努めてゐる樣子を、ヂンは輕蔑した目附で凝然と見たが、意地の惡い笑を鼻の頭に浮べて、小馬鹿にした風で肩を搖ると、梯子段を踏鳴して二階に上つて行つた。

「オオ」

唸るやうに低くつぶやきながら、はげしい舌打をした夫人は、激怒の爲めに頭痛のする額を手

の甲で叩き叩き、重たい足を引摺つて、食堂の中に姿をかくした。食卓の上に、何か手きびしく叩きつける音がした。

　その日は、晩餐の卓で、又しても夫人の心を亂す事が起きた。溫い肉漿の湯氣の立昇る燒肉の皿を前にして、クリスティンは急に改つた樣子で云つた。

「お母さん。私ね、いゝ仕事を見附けたんですよ。老貴夫人のお相手役なの。」

「何ですつて。」

夫人は驚いて、肉刀(ナイフ)と肉叉(フオオク)を下に置いて、まあるい目に怒の色を漲らした。

「何時私が許しました。何時私に相談したのです。」

「だつて、お母さんにきけばいけないつていふのは知れ切つてるんですもの。」

娘は伏目になつて、早くも涙組んでしまつた。

「許さないと知つてて、そんな輕はずみな事を……。陸軍士官の娘が奉公に出るなんて。」

はげしい屈辱に夫人は物を言ふ事も出來なかつた。誰も彼も、その爭ひの間に身を置いて、如(ど)何(う)していゝのかわからなかつた。

「第一、お父さんが許す筈がありません。私としても、留守中にそんな眞似をされては、申譯が

ありません。」

「お母さん。お父さんには昨日手紙を出したのです。きつと許して下さると思ひます。」

蒼ざめた顔をあげて云つた。

「いけません。その遣口は何です。私を出しぬいて、お父さんに相談するなんて事がありますか。いくらそんな惡がしこい事をたくんだつて、お父さんだつてお許しにならない事は確かです。」

只管娘の口を塞ぐやうに、夫人は押切つて斷言した。子供達のすべてが、我儘で、いふ事をきかないで、良い家庭の子らしくないのを、何時迄も何時迄も、繰返して憤慨した。

不愉快な食事の後で、夫人は直に二階に上つて、それつきり下りて來なかつた。客間に殘つた姉妹は、しきりに母親の無理解を攻擊し、その橫暴に反抗の氣勢を高めて、止度なく昏をひるがへした。

「お父さんはきつと許して下さるに違ひ無いわ。」

「エ、きつとよ。」

姉の言葉に相槌を打つて妹が答へた。

二三日たつて、果して父親からは許して來た。クリステインは、その手紙を母の目の前につき

つけて見せた。
「甘いつたらありやあしない。だから他人様には馬鹿にされるし、子供達はいふ事をきかなくなるんです。」
夫人は夫を責めるやうにつぶやいて唇を噛んだ。
「勝手になさい。私は何も知らないから。」
いふ事をきかない娘に對する忌々しさに震へながら、荒々しくその場を立去つた。
「御覽なさい。私の云つた通りお父さんは許して呉れたでしよ。」
父親の、いぢけた字で書いた手紙を、柘植にも見せた。
そんな心配迄させるやうになつたのを氣の毒に思つてゐる。許しておくれ……
自分自身の甲斐性の無さをかこつやうな文句もあつた。善良な老軍人の氣の毒な姿を、柘植は感傷的な氣持で想ひ描いた。
郊外の荘園に住むといふ老貴婦人のところからも返事が來た。兎に角一度逢ひ度いといふ文言だつた。
「あゝ、私の新生涯が始まるのか。」

クリスティンは感慨深く、確に代筆に違ひ無い、若々しい女の手の、簡短な返事を、繰返して讀んでゐた。

朝の食卓についても、何も味の無いやうに、せかせか喰べてしまふと、狼狽しく外套を着て、厚ぼつたい毛皮に顔を埋めて、黒い大きな帽子の下に、近眼の目をしばたたきながら、凍てついたやうに動かない霧の戸外に出て行くのだつた。

「柘植さん、今日はお稽古はお休みですよ。」

おもひ出した風で、つかつか戻つて云ひ殘した。

「お目見榮なんですからね。それどころぢやないわ。」

づつしりと重たく入口の扉がしまると、往來の敷石の上を急ぐ靴の音が、小走りに聞えた。非常な努力で感情を抑へつけてゐた夫人は、娘の姿を見送り果てて、力無く嘆息した。大きな目に、涙がいつぱい溜つて居た。

柘植も寂寞を感じてゐた。單純な、喜怒哀樂のかくせない夫人に對しては、その我儘な心から、いつも平靜を失つて、怒鳴つたり、泣いたりするのを、自分が當面の相手になる時は堪らないが、一面からは、憐憫と同情を持つ事が出來た。男のやうにさつぱりした、天の邪鬼の次女も、內心

は非道く親切で、學問や讀書は大嫌だと自分からいひふらし、母親からも思慮が無いと云はれてゐるくせに、此の家では第一の教育を受けた姉よりも遙かに物の理解が早くて、話をしてゐて一番氣持がよかつた。末の娘も男の子も、少しも心にやましい陰影の無いのがよかつた。

けれども、その人達のどれもが、餘りに柘植を了解して居なかつた。未開國から來た學生で、無闇に本を讀む事ばかりに熱中し、人づきあひの嫌ひな、だんまりの變物だと考へると同時に、存外物しりで、意外に親切で、頼もしいとも思ふのだつたが、しかもその感心する點も、不感服の點も、はなればなれに見える爲めに、一個の人格として考へる時は、全く不可解な人間だつたのだ。

たゞ一人クリステインは、一番多く異邦の人ともつきあつた經驗から、英吉利以外にも國のある事を知つてゐた。その國民の思想、文化、いづれも自分の國のものとは違ふ事も知つてゐた。殊に歐羅巴大陸を旅行した經驗から、長い間旅をした者の例にもれず、異國人に對する同情が深かつた。柘植にとつても、お互の感情を、理解し同情しあふのは此の一人だつた。へだての無い話にみが入つて來ると、クリステインは、自分の身のふり方をさへ、柘植の判斷をまつて極めようとする心持さへ見せた。極く極く輕い心の影として、彼は、女に對して、一歩踏み込んだ態度

に出る事さへ、想ひ浮べる事もあつた。

その日は、夕方圖書館から歸つて來ると、食事の支度で夫人は居なかつたが、きやうだいは客間にかたまつて、緊張した顔をして居た。

「栢植さん、私お目見榮に及第したんですよ。直に明日から行く事にきめちやつたの。」

彼を見ると、クリスティンは椅子を並べて話した。大木の林に圍まれた庭園の中の宏大な邸に住む貴族の老未亡人に逢つて來た今日の一日を、かくし切れない昂奮した調子で、次から次と紹介するのだつた。僂痲質斯の爲めと、肥滿し過ぎた爲めに、步行も不自由なその人にかしづく自分の、新しい生活に對する好奇心と輕い怖れとが、二十二の娘の胸にあふれてゐた。時にふと、聲を落して沈み勝になるのは、さういふ境遇になつてしまつた自分を儚なむ爲めであらう。かすかにもらす溜息を、栢植は同情してきゝもらさなかつた。

晩の食卓には、平生よりも御馳走が出た。栢植にはウイスキイを勸め、女連はキュンメルの杯に唇を觸れた。當のクリスティンはふだん着のまゝなのに、夫人は他所行に着換へて席に着いた。そんな事にも、夫人の育つた家風、その背景になつた時代などがうかゞはれた。娘が他所に出て自活の道を求める事に、ヒステリックに反對したのが、今は全くあきらめたやうに、寂しく沈默

してしまつた。その様子を見ると、夫人の執つた態度も、無理では無かつたやうに思はれるのであつた。

お別れの積りで、子供達ははしやぎ廻つた。ジョオジは手馴れたバンヂョオや、手製の提琴を持出して、姉の洋琴に合せた。キテイはおだてられて、惠まれた涼しい聲で獨唱し、ヂンは調子づいて袴をたくしあげ、弟の學校の帽子をかぶつて、蘇格蘭(スコッチ)舞踏の眞似をした。

「栢植さんもおやんなさいよ。」

「日本の唄をきかせて頂戴。」

口々にせつつかれて、苦笑してゐる手をとつて、田園舞踏を教へ込み、一人の洋琴の拍子につれて、床をふみ鳴して四人は踊つた。いつもいつも、無益に本ばかり讀んでゐて、相手にならない栢植が、意外にも小器用に覺え込んで、一緒になつて騒ぐのを、夫人は片隅の長椅子に坐つて、ひとりぽつちの寂しさで見守つてゐた。

翌朝は濃霧の中に、かぼそい雨が降つて居た。昨夜の騒ぎは忘れたやうに、みんながみんな、妙に嚴肅な顔をしてゐた。運送屋に托した荷物の外は、スウト・ケヱスが二個、手提鞄が一個あつた。何時もよりも心持濃い化粧をしたクリスティンは、はじめから目をうるませて居た。母親

も妹達も、いつときでも永く自分の側に引つけて置き度いと思ひながら、いざとなると何も口がきけないで、これから直に此の家を出て行く相手を、おもひ深く見詰めるばかりだつた。時々顔を見合せると、お互の心の中を見透されたやうな、てれた微笑をかはすのだつた。

「愈々お別れだわ。」

クリスティンはため息をして立上つた。雨除の外套を着て、もう一度、母や妹や弟と抱きあつて接吻した。

「左様なら。御きげんよう。」

柘植とも力強い握手をした。

「ヂャック。ヂャック。お前も達者でおいで。」

かすんだ目をしよぼしよぼさせて見上げてゐる老犬の額を撫でながら、クリスティンの聲はうるんだ。

二人の妹が近くの停車場迄送つて行く事になつた。自分で一つ、ヂンが一つ、スウト・ケェスを持つた。キティは手提鞄と姉の傘を持つてついて出た。濡れた石段を下りて行く時、長途の旅を經て來たらしい黒ずんだ鞄が如何にも重たさうに見え、踵の高い靴が危なかつた。柘植は自分

もその鞄を持つて見送りに行かうかとも心が動いたが、理由もなく恥ぢて止めた。夫人は入口の扉にもたれて、雨に濡れながら町角を曲つて行く娘の後姿を、暗然と見詰めて動かなかつた。

次女

クリスティンが居なくなつて、家の内は俄に暗くなつた。人手が足りなくなつたので、掃除も行屆かなくなつた。二人の娘を叱りつける母親の聲ばかりが、甲高く響きわたつた。やうやく居附きかけた女中も、口實をこしらへて暇をとつてしまつた。夫人の絶間のない小言に、到底も辛棒出來なくなつたのだ。

氣球隊に入つたMは、水兵服を着て、度々遊びに來た。旣に氣球の操縱にも馴れ、近いうちには海峽の防備につく事になつて居て、それと同時に士官に取立てられる筈だと、例の通り勇敢に、斷定的に話すのであつた。

深い霧か、霙まじりの雨の降る、わびしい日が續いた。將校夫人會の仕事は、矢張り忙しい筈だつたが、夫人はちつとも出て行かなくなつた。むら氣な性分だから、意外にはかばかしくない戰況と、愈々困難になつて來た募兵に倦きてしまつたのであらう。

「どうも頭痛がして堪らない。」

と、口小言のやうにつぶやきながら、しきりに額を叩いてゐた。

柘植の英語の稽古は、クリスティンがゐなくなつたので、自然と立消えになつてゐたが、或時、夫人は彼に云つた。

「柘植さん。貴方にお願みがあるのですが、きいて頂けませうか。」

何時もに無い氣の弱さが、その言葉つきに現はれてゐた。

「何ですか、私に出來る事でせうか。」

「では遠慮なく云つてみますがね、隨分虫のいゝ話なんですから、氣を惡くなさらないで下さい。」

又しても躊躇しながら、かくしきれない羞しさに顔が赤くなつた。

「ほかでもないのですが、あのデンですね。あれが又、百貨商店の賣子になつても、工場の女工になつても、自分でお小遣を稼ぐといつてきかないのです。私としては、家柄もあり、親類の手前もあり、どうしてもそんな事は許せません。クリスティンの時でも、私は斷じて許さないつもりだつたのですが……」

持前の早口で、夫人が柘植にいふのは、いつも口癖になつて居る家柄と、その家柄に背く事を

何とも思はない娘達の不心得に困じ果てた事、しかもさういふ娘達の申出も、もつともだと思はなければならない現在の家計の狀態を歎く事、その結果として、柘植の救濟を乞ふのは、ヂンの小遣取に、今迄クリスティンに習つてゐた英語の稽古を、引つゞいてやつて貰ひ度いといふのであつた。

「チンの方は、クリスティンとちがつて、學問も出來ないのですけれど、どうしても他所に出してお給金を取らせる事は忍べないのです。づうづうし過ぎるとは思ひましたが、思ひ切つて貴方にお願ひするのです。」

幾度も幾度も、自分の申出の厚かましさを辯護し、且つ恥入りながら頼むのであつた。

「承知しました。」

柘植は、斷り切れ無い立場になつてゐた。家柄や身分に執着して、羞恥の念を示さずには話の出來ない程悄氣てゐる夫人の心持は察しる事が出來た。俠氣に似た氣持もたしかにあつた。

「誰か、友だちの中にも、習ひ度いといふ人があるかもしれません。きいてみませう。」

夫人は感激して、まんまるい目に涙をためて、彼の厚意を謝した。

何事によらず、いつたん引受けると夢中になつてしまふ柘植は、友たちの中の誰に話を持つて

行かうかと考へた。誰彼と、よくは知らない人間迄も數へてみたが、結局は、一番親しい和泉と高樹を擇び出した。二人とも、ちひさい時から、學校中の秀才で、語學もみを入れて勉強した方だから、小娘のヂンの力では、到底も教へる勇氣さへ出ないだらうとは流石に考へられたが、それよりも此の一家の窮境を、少しでも救ひ度い心持の方が強かつた。

その日のうちに、郊外の和泉の宿に出かけて行つた。

「さうか、それは氣の毒だね。けれども、僕は近いうちにケムブリッヂに行く事になつてゐるんだ。」

最初から同情に訴へてかゝつた彼の話をきき終つて、和泉は直に溫い心持にはなつてくれたが、しめたと思ふひまも無く、既に豫ての心組み通り、倫敦を引拂つて、ケムブリッヂに行く事になつてゐるといふのだつた。

客間兼食堂の、煖爐の前に椅子を並べて話してゐると、あるじの老婆が、老齢と過度の肥滿の爲めに歩行の不自由な體を、娘に助けられながら、よたよた出て來た。顏附はヴィクトリア女皇に似た上品なお婆さんだつたが、無智で、おまけに英吉利人特有の一人よがりが、屢々相手を苦しませた。淺薄に、しかし何の疑もなく、基督教徒だといふほこりを持ち、他の宗教を信じ、又

は何の宗教をも信じない者を、甚しくいやしみ憐れんで、くどくどと筋の通らない事を喋るのだつた。柘植は面倒臭くなつて、無信仰を宣言してゐたから、一層此の老婆には惱まされた。ぬくぬく白肥りに肥つて、坐つてゐても息切れのする胸の邊を見てゐると、あまりに分量の多い肉體が、堪らなく憎らしくなつて來るのだつた。

娘は夙に婚期を失つて、此の老婆の世話をして一生を過さなければならないのだつた。舌たらずの、涎のたまつた口で、卑俗な口をきくのだが、それがぼけて居る老婆よりも、更に低能なものであつた。

此の家には、和泉の外にも二人の日本人が居たが、二人とも月給取で、シテイの銀行に出かけて行くのだつた。拔ん出て脊の高く、風采のすぐれてゐる上に、學問のある和泉は、三人の寄宿者の中で、ほしいまゝに尊敬を一身に集めてゐた。かりそめの茶話にも、親子は彼の批判をきかなければ承知しなかつた。舌たらずの娘の態度には、しつつこい程信頼を見せてゐた。

「あいつは和泉君に惚れてるぜ。」

などゝ、同宿の日本人はよくからかつてゐた。

夕方迄話込んでしまつた。方角の違ふ高樹の所にも廻る積りだつたが、寒い戸外に出るといぢ

けてしまつた。じとじと濕つてゐる草原を横切り、林の中をぬけて停車場に急ぐ道々、柘植は、和泉の宿の無智な人々の方が、なまじつかの家柄などにわづらはされてゐる少佐の家の人達よりも、遙に幸福だと考へてゐた。

「あゝ柘植さんが歸つて來た。」

待構へてゐて、デンは廊下に驅出して來た。

「柘植さん、お母さんが貴方にとんでもない事をお願ひしたさうですが、それは私が取消します。」

非道く昂奮した様子で、まんまるい目を一際まあるく見張つて、母親似の早口で、男のやうな強い調子で云ふのであつた。

「第一、何より先に、私には英語を教へる力がありません。自動車の運轉手にでも、兵器廠の女工にでも、百姓にでも、巡査にでも、ならうと思へばなれるけれど、英語の先生には到底もなれません。なれるわけがないぢやありませんか。それなのにお母さんてば、自分の一人合點で、待手勝手な事をお願ひするなんて非道過るわ。」

息をはずませて立て續けにまくし立てた。

「柘植さんだつて知つてるぢやありませんか、私の様なものにそれ丈の力が無いつて事は。知り

つつお母さんに調子を合せてゐるなんて、人が悪過ぎるわ。侮辱し過ぎてるわ。面白がつてるんだわ。」

「デン、デン。」

奥の室から、母親は狼狽して飛び出して來た。

「何を云つてるのです、失禮な。」

怖い顔をして娘を睨みつけてから、柘植の方には、無理につくろつた笑を浮べて振向いた。

「どうもわからない事ばかり云つて困つてしまふんですよ。」

「お母さんこそわからないんぢやありませんか。」

「默つてらつしやい。私が柘植さんにお話をするから。なんて大きな聲をするんでせう、みつともない。」

夫人は柘植に氣を兼ねて、娘をたしなめながら、

「まあ兎に角廊下では困りますから、あちらへ行きませう。」

と促して、先に立つて客間に入つた。デンも、ぷりぷりしながらついて來た。

「柘植さん、どうも此の人には手がつけられないんですよ。」

夫人は椅子に腰を下すと、直に始めた。今朝柘植に賴み込んで承知して貰つた英語の稽古の事は、ヂンに知らせなかつたには違ひ無いが、勿論苦情を云ふ筈は無い、親切を喜ぶ事と思つてゐると、意外にも夢中になつて怒り出した。自分には英語を教へる力は無い。クリスティンさへ、ほんとは、教へる事は出來なかつた。たゞ僅かに柘植の厚意で、續けてゐたに過ぎない。それを知りつゝ、一層學力の劣る自分が引繼ぐのは、慈善を強ゐるのとおんなじだ。斷じて慈善は受け度くない。さういふ意味の事を言ひ張つて、いくら說いても、なだめても、承知しないのだと云ふ事だつた。

「どういふものでせう。ヂンでは貴方に英語を教へる事は出來ますまいかしら。」

夫人の顏には、ありありと、當惑の色が見えた。

「そんな事があるもんですか。發音を直して貰ふ丈でもいゝんですから。」

柘植は心にもない返事を善意でした。

「ごらんなさいな。柘植さんのいふのが確かですよ。」

「よして下さい、お母さん。」

ヂンは腹立たしさうに舌打ちした。

「どうしても、私はいやです。——柘植さん許して下さい。これが私の性分なんです。」
唇が震へて、涙が溢れさうになつて來た。
柘植には、ヂンの心持はよく解つた。あんまりつけつけとまくし立て、最初から自發的には話に關係しない自分に對しても、いきり立つた甲高い聲を浴せかける態度は小面憎かつたが、その言ふ事はもつとも過ぎる位だつた。いゝ加減な妥協を許さない男らしさが、此の娘の美しさだとさへ考へられた。
氣まづい氣分に唇を乾かして、暗い電燈の下に、三人は暫時顏を見合せた。
「それでは柘植さん、折角御親切に云つて下さつたのですけれど、當人があゝいひますから、先程の話は取消しませう。どうもつまらない事をおきかせして濟みませんでした。」
夫人は嘆息して立上つて、晩餐の支度に、地下室へ下りて行つた。
「いやになつちやふな。お母さんて人はほんとにわからないんですからねえ。」
その姿が見えなくなると、ヂンは柘植の顏を見て笑ひながら、してやつたぞといふやうな意味で、首をちゞめた。
「矢張り娘が可愛いからですよ。」

「ふふん。」

いたづらつ兒らしく鼻を鳴らし、肩を聳やかして男の眞似をしながら、室内をぐるぐる歩き廻つた。あたりの空氣は、その冗談の爲めに輕くなつた。

「實はね、今朝貴方のお母さんから話があつたものだから、我が尊敬するデンの爲めに、友だちの所に勸誘に出かけたんですよ。英語の稽古に通つて來いつて。」

「貴方も馬鹿ねえ。——それで、そのお友だちの方も承知したんですか。」

「いゝえ、不幸にして、もう直き倫敦を立去るので駄目でした。それでなかつたら……」

「何が不幸にしてなもんですか。若しほんとに乘氣になられたら如何するんでせう。人を馬鹿にして。」

デンは、何かしら苛立たしい、捨てばちな調子で、しかもふざけ度なつてゐた。

「貴方は柔術出來るんでしよ。」

柘植の前に立ちはだかつて、無關係な事をいひ出した。柔術が如何いふものかは全く想像がつかないので、拳鬪の身構へをして、指輪の光る握りこぶしを、柘植の目先に突き出したり、ひつ込めたりしてからかつた。

「ね、柔術教へて下さらない。」
「残念ながら知りません。」
「嘘、うそ。日本人はみんな其の驚く可き狡猾な術を知つてるんでせう。露西亞に勝つたのも其の爲めだつていふぢやありませんか。」
「冗談いつて。そんな事があるもんですか。」
「はゝあ、柘植さんの羞かしがり。」
いきなり柘植の兩手を引張つて立上らせ、力任せに押して來た。不意を喰つて、ひとたまりも無くよろけたが、危ふく踏み止まると、其の場のはずみで、足をからんで、壁際の長椅子の上に相手の體を投げ出した。力があまつて、折重つて倒れた時、女の熱い呼吸が額に觸れた。立上ると、柘植は靴の音高く、二階に驅上つた。
食事の時は、ヂンは非道くとりすましてゐた。母親と柘植と、ありふれた話をしてゐるのを、何時もならば横から口を出す筈なのに、默り勝だつた。
「お母さん、柘植さんは今日の午後、お母さんの出たらめを眞に受けて、お友だちの所に行つたんですつて。私の爲めに英語の稽古をしないかつて。」

ふと話の途切れたところで、突然ヂンは口を切つた。

「まあ、ほんとですか。」

夫人は驚いて、

「申譯もありませんねえ、それ程親切にして下さるなんて。」

單純な心から感謝に目がうるんで來た。

「實は先刻又考へたんですが、佛蘭西語は如何でせう。貴方はちつともおやりにならないといふ事でしたねえ。」

「えゝアイウエオも知りません。」

「そんならヂンにでも手ほどきは出來るでせう。ひまの時には私が代理をつとめてもいゝのです。私は隨分長く稽古しましたし、巴里にも暫く居た事がありますから。」

自分の語學の力を示す積りで、母親は娘にむかつて佛蘭西語で話しかけた。

「駄目ですつたら、お母さん。私の佛蘭西語なんて成つてやしないんですもの。」

「だつて柘植さんは全く初めてなんだから。」

「初めてだつて同じだわ。最初にいゝ先生につかなくちやあ損ですよ。」

親と子は、又しても押問答を續け出したが、ヂンの語氣にも、全く柘植が佛蘭西語についてはは無知識だとわかつて居る爲めか、あまり力強い否定は現はれてゐなかつた。少なくとも、英語の教授を拒んだ時の熱は無かつた。

「それは私にとつても願つたりです。近いうちには是非始めようと思つてゐたのですから。」

柘植自身も、英語よりは此の方が望みだつた。來年の夏か秋には、巴里に行かうと考へてゐたのだつた。

「だつて駄目なんですよ。物を教はつた事はあつても、教へた事は一度も無いんですから。人に教へるつて事は、どうすればいいのか見當もつかないんですからね。」

「なあに、私の方が教はりつけてるから大丈夫です。先生を指導して、上手に教はつてお目にかけますよ。兎に角やつて見る事にしませう。」

うやむやのうちに、佛蘭西語の稽古の話はまとまつてしまつた。

霧の深い夜だつたが、彼は町はづれの高樹をたづねた。無教育な猶太人(ユダヤ)の夫婦と、一人前の女になりかけた年頃でゐながら、妙にがさがさして女らしくない小娘と、三人の家族の外に、室借(へやがり)の人が外にも二三人居た。しかし話相手になるやうなのは一人も無く、高樹は何時も煖爐の傍で、

一人ぼつちの讀書を樂しんでゐた。足下に鼻を擦りつけて來る赤犬を、
「こいつは馬鹿なんだぜ。」
といひながら、如何にその犬が他の犬共に馬鹿にされてゐるかを、高樹は屢々話すのだつた。犬の身の上の事にしても、あまり馬鹿にされ過ぎてゐるのが、彼の性分としては、腹立たしいのだつた。

栢植は佛蘭西語の稽古の事を切り出した。

曾て數箇月巴里にゐた高樹は、天性の語學の才能で、日常の會話位には差支へない程度迄進んでゐた。ヂンの教授では、勿論無理とは思つたが、冗談半分にやるのなら、差支へなからうと考へたのである。

「美人ぢやあないけれど、兎に角若い娘だから、遊相手の積りでやつて呉れないか。充分教へる丈の力は無いにきまつてるんだ。」

只管勸める事に熱中して、自分の宿の一家の狀態を細々と述べ、多少は友情に絡んで、遂々相手を納得させた。

何か大きな仕事でもしたやうな心持で歸ると、直ぐに夫人とヂンにその話をした。

「まあ、何んて御禮を云つたらいゝんでせう。ほんとに難有う御座いました。難有う。」

夫人は忽ち涙ぐんで、繰返して感謝した。

「耶蘇降誕祭（クリスマス）にはその方（かた）もお招きしませう。」

幸福な氣持で、夫人はひどく愛想がよくなつた。

祭の日は數日のうちに近づいてゐた。更けた夜の町を、つめたい霧に濡れながら、管笛を吹いて通る乞食があつた。夫人は手づから窓をあけて、ちひさい銀貨を投げてやつた。

耶蘇降誕祭の前後

耶蘇降誕祭の前夜から、霙まじりの雨が降り續いた。東洋の雜貨を賣る店で買集めた、心ばかりの贈物も、日本風の色彩の珍しさに、ひどく買かぶられた。夫人には、絹地に、櫻牡丹藤などの花を肉筆で描いた皿敷布（ドイリイ）を、娘達には友染縮緬の紙入に懷中鏡と蒔繪の櫛の入つてゐるのを、男の子には——これ丈は適當な和製の物が見つからないので、安物の萬年筆を贈つた。クリスティンの分は郵便に托した。みんなからも、それぞれ、柘植に向くやうに考へて選ばれた、ささやかな贈物があつた。

二十五日の晩には高樹も招かれて來た。夫人も娘達も、他所行の着物に着換へて、晩餐の卓に着いた。主人と姉娘の居ない事が、家の者の心に陰影を投げてゐた。

「去年迄はみんな揃つてゐて、一家の主人が雪の降る兵營で、妻子と別れて耶蘇降誕祭を迎へるなんて、考へた者もなかつたのに……」

夫人は、遠くゐる夫をおもひ、娘の事を考へては暗い顏附になつた。それもこれも、憎む可き獨乙皇帝の所業だといふ風に話すのが、此の頃の英吉利の――貴夫人も、勞働者も、淫賣婦も――あらゆる階級の會話の色彩であつた。

「七面鳥の燒肉と猪の頭、これが英吉利の耶蘇降誕祭の御馳走には、なくてならないものになつて居たのですけれど、今年は何處の家でも、そんな事は出來ないでせう。うちでは猪のかはりに兎なんですよ。」

諧謔を知らない生一本の夫人は、初對面の高樹に迄も、戰爭が世間に與へた影響と、所帶の苦勞を、口に出して云はなくては氣が濟まなかつたのだが、たくまないをかしさに、みんなは賑かに笑つた。

やがて其の兎の肉も、各々の皿に盛られた。昔のぜいたくを偲ばせるものは、地下室から取出

されたブランデイとシェリイ丈だつた。

食後は客間で骨牌をして騒いだが、それもひとしきりで、子供達の待構へた一年中のかき入れ日も、何となく寂しく更けて行つた。

骨牌の仲間に入れられて、遊相手をつとめた高樹も、一週間に三度ときめた佛語の稽古に來る事を誓つて歸つて行つた。

「矢張り學問に凝る方は違ひますねえ。知識的に見えますよ。」

夫人は、苦しい家計の中で、耶蘇降誕祭の大役を濟ませた安心に疲れたらしく、椅子の背に深々と全身を埋めて、高樹の噂をした。娘の爲めに、語學の稽古に通つて來て吳れるといふ事が、人のいゝ性質から、無上に嬉しい事だつたのだ。

「一體どつちが日本人本來の型なんです。貴方と彼の方と。」

ヂンはいたづらつ子らしい質問を、半分は意地惡く、半分は好意で聞くのだつた。がつしりと肥つて、額の迫つた、眉毛も太く眼も大きい柘植に比べて、額の廣い、色白の、近眼鏡をかけた弱々しい高樹は、人種が違ふやうに思はれたのだ。

「何を云つてるのです、失禮な。」

娘をとがめながら、夫人も微笑を禁じる事が出來なかつた。

「どつちも日本人ですよ。ブルドツグもセツタアも英吉利の犬ですからね。」

獨骨牌を並べてゐる柘植が答へた。

「フレエー。」

ヂンは手を打つて躍り上つて、笑つて笑つて笑ひ止まなかつた。笑ひ止んだと思ふと、足下にうづくまつて居た老犬の前肢を持上げて、ぐるぐる廻りながら舞踏の眞似を始めた。犬は涎をたらしながら、爲方無しにとぼとぼ足を運ぶのだつた。

「馬鹿ッ。」

先刻からバンヂョオを抱へ込んで、流行唄を彈いて居たジョオジは、姉の笑の仰々しさと、はしやぎ切つてゐる姿を見て、自分の感興を亂されたいまいましさに、苦々しげに舌うちしたが、直ぐに又夢中になつて、急調の絃の響に心を吸込まれてしまつた。

雨はまだ降り止まず、窓かけをかゝげて見ると、戸外の闇をさへぎる硝子戸に、水玉が落ちては流れ下るのであつた。

「さ、いゝ加減にお休みなさい。私は此の頃からだの具合が惡いのか、大變疲れてしまつたから

お先きに寝ます。柘植さん、おやすみ。」

あくびを手の平でかくしながら、夫人が出て行つてしまつた後も、子供達は矢張り昂奮してゐて、直ぐには寝床に行く氣になれなかつた。

二人の娘は肩を並べて洋琴を弾き、ジョオジはそれとは無關係に、勝手にバンヂョオをかきならした。柘植は獨骨牌が成功したら寝ようと心に誓ひながら、何時迄も何時迄も出來損なつて、癇癪を起しながらも、繰返して骨牌を切つては並べてゐた。

約束通り、高樹は稽古に通つて來た。その頃柘植は、毎朝、佛語の初歩の文法と、小學讀本を習つて居た。變則に、不器用ながらも覺えてしまつた英語と違つて、全くの初めてだつた丈熱心に、大概は自修して、その補ひを求める位だつたから、ヂンの教授でも事は足りた。しかしそれよりも進んで居る高樹には、勿論物足りないに違ひなかつた。時間が濟むと、二階の柘植の室に上つて來て話して行つた。

「到底も駄目だらう。」

「いゝや、それ程でも無いよ。初めから遊び半分なんだから。」

「それにしちやあ器量が惡過るね。」

「さうでもないさ。きびきびして居て面白いぢやないか。」

嘘の無さゝうな高樹の言葉に柘植は安心した。若しも友達が不滿足だつたら、自分の立場は全く無くなると、密かに怖れてゐたのだつた。嬉しかつた。豫々約束してゐた、ディッケンスの小說「デビド・コッパアフヰルド」を脚色した芝居に子供達を連れて行く時、高樹も誘つた。少しでも、ヂンに親しみを持たせようと願つてゐたのだつた。

千九百十四年は、大都を霧が包んだまゝ、暗澹として暮れてしまつた。獨乙の飛行船が海を越えて襲擊しに來るといふ、殆んど曾て想像も出來なかつた恐怖が、今にも實現しさうな豫感となつて、人々の心に喰ひ入つて來た。その飛行船の目標となる事を避ける爲めに、街上の燈火は殆んど消され、屋內の燈火も、戶外に洩れないやうに、窓かけで嚴重にさへぎられた。到るところに獨探の噂がかしましく、シヤアロック・ホルムスを主人公にしなければ納まらないやうな奇怪な事で、しかも信じ得可き話が、何處からともなく廣まるのであつた。重苦しい冬籠りの倦怠にむしばまれた心は、その飛行船の出現や、獨探の活躍の結果、此の廣大な世界の大都市が、一夜にして爆發してしまふ壯大悽慘な光景を、憧憬する事さへあつた。

主人の少佐も、愈々近いうちには戰場に行かなければならないといふ話が、家の內を一層みじ

めにした。夫人はその事を想ひ惱めば惱む程ヒステリツクになり、女中は幾人も幾人も出替つて、臺所働の愛蘭土種の女だけが、叱られながら、叱られると嚙みつくやうに反抗して、それでも、一週間に一度の情人の兵士との逢引をたのしみに勤めて居た。

そのだぶだぶの軍服を着た、薄髯の新兵も、正月早々、白耳義海岸線の防禦軍に加つて、戰場に運ばれてしまつた。

「ドラの兵隊も遂々出征したんですつて。」

末の娘にさう聞かされた朝、柘植は、當のドラが、二階の室の往來に面した窓に立つたまゝ、油に汚れた前かけの中に顏を埋めて、すゝり泣いて居るのを見た。

一月のなかばであつた。漸く二週間ばかり、週に三度通つて來た高樹が、來る筈で來ない日があつた。二三日圖書館にも姿を見せなかつた。ヂンも夫人も、佛語の教授が不滿足で來ないのではないかと心配してゐた。柘植も心に懸つた。しみじみと寒い日に、彼の下宿を訪れると、風邪を引いて寢てゐるのであつた。廣い額に手を當てて見ると、熱があつた。

「うちの連中は、君が佛蘭西語の稽古の馬鹿々々しさに堪へられなくなつたんだらうつて心配してゐたぜ。」

「そんな事はないよ。なほつたら又行くから、よろしく云つて呉れ給へ。」
高樹の言葉に安心して、柘植はその全快の日を祈りながら歸つた。
けれども彼は來なかつた。
「高樹さんはまだお惡いのかしら。心配する容體ではないんでせうか。」
夫人やヂンは、幾度と無く柘植にきくのだつた。
四日たち、五日たち、やがて一週間も過ぎた。或日、突然、高樹は葉書で云つて來た。
「お孃さんといふものに敎へて貰ふのは苦痛だ。」
とあからさまに書いて、稽古をやめにしようといふのだつた。
「畜生、勝手にしやがれ。」
友達なんぞといふものゝわづらはしさに、柘植はつくづく腹が立つた。もとより得手勝手な我儘者には違ひなかつたが、それにしても一體此の家の者に、何と云つて斷つたらいゝのだらう。小憎らしい程達筆の、高樹の葉書を目の前に置いて、何時迄も頭に上つた血は下らなかつた。
高樹はそれつきり、二度と足ぶみをしなくなつた。柘植は、嘘をつく不愉快に又しても憤懣しながらも、爲方が無くて、友達は病氣が重くなつて來られないのだと云はなければならなかつた。

家の者が眞に受けて、聲をひそめて心配さうに容體をきくと、
「たぶん肺結核でせう。」
と答へてやつた。
それでも、間も無く、圖書館で顏を合せると、つけつけと荒い口はきゝながらも、歸路に立寄るカフヱで、一杯のアプサンを飮んでゐるうちに、氣まづかつた事も忘れて、醉ふと何時迄も話込んで、別れともなくなつてしまつた。
「あゝあ、折角栢植さんの御親切で、お友達にも稽古に來て頂いたのに、どうしてかう運が惡いのだらう。」
夫人は頭痛のする額を叩きながら、手持不沙汰のヂンを見て嘆息するのだつた。さういふ言葉をきくと、
「又誰か、友達の中に希望者があつたら御紹介しませう。」
といひながら、栢植はゐたたまれない氣持だつた。
「お母さん、私は郵便局に出て見度いの。モリスン少佐のとこのアリスも行つてるんですよ。」
末の娘のキテイは、近頃しきりにその願を母親に繰返すのだつた。陸軍士官の娘として、そん

な仕事はさせられないといふ夫人の拒絶も、段々氣勢が弱くなつて來た。殊に同僚の娘もさういふ事に從つてゐるといふのが、我慢の出來ない筈の我慢をさせるもとにもなつた。

「勝手になさいな。私はもう何も知らないから。」

なさけなささうに云ひ捨てて、夫人はその時座にゐたゝまれなくなつたのであらう、みんながあつけにとられてゐる中を、驅出すやうに室外に出て了つた。

その事があつてから二三日すると、キテイはもう町中の郵便局に、朝早くから通ひ初めた。僅かのお小遣を稼ぎに、耶蘇降誕祭に父母から貰つた人造の黑斑の豹の毛皮の襟巻に顏を埋めて、露霜を踏んで出て行くちひさい娘の姿を、夫人は涙無しには見る事が出來なかつた。

流行感冒

心寂しい夫人は、兵營に居る夫に逢はなくては居たゝまれない樣子で、一週間を期して出かけた。

子供達は、母親の留守をいゝ事にして、毎日々々騷ぎ暮らした。夕方、圖書館から歸つて來る柘植と、郵便局から歸つて來るキテイを待つて、手輕な夜食を濟ませると、倦きもしずに骨牌を

繰返した。誰にも頭を押へ付けられない生活の歡喜を、三人の姉弟はかくす事が出來なかつた。

吾々は、今、お母さんの留守中、

最も樂しい日を送つてゐます……

郊外の他人の家に住む、クリスティンへ宛てた寄書の葉書の冒頭に、ヂンの書いた文句を、外の者も面白がつて口吟んだ。

その姉からは、近頃しきりに、父母の家の戀しさに堪へられない事を云つて來た。膝關節の不自由な、老貴夫人の氣むづかしさに、屢々泣かされる事などを、細々と書いて來る事もあつた。

一週間たつても夫人は歸つて來なかつた。別段家の方に、用事もあるまいから、なほ數日を父親と共に暮らすであらうと、母親の手紙にあるのを見出して、子供達は更に喜びを新しくした。けれども、或日、ジョオジが眞靑な顏をして學校から歸つて來た。床に就くと發熱して震へ出した。氣の弱い此の少年は、いつぱい涙のたまつた眼をつぶつて、姉達の看護に身を任せた。

「お母さんに知らせなくてもいゝかしら。」

キテイは流石に心配して、直ぐに母親を頼る心を起したが、ヂンは卽座に反對した。

「輕いインフルエンザだから、うつちやつといても二三日でなほるに違ひ無いわ。ねえ、ジョオ

ジ。お母さんなんか呼ばなくたつていいわねえ。」

押つけるやうな姉の言葉に、弟は眼を開いて頷いて見せた。挑色の頬ぺたをつたはつて、涙が流れて來た。彼は頭から蒲團をかぶつてしまつた。

「いゝ子、いゝ子。」

ヂンはへらず口を叩きながら、晩の支度をしなければならなかつた。

そのヂンも、次の日から發熱して寢込んでしまつた。姉と弟は、壁一重へだてた室に、別々に咳入つてゐた。

心配して、郵便局の勤務にも行き度がらない妹を叱りながら、ヂンのまんまるい大きな目も、熱の爲めにうるんでゐた。

「お母さんになんか默つてる方がいゝのよ。」

二日、三日、又しても降りつゞく雨の寒い日を、キテイは朝も早く起きて、病人の世話をし、そゝくさと郵便局に出かけるのであつた。夜は夜で、食事の支度もしなければならなかつた。忙しく、甲斐々々しく、年弱の娘の働くのを見てゐるのは、柘植にとつても苦痛だつた。夫人の留守は、矢張り望ましかつたが、さりとて斯うした場合だから、何の報知もしないのはいけないと

思つた。
「兎に角お母さんにしらせた方がよくはない。」
キテイと差向ひのさびしい食卓で云つてみた。
「えゝ私もさう思ふんですけれど、ヂンはそれには及ばないつてきかないんです。」
おとなしい娘は、頼りなささうに答へた。
それから二日ばかりたつた夕方、圖書館から歸つて來た柘植は、客間の長椅子に突伏して泣いてゐるキテイを見出した。外出のまゝの、帽子もとらず、外套も着たまゝのが、毛皮の襟巻の中に顏を埋めて、むせび泣くのであつた。
「どうしたの。お母さんが歸つて來たの。」
わけのわからない光景に驚いて、遠くから聲をかけながら、柘植は、夫人に叱られたのではないかと思つた。突然母親が歸つて來て、病人を見て、それをしらせなかつた事について、此の小娘の責任として叱つたのだらうと考へたのだ。
「お母さんが歸つて來たの。」
もう一度同じ言葉を繰返したが、相手は烈しく横に頭を振つた。つばの廣い帽子につけた紅い

薔薇の花が、形を崩して搖れた。

近寄つて、躊躇しながらも肩に手をかけた。泣きじやくる背中の肉の波打つのが感じられた。

「胸が痛いんです、胸が……」

きゝとれない程の聲で答へて、一層堪へ性がなくなつて泣いた。

「熱があるんだね。さうぢやない？」

柘植は相手が病人だと思ふと、手をかけても構はないと思ふ安心を持つた。いきなり兩肩をかゝへて、力任せに抱き起した。拒まうとしながら拒み切れずに、涙の顏を見せたキテイの頰ぺたには、濡髮が幾條もへばりついてゐた。額に手を當てて見ると熱があつた。

「さ、寢なくちやいけない。うちの事なんか心配しないで寢てゐれば直きになほる。」

何か云はうとして、色の褪せた唇を震はせながらしやくり上げてゐるのを、引起して、無理やり二階に連れて上つた。

引續いて女中の居つかない折柄、臺所働のドラの手ひとつでは、三人の病人の世話はやりきれないに違ひなかつた。柘植は夫人に宛てて手紙を書いた。電報にしようかとも考へたが、あんまり大仰過ると思ひ返した。至極く手短かに、三人の子供が順々に風邪を引いて床についた事を、

心配するには及ばないといふ言葉を添へて書いた。讀返して、封をして、切手を貼つて、何となくそれを出しともない氣持を感じながら、戸外に出た。冷い雨の降り止まない町角の郵便箱へ、自分で行つて入れて來た。

中一日置いて、夫人は歸つて來た。三人が三人とも同じ容體で、高熱と、絶間の無い咳に惱んでゐるのを見て、冷靜に物事を處理する事の出來ない性質の夫人は、何も手につかない様子で、昂奮し切つてゐた。

「難有う、柘植さん。貴方が知らせて下さらなかつたら、あの三人は如何なつたでせう。」

などゝ、いかにも重態のやうに云ふのだつた。子供達が申合せて、自分には知らせなかつたとは考へないで、只管柘植の親切に感謝してゐた。人手の不足を歎きながら、二階の病室と、地下の臺所へ、肥つた體を運びながら、心配のあまりに涙ぐんでゐた。

「かういふ時に、クリステインがゐてくれゝば大助かりなんですけれど。」

と、離れて他人の家に仕へる姉娘の名を、幾度となく口にした。

四五日たつて、ヂンとキテイは前後して床を離れた。ふだんから一番弱いジョオジ丈が、なかなか熱が下らなかつた。

「柘植さん、クリスティンが歸つて來るさうですよ。」
或朝の食卓で、夫人は姉娘の手紙を見せて、嬉しさうだつた。
「實はあんまり手が無くて困つたものですから、うちが病人だらけで始末がつかないと云つてやつたのです。ところが、あちらも老夫人のお相手が苦しくて、そろそろ我家戀しくなつて來たところだつたものですから、いゝ機會にして歸つて來るらしいのです。矢張り兩親の家程いゝところは無いのですからねえ。今度こそは親の愛がわかつたでせう。」
いふ事をきかないで出て行つた娘の歸つて來る事に對して、優しい親心ばかりでなく、自分の言ひ分の間違ひでなかつた事をほこる態度で、喜んでゐるのだつた。
姉が歸つて來るといふ事は、妹達のよろこびだつた。毎日々々、その金曜日迄の日數を數へて樂しんでゐた。ジョオジも平熱に近くなつて、時折は寬衣にくるまつて、手馴れた樂器を弄んでゐた。
愈々その待遠しかつた金曜日には、朝から家の中が明るかつた。
「今日は早く歸つていらつしやい。クリスティンが歸つて來ますから。」
圖書館へ出て行く柘植の後から、夫人は晴れやかな聲をかけた。

クリスティンは歸つて來た。不如意な我家の家計を見て、此の頃の若い女の誰もが考へるやうに、或る勇しい行爲だとさへ思つて、自活の途を求めて行つたのだつたが、他所の家の煖爐は、我家のよりも暖かくなかつた。老貴夫人の、門閥と家風を鼻にかけた横柄な態度で、全然平の召使と同樣に、威壓的に命令して來るのが、根が良家のお孃さんで育つた者には、旣に堪へられない事だつた。その上に、主人といへば其の老夫人の外には無く、廣い邸宅のどの部屋も、人間の呼吸のしない事が、堪へ難い寂寞だつた。

「私はその窮屈と退屈の中で暮らしてゐたのですよ。」

頰のあたりに瘦の見えるクリスティンは、楡木立に圍まれた伯爵の家の幾日かを、細々と物語つて、身震ひするやうに笑つた。

「それで、やつとおもひ知つたでしよ、他人の辛さが。」

娘の歸つて來た事に滿足しきつてゐる夫人は、機會があれば押かぶせて、いひきかせなくては承知出來ないのだつた。

「たつて爲方が無いわ。みんなが病氣だつていふから歸つて來てあげたんぢやありませんか。來てみるとみんなぴんぴんしてゐるんですもの。」

母親の前では、弱味を見せまいとして、病人の爲めに歸つて來たのだと云ふのであつた。
「そんな負惜みを云つて、手紙の度にお勤は辛いとこぼしてゐたくせに。」
「いゝえお母さん、働く事は辛棒出來るわ。たゞ働く場所の選擇が惡かつた丈なのよ。私もキテイと一緒に郵便局にでも出ようかしら。」
親と子は、何時迄も、さういふ輕い爭をつゞけながら、お互に久しぶりで家庭らしい氣持を家の内に感じて、心持は暖くなつてゐた。
二週間近く兵營に暮らして來た夫人は、天晴軍事通になつた氣たつた。此の幾月の間の、怖しく沈默した對陣は決して無意味なものではなく、春三月の雪解と共に開始される、東西兩面の總攻擊の準備の爲めで、愈々その總攻擊が始まれば、獨乙はひとたまりもなく潰走すると、確く信じてゐるまゝに、誰人にも肯定させなくては承知しなかつた。しかし、總攻擊が始まるといふ事を、確かな筋から聞いて知つてゐるのは自分一人だといふやうな、無邪氣な得意のうらには、その未曾有の大戰鬪に、自分の夫も參加しなくてはならないといふ暗い不安が絡つてゐた。
「どうしても三月迄には、ダアダネルスか佛國戰線か、どつちかにやられるさうです。」
と、夫の身の危險に曝される事を考へる時は、忽ち顏の色迄も變つて、目には涙を浮べるので

あつた。

風邪を引いた者は、みんな元氣になつて、ジョオジは學校へ、キテイは郵便局へ通つた。栢植の語學の稽古は、クリスティンとヂンと、手すきの方が受持つ事になつた。二人とも、何かしらい丶仕事さへあれば、何時からでもそれに從はうと考へてゐて、毎朝の新聞の職業欄を引張りあつて見るのだつた。殊更クリスティンは、父母の家の懷しさを沁々感じたのも束の間で、我儘がきけばきく丈、思ふに任せない我家の無刺戟に、今にも家を飛出す事さへ辭さない様子に見えた。娘達の從順でない事は、夫人の心持を愈々苛立たせないでは置かなかつた。一度、二度、目見榮の女中の來た事もあつたけれど、夫人の人使ひの荒さに閉口して、逃げてしまつた。爲方が無しに、娘達はこき使はれる事になつた。

一月も終りに近い或日の事、日の暮に外から歸つて來た栢植は、入口の出合頭に、あわたゞしく出て來たヂンに逢つた。

「何處に行くの。」

「藥屋迄。Mさんが來て、病氣で寢ちまつたんです。ちえッ、厄介つたらありやしない。」

舌打ちして、まんまるいお尻をぷりぷりさせながら、足早に町の方へ行つてしまつた。

氣球隊に入つてゐたMは、今日久しぶりで遊びに來た。相變らず元氣よく、皆を相手に、隊の話をしてはゐたが、此の頃氣球に乘つて、高空から四方を見張る過勞の爲めに、視神經が弱つたのか、風に當つても涙の出る眼が、熱氣を帶びて充血してゐた。氣分が惡いのではないかと、夫人が氣が付いて聞いた時は、既に午後のお茶もおしまひになる頃だつたが、額に觸つて見ると非道く熱いので、俄に騷ぎ出して、先刻から二階に寢てゐるといふのだつた。

娘達は、ふだんから好意を持つてゐないので、自分達の仕事の殖えた不平もまぜて、陰口をきゝ度がつた。

「最初からうちに寢込む氣で來たに違ひないわ。づうづうしいにも程があるわ。」

誰憚からぬヂンを眞先にして、他の者も調子を合せるのだつた。

「そんな事をいふものぢやありません。Mさんはうちの古いお友達なんです。しかも御國の爲めに志願して軍人になつて、人一倍働いて病氣になつたのだから、戰場で負傷したのと同じ事です。」

夫人は子供達をたしなめて、Mの人となりをほめ、同時に又、彼が軍人として、如何に激しい勞役に服したかを——多分M自身からきかされた通り——力を極めていひきかせるのであつた。

「柘植さん、貴方も見舞つてあげて下さい。貴方のお部屋の隣りですから。」

食後の珈琲を飲んでゐる時、さういはれて、否とも云へずに二階に上つた。隣室は、平生夫人の部屋になつてゐた。扉を叩いたが返事が無い。二度叩いても返事がない。それをいゝ事にして、自分の部屋に入つてしまはうかとも思つたが、思ひ切つてあけて見た。廣い室の正面の煖爐に燃える火の氣の爲めか、病人の熱の爲めか、蒸されるやうな空氣が漲つてゐた。まだ片附けてない夫人の衣類を、不取敢一纏めにしたのであらう、椅子の上には女物の外套や、短衣や、毛皮の襟卷などが、取亂して積んだ儘になつてゐた。屛風で圍つた一隅には、此の家の夫婦のもので、近頃は夫人が獨寢の床であらう、大型の寢臺に、日に燒けた廣い額に氷囊を乘せて、大男のMが昏々として眠つてゐた。鋭い鼾が聞えた。近寄つて、猶太型の鉤形の鼻の盛上つた寢顏を見下したが、その顏面の輪郭が與へる印象か、故もなくむらむらと、不快の念が頭の中にいつぱいになつた。

安全剃刀

Mの病氣は、何時迄もよくならなかつた。繃帶をした患部の熱氣は、脂汗の滲み出した半面に、

不自然な紅潮と陰影を描き出して、癖のある容貌を一層強くくま取つた感じがあつた。見舞に行つても、大概は、苦痛に疲れて眠つて居た。其の容體は一週間ばかり變りが無かつた。

人手の無い時に、一人の病人はいろんな用事をふやして、家内の平和を亂した。口やかましく命令ばかりしてゐる夫人は、病人の枕頭に腰を下して看護しながら、のべつに廊下へ顏を出して、階下で働いてゐる娘達の名を呼んだ。水を缺いて來い、水を汲んで來い、といふやうな事を、一つの用事をいひつけて、それがまた濟まないうちに、追かけて又いひつけるのであつた。殊に食事を運ぶ事は、娘達の最もいやがる事だつた。折角自分達が食卓へ着いて、食事を始めようといふ時に、錫の大きな盆に載せられた病人の食物を、先づ誰かゞ二階に運び上げなければ、みんなが肉刀を持つ事は許されなかつた。

「さ、誰かこれをMさんに持つて行つておあげ。」

母親にさう云はれると、又かといふ顏附で、お互に目を見合せるのであつた。

「キティ、これをMさんに持つて行つておあげ。」

ヂンは直に母親の聲色で、妹にからかひ面で命令する。

「いゝえ、私は昨日も二度、今朝も一度運んだんだから今度はヂンの番だわ。こすいつたらあり

やあしない。」

白眼でうらみがましく拒むのがおきまりだつた。

「そんな事を云つてないで早くしなくてはいけません。今朝キティが行つたのなら、今度はヂンが行けばいゝぢやありませんか。」

夫人は忽ち苛々して、その大きな盆を娘の方に押やるのであつた。

「そんならお母さんが自分で持つて行けばいいでしよ。お母さんが無理に泊めてゐる御病人なんぢやありませんか。」

「何ですつて。」

夫人は椅子を離れて立上つた。手に持つ肉切庖丁が、焼肉を盛つた皿のふちに震へてゐた。

「私達は、朝から裁縫や臺所働迄させられて、新聞を讀むひまもありやあしない……」

母親の權幕にぎよつとしながらも、ひるんだところは見せ度くないと思つて、ヂンはまだへらず口をきいてゐたが、それでも目の前の盆を兩手に持つて、ふてた身振りで二階の病室へ運んで行つた。

夫人はさういふ時には、何時迄も不機嫌で、事毎に角目立つて聲を高くした。それに對して娘

達は、皮肉な微笑を酬いながら、母親の姿が見えなくなると、口を揃へて陰口をきくのであつた。人のいゝ母親が、口の上手な、取入る事の上手なMの爲めに、すつかりまるめられてゐるのだといふやうな事を、柘植にも聞けがしに云ふのである。

その柘植も、病人の爲めにいやな思ひをしなければならなかつた。彼は、ほんとに病氣で惱んでゐる一人の男を哀れむ心は持ちながら、最初から消えない直感的の不快な印象が、どうしてもMに對して好感を抱かせないのであつた。

「柘植さん、貴方に御願ひがあるのですが。」

と夫人に切出されたのは、病室の前の廊下だつた。聲をひそめて居る事から察して、病人にかゝはる事だと直に考へた。

「貴方のお部屋の鏡臺に置いてある安全剃刀ですね、毎朝貴方のお髯を剃るのはあれでなんでしよ。」

いひにくさうに、とりつくろつた笑顔を傾けてきかれるのを、柘植はおもひもかけない事に思つた。

「ほんとにお頼みしにくい事なんですけれど、あれでMさんの髯を當つては頂けないでせうか。

今日は少しは氣分がいゝと云つてゐますから。」
夫人は心持顏を赤らめて、媚びるやうな、てれたやうな樣子で返事を待つた。
「さあ、他人（ひと）の顏をあつかつた事はありませんから、少し危つかしい氣持がしますね。」
柘植は意外な要求に困つて、すゝまない心持で答へた。
「だつて安全剃刀なんぢやありませんか。」
「安全と云つても絶對に切れないといふわけでないのです。下手にやれば矢張り危ないのですからね。現に私なんか髯がこはいものだから隨分しくじる事が多いんですよ。」
彼は眞靑に剃つた顋に、血の吹いた痕の殘つてゐるのを見せた。
「左樣（さう）ですかねえ。私は絶對に安全なのかと思つてゐました。――でもざつとでいゝんですから、おひまの時にやつて見て下さいな。」
繰返して頼まれて、彼は否（いや）とは云へなくなつた。
「ではお稽古が濟んだらやつて見ませう。」
柘植は夫人の感謝の言葉を後にして、階下の客間に下りて行つた。
漸く掃除の濟んだところで、珍しく晴れ切つた靑空の窓の下で、惰性になつてやつてゐる佛蘭

西語の稽古をした。會話の練習と稱して、面白半分に姉妹二人を向に廻して、片言を並べるのが此の頃のつとめであつた。

「兎に角進歩のあとは見えるでせう。」

だらだらと小一時間を過して、椅子の背に仰向になりながら伸をした。何のわだかまりも無い心持で、娘達を相手にしやべつてゐるのが、一番呑氣でよかつた。

「確かに。」

相手は、いゝ加減ふざけ疲れたと云つた風に、簡短にうけたまゝで、姉も妹も、既に一枚の新聞を開いて、兩方から引張り合つてのぞき込んでゐた。又しても此の頃は、職業探しに夢中になつてゐるのだつた。

「ね、ね、柘植さん。女の自動車運轉手駄目でせうか。」

ヂンは、目をつぶつてゐる柘植の椅子の背中を叩いて、返事を促した。その種類の女の勞働は、近頃やうやく市中に姿を見せて來たものだつた。

「私は家庭教師だとか、書記だとか、そんな堅苦しい事は到底も駄目なんですもの。自動車なら易しいでしよ。」

「駄目々々。お孃さん育の運轉手なんか活動寫眞好みだ。」
目をつぶつたまゝで柘植が答へた。
「何いつてらつしやるの、眞面目に御相談してるんぢやありませんか。」
「だから眞面目に駄目だつて云つてるんですよ。第一お母さんが承知しますまい。平民の娘とは違ふつて。」
「お母さんなんか……」
勢込んで反駁しようとした時に、部屋の扉が開いた。驚いて振かへる娘の目の前に母親の姿が現れた。
「柘植さん、お稽古は濟みましたか。濟んだら先程お賴みした事を願ひ度いのです。恰度Mさんも今退屈してるところですから。」
「承知しました。うまく行くかどうだか危つかしいものだけれどやつてみませう。」
柘植は今更斷れないので、故意と威勢よく立上つた。
「何をするんです、柘植さん。」
「なあに床屋になるんですよ。」

「床屋？」

姉妹は腑に落ちない顔をして、いちどにきゝ返した。

「えゝ、Mさんの髯を剃つて上るんです。」

「まあ、お母さんたら、柘植さんにそんな事をお願ひしたんですか。」

クリスティンは母親をとがめるやうに、さもあきれたと云ふ様子を見せた。

「およしなさいよ、馬鹿々々しい。」

直ぐさまヂンは憤慨してしまつた。

「餘計な事を云はなくてもよござんす。柘植さんが親切に引受けて下さつたのに、貴方がたの關係した事ではありません。Mさんは病人ぢやありませんか。」

「なんぼ病人だからつて、よく知りもしない柘植さんに、そんな事を頼むなんて失禮でしよ。」

「よく知らない事はありません。柘植さんは此の家の家族と同様に思つて居て頂いてるのです。」

「それにしたつてお母さんが自分でやればいゝぢやありませんか。」

「私に出來れば他人様には願ひません。出來ないからこそお願ひするのです。」

癇癪筋が額に疼いて居る様子で、今にも甲高い聲で怒鳴り出しさうに思はれた。

「兎に角やつてみる事にしませう。そのかはりしくじつて傷位つけるかもしれませんよ。」

二人の爭に割込んで、當の柘植は、その場の息詰つた場面を轉換しようとした。

「それではどうぞ。」

夫人は憤りに乾く唇に強ゐて微笑を浮べながら、矢張り娘の方を尻目にかけてゐた。

「お湯と石鹼を持つて來て下さい。」

「只今。」

それをいゝきつかけにして夫人は室外に去つた。

「柘植さんも下らない事を引うけなくたつていゝぢやありませんか。汚ならしい髯なんか剃つてやるなんて。」

デンは他人事ながら忌々しいと云つた調子で、

「お母さんこそ自分でやればいゝんだわ。御自分の御寵愛なんぢやありませんか。」

傍の姉と目を見合せて、意味あり氣に笑つた。柘植はその場の樣子から、直に不快な想像をたくましくした。

「さて、腕をふるつて來るか。」

まぎらかしを云ひながら、自分の部屋にかけ上つて、安全剃刀の小箱を持つて病室に行つた。
「お入りなさい。どうも御苦勞さま。」
夫人は病人の枕もとに、いひつけられた石鹼や湯を揃へて待つてゐた。
「Mさん、柘植さんが御親切に、貴方をきれいにして下さいますつて。」
さういはれて、Mは存外勢よく、むくむく起上つた。
「どうも濟みません。とんだ御迷惑です。」
長い間寢込んでゐるにも拘らず、持前の強い聲で挨拶して、半面を卷く繃帶を無雜作にとり始めた。
「およしなさい、私が取つてあげませう。」
夫人は寄添つて、叮嚀に解いた。眞赤に爛れた片方の眼の中は、血脈が幾條も通り、目のふちは紫色にはれ上つてゐた。面變り（おもがは）のしたその頰から咽喉にかけて、密生したこはい髯がべつたり延びてゐた。
湯で濕して、刷毛で石鹼をぬりつけると、湧上るやうに泡立つた。柘植は、左手で相手の頰邊を押へながら、剃刀を取上げた。不愉快な音を立てて刄の光る度に、粗い髯は、踏躙られた草の

やうに、石鹼の泡にまじつて落ちた。病人は目をつぶつて、爲すがまゝに任せてゐた。猶太型の鼻から出る太い息が生あつたかく柘植の手にかかつて來た。彼はその鋭い鼻梁に對して反抗的の憎惡を感じてゐた。

「まあ、上手に剃れるぢやありませんか。」

傍の夫人は心底から感心して聲をあげた。病人も同意を表して頷いた。

片方の頬ぺたが濟むと、今度は眼の惡い方を手がけなければならなかつた。

「痛くはありませんか。」

「いゝえ。」

横に首を振る心持を見せはしたが、目の下に刄を押當てると、紫色に浮腫の來てゐるところに血が寄つて、剃刀を持つ方がかへつて不愉快だつた。段々に頬ぺたから顎に下つて來ると氣が樂になつたが、咽喉のあたりの剃り惡さは、幾度となく刄の滑りを止めて、思はずしらず力の入り過る事があつた。二三ケ所から留針の頭よりもちひさい血の玉が噴出して來た。

「あら、血が出て來た。」

しまつたと思ふひまも無く、傍の夫人が眉をひそめた。

「切れたのですか。」
病人も白い目をして柘植の手許を心許なさゝうに見守つた。
「こゝの處は髯がこはいものだから……」
いひわけをしながら、柘植もその血の湧いて來るのを見てゐた。蚊にさゝれた位のちいつぽけな切傷から、眞赤な血は止度なく噴いて來た。
漸く剃り終つた時は、柘植の手は石鹼と人肌のぬくみで不氣味に濡れてゐた。
「見違へるやうに綺麗になりましたよ。いゝ氣持でせう。」
夫人は顏を洗つたMに鏡をさしつけた。
「難有う。」
口では叮嚀に挨拶したものゝ、Mは仰向になつて、鏡に映る咽喉の切傷ばかりを氣にして見てゐるのだつた。明かに、柘植の腕前を非難するものゝやうに感じられた。彼はさつさと道具をしまひ始めた。
「どうも御苦勞さま、又明日もお願ひしますよ。」
夫人の言葉を背中に聞きながら、不愉快な心持で室外に去つた。

その日から、Mの髯を剃る事は栢植の仕事になつてしまつた。彼は自分自身の手數のかゝる濃い髯に難澁してゐた上に、負けず劣らずの他人の髯を剃る事は、殆んど腹立たしかつた。殊に、馴れるに從つて、Mの態度にはあきたりない處が益々多くなつて來た。心の傲慢を、言葉の世辭でごまかしてゐる事が、あまりに明白だつた。そんな見え透いた事さへわからない夫人の、一にも二にもMの云ふ事を信じ切つてゐるのが一層面白くなかつた。實際夫人の態度には、佛蘭西小說の場面を想像させるやうなところさへあつた。Mが來てからは、寢室を三階の小部屋に移してゐたが、夜更けても、その二階と三階を上り下りする足音が、子供達の寢靜まつた家の內に、耳についてしかたのない事もあつた。勿論、眼の不自由な病人の爲めには、何から何迄爲てやらなければならなかつたのだらうが、晝も夜も、絕えず附添つてゐる程の事はあるまいといふやうな考が、くすぐつたく湧いて來るのであつた。子供達のMを罵る言葉や、暗默の中に語合ふ目くばせにも、家庭の平和を亂された事に對する憤りに似た感情が伴ふやうに見えた。

「お母さんの親切は度が過ぎてるわ。」

おとなしいクリスティンさへ、ちひさい唇をとんがらかして、不平をもらす事が度々だつた。

夫を持つた西洋の女は、一週間とは離れて住めないといふ人の話が、不愉快な重味を加へて栢

植の頭腦を去らなくなつた。

癈兵

二月初の事であつた。戰地へ行つてから消息の絕えてゐたAから、意外にも、倫敦の消印の葉書が來た。女文字の代筆で、少佐と夫人に宛てあつた。

命丈は助かりましたが、負傷して病院に收容されてゐます。突然ながら明日の午後御宅へ伺ひ度いと思ひます。

手短かに認めてある文言を、家内の人々は手から手に渡して讀んだ。

「Aさんが負傷したつて、何處をやられたんでせう。重いんでせうか、それとも、ほんのかすり傷か何かでせうか。」

夫人はその葉書を柘植の手にも渡した。

「僕は重傷だと思ふ。」

ジヨオジが何の苦も無くきめてしまふのを、キテイは直ぐに打消した。

「私は輕傷だと思ふわ。だつてそれでなければ明日うちに來る事なんか出來やしないわ。」

「重傷だよ。屹度。」

「如何して。如何いふ理由で重傷だつていふの。」

姉と弟は夢中になつて、お互に自分の想像に贊成させようとした。

「だつて重傷でなければ自分で手紙位書くさ。」

「そんな事いつて、指を怪我すれば自分ぢやあ書けませんよ。」

「二人ともおよしなさい。みつともないぢやありませんか。」

母親が爭の中に割つて入つて默らせてしまつた。

「けれども何處に負傷したんでせう。」

直ぐに又ヂンが想像をたくましくし始めた。

「そんな事は明日になればわかります。兎に角命があつて歸つて來れば御目出度いと云つていゝのです。隨分此の頃の戰には戰死者が多いさうだから。」

夫人は自分の知つてゐる甲の家乙の家の、夫が死に、息子が死に、兄弟が死に、從兄弟が死んだ話を、それからそれと止度なく持出して、再び故國の土を踏む事の出來たAの身の上を幸だと斷定した。

たつた一人クリスティンは、みんなの話を聞くともなく聞きながら、一言も云はなかつた。心持青ざめて、筋肉のこは張つた顔を伏目勝にしながら、心の中の動揺を無理にも靜めようと努めてゐるのだつた。

その晩柘植が、自分の部屋に引上げて寝ようと思つて、梯子段を上つて行く後から、最後に階下の燈火を消して、これも寝部屋に行くクリスティンが、追かけて來て呼止めた。

「柘植さん、貴方はどうお考へになつて。Aさんは重傷だとはお思ひにならない？」

他聞を憚かる事のやうに聲をひそませて訊いた。ふだん目ばたきの頻繁な碧い目をみはつて、心配の爲めに胸が波うつのであらう、薄暗がりの中に、ほの白く呼吸づくのが感じられた。

「大丈夫、輕傷ですよ。でなければ來られるものですか。」

先刻キテイが云つたのと同じ言葉を、柘植も答へる外に返事の爲方が無かつた。

「左様でせうか。左様だといゝんですけれどねえ。」

嘆息するやうにつぶやいた儘、クリスティンは梯子段の中途に佇んでゐて動かなかつた。その容姿が、妙になまめかしく見えた。體と體が接近してゐる爲めでもあつたが、たゞ一事をおもひわづらふ外に何も考へないのが、平生細心に身を守る事ばかり注意してゐる女性とは違つて、直

ぐにも人を頼らうとする風情だつたのだ。

「おやすみ。」

柘植は、輕い嫉妬と妄想を振捨てるやうに身をかへして、夜更けてひつそりした家の内に、わざと靴の音をさせながら梯子段を上り切つた。自分の部屋の扉に手をかけた時、どうしても一度振り向いて見る氣になつた。梯子段のまん中に、まだ佇んで動かないクリスティンの仰向いた顔が白く見えた。どうした其の場のはずみだつたか、寄席藝人が觀客に向つてするやうに、柘植は指尖を唇に觸れて、接吻を贈る眞似をした。その儘狼狽てて室内に飛込んだが、寢床に入つてからも、自分の輕率な振舞を唾棄する心持で、何時迄も動悸が止まなかつた。

翌日、お茶の時刻に軍服を着たAがやつて來た。先を爭つて出迎へた姉妹は、玄關に佇立してゐるAを見て、挨拶をする事も出來なかつた。第一番に手を差延したヂンは、大きな目に涙をためて、後退りした。Aは右手を失つたのだつた。

血色のいゝ肥肉のAは、たゞ少し日に燒けたばかりで、以前とちつとも變つてゐなかつた。夫人もクリスティンも、如何いふ言葉で慰めていゝか、只管混惑して、涙ぐんでばかり居るのに、本人は案外平氣で、左の手を不器用に突出して、一々握手した。

「それでもまた御目にかゝれて嬉しう御座います。隨分苦勞なすつたでせうねえ。」
夫人はやつと唇を動かしたが、聲は異樣に震へてゐた。
「夢です。」
Aは回想するやうな樣子を見せたが、しかも豐頰には絕えず微笑を浮べてゐた。持前の人のいゝ性質から、自分の身の上の不幸よりも、斯うして親しい人達に逢ふ幸福を、強く感じる風に見えた。
「何しろ第一線に送られた其の翌日、敵の砲彈の破片で倒れてしまつたのです。氣の付いた時は、もう片腕無くなつてゐました。」
さう云ふ彼の右の手に、人々の視線は集まつたが、肩のつけ根から、空つぽの片袖は、だらりと橫に垂れ下つてゐるばかりだつた。
誰もはかばかしく口をきく者は無かつた。どつちかと云へばAも無口な方なので、誰がするとも無く折々溜息が、一室の沈默の中に、微かに聞えた。クリスティンは、母親の入れた紅茶をAの前に運んだ。勸めれば勸められるまゝに、彼は麪麭を取つて、左手で小刀を使ひながら、幾枚も幾枚も、さもうまさうに喰べた。

「此の四五日大變氣分もいゝやうだから、Mさんもよんでおあげ。寢衣の上に寛衣を着て來れば構ひませんと云つて。」

想ひ出して、夫人は男の子に使ひをいひつけた。

「Aさんも御存じのMさん――永らく商船に乘つてゐたのですが、去年の暮に氣球隊に入つたのですよ。」

「あゝ、あの話の面白い人ですか。」

Aは一寸考へて、想ひ出して頷いた。

「えゝ、あの方が此間から病氣でうちに寢てゐるのです。どうしたのか眼が惡くて。何しろ身寄の無い人ですからね。」

娘達は、此の場にMの來る事を面白くなくおもつて、お互に目くばせをしてゐるのに頓着無く、夫人はおかはりの茶をつぎながら話しつゞけてゐた。

ジョオジにつれられて、片目繃帶したMが二階から下りて來た。

「しばらく。」

彼は直ぐにAの方へ進んで右手を差延した。

「おゝ、君は片腕やられたのですか。」

今迄低い調子の外には物を言ふ者もなかつた室の内に、高く強い聲が響きわたつた。默つて、にこにこしながらAの出した左手を、雙方の手で固く握つて振り立てた。

「羨しいなあ。名譽の負傷だ。それなのに、こんな意氣地の無いていたらくで、國家危急の時に、無駄に寢て暮してゐなければならないとは。畜生ッ。」

一同が驚いて振向いた程戲曲的の言葉と身振りで、患部に卷かれた繃帶を、かきむしるやうに身をもんで、足踏みした。

「Mさんはほんとに戰地に行く事を願つてゐるんですよ。」

夫人は彼の激越な調子に感動して、直ぐに同情してしまつた。

「しかし決して面白い處ではありませんね。」

笑ひながらAが答へた。

「面白い處？　それは面白くは無いでせう。蹴球競技とは違ひますから。しかし國家の爲め、吾人の生存の爲め、光輝ある歷史の爲めに、吾々は闘ふ義務があると思ひます。闘はなければならないのです。」

Mは演說口調で恰も相手を說服するやうに力を込めて叫ぶのだつた。

誰にしても、口をさしはさむ餘地の無いその昂奮した言葉の連續を、當のAは、全く善意に受入れて、微笑しながら聽いてゐた。

「一體初めて砲彈の洗禮を受ける時はどんな氣持がします。勇氣のある者にとつては寧ろ愉快でせうね。」

Mは又話を新しくする意圖で、Aの方に問ひかけた。

「夢です。まるで夢です。」

實戰に參加した人は、短い言葉を繰返した。

「君がやられたのはどの位の大きさの砲の彈丸でした。飛行船の爆彈では無いのでせう。」

「さうです、大砲のたまです。しかしどんな大砲かはわかりませんね。曉方でした。塹壕から塹壕に退却する時にやられたんです。何處か後の方で、何ともいへない物凄い音がしたと思つた丈で後は夢です。」

又しても同じ言葉に落ちついてしまふのだつたが、實際彼にとつては、それは夢としか思へないのらしかつた。殆んど軍事上の專門的知識を缺いて居るらしいAは、如何なる地點で、どの位

の軍團が對陣したか、最新式の敵方の武器の威力は如何なるものか、現在の兩軍の策戰はどう展開さる可きか――それからそれと根掘り葉掘りきゝ度がり、又自分の多少の智見を示さうとあせるMの質問には、全然答へる事が出來なかつた。彼はたゞ怖る可き戰地の空氣を呼吸し、第一線に送られた翌日に負傷した自分の運命を甘んじて受入れたに過ぎなかつた。

話好きのMは、折角話相手にしようと思ふAの、口數少なく、たゞ他愛なく笑つて居る張合ひなさに憤慨した樣子で、何時も何時も口癖のやうに力說する國家危急の現在の國民の覺悟を、手を振り足を踏鳴らして、大きな聲で說き出した。子供達は、又かと云ふ心持を、目附や手先の合圖で示しあつたが、氣が付かないのか、氣が付いても平氣なのか、Mは何時迄も止めなかつた。兎もすれば、何の意見も無く、にやにやしてゐる癈兵に、一同の同情の集まり勝なのを、無理にも自分の器量で、自分を立役にしようとする努力のやうにも思はれるのだつた。夫人は感心して傾聽してゐた。

「久しぶりで音樂でも伺ひませうか。」

そんな事にはあき果てたらしく、Aは母親の傍に固くなつて坐つてゐるクリスティンに、小聲ながら、聲をかけた。

「隨分長い事彈かないんですよ。それよりもジョオジのバンヂョオと、お手製の提琴の方が面白いでしよ。」

子供のやうな顏を赤くして、少しどぎまぎしながら、かへりみて他を云ふといつた風に、姉は弟に振り向けた。

「それでは合奏さ。」

Aはいゝ機嫌で、自分で立上つて、不自由さうな左の手で洋琴を開けた。

「駄目なんですよ。」

愈々赤くなつて、クリスティンは洋琴の前に掛けた。ジョオジは先刻から大人の話にもてあぐんでゐたので、直ぐにバンヂョオを取りあげて、姉の側に並んだ。

「何にしませう。」

譜本を探しながらクリスティンは、誰にともなく聲をかけた。

「『今宵隊商は何處に宿る』をやつて下さい。」

誰も何とも云ひ出さないので、柘植が進んで注文した。

「あれは私が初めて此の家に來た時、――Aさんにも恰度お目にかゝつたのでしたが、あの時ク

リスティンとジョオジが合奏した曲ですよ。」
「左様々々、さうでしたつけね。」
Aは直ぐに興がつて、更に又自分で積み重ねてある譜本の中から、その一編を探し出した。
「柘植さんて人は、そんな事迄覺えてるんですか。」
クリスティンは捨ぜりふを云ひながら、ジョオジをかへりみて洋琴の鍵に指を觸れた。
一方ではMが、たつた一人の聽衆の夫人を相手に、音樂に遠慮も無く、なほ引續いて演說を止めなかつた。
日が暮れてから、Aは後日を約束して歸つて行つた。みんなが送り出した玄關の石段を下りて行く迄、如何に今日の日が樂しかつたかを繰返してゐた。片手は無くても、堂々とした後姿は、五六間行つたばかりで、立こめた夕靄の中に吸ひ込まれてしまつた。
「存外元氣がいゝぢやありませんか。」
石段の上に佇んで殘つたクリスティンに、柘植は斯う云つて言葉をかけた。
「柘植さんは、あの人いゝ人だとは思ひませんか。」
それには返事をしないで、妙に靑白い顏をして、眞面目に向ふから問ひかけて來た。

「偉い人でも悧巧な人でも無いのです。それは私もよく知つてゐます。けれどもいゝ人つていふんでせうねえ。」

「確かにいゝ人です。成程偉くは無さゝうだが。しかしそれ丈一層同情されますね。」

柘植は相手の心持を察して、Aに對しても、クリスティンに對しても、柔い愛の心を感じてゐた。

「えゝ、ほんとに同情しますわ。」

さう云つて、もう一度靄の奥に燈火の滲んで映る町角の方を見送つて、娘は瞼に浮ぶ涙をまぎらした。

トルストイ

その頃、柘植はトルストイの研究に熱中して居た。「アンナ・カレニナ」を讀み、「戰爭と平和」を讀み、「復活」を讀み、「闇の力」を讀み、「生ける屍」を讀み、「藝術論」を讀み、其他彼の書架を飾る二十四巻の全集に納められた作品を、次から次と讀んで行くうちに、殆んど想像も出來ない程底の知れない人間力の偉大な事に感激した。長い生涯を、自己の心と闘ひつゞけ、しかも安住の

地を見出す事も出來ないで、片田舍の孤驛で命を終つた人の一生が、如何に生甲斐のあるものであつたか。人類意識の強さに驚くと共に、いかなる詩人も及び難い纎細な神經の顫動を、感じさせられた。あらゆる人間の持つてゐる善心も惡心も、此の一人の中に最も根強く體驗されたに違ひ無い。栢植は、兎角人間の世の厭はしさを感じ、人生の倦怠に身を任せようとする傾向のある自分を顧みて恥ぢた。同じ人間の中にトルストイのある事を痛感して、彼自身も人間である生甲斐を感じて來た。圖書館に行つても、トルストイの傳記と、トルストイに對する批評ばかりをあさつて讀んだ。物事に熱中すると、宣傳癖のある栢植は、先づ高樹を說いて「アンナ・カレニナ」を讀ませた。和泉にも手紙を書いて、同じ本を勸めた。郊外の先輩の家に集る同窓の會合の、輪講の順番が廻つて來たら、トルストイ論をやつてやらうと待構へてゐた。

家に居る時も、机の側が離れられなくなつた。舊式な煖爐に乏しい石炭を焚いても、どうしても室內は溫まらないので、外套を着て本を讀んだ。絨毯が古び汚れて、一種の埃臭い匂を立てるのを、氣にはしながらもうつちやつて置いたのだつたが、此の頃のやうに自分の部屋に親しんで來ると、その匂が堪らなくなつて來た。彼は奮發して、身上不相應な香水を買つて、すべて部屋中に撒いた。

「栢植さんはどうなさつたの。溫室の花のやうに、いゝ匂をさせながら、此の室にちゞこまつてゐらつしやるのね。」

一番先に怪しんだのはクリスティンだつた。或時、室の戶を半開にして、顏丈中に突込んで、小鼻をひくひく動かしながら聲をかけたのだつた。

「だつて、此の古い敷物は、決して勉強心を振ひ興して吳れません。黴と埃の匂をかいでゐると、センテイメンタルになるばかりです。」

煖爐で足を暖めてゐたのが、身を捩つてふり向いて云つた。

「まあ此方にお入りなさいな。」

「駄目よ。火の側で外套を着込んで、始終本ばかり讀んでる方がセンテイメンタルになり易いんですとさ。」

さういひながら、外から誰が見ても怪しまないやうに、入口の戶をすつかり開けて、クリスティンは椅子の背に近寄つて、上から覗き込んだ。

「何の本。此の頃貴方の強情な魂を奪つたのは。」

「トルストイ。」

彼が讀みかけたのを見せたのは、「神の御國は汝が內に在り」であつた。

「あら、柘植さんが宗教の本を讀むんですか。」

目を見張つて驚いた。何時だつたか、日曜の教會行を勸められた時、新教は嫌だと云つてきかなかつた爲め、夫人と二三十分も言ひ爭つた事のあつたのを、クリスティンは忘れなかつた。

「貴方はお母さんをいやがらせる爲めに、私は無信仰ですなんて云つたぢやありませんか。」

「いやがらせでもなんでもありません。さういふ外に爲方が無いんですもの。」

柘植は立上つて、書架から全集の他の一冊を拔出した。

「まあだまかされたと思つてこれを讀んで下さい。讀んでつまらなかつたら、僕はもう二度と他人様に向つて口返答なんかしませんから。」

彼は「アンナ・カレニナ」をすゝめた。その女主人公の描寫の素晴しいのに驚嘆して、實際の人間よりもほんたうに生きて居ると評した近代佛蘭西の小說家の言葉などを引用した。

「へええ、生きてゐる人間よりも生々してゐるつていふんですか。つまり私達なんかよりも、もつとはきはきしてゐるんですね。」

クリスティンは非道く其の言葉に感心して、

「さあ、柘植さんに、二度と口返答をさせないやうにしてやらうかな。」

捨ぜりふを殘しながら、一冊を胸に抱へて部屋の外に行きかけた。

「ちよつと、ちよつと。」

後から柘植が呼止めた。

「若しも私のいふ通り、ほんとに面白かつたらどうします。生きてる人間よりも、もつと生きてゐたらどうします。」

ふり向いて、適當な返事が見出せないで、それが癖の、近眼をしばだたくばかりで小首をひねつた。凝然と見て、柘植は何時かの晩、梯子段に佇む相手に對して敢てしたと同じやうに、指尖を唇にあてて、接吻を贈る眞似をした。クリスティンのちひさい顏に、紅い血の流れるのを見た。それでも、わざと怖い目をして睨んだが、その睨んだ口元に、次第に微笑の影が浮んで來た。身をひるがへして、クリスティンは梯子段を驅下りた。

二三日たつと、クリスティンはもう「アンナ・カレニナ」に夢中になつてしまつた。アンナとヴロンスキイの戀のいきさつ、キティとレヴィンの結婚の幸不幸——さういふ女の讀者に特有の興味に基くものではあつたが、默つて一人で讀む丈では物足りなくなつて、誰彼のみさかひなく、

小說の筋を話した。

「栢植さん、ほんとにアンナは生きてゐるわ。なんていふ美しさなんでせう。私は今迄に、こんな面白い小說は讀んだ事ありませんわ。」

感激に上氣した顏をふり向けて、クリスティンは嘆息するやうに云つた。近眼の目さへうるみを持つて輝いた。

「そんなに面白い本なら私にも讀ませて頂戴。此間の椿姬よりも面白いこと。」

傍のヂンは直に手を差延べて、姉の膝の上の本を取上げようとした。

「待つて頂戴つたら。もう少しばかり殘つてゐるのよ。」

二人は爭つて互にかけた手を放さなかつた。

これがはじまりで、上の姉妹はもとよりの事、キテイ迄も、彼等が平生栢植の圖書館と呼びならはす、その書架の文學書を、手當り次第に讀み始めた。安價な小說本に馴染んでゐたので、最初は勝手が違ふらしかつたが、忽ち熱病にとりつかれた勢で、暇さへあればお互に讀んだものに就ての知識をほこる事になつた。讀書嫌を標榜してゐたヂンさへ、おとなしく椅子に腰かけたまゝ、幾時間となく動かずに、頁を繰る事が多かつた。

「此の家で本を讀まないのは、ジョオジとヂヤックだけよ。」

末の娘が得意になつて云ふのはほんとだつた。何時も變らず樂器を抱へてゐる少年と、その足下にうつらうつら居睡(ゐねむり)をしてゐる老犬ばかりが、仲間外れの景色になつた。

病人のMは、何時迄たつてもさつぱりしなかつた。其の癖最初のやうに、別段高い熱があるといふのでもなく、苦痛も薄らいだやうに見えたが、繃帶をとると、惡い方の眼には霞がかゝつて、腐つた魚のやうになつてゐた。柘植の剃刀の手が馴れるに從つて、段々不注意になる爲めか、いやだいやだと思ひながら動かしてゐる爲めか、切傷から血の出る事が度々あつた。近頃は、M自身が、夫人の助をかりて、不器用な手で當る事になつてゐた。

永い間寢てゐるので、人一倍活動好らしいMは、所在無さに困り切つてゐた。時々は階下の客間で、みんなを相手に話込む事もあつたが、大概は相手の方が逃げてしまつて、手持不沙汰を重ねるのであつた。さういふ場合に、逃げる方からいふと、本に讀耽つてゐるのが一番いゝ手だつた。

「はゝあ、トルストイか。偉いものを讀んでゐますね。」

或日も彼は娘達の間に割込んで、席に着くと直ぐに、キテイの讀んでゐる童話篇を覗き込んで口を切つた。

「トルストイは大作家だ。しかし私は露西亞の小說を好きませんね。陰鬱で、讀者の心を不愉快にします。たしかにいゝ影響は與へません。」

そんな風に切出して、自分の知らない事に迄も獨斷的の意見を立てなければ承知しない英吉利人の根性から、其の露西亞の小說を此の家庭に移入した柘植を非難する態度迄見せるのだつた。

「それではMさんはトルストイの何ていふ小說をお讀みになつたの。」

意地の惡い質問を、ヂンは正面から持つて行つたが、

「いろんな物を讀みましたよ。尤も隨分前の事だけれど。」

先方は一向平氣で答へた。

「兎に角、私は讀者を愉快にするものでなければ、いけないと考へる。デイツケンスはよござんす。是非讀んでごらんなさい。」

彼は直に柘植の方に話をむけて、露西亞や佛蘭西の小說の不健全なものだといふ事を繰返した。相槌を打つ者も無く、しまひには返事をする者もなくなつたが、彼は倦きずに、根底の無い文學論で時間を費した。

その日はそれで濟んだが、翌日の朝の食事の時であつた。夫人は子供達の居る前で、露西亞の

小說などを、一人前にならない、心の堅固で無い娘達に讀ませるのはよして呉れと云ひ出した。
「貴方がお讀みになるのは構ひません。それを私が兎や角いふ權利はありません。けれども私の若い娘達には、いゝ事と惡い事についての判斷さへまだ無いのですから、あゝいふ種類の本は讀ませない事にしてあります。」
「しかし露西亞の小說が惡いものだとお考へになるのは間違ひではありませんか。殊にトルストイの……」
「いゝえ、私は一概に惡いとはいひません。貴方がた日本人の目から見ていゝものも、英吉利の家庭では許さない事もあるのですから。」
夫人は柘植には一言もいはさないで、たゝみかけて自分の勝手ばかりまくし立てた。何故露西亞の小說が惡いのか、夫人自身は何も知ら無いのだつた。たゞ何と無く、世界を知らない英吉利の俗物が、他の國の物事を一般に輕蔑したり排斥したりするのと同じ根性と、尙一つには母親が子供の教育に就て、嚴しいしつけと細心の注意を怠らない事を示し度い氣持から、わけも無く自說を立て通さうとするのだつた。勿論、そんな事をいひ出したのは、Mの入智慧に違ひなかつた。さう思ふと、柘植は憤に堪へなかつた。

「わかりました。」
止度なく自分の立場と言分を辯解しようと努める夫人の言葉をさへぎつて、彼の語氣も鋭くなりかけた。
「どうぞ誤解なさらないで下さい。私は決して貴方をとがめてゐるのではありませんから。」
妙に柔な聲と態度で、無理にも笑顏を見せようとする夫人は、相手が不滿に思つてゐる事を承知して、氣づかつてゐる樣子だつた。それが柘植にもよくわかつた。彼は尖がらかした口を堅く結んで苦笑した。
暫時の間は夫人の辯解がつゞいたが、やうやくそれが終つたところで、先刻から事の成行を心配して、まばたきもしないで二人を見守つてゐた姉妹の方に、柘植は強ゐておちついた聲で言つた。
「みんなお聞きの通りです。私の圖書館は今日限り閉鎖します。」
誰も何とも答へなかつた。座が白けたのをまぎらす爲めに、夫人も娘達も柘植自身も、今迄休んでゐた食事を、狼狽(あわたゞ)しく口に運び始めた。
おもひもかけない玄關の呼鈴が鳴つて、床の上に物の落ちた音がした。

「郵便かしら。」

肉叉（フォーク）を置いてキテイが立つた。室の内の氣まづい空氣を逃れる機會を喜んでゐる樣子だつた。誰の顔にも、同じく救はれた色が浮んだ。

「はい、これは栢植さん。これはお父さんからお母さんに。」

それぞれ郵便物を分配して、又食事にとりかゝつた。

「お父さんから何て云つて來て。」

「隨分久しぶりだつたわねえ。」

左右から娘達は首を差延して、母親の手に開かれた手紙を覗き込んだ。

夫人は一心に良人からの消息を讀んでゐたが、突然こはばつた表情に變り、それを堪へようと努めながら堪へ切れなくなつて、顔面筋肉が激しく震へたと思ふと、その手紙の上に涙が落ちて來た。

「お父さんが如何かしたんですか。」

驚いてすり寄つた娘の聲も震へてゐた。夫人は涙に濡れてインキの滲み出した手紙を、娘の方に押やると同時に、兩手で顔を覆つて泣き出した。肉附のいゝ指の間からも、涙は流れて來た。

「おゝ、いよいよ出征するんですつて。」

クリスティンは手紙を妹の前に突つけて、蒼ざめた顔をして、しきりに目をしばだたいた。誰も口をきかなかつた。夫人の嗚咽が、何時迄も續いてゐた。

訣別

手紙の末に書いてあつた通り、二三日たつと少佐は家に歸つて來た。愈々差迫つて來た出征の別れに、家族と名殘を惜む爲めの休暇だつた。一體に、英吉利人には珍しい顏色の薄黑く濁つた皺だらけなのが、雨に風に曝されて一層汚なくなつて居たが、おしやれの性分で、綺麗に髯を剃り、白髮まじりの頭髮には規則正しく櫛の齒が通つて居た。細い胴中のくくれたやうに形のついてゐる軍服の折目も整然としたのが、何となく意氣のあがらない樣子に見えた。

玄關に驅出して迎へた夫人は、自分よりも脊も低く、小柄で瘦つぽちの夫の首に縋りついて、肩章の目立つ肩に顏を埋めて泣いた。

二階に寢て居たMは三階の小部屋に移されて居たが、少佐が歸つたと知ると、いそいそ下りて來た。

「泣く事は無い。泣く事は無い。」
少佐は子供をすかすやうに夫人の背中を叩きながら、やうやく體を自由にした。
「御機嫌よう。」
「御機嫌よう。」
待構へてゐたMと、固い握手をした。
「愈々御出征ださうで、御目出度う。私は實に羨しくて堪りません……」
感慨に堪へないといふ語調で、何時迄も握手の手を放さないMの目の前で、少佐は輕く手を振つた。
「御目出度いものか、私は悄氣てゐるんだ。」
取圍んで傍に立つてゐる子供達の笑聲に合せて、少佐は涸れた聲を立てて笑つた。
晩餐の卓にはMも衣服を着換へて出た。少佐は自分で地下室に下りて行つて、酒の瓶を兩手に抱へて來た。夫の歸宅を喜び、父親の歸宅を迎へる妻や子を左右にして、久しぶりの團欒に陶然とした少佐は、惜氣も無く三鞭をぬいて、忽ち上機嫌になつてしまつた。
岡の上の兵營の生活の、日本人には想像もつかない程明い方面を、彼が充分享樂してゐる事を

話した。耶蘇降誕祭の頃催された舞踏會の事、同僚の夫人の舞踏のうまい事、或將軍の令嬢の洋琴の妙技――その令嬢と自分の部下の若い貴族出の士官とが戀してゐる事、晴れた日のゴルフの遊び、連夜の骨牌の勝負――それからそれと、くつたくの無い性分なので、みんなを笑はせるやうな話の數を盡した。

斯ういふ場合にも、勿論Mは賑かに相槌を打つたが、彼は長い間此家の厄介になつてゐる身の上として、自分がわざわざ氣球隊に入つた事、病氣の爲めに思ふ儘には國家に盡せない事を嘆くと同時に、自ら話を軍事上に向けなければならない氣持に驅られるらしく、屢々少佐の輕い心持にそぐはない質問をする事もあつた。さういふ時には、少佐は俄に醉が醒めたやうな眞面目な態度になつて、額に皺を刻みながら、

「戰爭!　これ程……な事は無い。……の罪惡だ。」

吐息をするやうにつぶやくのだつた。

それでもMは頓着なく、自分の愛國心をほこる態度で、語氣も鋭く獨乙の暴虐をこらす必要を刀說すると、少佐も直に其方に引入れられて、極めて世間的な愛國者の昂奮した樣子を見せて、食卓を叩いて獨乙と獨乙皇帝を罵つた。

「だから自分もこれから出征するんだ。かういふ場合には戰爭も止むを得ない。正義の爲め、自由の爲めに戰ふのだから。」

酒氣の出た顏をあげて一座を見渡す少佐の目の前に、Mは大きな兩手を差延して拍手する眞似をした。

少佐は自分がどの方面の戰場にやられるのか知らなかつた。それは全く極祕の事で、自分達の隊の上官さへ、いまだに知らない事だと云つてゐた。其頃は、露墺國境では、露西亞が引續いて敗退し、西方の戰線でも、久しく期待された聯合軍の總攻擊は開始されず、かへつて獨軍はヴェルダンの攻擊を、前にも增した勢でやり始めた時であつた。假令聯合軍は負けないにしても、軍事上敵に打勝つ望は遙に遠いものに思はれた。栢植は平生思ふ儘に、その事を口にしてゐた。

「此の栢植さんの意見では、聯合軍は絕對に勝てないといふのですが、私は斷じてそんな事はないと云つてゐるのです。」

Mはそれを話の材料にする事を忘れなかつた。

「斷じてない。それは斷じてない。屹度勝つ。二度と獨乙は起てないやうに決定的にやつつけてしまふ。たゞ時期の問題さ。」

少佐は手に持つ酒杯を下に置いて、柘植の方にむかつて云ひ出した。

「いえ、私だつて聯合軍が勝つと信じてゐます。しかし軍事上の意味で勝つ事は一寸想像出來ないといふのです。」

柘植はあわてて自分の説を訂正しなければならなかつた。

「でも君は何時でも獨乙を打敗る事は不可能だと云つてるぢやないか。」

側からMが口を出した。

「左様です、大砲や飛行機で敵を全滅させるやうな話は、愉快な空想に過ぎないといふのです。しかし必ず勝つとは信じてゐます。事實上獨乙は封鎖されてゐるのだから、國を擧げて疲弊するか、そこ迄行くうちに國内の統一を失つて自滅するか、いづれにしても負けてしまふには違ひない。結局聯合軍は勝つには勝つが、その爲めには隨分長い時日を要するだらうと思ふのです。つまり時期の問題でせう。」

何時になく彼は熱して、眞正直にMに向つて自説を主張した。

「わかつた。わかつた。君の説はわかりました。しかし僕は、その大砲や飛行機で勝つ事を信じてゐる。どうです、少佐。」

Mも赤い顏をして同じ話をやめなかつた。

「大丈夫勝つ。大砲でも飛行機でも、經濟戰爭でも勝つ。全く時期の問題なんだ。」

少佐は雙方をなだめるやうな調子で、醉つて重くなつた首をしきりにうなづかせながら、矢張り酒で唇を濡らしてゐた。

「しかもその時期が、今正に來てゐるかもしれないんだ。雪が解ける。春が來る。吾々は大軍を率ゐて押出して行く。その時期は存外來てゐるかもしれん。」

いゝ機嫌で酒杯を飲干して、此の頃流行る行進曲の一節を、足踏しながら低い聲でさゝやくやうにうたつて、嗄れた聲を高々と笑つた。

食後の珈琲を飲みながらも、Mはしきりに軍事談を聲高に口にしたが、少佐は睡氣のさして來た體を椅子の背にもたせかけて、葉卷をくはへながら娘の彈く洋琴に足拍子を踏んでゐた。しまひには輕いいびきを立てて、ほんとに睡つてしまつた。

「まあ、すつかり疲れ切つてゐるんですよ。」

夫人はいち早く見附て、

「貴方、風邪を引くといけませんよ。二階でおよつたら如何です。」

背中を叩いて目をさまさせた。びつくりして立上つた少佐は、あくびをしながら客間を出て行つた。睡眠の外には何も考へる氣力もないやうなその様子を、子供達ははやし立てて笑つた。

夫人も直に隨いて出て、一緒に寢室に引上げてしまつた。

父親の歸宅で心強さを感じてゐる子供達は、何時迄も歌ひ騷いだ。誰も相手にならないと見ると、Mも三階の小部屋に上つて行つた。

別れて住んでゐた夫に對する夫人の態度は、うら若い戀人同志のやうな、人目に餘るものがあつた。一分間でも多く、夫の體に接觸してゐようとするのか、並んで長椅子に腰かけても、大きなからだをもたせかけて、目を細くしてゐた。さういふ様子を見ると、此の頃、Mに對する態度にただならぬ情あひを感じて、不安心な疑をかけたのは、恥づべき邪推だつたと柘植は考へた。しかし又一方から考へると、慾情の強烈な西洋人には、夫に對する濃かな愛情には何の影響も無く、萬一その愛する夫とはなればなれに住むやうな場合には、殆んど不可抗の力を以て慾情の壓迫に全身を任せ切る事が屢々ありさうにも想像された。

その夜は寢床に入つても、夜更迄、隣室に眠る夫婦を中心にして、柘植は推測をほしいまゝにした。

少佐は三日三晩泊つてゐた。その三日目の午後の事であつた。暫時怠けてゐた圖書館に出かけて、朝から夕方迄讀書して、少し頭腦の疲れてぼんやりした頃、栢植は燈火のつき始めた往來に出た。今日の晩餐を最後として、少佐は再び兵營に行き、間も無く戰地に行くのだから、是非とも食卓に着いて吳れと夫人に云はれてゐたので、眞直に歸る筈だつたが、煖房で不自然に溫められた讀書室で乾いた咽喉を濡さうと、大通のカフェの地下室に、麥酒を求めて下りて行つた。

橄欖の鉢植の蔭に空席を見つけて、泡立つ麥酒に口をつけた瞬間、栢植は思はずしらず噎返つた。飮まうと思つた直ぐ後から、思ひもかけない目前の景色に狼狽して、飮むのを止めようとしたゝめであつた。たつた一つ席を置いた向の卓に、二組の女連の陸軍士官がゐた。その一人が少佐だつたのである。

先方は既に氣が付いてゐた。視線が合ふと、鼻眼鏡の下で、合圖の目ばたきをして、ばつの惡さをまぎらすやうに笑つて、連の女に何かしら說明する樣子だつた。彼も、もう一人の若い士官も眞赤に醉つてゐた。相手の女は、體格のいゝ中年増と、佛蘭西か伊太利の血のまじつてゐる小柄な若いのとで、その安つぽくけばけばしいみなりから見ても、自墮落な身じろぎから見ても、往來で擦違ひざまに色目を使ふ種類の女に違ひ無かつた。見る可らざるものを見た氣持で、栢植

の方が狼狽(あわ)て赤面した。
日本人の珍しさか、少佐とその日本人との關係を知つて面白がつたのか、二人の女も若い士官も、一齊に栢植の方に向つて杯をあげた。少佐も中年增に促されて、目よりも高くさしあげて乾杯した。
「バンザイ。」
若い士官は低い聲ながら、聽覺えを口に出した。栢植も飮みかけの大杯の底の麥酒を飮干した。
彼は、長く其の場にゐる事を氣の毒に感じて、勘定をして立上つた。それとなく挨拶をして出かけようとすると、少佐は呼止める手つきをして、人差指を唇にあてて、うちの者には默つてゐろといふ合圖をした。栢植が頷いてカフヱを出ると、背後に陽氣な笑聲が聞えた。
歸ると、夫人も娘達も、此の頃來た新しい女中と一緒に、食事の支度に忙しく、ジョオジ一人が老犬を相手に、客間の椅子に寢そべつてゐた。
其日は、招かれてAも來た。御馳走の準備を整へて、小ざつぱりした衣服に着換へた夫人や娘が、お化粧をして現はれて、直に食卓に着く順序になつても、御本尊の少佐は歸つて來なかつた。

「どうしたんでせう。今日は陸軍省へ行くと云つて出たのですが、此の時間に未だ歸らないつて事は無い筈ですがねえ。」

夫人は性急な質だから、不安と疳積に顏色を變へて、幾度となく自分で立つて行つては、玄關の扉をあけて、霧の降りた夜の往來を覗いた。

「あゝあ、僕お腹が空いちやつたなあ。」

ジヨオジは大きな欠伸をして、足下にうろうろしてゐた老犬の首に兩手を廻し、もろともに床の上に身を倒した。

「Aさんにお氣の毒ぢやありませんか。折角來て頂きながら。」

氣短のデンは、母親の責任にして口を尖らせる。

「そんな事を云つても爲方がありません。お役所の御用が濟まなければ歸られないんです。」

子供達をたしなめながら、夫人も氣が氣では無いのだつた。

「ほんとにAさんにも柘植さんにも申譯がありませんが、もう歸る頃でせうから暫時がまんして下さい。そのかはり今晩は御馳走しますよ。」

とつてつけた笑聲を立てても、一座は矢張りしらけてゐた。

柘植は、自分丈は少佐の行衞を知つてゐるのが、此の場合かへつて具合が惡かつた。その歸宅の遲い事を、人々が氣にして話しかけると、一層うけ答に困つて、自分自身の弱點を攻擊されてゐるやうな氣持にさへなつた。その癖少佐を憎む事は出來なかつた。此の大家族をしよひ、借金をしよひ、しかも骨牌と三鞭を無邪氣に享樂してゐる人のよさが、憐れみ親しむ心を起させるばかりだつた。相當の年になつて、立身も出世も別段希望しない平凡人が、功名と死の戰場に運ばれて行く事は同情すべき事であつた。首途の小閑に、ゆきずりの女と手を組んで、輕い戯れに一切を忘れてしまふ心弱さが、此の一家の運命だつたやうにも考へられた。彼はカフヱの橄欖の鉢植に圍まれた光景を、今もありありと目の前に描いてゐた。

あんまり口をきく者もなかつた。Mも三階から下りて來て一座に加つたが、みんなが重い心持で默つてゐるので、うまい話のいとぐちもなく、手持ぶさたに控へてゐた。娘達ががはるがはる、父親のあてにならない歸宅を待たずに、食事を始める事を主張しても、夫人は強情に拒んだ。拒む事が、夫の少佐の歸つて來ない爲めに、甚だ引立たない主婦の地位を、せめても維持する事と考へてゐるらしかつた。

少佐の歸つて來たのは、定められた食事の時間より二時間も遲かつた。いゝ機嫌で、足下の少

し危ないのが、弱みを見せまいとして、無理に正しく歩かうとすれば する程をかしかつた。

「どうしたんです、貴方は。」

夫人はいきなり立ふさがつて詰責した。怒つて震へた聲が甲高く響きわたつた。

「どうも忙しくてね。役所に行く。友達にあふ。倶樂部に引張られて行く……」

「何を云つてらつしやるんです。倶樂部なんかに行く事は無いぢやありませんか。お客さんが待つてゐらつしやるのに。」

夫人はたたみかけて、許さなかつた。

「何しろ忙しいもんだから……」

口の中で、はつきりしない辯解をしながら、夫人の方には取合はないで、

「やあ、A君どうした。我が陛下の忠勇なる軍人！」

相手が負傷兵だといふ事も忘れたやうに、はしやいだ調子で近づいたが、先方が軍人らしく直立して、左の手を差延したのを見ると、流石に少佐も身を正した。

「御機嫌よう。」

Aはいつもながらににこにこした笑顔で、醉をかくし切れないで困つてゐる少佐の顔を、無邪氣

にからかふやうにのぞき込んだ。

「御機嫌よう。兎に角命があつて歸つて來たのは幸運です。御目出度う。」

順序のたゝない言葉を繰返しながら、少佐はAの片手を兩手でつかんで振り立てた。

「どうだね、戰爭は。獨乙もなかなかやるぢやあないか。」

Aの隣の空椅子に腰を下すと、直にかくしから葉巻を出して火をつけたが、一軒置いた柘植の方に横目をつかつて、意味の深い合圖をしながら煙を吹いた。そのおどけた、若々しい様子を、柘植は氣の毒なやうな感じで見守つた。

「貴方。直に食堂へ行つて頂きませう。みなさんをお待せしてあるんですから。」

苦々しさうに、夫人は葉巻をふかす夫を見て云つた。

「さあ、どうぞAさんもMさんもいらつしやつて下さい。」

「さうか。まだ食事前だつたつけ。成程。」

少佐は狼狽てて煙草の火を消して立上つた。娘達は聲をあげて笑つたが、夫人は一層苦り切つて、一直線に食堂に入つて行つた。

食卓についても、既に食事を濟ませて來たらしい少佐は、殆んど何も喰べる餘地が無かつた。

徒らに肉刀と肉叉を兩手にしては、又そのまゝ下に置くばかりだつた。それでもさかんに三鞭を拔いて人々にも勸め、自分も飮みながら、他愛の無い冗談を云つては一人で笑つてゐた。MもAも、いゝ話題をつかまへる機會が無いので、子供達と同じく、せつせと喰べるばかりだつた。その場の樣子のちぐはぐな事に、愈々頭に血の上つてしまつた夫人は、靑ざめた顏をして、夫のふしだらを睨んだまゝ默りかへつてゐた。

食事が濟むと、又客間に椅子を並べて澤山の顏が向合つたが、矢張り社交的の空氣は釀されなかつた。Aに懇望されて、クリスティンは洋琴にむかつたが、誰も靜に耳を傾ける氣分にはならなかつた。彈手もぢきに元の席に歸つて膝に手を置いてしまつた。少佐は半分灰になつた葉卷を指にはさんだまゝ、幾度となく居睡に引擦られながら、傍の夫人に靴の尖で足を突かれては、はつとして居ずまひを直すのであつた。

Aが別を告げると、直に少佐は寢床を思つた。

「あゝ愉快だつた。矢張り我家にまさるところはない。だが又明日は兵營か。」

欠伸まじりにつぶやきながら、重たい足を一つ一つ二階に運んで行つた。

忌々しさうに後姿を睨みつけてゐた夫人も、追かけるやうに二階に急いで行つた。その氣勢か

ら察して、差向ひで夫の不始末を詰る爲めと思はれた。姉妹は顏を見合せて吐息をした。

出征

翌日は晴れ渡つた朝の日光のあかるい食堂に、寢不足らしい顏はしながらも、少佐は兵營に歸る身支度をして坐つた。Mも栢植も、きやうだい達も、これが戰場へ行く人との別れと思ふ爲め、めいめい違ふ心持ながら、同じ緊張した態度で席に着いた。

其の日の新聞に繪圖入で出た西部戰場の、英佛聯合軍の僅かばかりの進出が、大勝利の先觸のやうに人々の口に上つたが、流石に少佐は浮かない顏色をかくす事が出來なかつた。それに誘はれて、殆んど外の者の存在は眼中にない程夫に對する妻の情感に滿たされた夫人さへ、次第に額に陰影を見せるやうになつて來た。

「みんなおとなしく、お母さんのいひつけをきかなくてはいけないぞ。」

少佐は一人々々子供の顏を見廻して、父親らしい嚴格な調子で云つた。

「殊にヂンは人と爭ふやうな根性をなほし、ジヨオジは一生懸命で學問を勉強しなくてはならない。」

紅茶々碗を手にしながら、別段それを飲まうともしずに、少佐は別離の言葉を殘し度い心持だつた。子供はうなだれて息を呑んでゐた。それ丈で、夫人はもう堪らなくなつて、食卓の上につつ伏して泣き出した。掛紐のちぎれる程肥つた背中の肉が、煮えたぎる熱湯のやうに波打つた。誰も口をきかなかつた。少佐は鼻眼鏡をはづして、しきりに手巾（ハンケチ）で拭いてゐた。

何時迄たつても誰一人口をきく機會をつかまへる事が出來なかつた。夫人も自分の感情を抑へる事が出來ないで、むせび泣くばかりだつたが、突然身を起すと立上つて兩手で顏を覆つたまゝ、食堂の外に出て行つてしまつた。あつけにとられて見送つた少佐も、直にその後を追かけて、二階に上つて行つた。

取殘された連中は、さめ切つた紅茶を啜つて、一層押默つてゐたが、一人立ち二人立ち、やがて前後して食堂を出て、客間の方に集つた。

「あゝ、今日は朝から輕氣球が上つてゐる。」

Mは硝子戸に額を押つけて、遠くの空に見入つた。

「ちえッ、此の眼さへ健全なら、今頃はあゝやつて飛んでゐるんだがなあ。」

舌うちをして握拳（にぎりこぶし）で空を切つたが、矢張り誰も口を開かなかつた。

裏庭の木立の上には、うぶ毛のやうな木の芽が萌え初め、窓の下の柔い土を破つて、水仙の葉も僅かながら頭を出してゐた。その戸外のあかるい景色は、目のあたりに見る人事の紛糾と、あまりにかけ離れたものに思はれた。

暫時して、少佐はあわたゞしく階下に下りて來た。

「さあ、たうとう時間になつてしまつた。Mさんは體を大事になさい。柘植さんもお氣に入らない事もありませうが、どうぞ末永く此の家で勉強をして下さい。」

一々固い握手をした。町中（まちなか）の珈琲店（カフェ）に女とたはむれてゐた面影は無く、小皺の多い黒ずんだ顔に、冷い嚴肅な氣稟が現はれてゐた。姉から次の妹、末の娘、男の子――順々に抱合つて接吻した。父の眼にも、娘達の眼にも涙がたまつてゐた。

玄關に出ると、其處には夫人が、泣はらした目を床に落して佇んでゐた。夫婦は、大きく開いた手で互に抱合つて、長い接吻をした。

「左様なら。」

「御機嫌よう。」

それ以上の言葉は誰しも云へなかつたらしい。外套の背中を前かゞみに、少佐は妻子の家を立

出た。竹の鞭を小脇に抱へて歩いでゆく靴の音が、敷石の道に暫時聞えた。
家の中の空氣は一際暗くなつた。夫人はその日は、昨夜も夫と共に眠つた寢臺に寢たきりで、晝も晩も、食事にも下りて來なかつた。
Mも亦病人らしく三階の小部屋に閉籠つてしまつたので、娘達を中心に、若い者は氣樂な一日を過したが、深くは物事を考へる事も感じる事も無いジョオジが、たまたまバンヂョオを掻鳴らすばかりで、それさへ誰の喝采も博さない爲め、次第に低い調子になつて、やがて家の中はひつそりしてしまふのだつた。編物をしたり、手紙を書いたりしてゐた姉妹も、殆んど一言も口をきかずに手ばかり動かしてゐたが、みんな早目に寢室に引上げてしまつた。栢植は遲く迄、たつた一人客間の煖爐の前に椅子を引寄せて、此の一家を中心とした世の中のまゝならぬ感じに思ひ耽りながら、小說めいた想像を、とりとめもなくつゞけてゐた。
翌日、夫人は夫の兵營に出かけてしまつた。朝の食事にみんなの顏が揃つた時、夫人は旣に身支度を整へてゐた。
「一晩か二晩で歸つて來ますが、兎に角家の事で未だ相談して置き度い事もありますから、一寸兵營に行つて來ます。」

専ら辯解がましい口調で、此の朝の出立を宣言して、食事もそこそこに、手鞄をさげてあたふた出かけて行つた。やがて戰地へ行く夫と、一刻も別れてはゐたゝまれないといふ情念が、あらゆる感情をかくす事の出來ない夫人の全身にひしめいてゐた。

四日目の夕方、夫人は悄然と歸宅した。恰も午後のお茶の後で、茶碗や皿の片づけに、姉妹の立働いてゐる折柄だつたが、キテイが兩手に片づけ物を持つて出て行かうとする出あひ頭に、玄關の扉の音も聞えず、何時の間にか歸つて來た夫人が、みんなの集つてゐる客間の扉を押して入つて來たので、開扉の重みはまともに陶器にぶつかつて、ひとたまりもなく床の上に落ちて碎けた。

「おゝ。」

おびえた聲を立てて、手の中からすべり落ちた物の足下に微塵になつたのを見て立ちすくんだ娘を、夫人は病的に青ざめた顏つきで見下したまゝ、叱る事も、なぐさめる事も出來なかつた。暫時の間親子は互の顏を凝視して立ちつくしたが、やがて夫人の目から涙があふれて來た。と思ふひまもなく、佇む力も失つたやうに、大兵肥滿のからだがよろめいたが、傍の長椅子の上に崩れるやうに倒れかゝつた。驚いて、みんなが取圍んだ時は、夫人はつい此間の時と同じやうに激

越な嗚咽に髮の根迄も震へてゐた。

少佐は其の日佛白の戰線の或地點にむかつて、一軍の兵士と共に送られて行つた。その目的地が何處であるかは、遂に少佐も知らなかつた。夫人は最後の數日を、出征の準備に忙しい營舍で、片時も夫の側を離れずに暮して來た。二十幾年かの結婚生活の間の、お互の氣まづい事や不滿不足も、此の數日の熱愛の中に、一切消え去つてしまつたであらう。夫人はすゝり泣きにむせかへりながら、夫のかどでを物語つて、我慢も意地もなく身を揉んだ。

春は次第に色彩と芳香を深く濃く漲らして來た。並木の梢にも淺緑が萌え、向ふ側の家に絡む蔦の蔓にも薄紅の芽を吹く頃になつた。しかし少佐からは何の消息も無かつた。

若し萬一の事があれば家族へ通知の來る事は知りながら、家の者が毎朝の新聞で、一番熱心に目を通すのは、戰死者の氏名の列記してある頁だつた。それも最初に一人が讀む、次の一人も讀む、更に又他の一人が讀む、さうして最後には、夫人が二度位繰返して讀んだ。夥しい戰死者や負傷者の中には、此の家族の知つて居る人もあつた。さういふ名前を發見した時は、親子は額をくつつけて、新聞の上には僅にその短い名を止めるばかりなのに、長い間見入るのであつた。夫人の目には、いつも涙が浮び易かつた。

将校夫人會の本部には足踏もしなくなつてしまつた。頭痛の日が多くて、終日三階の小部屋に寢て暮らす事も珍しくなかつた。些細な事にも怒り罵り、さうしてしまひには眞青になつて身を震はして泣いた。娘達は愈々怖がつて、成るべく母の身近に寄らないやうになり、その姿の見えない時は、寄集つて陰口をきいて居た。以前から居つきの惡かつた女中は、短時日の間に幾人も出替つて、此の頃は伊太利人の血のまじつてゐるといふ目附の鋭い、頰邊に切傷の痕の殘つてゐるのが、存外人はいゝらしく、叱られながらも立働いてゐた。

Mは病氣もよくなつたらしく、流石に眼の中は白けて曇つてはゐたが、旣に素人眼には全癒近いもののやうに見えた。それでも矢張り二階の一室に、少佐が出征前に夫人と數日の別れを惜みながら相抱いて眠つた大型の寢臺に寢そべつて日を暮らした。機嫌のいゝ日の夫人は、多くはその室で、時折は笑聲も聞えて、何かしら話合つてゐた。

勿論娘達は、餘りに長いMの滯留を快く思はなかつた。殊に疾患が夙になほつてしまつたやうに考へられるので、心の中の口には云へない不安と疑惑に、機會さへあれば反抗的の態度に出た。

「Mさんの眼はそれでも惡いんですか。」

など〻、意地の惡い質問を浴せかける事もあつた。

「どうも霞んでいけないのです。私は人一倍視力は強く、船に乘つてゐる頃は、他人には見えない遠方の船の烟も、一番先に認めるのは私でした。そいつが此の頃は、まだしも晝間はいゝけれど、夕方の光では殆んど何も見えないんですよ。」

さりげなく答へるのを追かけて相手はきき度がつた。

「殘念でせうねえ、いくさに行かれなくて。」

「えゝ實に殘念です。」

語調は強くいひ切りながら、流石に相手の底のある物の言ひ振に不快を感じて、險しい眼附で見守るのであつた。さういふ時の家の中の空氣は堪へ難いものだつた。さうして、夫人は忽ち娘達に八當りの小言を無理にもきかせなければ承知しなかつた。

家の內の平靜が全く失はれてしまつたので、柘植は自分の心持さへ亂される事が多くなつた。自分の室に閉籠つて勉強してゐても、何となく身の廻りに不安定な氣配を感じて爲方が無かつた。

恰も其の頃高樹は大英博物館の裏手に新しい宿を見付けて引越した。四月頃か、遲くとも初夏の頃には佛蘭西に行き、やがて豫々憧憬の伊太利の旅に立つと云つて、彼が專門の研究に、一層緊張した心持を盡してゐた。その新しい宿といふのは、樹木の多い共有園を前にした大きな家で、

專業の下宿だつた。田舍の醫者の娘だといふ三十代の獨身の女が、十六七の妹と二人で經營してゐた。つい先頃の海戰に、海軍少尉の弟が船と共に沈んだ爲め、姉妹とも喪服を着てゐたが、少佐の家の人々とは違つて、客馴れた氣輕い樣子が、いかにも呑氣な下宿らしく、それがその時の彼にとつては、非道く羨しく思はれた。下宿に限る、下宿に限る。心密かに、窮屈でわづらはしい、格式張つた家庭を逃れる事さへ考へた。

激怒

段々に日が永くなると、重苦しい倫敦の霧も、日光に追はれながら、金粉のやうに消えてゆく事が多くなつた。草や木の新芽の色も、囀りかはす小鳥の聲も、日增に深く高くなつたが、少佐の家の有樣は、愈々みじめになつて來た。

夫人は春先の濃厚な外氣に腦神經を壓迫されて、毎日頭痛をかこちながら、血走つた眼をして、大概は階下には下りて來なくなつた。キテイは相變らず郵便局に通つたが、二人の姉はいゝ仕事も見つからず、來る夏の着物も出來さうもないので、事毎に反抗的になり、意氣地の無い父親を罵り、橫暴な母親を怨み、厄介者のMには、殊更辛く當り度がつた。僅かながらも栫植の拂ふ語

學の稽古の御禮が、二人の乏しい小遣になつた。
母親の小言は益々條理を缺き、おまけに細かい注意は一層失はれたので、家の中は亂雜に、埃つぽくなつた。朝の掃除も行屆かず、食事の支度や後始末さへ、なげやりになる事もあつた。
柘植は多くは圖書館で暮らしたが、その留守の部屋には姉妹が勝手に出入して、一度は禁じられた露西亞の小說を引出しては、母親の目を盜んで耽讀した。殊に「戰爭と平和」は奪ひあつて讀まれた。
「そんな禁園の花を摘むとお母さんの罰が當つて獸になりますよ。」
柘植は、家庭の平和を亂す基にでもなられては迷惑だと思ひながら、一方では、眞の藝術を一人でも多くの人が愛好する事を希望したので、強ては止めようとしなかつた。
「獸になれるならなりたいわ。人間の牝にはあきあきしてしまつたんですもの。」
ヂンは捨ばちな調子で答へて、若い士官の戀を描いた一節に夢中になつて、その一卷を胸に抱いた。
四月上旬の或日、終日圖書館で暮らした柘植が歸つて來ると、待兼てでも居た樣子で、クリスティンは玄關に驅出して來た。

「大變、大變。大變な事になつてしまつたわ。」
他人の耳を憚かる聲で、息忙しくささやくのであつた。
「何が大變なんです。」
咄嗟の間に、柘植は少佐の戰死を想つた。
「何がつてお母さんが氣狂のやうに怒つてしまつたの。」
夫人が氣狂のやうに怒つたのなら、別段珍しくもないではないかと、柘植は密かに安心した。
「今日のお晝の事なんです。ヂンが讀みかけのトルストイの小說を、食堂の椅子のクッションの下にかくして臺所を働いて居る間に、お母さんに發見されてしまつたんです。それからの大變な事つたら……」
近眼の目を頻にしばだたきながら、心持上齒の出過てゐるちひさい唇をとがらして、口早に訴へるのであつた。
夫人は本を取上げてみると同時に、顏色を變へて娘達を呼びつけた。さうして相手には一言の主張も辯解も許さずに、頭ごなしに叱りつけ、當の本人のヂンは口惜しさに抗辯を試みたが、一層激怒を増すばかりで、たうとう泣出してしまつた。氣の勝つた娘は、それつきり二階の一室に

籠つて、寢臺に突伏した顏をあげないと云ふのであつた。
「柘植さんにはほんとに申譯ないわ。私達が勝手にお部屋の本棚から引出して來たんですもの。若しお母さんが失禮な事を云つても、どうぞ堪忍して頂戴。あれが病氣なんですから。」
氣の弱さを額の皺に浮べて、柘植の胸に取縋るばかり、歎願するやうに繰返すのであつた。
「大丈夫です。ヒステリイの爆彈には馴れてゐますから。」
さう答へながら、彼はほんとに取るにも足りない事件だと思つてゐた。
折柄女中が食器を運んで、地下室から上つて來たので、柘植は二階に引上げた。机の上を整理し、手を洗つて食事の時を待ちながらも、何となく新しい出來事を期待するやうな遊びの氣持が強かつた。
食卓にもヂンは出て來なかつた。何時も先立ちになつてお喋りするのが居ないのと、晝間の事件の後なので、誰も憚かつて口をきかうとしなかつた。夫人は、怒の外の一切の表情を失ひ切つた顏をして、堅く唇を結んで席に着いた。クリスティンもキテイも、肉汁(スウプ)の匙を動かしながら、上目(うはめ)をつかつては母親のけしきをうかゞつてゐた。
何時迄たつても誰も口を開かない。今にも夫人の小言が出る事と想像してゐた一種の張合も拔

けてしまひさうになつた。怒り疲れて反省したのかとも考へられた。娘達の顔には安心の色さへはつきりと浮んで來た。

プデイングが出て、それもおしまひになつた。そろそろ食卓を離れようとする時であつた。

「柘植さん。」

夫人は突然重々しい調子で口を切つた。

「私は貴方に率直に申上げ度い事があるのです。貴方は何故私の命令――此の家の掟を守つては下さらないのです。」

大きな目をみはつて、詰責する態度をとりながら、早くも夫人の聲は震へを帶びて來た。

「私は何も此の家の掟といふ可きものを破つた覺えはありませんが。」

柘植は冷かに反問した。相手の高壓的な調子が、非道く反感を抱かせた。

「いゝえ、破らない事はありません。貴方は御存じでせう。先日も御注意した通り、私の家では不道徳な小說本は讀ませない事になつてゐます。それなのに一體これは何です。」

何時用意して置いたのか、傍の椅子の上にあつた本を取つて、食卓の上に音高く置いた。その表紙の金文字を指さす夫人の指は痙攣してゐた。

「それはトルストイの小説です。多分私のものでせう。」

「確かに。確かに貴方の御本です。私が不道德な小説だといふのは斯ういふ小説の事なのです。おわかりになりましたか。」

柘植がおちつけばおちつくだけ、夫人は苛立たしい心を押へ兼て、たゝみかけて問ひつめようとするのだつた。娘達は身動も出來ない程心配にかたくなつてゐた。

「私には一向わかりません。それは立派な小説です。」

「いけません。」

夫人の聲は突然甲高くなつた。

「さういふ無責任な言葉は控へて頂きませう。私は日本の事は知りません。けれども此の國では、トルストイの本は善良な家庭には入る事を許されないものです。あれは氣ちがひです。」

「それは誤解でせう。英吉利の偉い教授や文學者が、如何にトルストイを評價してゐるか御存じですか。その著作は永久に世界的古典として殘る可きものです。」

柘植は多少昂奮して來た。相手のわからずやの腹立たしさと、日頃自分の尊敬する藝術並に藝術家を護らうとする心持もあつた。

――何と仰つても、私は此の家の主婦です。私が禁じたものを若い者に讀ませる事は許せません。若い心にどんな惡影響があるかを考へなければなりません。」
「失禮ですが、若い者は貴方の御考へになる程無理解ではありません。第一、今日の人間は、昔の人間よりも強い意志と、正確な判斷を持つてゐます。」
「何ですつて。」
夫人はそれが甚しい侮辱だと感じたのであらう、血相變へて詰つた。
「貴方は母親の威嚴をさへ傷けようとするのですか。二度とさういふ言葉は云はせません。」
「乍遺憾自分の信じる事を云ふ外には爲方がないんです。」
柘植も正面から相手の顏を見返へした。不愉快な沈默が續いた。
恰もその時、食事の後始末をする積りで、女中が大きな盆を持つて入つて來た。室内の息苦しい景色に一度は二の足を踏んだらしかつたが、おづおづしながらも食卓の上の空皿に手を差延した。
「何をするんです。馬鹿ッ。」
夫人の鋭い聲がその手を叱つた。

「呼びもしないのに何しに來た。いひつけもしない事に差出がましい。」

伊太利の血のまじつてゐる凄い眼附の女中は、あつけにとられて夫人の顔を見た。

「でも、お食事はお濟みのやうでしたから。」

「うるさい。」

とたんに食卓の上の小說本に手がかゝると、力任せに女中の顔に投げつけた。

危ふく身をかはした胸の邊をかすめた部厚な本は、一隅に飾つてある和蘭製の大花瓶に當つた。常々夫人が自慢の品は、脚の高い臺の上にあつたが、なだらかにふくらんだ胴中に叩きつけられた物の爲めに、ゆらゆらと搖れたと思ふと、眞逆さまに床に落ちて碎けた。

女中は怨みの眼ざしを夫人に投げたが、身をかへすと一散に、室外に驅けて行つた。先刻からジョオジの足下に眠つてゐた老犬は、むつくりとび起ると、物におびえた唸聲を立てながら不自由な四脚で床の上を方角も知らずに歩き廻つた。眞青になつて身を震はしてゐる夫人を後にして、柘植は食堂を出ると直ぐに、帽子と外套を手にして戸外に出た。

柘植は高樹の下宿を訪れた。友達の顔を見ると、今迄我慢してゐた憤懣に頭の中迄熱くなつて、自分の高調子に一層感激しながら、一氣に顚末を話した。

「だから英吉利の家庭はいやだよ。下宿の方が氣樂で餘程いゝや。」
高樹は自分自身の事ででもあるやうに唾棄した。
「僕も今度といふ今度は辛棒出來なくなつた。明日にも下宿を探して出ちまふ積りだ。」
來るみちみち考へて居た事を、ぬきさしならないものにしてしまへと思ひながら、きつぱり云つてしまつた。
「そりやあ其の方がいゝさ。此の家の二階も空いてるぜ。」
「ひとつ見せて貰はうかな。」
ふだんから英吉利の中流階級の、世間見ずでたかぶつてゐる愚かさと窮屈に、強い反感を持つてゐる高樹の調子には、おのづから煽動するやうなところさへまじつてゐた。一も二も無く柘植は相槌を打つて、やがては國家としての英吉利をさへ、飽迄も罵倒して止まなかつた。
主婦に案內されて、今空いてゐるといふ往來に面した二階の一室を見せて貰つた。室內の裝飾も、家具も、一切が安物ながら、小ざつぱりと明るく、少佐の家の永年の埃に何とも云へない惡臭を帶びてゐる室に比べて、遙かに氣持がよかつた。窓を開けて露臺に出ると、目の前の共有園の樹立の上に、薄い靄にぼやけた春の月がまんまるくかゝつて居た。

實際引越して來るのは何時にしても、兎に角翌日からその室を借りる事に約束した。此の頃の少佐の家の紛糾に、不知不識かゝづらつてゐたわづらはしさと、きれいに絶縁した清々しい心持で、何時迄も高樹の室で談じて居た。

夜更けて歸ると、平生は母親が喧しい爲めか、割合に早寢の上の娘二人が、何をするともなく待つてゐた。今日の事件を引起した責任を感じて胸を痛めてゐる樣子は、いそいそして迎へる態度にも明かだつた。

「柘植さん、何處に行つてらつしやつたの。隨分遲いぢやありませんか。」

クリスティンはあたりを憚かる聲で訊いた。

「友達の所へ遊びに行つたのです。それよりも貴方達こそ珍しく遲く迄起きてゐるぢやありませんか。」

彼は反問しながら、深々と椅子の背に身をもたせて坐り込んだ。心配して待つてゐて呉れたのを見ると、愈々此の家にも別れる事に決心しただけ、かへつて親しさを增したやうに思つた。

「私はね、貴方に謝まらうと思つて待つて居ましたの。」

デンは心持眼をうるませて云つた。

「私達の不注意の爲めに、柘植さんに御迷惑をかけてしまつて、ほんとに濟まないと思つたわ。だつてお母さんはあんまりなんですもの……」
「難有う。その事ならもう濟んだ事です。心配なんかしない方がよござんすよ。」
口ではさういひながら、柘植も流石にあだには感じなかつた。
「ほんとはね、柘植さん怒つて何處かに行つてしまつたんぢやないかと心配してゐたんです。若しかさうだつたら如何しようと思つて……」
クリスティンも言葉を添へて、二人はしきりに自分達の不念と、母親の無禮を詫びるのだつた。彼は、既に今晩新しく下宿をきめて來た事を口にする心持にはなれなくなつた。さういふ決心をした事さへ悔まれて來た。
「一體私達は如何なるんでせう。お父さんは戰爭に行つてしまつて、生きて歸るか死んでしまふかもわからないのに、お母さんはまるつきり狂人みたやうになつてしまつて……」
日頃の不平と心配に力を加へて、ヂンの聲は段々高くなりかけたが、とたんに室内の電燈は、天井に吸ひ込まれたやうに消えてしまつた。
「あら、どうしたんでせう。」

クリスティンの立上る氣配がした。暗闇を手探りで戸をあけると、廊下の壁に取附けてある電燈の扭鈕（スウイッチ）の前に立つ、夫人の姿が目に入つた。

「まあ、お母さん……」

「誰です、こんな夜更け迄大きな聲でお喋りをして居るのは。此の頃は遲く迄本を讀んでる人があるものだから、毎月の電燈代が嵩んで爲方が無いぢやありませんか。いゝ加減にしておやすみなさい。取締りがつきやあしない。」

心の制御を全く失つてしまつた夫人の聲は、家中に響き亙つた。うつかりすればつかみかゝりもしかね無い母親の權幕に怖れて、唇を噛んでうなだれた娘を、暫時は睨みつけてゐたが、

「さあ、二人とも愚圖々々してゐないで、直に寢るんです。」

もう一度高壓的な言葉を浴せかけた上で、勝ほこつた態度で身を返すと、わざとおちついた足取を見せて二階に引上げて行くのだつた。

その大兵肥滿の後姿を見ると、栢植の憤は押へ切れなくなつた。今更何の躊躇も無く、彼はつかつか後を追つた。

「待つて下さい。話す事があります。」

三四段上つた夫人は呼止められて、ぎよつとして振かへつた。

「外でもありません。永々御厄介になりましたが、愈々此の尊敬すべき家庭ともお別れです。勿論約束通り、一週間の豫告をしなければならない事は承知してゐます。但し實際は、自分のからだ丈は明日にも他所に運んでしまひ度いと思つてゐます。」

強ゐても弱味は見せ度ない、飽迄も優越を示し度いと思つて、努めて沈着を裝つたが、柘植の聲は感激に震へて居た。

上と下と、夫人と柘植は、敵意のある視線を眞當面にかち合せて動かなかつた。

「わかりました。御勝手になさい。」

暫時して、夫人は叩きつけるやうに答へると、その儘足音をさせて二階に上つた。姿が見えなくなると同時に、怒りに震へた聲で、

「クリスティンもヂンも、直に來ないと承知しませんよ。」

と叫ぶのが聞えた。

二人の娘は、口をきく力もなかつた。歎願するやうな目を柘植の方に向けたが、その目からは既に涙が溢れてゐた。一樣に兩手で顏をかくした二人は、すゝり泣きながら二階に上つて行つた。

夜更けて暗い自分の室に、昂奮した身を横へ、枕に顔を埋めても、栢植の耳には夫人の怒聲と、娘達のすゝり泣く聲が長い間殘つてゐた。

轉宿

翌朝早く目の覺めた栢植は、すべて荷物を大鞄につめてしまつた。どうしてもその日のうちに、此の家を立去らうと、一層心をかたく決めた。古び汚れた壁紙にも、埃臭い絨毯にも、心の殘る事は否まれなかつた。窓をあけて、朝日の上る靑空を何時迄も見てゐた。

朝の食事に家の者——家の者といふよりも、夫人と顏を合せるのが氣まづくて、流石に躊躇したけれど、引込んでゐるのも見苦しいと思ひ直して下りて行つた。

いゝあんばいに、夫人はその朝食堂に姿を見せなかつたが、上の娘達は勿論の事、その二人に話を聞かされたに違ひ無いキテイも、ジヨオジも、妙に固くなつて、その癖じろじろと栢植の顏を盗み見るのだつた。誰も口をきく者もなく、息の詰る心持の食事だつた。

何時もの通り、男の子は學校に出て行き、末の女の子は郵便局に通つて行つた。その二人には、もうこれつきり逢ふ機會もあるまいと思つて、別れの言葉をかけようとする氣も動いたが、何と

なく言ひ出し兼てしまつた。

上の二人も口のききにくさをまぎらす爲めか、食事の後始末や、室々の掃除に側目も觸らないで働いて居て、沁々話す機會も無かつた。これがお別れならば、もつと緊張した場面を見なければふさはしくないと思ひながら、柘植も自分の部屋の殘の片附に二階に上つてしまつた。

餘程たつてから、部屋の戶を叩く者があつた。

「お入りなさい。」

靜に開けて顏を出したのはクリスティンだつた。

「柘植さん、お母さんが御目にかかり度いんださうです。」

云ひながら、綺麗にかたづいた室內を見て吃驚して、つかつか入つて來た。

「貴方、ほんとに行つてしまふんですか。」

柘植は默つてうなづいた。

「後生だから我慢して下さい。お母さんも自分の方が惡かつたと氣が付いて居るに違ひ無いんです。今朝は私達にも珍しく優しいんですから。」

近眼の目をうるませて、少し上齒の出過ぎた子供らしいちひさい赤い唇の震へながら動くのを

見てゐると、その心根に動かされるよりも、寧ろ感覺的な刺戟を強く感じた。栢植は兩手を差延して、心持後に身を退かうとする相手の二つの手首をぐつと握つた。そのまま引寄せて唇を吸つてやり度いと思つたが、恰も狼狽しく梯子段を驅上る人の足音に驚いて、クリスティンは取られた兩手を振拂つた。

「栢植さん、お母さんが下でお待ちして居ますつて。」

廊下から、ヂンの聲が高く聞えた。

「只今。」

栢植も聲高く應じて、吃驚して佇んで居るクリスティンを殘して、迎ひに來たヂンと前後して梯子段を驅下りた。

夫人は客間に待つて居た。彼を見ると、愛嬌笑を浮べて、傍の椅子を勸めた。

「栢植さん、私お詫びしなければなりませんの。」

多少云ひ出しにくさうではあつたが、夫人は直に持前の早口で言葉を續けた。

「昨日はほんとに失禮しました。此の頃は體の具合が惡くて、始終頭痛がするものですから、ついつい些細な事にも氣が立つたりして、後では自分でも恥しくなる事が多いのです。貴方がお怒

りになり、おさげすみになるのも御無理は無いと思ふのですが、どうか平生の廣いお心で、面白く無い事は綺麗に忘れて頂き度いのです。」

自分の言葉を助ける爲めに、つくり笑しながら、至極く物柔かに詫びるのだつた。

どうかして自分の位地を一段高いものと認めさせなくては承知しない性質の人だから、これ迄に折れて出るのはよくよくの事に違ひ無かつた。さうは思ふものの、今更柘植の立場としては、何とも答へる言葉が無かつた。

「昨夜は貴方も御腹立(はらだち)で、もう此の家には居ないなんて云つてらつしやいましたが、あれは勿論一時その場限りの事と思ひますけれど、どうか何時迄も此の家に居て頂き度いのです。御承知の通り、此の頃は此の家の暮しも隨分樂ではないのですから……」

段々に聲も弱くなつて泣言めいて來た。それは幾度となく繰返された一家の運命であつた。自分の生ひ立の華やかだつた事、此の家もかなり贅澤に暮して居て、結婚當時の樂しかつた事、それが段々非運に傾き、夫の投機の失敗で、全く動きのとれなくなつた事、更に戰爭が幸運を奪つて、此のまゝでは行末どうなるかわからない事を順々に話した。その生活を助ける爲めには、何時迄も柘植に居て貰ひ度い、現在拂ふ宿料と月謝がなくなると、少なくとも子供達に着物を着せ

る事が出來なくなると云ふのだつた。

柘植は、既に下宿もきめ、荷物も引纒め、いつでも出て行ける準備をしてしまつた自分とは知らないで、くどくどとかき口說く夫人が氣の毒にも思はれたが、一旦かうときめた心持をひるがへさうとは少しも考へなかつた。

「そんなやうな事情なんですから、貴方の英吉利滞在中は、此の家の一員として、此の家を自分の家と思つて居て頂き度いのです。」

夫人は、充分相手の同情を得たといふ滿足を示してゐた。あまりと云へば勝手極まる先方のむら氣に、柘植はすくなからず不快を感じた。そればかりで無く、此方の心持を知らずに、段々安心して來る樣子を見ると、何時迄もうつちやつては置けなくなつた。彼は思ひ切つて夫人の言葉を遮つた。

「お話はよくわかりました。今の貴方がたの賴り無い立場には平生から同情してゐます。お氣の毒だと思つてゐます。けれども、實は私は、もう引越す先迄きめてしまひました。今日にもお別れしようと思つて、今朝のうちに荷造もしてしまひました。」

「何ですつて。」

大きな目を一層大きく見張つて、夫人は平靜を失つた聲を立てた。

「ほんとにですか。」

「乍遺憾ほんとです。昨夜のうちに下宿の約束をして來ました。私にはもう辛棒出來なくなつたのです。」

柘植は、目の前に唇を嚙んで怒りを堪へて居る相手を見ながら、極めて冷靜な態度を失はなかつた。

「下宿――それは一體何處なのです。」

「博物館に近い所です。」

その町の名を云ふと、夫人は更に驚いた。

「貴方はそれがどんな場所だか御存じないんでせう。決して社會の尊敬を受く可き人々の住む場所でない事を。」

その意味は、夜の女の巢窟だといふのだらうと察しる事が出來た。

「貴方の御兩親が御聞きになつたら、何といふか御存じですか。」

「大丈夫です。私の兩親は自分の子供を信じて居ます。どんな場所に住まうとも、無駄な心配な

んかしません。」

柘植はきつぱりと云ひ切つた。語氣の強さに、夫人はなほも開かうとした口を閉ぢた。

「勝手になさいまし。」

暫時たつて、憎惡に滿ちた聲で云ひ放つと、身を起して室外に出て行つた。

見送り果てて、柘植も、一切の終つた事を知つた。客間を出ると、わざと戸をあけ放した次の間の食堂に、心配さうな額を集めてゐた姉妹が、呼止めさうな樣子を見せたにも拘らず、振向きもしずに戸外に出た。昂奮した態度を見せ度ないと云ふ氣持もあつた。

十數分の後、柘植は町角の辻待の自動車を呼んで歸つて來た。その物音に出迎へた姉妹に、卽刻此の家を立去る事になつたと話した。

「柘植さん。」

一時に兩方から、姉妹は聲をかけたけれど、それつきり何も云ふ事が出來なかつた。思ひ止れと云つても無駄な事がわかり切つてゐる所迄既に事は運んでしまつたのだ。

「お母さんによろしく。」

向一週間分の宿料を托した。大きい荷物は運送屋を取りに寄越す筈だと云つて、比較的ちひさ

い旅鞄を自動車に積んだ。

「それでは左様なら。」

柘植は姉と妹と、力強い握手をした。二人とも、涙を頬ぺたにつたはらして、一言も口をきく事が出來なかつた。

「キテイにもジョオジにもよろしく。」

彼は車の中から、玄關に立つ二人に最後の言葉を殘した。あまりに狼狽しい結末をはかなむ心は寂しかつた。

自動車は容赦なく、けたたましい音を立てて、日光の漲りあふれる新綠の並木の下を一直線に滑り出した。（大正十一年五月二十一日）

第二部　都　塵

ながらく間借してゐた山の手の陸軍少佐の家を、夫人と喧嘩して出た柘植は、さしあたり行くところが無く、友達の高樹の下宿に割込んだ。大英博物館に近い、下町の塵埃と馬糞の風に舞立つ區域だつた。

少佐の家は、おひとよしの主人が戰前株式相場で失敗した爲め、下宿人を置かなければならない家計狀態に陷つてゐた。夫人は生家の家柄がよく、親類には侯爵や伯爵が澤山あるといふのが何よりのほこりで、英吉利の傳統を無批判に固守しようとしてゐたが、三人の娘と一人の息子を、自分の好みのまゝに貴族的に育てる事は絶望に等しかつた。中學生の男の子は、からだは無闇に大きくなつたが、未だ全くの子供で、年中他愛なくバンヂョオを彈いてゐた。三人の姉達は、流石に世間の風潮も知り、役所か郵便局か百貨店で働いて、自分の着物位は自分で作り度いと主張するのであつたが、我子が賃銀の爲めに働くといふ事を羞て、夫人はなかなか許さなかつた。

長い間の平和に馴れ、競馬と骨牌と倶樂部と酒で暮らしてゐた少佐は、時たま郊外の兵營から歸つて來ると、貧乏はしてゐても三鞭酒をぬいて、上機嫌で話すのだが、世界の現狀を少しも知らず、軍事についても疎かつた。亞米利加は未開國であり、日本は英吉利の援助なしには獨立の保てない小國で、日露大海戰の時の如きは、英吉利の海軍士官が各艦に乘込んでゐて號令をかけ

たのだと確く信じてゐた。目前の歐洲戰爭に對しても、政府が政策的に宣傳するスロオガンを、其のまゝ信じて疑はなかつた。歐洲諸國が一年越たゝかつて、今では東部戰線も西部戰線も塹壕で固められ、決定的の勝敗を期待する事は兩軍ともに望めない戰況なのに、春になつて雪が解け、キッチナア元帥編成の英吉利の大軍が海峽を越れば、忽ちカイゼルは動物園の檻の中に囚はれの身となるであらうと、中學生が明日のラグビイを語るやうな樂しさで、常に妻子に話すのであつた。だが、春が來て英吉利の大軍が海峽を渡り、少佐もその一員として戰地へ向つたが、獨乙の戰線は一歩も後退しなかつた。

柘植はこの一家の人達と馴染んだが、夫人の無識のたかぶりとヒステリイには幾度となく衝突し、たうとう我慢出來なくなつて、喧嘩別れとなつたのである。その喧嘩の最後は、レオ・トルストイの小說が原因となつた。柘植は其の頃トルストイの全集を買込んで夢中になつて讀んでゐたが、娘達も母親の目を忍んで、勝手に借覽してゐた。それがめつかつて、夫人は激怒し、柘植も負けずに爭つた。此の英吉利魂の夫人にとつては、ヤスナヤ・ポリアナの聖人は極めて危險なる狂人に過ぎなかつた。勿論夫人はそんな狂人の書いたものを讀んだ事もなく、手に觸れた事も無い。何故ならば、善良なる英吉利人の家庭には、トルストイの書を置くべき場所は無いからで

ある。柘植は結局トルストイ全集と共に、英吉利人の城郭である尊敬すべき家庭を出てしまつたのだ。

今度の下宿は、田舎の開業醫の娘の經營するものであつた。姉は三十前後、妹は十六七で、柘植が最初にあつた時、二人とも喪服を着てゐた。姉には弟、妹には兄になる海軍少尉が、つい先頃の海戰で、船と共に水に沈んだのであつた。その話をする二人は、悲みよりも誇に、寧ろ輝かしい表情を見せた。ほかには、下僕が一人、女中が一人ゐた。若い下僕は、今此の國の敵となつて戰つてゐる墺太利人で、飴色の柔い頭髪を綺麗に分けた、色の白い、頰の紅い、おつとりした顔立ちの青年であつたが、何時も鼻の下が濡れ、それに石炭の粉がついたのを横撫でにして、せつかくの目鼻だちをだいなしにしてゐた。

客は高樹の外に印度の學生と、白耳義ブラッセルから避難して來た一組の男女がゐた。頭の天邊の禿げた、猫背の、溫良さうな四十男と、殆ど英語を解さない二十代の小鳥のやうな顔つきの女で、兄妹だと云つてゐたが、すべての様子が夫婦だつた。何か輕い言ひ爭ひのあげく、つんとすねてゐる女の機嫌をとる爲に、うしろから手を廻して抱きながら近々と顔を寄せる男の禿頭を、平手で叩いて逃出すやうな所作を見せた。

下宿の入口は共同園の芝生に面してゐた。人造石の段々を上り、重い扉を押して入ると直に右手が客間兼食堂で、その隣の室に高樹がゐた。二階のとつつきの室には印度の學生が、割合に贅澤な生活をしてゐた。跛のくせにお洒落で、政治史を勉強してゐると云つてゐたが、別段學校に通ふ樣子も無く、カフヱやレヴュウで夜を更かして歸つて來た。その隣室に柘植が入り、三階には白耳義の男女がゐた。

朝、誰よりも早く食堂に顏を見せるのは柘植で、一人で食事を濟ませると、大英博物館の圖書館に出かけた。彼は其頃、近代歐羅巴文人の傳記に興味を持つてゐた。廣い讀書室は、埃臭い下宿の一室よりも居心地がよく、時には地下室の食堂で、パンと紅茶で晝を濟ませ、日の暮る迄居る事もあつた。少し遲れて高樹もやつて來る。彼は美術史專攻で、元來獨乙にゐたのが、戰爭開始と共に身を以て逃れて來て、一年間英京で暮らしながら、心は常に伊太利へ憧れてゐた。初夏の頃には巴里へ行き、フロレンスへ行き、來年の春迄には日本へ歸つて、母校に教鞭をとる身の上だつた。

「いやだなあ、又今日も冷肉か。」

正午に近く、高樹は柘植の席へ來て、自嘲に似た言葉を屢々漏らした。

英吉利の一般家庭の質素で、辛抱強く、變化の無い日常生活に耐る事は驚くばかりで、たとへば大きな肉の塊の焙つたのを大皿に盛り、毎日少しづゝ端の方から切つて喰べ、喰べ終ると甲のやうな銀の蓋をして置き、次の日も又次の日も、暖めもしずに切つて喰べる遣口だ。食物に纎細な味をつける事をしないで、同じ物を年中あきずに喰ふ鈍重な感覺は、大英帝國そのものゝやうな底力を藏してはゐるが、客間兼食堂の食器棚の上に、いつも大皿に盛られた冷肉に銀の蓋のかぶせてあるのが置いてあると、未だあの肉塊はなくならないのかと、嘆息する氣が起るのであつた。しかも其の肉塊の最後の一片がなくなると、翌日は又新たにうづ高い焙肉がつくられる。結局、一生涯焙肉を喰つてゐなければならないのだ。それが下宿の最下等の肉塊と來てゐるのだから、食慾は減退し、氣は重くなり、殊に旅人の心持は、いやが上にもやるせなかつた。體の弱い爲か、生來の我儘か、高樹はその冷肉の嘆を始終口にして、なさけながつた。

「實に驚くべきものだねえ、何の味もつけずに燒いた肉に、鹽かソオスをかけて喰ふんだからなあ。」

彼は又極端な英吉利嫌でもあつた。實利主義一方で藝術を理解しない事も、一生涯ロオスト・ビイフを平氣で喰ひつゞけてゐる事も、すべて呪ふべきデモクラシイの精神に出るものであると、

美術史專攻の學徒は唾を飛ばして罵るのであつた。

或日の如きは、夜食の鐘の鳴るのを聞いてから、高樹は帽子をかぶり、外套を着、ステツキを小脇に挾んで、柘植の室の扉をノツクした。

「君、何處かに飯を喰ひに行かないか、僕は此の家の飯を喰つてゐては體がつゞかないよ。」

白い、廣い額に憂鬱な陰影を刻み、眼鏡の奥の細い目には涙さへ浮べてゐた。

「どうしたんだ、ひどく眞劍ぢやあないか。」

「今日程故鄕を懷しく思つた事はない、晝飯の時、例の冷肉を喰つてゐたら、ふいに涙が流れて來た。あの薄つぺらな肉のどこに脂肪があるんだ。君、命の問題だよ。」

柘植は笑ひながら聞いてゐたが、高樹にはそれが冗談では無かつた。おもひつめた顏つきで、甚しく感傷的になつてゐた。

戸外は風の無い春の夜であつた。共同園の木立の、若芽を吹いた梢に、まんまるい月がかゝつてゐた。下宿の食物が惡いと云つて、むきになつて怒るのも旅なればこそである。かねての計畫の伊太利旅行が、目の前に迫つて來て、高樹の全身は興奮に燃えてゐた。極めて冷かな性格の一面に、こどもらしい情熱を失はない彼が、その心地よい興奮を妨げる下宿のわびしい生活に、は

げしいノスタルヂアを起し、旅愁にたへかねる心持は、柘植にも深く了解出來た。その晩は裏町の伊太利料理店でキヤンテイの一瓶を傾け、高樹は初戀の人の話を繰返して、追慕に心をなごやかにした。下宿に歸つても語りあきず、柘植の室で曉近く迄話した。

翌日、高樹は風邪を引いたやうだと云つて起きて來なかつた。大した事とも思はずに、一人で圖書館へ出かけた柘植が晝飯に歸つてみると、僅かの間にすつかり氣力を失つて、うちのめされたやうに横つてゐた。

「どうした、昨夜遲く迄起きてゐたのがいけなかつたのではないか。」

「さうぢやあない、二度目なんだが、血を吐いたよ。」

病氣の家畜のやうに人なつつこい目つきで、高樹は存外おもひきりよく話した。一度は獨乙で、伯林の宿の洗面器を血で染めたが、今朝はしきりに咳の出るのをこらへるとたんに、半巾が眞紅になつた。かねて自分のおそれてゐた運命が、早くも自分の勉學を妨げに來た。しかし、こんな事で命は捨てない。自分の希望と意志の力でも、容易に病氣と闘つて勝つてみせる自信がある。兎に角醫者を呼んで來てくれ。それも日本人の醫者がいゝ。それには郊外に住んでゐる茅野の知人で、日本の醫科大學の助教授の肩書のある人が何處かにゐる筈だから、先づ何よりも茅野を呼

寄せて貰ひ度いと云ふのであつた。
茅野は年の若い戯曲作家で、高樹と同じ頃伯林に行き、戰爭が始まると直ぐ、いつしよに海峽を越て逃げて來た仲間だつた。栢植は早速電報を打つた。

茅野は郊外の、落葉樹の多い町に住んでゐた。いかにも英吉利人らしく、贅肉の無い、とりすました御婆さんと、その孫にあたるちひさい娘の外に、犬と猫のゐる家庭であつた。外見は小肥にふとり、皮膚が白く、頬が紅く、健康な小兒のやうに見えながら、彼は胸部に疾患を持つてゐた。自我の強い、人と折合はない二人でありながら、同病が高樹と茅野を結びつける鎖のひとつだつた。健康な人間に對する反抗的な輕い憎惡とはゞかりから、高樹は茅野よりも古く、茅野よりも親しい栢植には、伯林で咯血した事を祕してゐたが、茅野には殘らずうちあけてゐた。だから、自分の枕頭で、洗面器を洗つたり、氷枕をとりかへたり、何から何迄世話をしてくれる栢植には、感謝と同時に敬遠したい心持を抱いてゐたが、電報に驚いてかけつけた茅野を見た時は、文字通り其手を握つて、熱のある眼底に涙を浮べた。
「やつたな。」

茅野が微笑に同情をあらはして近づくと、たゞその一言で、總て自分の今の境遇と心持を殘らず汲んでくれたやうに感じるのだつた。

茅野の知つてゐる醫者といふのは、意外にも二三丁しか離れてゐない所に住んでゐた。醫者は病人を裸體にして、胸部背部を檢診した。

「ふむ、前にも一度咯血した事があるのですね、ふむ、ふむ。」

日頃の健否を、既往症を訊きながら、職業的に重々しくうなづいた。

「いや、大した事はありません。しかし、當分は絶對安靜ですね、かるはずみをするとひどいめにあひますよ。」

高樹は多分の疑惑と心配で固くなつてゐたが、こどもが母親の手を求めるやうに訊いた。

「伊太利に行く事は出來ないでせうか。」

何の脈絡もない質問に、醫者は一寸ためらつたが、

「伊太利? 冗談いつちやあいけない、旅行なんか先の事です。先づからだをよくしなくては。健康第一、健康第一。」

最後のモットオ丈を英語でいつて、それをきつかけに手を洗ひ、聽診器を鞄にしまつた。

醫者を送つて、栢植は往來迄出た。

「病狀はどうなのです。ほんとに大した事はありませんか。」

「いや、よほど進んでゐますよ。旅先の病氣は氣の毒だが、少しよくなつたら日本へ歸る方がいゝかもしれない。」

はつきりいひ切つて、醫者は山高帽子をかぶつて歸つた。モオニング・コオトの裾の少し長過る後姿を、それが唯一の賴りに思はれ、町角に消える迄栢植は見送つた。

「君、僕の病氣醫者は何ていつてた。ほんとに大した事はないと云つてたか。」

栢植が室に戻るのを待つてゐて、高樹は疑深く訊くのであつた。自分には氣やすめをいひながら、實は病狀はよくないのではないか、自分のゐない室外では、ほんとの事を云つたのではないかと、彼の心配は色に出てゐた。

「たいした事は無いと云つた。しかし用心しないといけないと繰返して云つてたよ。」

「さうか、伊太利旅行は駄目かな。」

高樹は不意にはげしい感動に打たれて、友達に顏を見守られてゐるのも苦しくなり、壁の方へ寢がへりを打つた。細い首筋が微かに震へてゐた。

肉體は虛弱で、性格は褊狹な彼にとつて、人間らしい情熱を燃え上らせ、至上の歡喜にひたらせるのは學問と美術であつた。日に日に新しい傾向を生む歐羅巴の美術に若々しい憧憬を寄せて故郷を立つたのが、いつの間にか古典の均齊調和の美に熱情を集中し、文藝復興期の研究に沒頭した高樹は、彼が主として文字と寫眞版で學んだ其時代の作品を目のあたりに見て、深き觀照と鋭い批判に動かない確信をつかむ爲には、どうしても伊太利へ行かなくてはならないと思つてゐた。それなくしては、彼の美學は完成されないと常に云つてゐた。靑く晴れたフロレンスの空の下に、繪畫と彫刻と建築の三位一體を歎賞する事は、高樹が一生の願であり、殆んど本能の強さで彼の全精神を動かすものであつた。それが病氣の爲に萬一果されないとしたら、高樹の一生の希望が失はれるのであつた。茅野も栢植も、友達の心の中を推察して、暗然として顏を見合せた。

夕方、熱で疲れて病人が眠つた間に、茅野と栢植は食事に出た。近所の小料理屋で友達の身の上を心配し、どうしたものかと結着のつかない相談をしてみたが、いつの間にか茅野は頗る雄辯に彼の此の頃の戀愛事件を語りはじめた。他人の話をきく辛抱は乏しく、自分の話にはどうしても同感させないでは承知しないのが彼の性格だつた。

茅野は明治維新の際、最も武士らしい出處進退をし、遂に悲壯な最後に終つた東北人の血を引

いてゐた。それにも拘らず、極端な近代型だつた。父は事業から隱退して、東海道線の或る海岸に住んだが、其處を天皇陛下の御召列車が通過する時は、たとへ眞夜中でも家人を起し、禮服にあらため、線路の近くへ出て送迎するといふ人物だつた。あまりに嚴格な、あまりに古風な家訓に對する反抗か、息子は生意氣盛になると、極端なお洒落になつた。彼は素晴らしく早熟だつた。文學的才能を認められたのも、僅かに十九か二十歲の頃だつた。戀愛や遊蕩の味も、それより早く知つてゐた。明治文學史上最も大きい運動だつた自然派の末期で、歐洲頽廢期の文學が移入された、ボオドレエルやラムボオを氣取つたり、オスカア・ワイルドやダヌンチオがもてはやされた時代ではあつたが、頭髮をきれいに分け、鼻眼鏡をかけ、はでな洋服に、うす茶色の山高帽子をかぶり、淡紅色の半巾を胸のかくしからのぞかせた彼の姿は、到る所で人目を引いた。時には顏面に美容術を施してゐる事もあつた。そんな事が、男の目には氣障に見えても、女の目には別に映つた。殊に聲が特別の朗かさを持ち、オルゴルの響を含む笑聲や、情熱の籠つた話振が、心を捉へるのに充分の力があつた。いろいろの階級の女を戀し、誘惑し、それがきまつて長つゞきしなかつた。長つゞきしないのは、あき易い性質の爲よりも、寧ろ東方のドンフアンをもつて任じてゐた彼のほこりであつた。それが最後に知人の夫人と不倫の戀に落ち、振切らうとしても縋り

つかれ、事態が重大になつて來たので、突然日本を去つて渡歐したのであつた。どつちかといへば、手輕な仕事をしても容易に名の成せる故國の文壇の寵兒としてもてはやされたダンデイズムの劇詩人の、浮々した藝術觀は、歐羅巴の諸藝術の記念塔に直面して、ひとたまりもなく打ちのめされた。纎細華麗な詞華を弄んで得々としてゐたのが、レオナルドオや、ミケランヂェロや、トルストイや、シェクスピアののこした包括力の大きい、立體感の強い、現實直寫の形式の中に深き理想をうち込む驚く可き力量によつて制作されたものゝ前では、面を覆つてひれ伏した。はじめて覺めた眼を以て內省した時、こざかしい機智を廻らし、多彩なる形容詞にうき身をやつし、會話の巧妙を專ら競ふ一幕物に溜飮をさげてゐたあさはかな心構と絶緣する事を誓つた。古典の偉大さに傾倒し、將來の目標を一段高いところに置くやうになつた經過は、高樹の場合と同じだつた。それ以來、茅野は相手をえらばず故國の文壇のヂヤアナリズムを罵倒し、曾ては自分も模倣を敢てしたホフマンスタアル、メヱテルリンク、ダヌンチオの如き近代の名匠さへ、故意に否定しようと努めるやうになつた。茅野は自分の目的の爲には、あらゆる周圍の物を、道具とし、踏臺として憚からなかつた。さうしなければ、自分を生かし、きづき上（あげ）る事は出來ないと信じてゐた。彼にいはせると、當面の戀愛も、決して戀愛の爲の戀愛ではなく、藝術完成の爲の止むを

得ざる犠牲だといふのだつた。その意味は、彼の藝術觀は根底からくつがへされ、光明ある新生活に入らうと思ひはするが、扨て長い間の遊惰な身持が心身をむしばみ、くさらせてしまつて、氣力を鈍らせ、スタアトを明朗にしなかつた。殊に過去の不倫な戀愛の絆は未だ絕ちきれず、事毎に彼の心を暗くし、不純にした。彼は長い間、何かしら今迄の生活の名殘をきれいに振捨てゝ悔いないやうな、きつかけをつかまうとあせつてゐた。

折柄、ロンドンの中心に近く、日本の商會の經營する喫茶店があつて、日本娘が五人、袖の長い紫のきものに紅い帶をしめ、英吉利娘にまじつて給仕してゐた。商店側の宣傳では、娘達は皆學校教育をうけた良家のもので、普通の雇人ではなく、見學旁々來て貰つたのだ。だから保護監督を嚴重にして、決して間違の無い事を期してゐると云つて、三十代の日本婦人を監督に置き、一人歩きは許さず、日本人の客には給仕さへさせなかつた。茅野はその五人の中の一人に、ひそかに想ひを寄せ、毎日喫茶店に通ひはじめた。日に二度三度行く事もあつた。一人で、いつぱいの臺灣紅茶を前にして二時間三時間とねばる事もあつたが、一人では流石に氣まづいので、友達の顏を見れば、時をえらばず誘つて行つた。行つたからといつて、日本人の客には口もきかないのだから、どうする事も出來ないのだが、茅野は驚く可き根氣を見せた。

「日本人の客にサアビスさせるのは危険だなんて、生意氣な事をいふうちなんかに行つてやるもんか、人を侮辱してるぢやあないか。」

高樹や柘植が本氣になつて罵つても、茅野は朗かな笑ひ聲を立てゝ、少しも抗辯せず、この場合丈は下手に出て、同行を求めるのであつた。最初のうちこそ本氣かどうかを疑つたが、茅野はどうしても其娘と結婚するといひ出した。彼一流の獨斷的な理論づけで、この少女の外には自分の靈魂を救つてくれるものは無いと說いた。

少女は、うす皮の皮膚の色の蒼白い、少し病身らしくうるんだ瞳、固くはしまらない唇のちひさく厚いのもこどもらしく、五人の中から此の一人をえらんだのは無理も無かつた。茅野はその少女に、ラフアエルの描いたマドンナの優しさを感じるといひ、その清淨な胸に縋つて過去の汚れを洗ひ清め、滿身にうづく惡血を根だやしにして、はじめて自分は更生の道を濶歩する事が出來るのだといふのである。それを彼獨特の自信に滿ち、熱情のあふれた言葉で、幾度となく繰返して友達の同情を強るのであつた。さういふ時に、高樹は生來の冷かな判斷から、茅野の幼稚な論理を嘲笑し、柘植はこの人生の經驗の淺い少女を犧牲にして自分を活かさうとする茅野の利己主義に反感を持つて罵つた。

その晩も茅野は夢中になつて、自分と喫茶店の少女との結びつけられた運命を論じ、幻を追ふ騎士の愚かさを示して憚からなかつたが、一面極めて押の強い彼は、目的の爲には手段をえらばず、着々として筋書を實行しつゝある近狀を物語つた。彼は自分の容貌に充分自信を持つてゐた。又彼の半生の經驗から、自分が手を差延ばして、それを振切る女はないときめ込んでゐた。今度の場合にも、若しも自由に少女に近づく事が許されるならば、何の苦もなく目的を達する事が出來ると思つてゐた。たゞ商會側の監督が嚴重なので、毎日顏は見てゐても口をきく機會が與へられないのに弱つてゐた。たうとう茅野は最近になつて、直接少女に接近する事の不可能を見抜き、戰法を變へて、先づ監督の年増によしみを通じる策をとつた。

監督は給仕の娘達とは違つて、日本人の客にも輕い挨拶位はした。うすく化粧はしてゐたが、平顏の額や頰に小皺の寄りはじめた皮膚は、二十代の者の目には、實際の年齡よりもひどくふけて見えた。茅野の仲間は、かげでは婆さんとか、ばばあとか呼んでゐた。その人に對して、茅野はしきりに微笑を送り、愛想のいゝ言葉をかけ、用事を賴んだりした。たとへば監督と視線の合つた時手をあげて呼び、ほしくもない紅茶のおかはりをしたり、菓子を註文したりした。それが毎日の事だから、先方も段々馴々しく卓の側に來て、無駄話をするやうになつた。偶然は思ひも

かけない喜びを茅野にもたらした。監督が五人の少女と共に日本をたち、生れてはじめて巨船で大洋に浮んだ怖ろしさを話した時、その船は曾て茅野を乘せて來たのと同じものだと知つた。船長、機關長、事務長の名前をお互にいひあつて、ひとつの家に住んだやうななつかしさを感じた。それ以來監督は俄に親しさを増し、こつちからきゝもしない身の上話迄しやべるやうになり、何かにつけて娘達の噂や、此の一連の住むアパアトメントの生活迄知る事が出來た。おまけに、今度又その船はロンドンへ向つて近づきつゝあつて、娘達の家々から托された品々を携へ、船長は喫茶店を訪れる事になつてゐて、自分達のアパアトでも娘達が日本料理で船長歡迎の晩餐會を開く筈であるといふ話迄きかされた。茅野は押せる丈押して見ろといふ氣になつて、自分も是非船長に逢ひ度いと、いかにも特別に親しい人であるやうになつかしがつてみせた。監督も調子に乘つて、それでは自分のはからひで、ひそかに招待してもいゝといつたさうだ。

「それがねえ、ほんとにないしよなんですよ、この店の支配人に知れると大變なんですからねと、幾度も念を押すんだ。こいつは毎日二度も三度もきかされるのだが、しかし愉快だね、わがあこがれの青き海は、ひろびろと眼の前にひらけたり。」

茅野は何かの芝居のせりふでもあらうか、すましで云つて、あたりの客や給仕人がびつくりす

る程朗な聲で笑つた。

食事を濟ませて、柘植は茅野と別れ、下宿に歸つて見ると、高樹は疲れて眠つてゐた。暗い電燈のつくる影が眼や鼻の周圍に深く、唇ばかりが病的に紅かつた。

その晩柘植は自室で机に向ひ、本を開いたが少しもみが入らなかつた。彼の頭に浮ぶのは、遠い異國へ出て血を吐きながら、只管伊太利の旅をおもふ高樹の學問藝術に對する熱情と、本氣なのかいたづらなのかわからないが、みつともない迄手を盡し、どうしてもその人を自分のものにしないでは置かないといふ茅野の野望の強さだつた。最後に、はつきりした目標もなく、近代文學の作品を無系統に讀み、經濟政治社會學——何にでも興味を持ち、そのどれにも熱中する事の出來ない自分の生甲斐の乏しさが、彼の熟睡を妨げた。

高樹の病狀は、みんなが心配した程の事もなく、神妙に醫者の命令を守つて靜に寢てゐるうちに、段々熱も下り、食慾も日ましに加つて來た。再び喀血する事も無かつた。

「僕はどうしても豫定通り伊太利に行く。フロレンスの土を踏まないうちは日本に歸らないと決心した。この氣持だけでも病氣はなほるよ。」

全精神を伊太利の旅への憧憬に打ち込んだ高樹の身邊には、何か眼には見えない力がほとばしるやうに感じられた。それでも、一週間二週間では、ベッドを離れる事は出來なかつた。

その間に下宿の客は頻々と變つた。戰禍の爲に家を焚かれ、親子兄弟を殺された佛蘭西人や白耳義人が、幾度となく來て泊つたが、短いのは二日三日、長くても一週間とはゐつかなかつた。はじめから、知らない土地へ着いた當座の假の宿と思つて來た人ももとよりあるが、居心地の惡さに堪へられず、出て行くものゝ方が多かつた。さういふ消息は、先客の白耳義の女の口を通して聞かされた。英語が充分出來ないので佛蘭西語をまぜ、素敵な早口で、いかに英吉利人といふものが冷酷で、無情で、おもひあがつてゐるか、いかに此の家の主婦が不親切で、慾張で、客あつかひを知らず、禮儀をわきまへないかを訴へるのであつた。つい此間なんかは、自分達兄妹の部屋に、ノツクしずに入つて來た事もある、鍵穴から覗いた事もある、何といふ失禮な所行であらうと、聲を震はせて憤る。ぷんぷん怒つてゐる女の樣子を、にやにや笑ひながら、さも可愛らしさうに眺めてゐる兄と稱する禿頭は、妹と稱する女が脱線して、自分達の寢部屋の事に迄言及したので、思はずしらず赫くなり、

「はゝあ、この御孃さんは又御機嫌が御惡いやうだ……」

てれかくしを云つて、いゝ加減にしろと目顏で合圖をするのだが、女はわざと禿頭を睨みながら、

「だつて、ほんとなんですもの。だつて、ほんとの事なんですもの。」

と甘つたれるやうに體を動かした。

兄妹だと云ひながら、その二人がひとつのベッドしかない部屋に居る事を、宿の主婦は再三柘植達に話した。歐羅巴大陸では、さういふ事が許されるのでせうか、英吉利では絕對に無い事だと、獨身の主婦は多分の惡意を籠めて繰返したものだつた。

その白耳義人も、やがて此の下宿を立去る事になつた。それは或日の食卓で、ふとした事から、主婦と妹と稱する女とが口爭ひをしたのに起因する。

いつもの通り、冷い肉が薄く切られ、主婦と、その妹と、白耳義人二人と、柘植が食卓に着いた。佗しい霧雨が窓硝子を濡らし、室內も陰氣だつたが、郊外の岡の草地に演習に行く兵隊は「テイペレリ」をうたひ、口笛を吹きながら、幾組となく通つた。無器用に重たい靴の音が、希望の無い交戰國の憂鬱な空氣を強く感じさせた。期せずして食卓の話題が戰線に及んだ。獨乙は野蠻だとか、人道の敵だとか、潛水艇で旅客船を擊沈したのは何といふ卑怯であらうとか、紳士淑女の

感傷に訴へる新聞の論調をそのまゝに、主婦と白耳義の男女が語合つた。いつの間にか、妹と稱する女は、不自由な言葉をあやつるもどかしさと、國土を敵軍に蹂躙された鬱憤に堪へられなくなり、それにつけても戰爭の悲慘を充分に味はず、悠々として事を運んでゐる英吉利の態度が憎らしくて爲方が無くなつた。

「全く獨乙は惡魔です。ですけれど、その惡魔の暴行をいつ迄も許して置くのは、英吉利が本氣になつてたゝかはないからです。何故英吉利は、もつと澤山の兵士を戰線に送らないのですか。私共の國白耳義は、年寄も子供も、みんなみんな武器をとつてたゝかつてゐます。それなのにあなた方の國、英吉利は……」

英語と佛語をちやんぽんにして、むきになつて喋り出した。

「それは無理では無いでせうか。」

主婦はつとめて冷靜を裝ひながら、大國民と小國民との差別を年中忘れたい英吉利人特有の態度で、はつきりと遮つた。

「どうして英吉利の責任でせう。英吉利は島國です。歐羅巴大陸の爭ひには關與しないでも、幸福に暮らして行ける國柄です。それがあなた方、白耳義や佛蘭西の爲に遙々兵隊を送り、多くの

若者の命を失ひ、莫大も無い戰費をつかつて戰つてゐるのは何故だか御存じですか。みんな人道の爲なのです。現に私達のたつた一人の兄弟も、名譽の戰死を遂げました。それでも英吉利は本氣になつてたゝかはないと云はれるのでせうか。私にはわかりませんわ。」

「人道の爲？　人道の爲にたゝかつてゐるのは白耳義です。白耳義が無抵抗で獨乙軍をやすやすと通過させたら、巴里の陷落は問題ではありません。巴里が落れば、その次はロンドンです。獨乙は容易にドオヴァ海峽を越て、この大都市を占領してしまつたでせう。それが今、あなた方が斯うして安全に生活してゐられるのは、我が白耳義のおかげです。さうです、たしかにさうなんです。」

兄と稱する禿頭が心配してなだめるのを振切つて、妹と稱する女は顏色も白ける迄昂奮した。

「私には同意出來ませんわ。それよりも、あなた方のやうに、國を奪はれた人が、住家を求められるのも英吉利のおかげではないでせうか。」

主婦は、相手が堪へ性を失つたと見ると、かへつて冷靜をほこる氣になつて、つめたくなつた珈琲をすゝり、ナプキンを叮嚀に銀環にさし込み、口邊に微笑を浮べながら立上ると、妹を促して食堂の外へ出た。出たと思ふと、今迄のおちついた態度とは反對に、手荒く扉をしめて、流行

唄をうたひながら、地下の厨房へ下りて行つた。いつも廊下を歩く時は鼻歌をうたふならはしではあつたが、場合が場合だけに相手を馬鹿にする效果が手強く表現された。

その靴の音が聞えなくなると、みんなは不快な顏を見合せたまゝ食卓を離れた。禿頭は、妹と稱する女が目にいつぱい涙をためて、汚れた卓布の一點を注視してゐる横からのぞきこみ、背中を輕く叩いてなだめたが、そのなだめ方のもの柔かさがかへつて氣に喰はなかつたのであらう、女は邪慳に振拂つて、恰度後を通つて室外へ去らうとする柘植を呼びとめた。

「あなたは、あなたはどう思ひます。英吉利がいけないとは思ひませんか。」

面とむかつて、どうしても自分の爲に同意させようとするのだつた。

「英吉利は何故もつと澤山の兵隊を戰線へ送らないのです。私達の白耳義は、國をあげてたゝかつてゐるのです。私達は、こんな冷酷な無情な無禮な英吉利に逃げて來なければならなかつたのです。」

この場合英吉利といふ國と下宿の主婦とは一體であつた。突然はげしい感動が、かぼそい全身を襲ふと、いきなり兩手で顏を覆ひ、柘植の肩に額を伏せた。小柄には見えても、脊は低くなかつた。すゝりあげる度に、熱い呼吸（いき）が柘植の首筋にかゝつた。

禿頭があわてゝおしへだてると、静脈のはつきり見える女の兩手の指の間から、淡紅色の薄絹の上着の胸に、涙が光つて落ちた。

柘植はその足で、食堂の隣の高樹の室に立寄つた。

「今日は食卓で英白衝突さ。」

病床で麪麭を食べてゐる友達に、一部始終を話した。

「例の御令妹が口惜がつてね、こゝんところへ顔を持つて來て泣かれちやつた。」

「さうか、肩のとこ濡れてるぢやあないか。」

高樹の指さす胸におもはず手をやつて、いつぱい喰つたなと思ひながら、機嫌のいゝ病人といつしよに笑つた。

「冗談いつちやあいけない。」

口ではさういひながら、柘植の掌は何かなまあつたかい濕つぽさを感じた。

「僕は理非曲直は問題でない、あくまでも白耳義の味方だ。」

レモンを浮べた紅茶をすゝりながら、高樹は血を吐いた日以來の元氣を見せた。

その晩の食卓では誰一人口をきくものも無かつた。珍しく顔を見せた印度の學生も、みんなの

交流しない心持に感染して何も言はなかつた。晝の爭ひの氣まづさは、暗い室內の隅々に迄もゆきわたつた。主婦と妹は、食事を濟ますとさつさと引上げてしまつた。その姿が見えなくなると、白耳義の女は今迄おし殺してゐた沈默に堪へられなくなり、向側の柘植にいたづらつこらしいまばたきを送つてから、持前の早口で喋り出した。

「私達、たうとう退去の豫告を與へました。明日から、いゝ家を探して步きます。えゝもうこんなつめたい家にゐるものですか。」

誰憚らず胸の鬱憤のはらせる嬉しさにはしやいで、椅子を離れるとあり合せの灰皿を腋の下に挾み、首をまげて反身になり、無感動な顏つきをし、浮いたり沈んだりするやうな足取で、室中を步き廻つた。それは、宿の主婦がいつも財布やかきつけを入れて置くハンド・バッグを小脇にはさみ、とりすまして步く身振の眞似だつた。禿頭は女の樣子と、柘植や印度の學生の顏とに忙しく視線を投げ、全身を搖つて笑ひ倒れた。

「あなた方もこんなうちにゐるのおよしなさい。私達がいゝ家を探してあげますから、みんないつしよに引越ませうよ。」

半分は冗談、半分は本氣でいひながら、とつさの思ひつきでやつた身振が存外喝采を博した調

子に乘つて、しまひには主婦がいつもするやうに、流行唄の譜を口吟んだ。

翌日から白耳義の兄妹と稱する男女は、ほんとに宿を探しに出て、一週間の後には引越してしまつた。

止宿人は長くは續かなかつたが、一組ゐなくなると、不思議に又別のが來た。今度も亦二三日たつと、これも白耳義から逃げて來たといふ獨身の男が、柘植の隣の室に入つた。僅かにベッドと、洗面臺と、椅子が一脚入るだけの小室で、しばらくかりての無いものだつた。

脊も高く、幅も廣い、でつぷり肥つたあから顔の大男が、ヘイドンといふ名前で紹介された。言葉は達者では無かつたが、押が強く、おめずおくせず食卓を賑はした。今迄幾組か來た白耳義人は、國土を奪はれ、身をもつて逃れて來たといふ有様が、貧しい衣服や持物や、日常生活にあらはれてゐたが、この男は眞新しい、はでな服を着て、少しも疲勞や窮乏のしるしがなく、借りた室はちひさいが、食卓では誰よりも贅澤で、葡萄酒やブランデイを抜いて他人にも勸めた。間も無く、主婦とその妹を寄席に連れ出し、それ以來主婦は此の新來の客を一番大切にするやうになつた。

或晩、柘植は自室で夜更まで本を讀んでゐると、ひそかに階段を上つて來る足音がして、やが

て隣の小室で男女の聲が聞えた。柘植の好奇心は本を閉ぢさせた。彼は自分の行爲を恥ぢながら、壁に耳をつけてゐた。一脚しか椅子が無い爲に、ベッドを代用するのであらうか、人體の重みのかゝる寢臺のきしみが聞え、忍び笑が聞えた。小半時もたつて、又廊下と階段に足音を忍びながら階下へ下りて行く氣配がしたが、隣室では男が大きなあくびをした。

それ以來、殆んど毎晩、隣には女が忍んで來た。柘植は或日の出來心で、いつもの通りひそひそ話をし、忍び笑をし、沈默し、そつと戸を開けて階段を下りて行く足音の消えないうちに、便所へ行くふりをして、いきなり廊下へ出てやつた。その物音に、一段々々足音を忍んで下りてゐたのが、あわてゝ馳下りて行くのを見た。寢衣姿の宿の主婦だつた。

それでも隣室へ忍んで來る事は止まなかつた。

「この頃僕の隣の室に、白耳義人だといふ奴が來たんだが、そいつのところへ毎晩かみさんが遊びに來るぜ。」

柘植はたいくつしてゐる病友に、あらゆる出來事を報告するのだつた。

「その男がね、僕の直感なんだが、少しあやしいんだ。」

「何が？」

「獨探ぢやあないかと思ふんだが……」

「獨探？」

高樹は驚いてベッドの上に起直つた。

「何から何迄臭いんだ。いつたい、ヘイドンなんて白耳義名前かしら。」

第一にその男は壯年で、しかも人並以上頑丈な體格なのに、どうして戰爭に行かないで濟むか。彼の骨格は白耳義よりも寧ろ獨乙のやうに無骨だ。危く國を逃れて來たといふのに、毎晩のやうに酒場やダンス・ホオルや寄席に行く。それ程金づかひの荒い男が、他に空室があるのにわざわざ往來へ向いた小室をえらび、しかも獨乙のツェペリンが飛來して爆彈を投下するおそれのある爲、全市中消燈し、家々の窓は必ず窓かけを下さなければならないといふ布令が出てゐるのに、その男の室の窓は屢々窓かけを下さず、あかあかとあかりが空に向いてゐる事がある。どう考へてもあやしいと、柘植は嫌疑の數々を並べた。

聞かされる高樹には一層探偵の興味が強かつた。彼は戰爭のはじまる迄二年間獨乙にゐた生々しい記憶から、伯林の街路の夜景の中に、一人の怪人物を點綴して想像する事も出來た。何氣なく話しかけ、その男の言葉の訛の中に獨乙人を見つけ出す冒險も胸を打つた。この頃元氣を取返

しつゝある自分が、一日も早く室の外へ出られる事を待ちこがれてゐるやさきに、新しい事件は一層心を緊張させた。

遠寄せに寄せて來た春は、灰色の霧に包まれ勝なロンドンの町中にも、光と影をはつきりと描き出した。つい此間迄、煤烟と濃霧に塗消(ぬり)されてゐた空の一角に、思ひもかけない教會の尖塔や、戰捷記念碑を見出して驚く事も珍しくなかつた。太陽が輝き、暖氣が加はり、ものゝ成長が著しくなると共に、高樹の健康回復も加速度を示した。

やがて病牀を離れる日には、茅野も喜びを述べに來た。ふだんから色の白い皮膚は、久しぶりで剃刀をあて、象牙石鹼のやうに半透明に見え、まばらな髯ながら剃痕は青く、それが病後の衰を深く隈取り、眼はうるみ、唇は異常に紅かつた。それでも本人は素晴しく元氣だつた。

「君、新しいカラアの肌觸りも惡くないね。ふだんは窮屈に感じてゐたけれど。」

高樹は友達の眼の前で、彼の好みの稍高めのダブル・カラアに、黑地に赤い斑の入つた襟飾(ネクタイ)を結び、縞の洋袴(ヅボン)に黑い上着を身につけて、姿見の中の自分の姿を、幾度となく見直した。黑い服と、雪白のカラアは、病みあがりの氣色をくつきりさせる效果をあげた。

「君、痩せたかねえ。」

くるりと二人の方へ向直つて、尖つた顋を撫でながら訊いた。

「それは痩せたさ。痩せる位は爲方が無いよ。僕達は、ひそかに再起覺束なしと思つてゐたんだぜ。」

「そりやあひどいや。」

柘植の言葉に不服さうな高樹を、側から茅野が押へてしまつた。

「ほんとさ、意外に早くよくなつたと、あの醫者も驚いてゐたぜ。」

「でも、僕が伊太利へ出かけてもいゝかと訊いたら、もつての外だといふ顏つきで笑殺されちやつた。」

「又伊太利か。そのからだで旅行が出來るものか。君のは熱心を越して執念だよ。」

冗談にして笑つたものゝ、高樹の胸中は充分想察する事が出來た。

「執念つて事は無いだらう。」

「いや全く執念といふ外には適當な表現を見出さないね。恰も茅野哲夫の喫茶店の少女に對するが如きものだよ。」

薄暗い部屋の中に、幾日ぶりかで笑聲があふれた。
「喫茶店といへば、君は矢張日參してゐるのか。」
「日參どころか、茅野君は日に二度だ。午前と午後と。」
「いや、三度通つた事もある。あの時は流石に僕も入りにくかつた。しかし、我事旣に成らんとす、頗る順調に運んでゐるんだ。」

暫高樹の見舞にも來なかつた茅野は、その間に彼が勝手に設計した戀愛の筋書を追及する事に忙しかつたのだ。當のめあての娘に接近する事の困難を見極て以來、彼は只管監督の年增に取入つた。娘達が待兼てゐた日本からの船も無事にテェムス河口に着いた。船長は、娘達の親許から托された品々を持つて、喫茶店を訪れたが、豫て監督と示し合せてゐた茅野は、偶然らしくつくろつて其場にあらはれ、船長と一別以來の挨拶をし、極めて自然に同じ卓に着いて茶を飲み、はじめて娘達に取圍まれて談笑する機會をつかんだ。その日は船長を晩餐に誘ひ、次の日は又喫茶店で落合ふ約束をしたが、此の日こそは、娘達のアパアトで日本料理の御馳走のある日で、茅野はづうづうしく船長にくつついて離れず、遂に客の一人として款待を受けた。日本にゐる頃から和服は身に着けず、米の飯や味噌汁を口にしないで、歐羅巴風の衣食住を好んだ茅野は、心から

喜んで舌鼓を打つ船長に、調子を合せるのが苦勞だつたと話した。
「さしみだとか、酢の物だとか、僕には苦手のものばかりなので、おかげで翌日は腹をこはしてしまつたが、しかし愉快だつたよ、女の子にしてみても、白髪頭の船長よりは、僕の方が相手にして騒ぐには面白い筈だからなあ。」
彼は獨特の朗かな聲で笑つた。
「伊豫田春代、町田琴子、山住文子、木場千惠子、峰村雪江、――わがマドンナが卽ち雪江さんさ。」
その晩彼は內懷にかくして持つてゐた手紙を、その少女に渡して歸つた。
船長の船は又日本へ向つて碇をあげたが、茅野は一層しげじげと喫茶店に通ひつゞけてゐるのだ。店の手前、人前では娘達と口をきく事は許されないのだが、當の娘とはひそかに文通をし、目顏で心を通はせる間柄となつた。
一女の手紙つてものは、稚拙であればある程眞情流露の美しさをあらはすやうに思ふんだが、どうだらう。」
茅野は衣袋から大切さうに一束の手紙を取出して、友達に見せようとした。

「よせよ。たどたどしい女の子の手紙なんか見たくないや。」

高樹は唾棄するやうに遮つた。

その晩の下宿の食堂は賑かだつた。主婦と妹と、ヘイドンと印度人と、柘植と高樹と茅野と、外に新來の佛蘭西人の母親と未成年の息子がゐた。此の頃めつきりお洒落になつた主婦は、夜食の爲にわざわざ衣服を着換へ、紅粉を刷いて食卓についた。その隣に手助をする妹が坐らうとするのを、突然ヘイドンが押のけて、自分が姉妹の間に席を占め、兩手に花といふやうなからかひ面で、右と左を見比べては、にやにや笑ふのだつた。いつもの通り葡萄酒をがぶのみして、顏面筋肉がゆるんで來ると、少し足りない妹の無表情な頰ぺたを指で突く。

「まあ、あなたといふ人は、なんといふいたづら者でせう。」

主婦が人前も憚らず、下手な横眼で睨むと、ヘイドンはその頰ぺたを突くのであつた。

柘植は茅野を一同に紹介し、高樹をヘイドンに紹介した。

「高樹さんは隨分長くおよつてゐらつしやつたのに、別段御變もないぢやありませんか。あなたの顏は、寧ろ輝いてゐますよ。」

上機嫌の主婦は、平生烟つたがつてゐる日本人にも珍しく愛想をふりまいた。

何につけても堪性(こらへしやう)がなく、策略の乏しい高樹は、かねて柘植からきかされてゐる獨探の疑のある男に、かくし切れない憎惡と好奇に燃(もえ)る眼をそゝいでゐた。彼は主婦の方には答へず、いきなりヘイドンに話かけた。

「あなたは白耳義から逃げて御出でになつたのださうですが、私も曾てあなたの御國に行つた事があります。あれは私が獨乙にゐた頃で、夏休を利用して行つたのでした。」

彼はたくんで、會話の中に獨乙の國名をはさむ事を忘れなかつた。

「さうですか、白耳義では何か面白い事がありましたか。」

ヘイドンはうるさゝうに應じた。

「私は美術史專攻の學生ですから、當然美術に興味を持ちました。建築だの、繪畫だの、彫刻だの。しかし、美しい町も今は獨乙軍の爲に破壞されたのでせう。」

「破壞？　あゝ、吾々の國土は、ダムダム彈、毒瓦斯、あらゆるものによつて汚されました。あの憎む可き獨乙兵の爲に。」

すつかり芝居がかつた調子で云つて、天井を仰いで嘆息した。

「實際獨乙は憎まれても爲方がありますまい。しかし不思議なものですねえ、私はミュンヘンに

も伯林にもなつかしい思出を持つて居るので、心から獨乙を憎むわけには行かないのです。」
「はゝあ、あなたは獨乙贔負か。」
ヘイドンは大きな口をあけて笑ひながら、同意と救援を求めるやうに、主婦の方へ顔を向けた。
「まあ、おそろしい事。」
主婦は兩手で耳をふさぎ、眼をつぶり、頭を振つていやいやをした。獨乙といへば人類の棲む國で無いやうに云ふのが、戰時に於る敵國民の感情であり、宣傳であり、又儀禮でもあつた。
「いゝえ、私は決して獨乙贔負ではありません。しかし、あなた方だつて平和の時代には、獨乙人を左程憎んではゐなかつたでせう。彼等は多少粗野であり、行儀が惡いかもしれませんが、今日の世界の文化をきづく上に、多大の貢獻をした國民です……」
「高樹さん、もうよして下さい。私共英吉利の家庭では、獨乙といふ言葉を聞く事を好みません。」
主婦が又口をさしはさんだが、高樹はすつかり昂奮して、眞正面からヘイドンに迫る態度を執つた。
「全く此の大戰前に、誰が獨乙人に對して今日の如きはげしい憎惡を感じたでせう。あなたは勿論獨乙に行つた事があるでせうが、恐らく樂しい記憶をもつて回顧する時もあるのでは無いでせ

うか。」
高樹は、自分が筋を立てた芝居の頂點に達したやうな緊張ぶりで、眼鏡の底に細い眼を鋭くしてゐた。
「樂しい記憶？　はゝゝゝ。何を樂しい記憶といふのですか。夜の街上の貴婦人との散歩ですか。はゝゝゝ。さういふ話なら、英吉利の貴女達のゐらつしやらないところでしませう。」
ヘイドンは相手の質問よりも、質問の態度に惡意を直感して、俄かに不機嫌の度を加へ、つつ放すやうにいひ切つた。それでも高樹は執拗に迫つて行つた。
「兎に角、あなたも獨乙に行つた事はあるのでせう。」
「えゝ、曾て……」
突然高樹は獨乙語で訊いた。
「何時、何處に、どの位長くゐたのですか。」
それは食卓の一同を驚かした。彼が何故獨乙語を用ゐたか、その眞意を疑はないものも、何かしら異様な豫感に打たれた。その向ふ見ずな遣口には、柘植も茅野も、冷汗に似たものを感じた。
「私は敵國の言葉を使ふ事を好まない。」

ヘイドンは忿怒に燃えた眼で高樹を睨み、飲みかけの葡萄酒をぐつと干すと、食事なかばに卓子を離れ、猛然といふ形容詞を幅の廣い背中に見せながら、扉を排して室外に去つた。氣まづい沈默の中で、誰一人口をきく者も無く、珈琲が出て晩餐は終つた。

その事件があつてから、ヘイドンは食堂にもたまにしかあらはれなくなり、それが又獨探の疑を一層深くした。たまにあらはれても、酒を飲んで醉つて、主婦とその妹を相手にみだらな口をきくばかりで、外の者とは言葉をやりとりしなくなつた。高樹や柘植が意地惡く話しかけても、露骨に不快の色を見せて、最も簡單な返事をするばかりで、忽ち横を向いて相手にならなかつた。

「あいつ愈々あやしいぞ。昨夜も一昨日の晩も、あいつの室の窓はあけつ放しで、あかりがついてゐた。」

「英吉利の警察なんて實に甘いもんだなあ。どうして氣がつかないのだらう。」

二人はあく迄も獨探と睨み、どうかして尻尾をつかまへてやらうと機會をねらつてゐた。

高樹の健康は次第に回復し、又圖書館に籠つて終日讀書に暮らす生活に復歸する事になつたが、柘植はそれに贊成しなかつた。喀血の後の肉體の衰弱と、神經の疲勞をやすめる爲に、かねての

計畫の小旅行に誘つてみた。
「僕はいやだ。英吉利の工業都市なんか見たつて爲方が無い。」
高樹は寧ろ不機嫌に拒絕した。
「しかし、君の健康の爲にも旅行はいゝよ。この國の春は素晴らしいぜ。」
牧草の柔かい綠は、汽車の窓にも反映するであらう。煤烟と塵埃のロンドンにしばらく別れて、牛や馬や羊の群の遊ぶ、前世紀風の繪畫の趣その儘の岡や野や水流に、自然詩人の感懷を追慕するのも惡くないではないかと、栢植は又押して勸めた。
「僕は自然の移り變りなんかには何の興味も無い。あんな幼稚なセンティメンタリズムとは完全に絕緣した。」
人間の力を盡してつくりあげた繪畫、彫刻、建築、音樂、詩歌、小說、戲曲には憧憬讃美を惜まないけれども、山川草木のやうなものに感慨を寄せるのは、女こどもの感傷主義に過ぎない、否その感傷さへ、主として過去の詩歌繪畫によつて培はれた感興の再現に外ならないのだと高樹は強くいひ張るのであつた。
「君、知つてるだらう、オスカア・ワイルドは斯ういつてるぜ。ロンドンの霧はタアナアが描い

てから密度を増したつて。」

「さうか、そんなら爲方がない。僕一人でこどもの感傷にひたつて來よう。」

かたくなゝ友達の態度に反撥して、柘植は一層旅へ逃れ度い心になり、旅粧を整へると直に、手鞄をさげて宿を出た。

シエフイルド、ニユウ・カツスル、エディンバラ、グラスゴオと、氣に入らないところは一晩、氣に入つたところは三晩四晩泊り、それから海峽を越て愛蘭土へ渡り、ベルフアストとダブリンに行き、引返してマンチエスタア、バアミンガムを經て再びロンドンの下宿に歸つた。

烟突の林立する町々は、軍需品の製造に忙しく、何處に行つてもカアキイ服の軍人と喪服の女を多く見た。愛蘭土へゆききの船は、獨乙の潛航艇の襲撃を恐れて、夜更に燈火を滅して出帆した。

恰度その頃、西部戰線では、一時はブダペスト迄進むだらうと思はれてゐた露西亞が、段々に盛返され、ワルソオも獨軍の手に歸して、愈々前途は暗く想像されて來た。旅中手にする新聞の戰報も、聯合軍に不利なものが多かつた。柘植は、旅へ出る前に空想してゐた輝かしい綠の野原に遊ばずに、漫然たる旅をしてゐては申譯が無いといふやうな肩身の狹さを感じながら、三週間近い日を過してしまつた。

歸ると直に高樹の部屋の扉を叩いた。

「やあ、歸つたね。どうだつた。」

机に向つて本を讀んでゐた靑白い額が、なつかしさうに振向いた。柘植は、どうしても今度の旅行を面白いものにして話し度かつた。

「面白かつたよ。殊にスコットランドと愛蘭土がよかつた。君もいつしよに來ればよかつたのにと度々おもつた。」

「さうか、しかし羨しくないな。僕は伊太利以外の土地に行く氣は毛頭ないんだ。」

ひと筋に自分の道を追求する事に熱中してゐる友達の言葉が、ひどく冷淡に聞えた。君はさういふ人間なんだ――心の中でつぶやきながら、椅子を離れて立上つた相手を見捨てるやうに、柘植は自分の手で扉をしめて、二階へ引上げてしまつた。

しばらくしめ切つてあつた部屋の中は埃臭かつた。窓をあけると、下宿の前の共同園の綠に、初夏の微風を感じた。長方形の芝生を圍む家並や、いろいろの形狀の屋根がつくる空との限界は、見馴れた線と色彩で迎へてくれた。こんな下宿でも、住めば旅中のホテルよりも親しみ深い――ゆつたりした氣のたるみと、輕い疲勞が四肢を重くし、柘植はふと疊の上に寢たい思鄕症（ホオム・シック）を感じ

た。

其處へノツクして高樹が入つて來た。たつた今、些かの感じ方の違ひから、親しい口もきかずに別れたのが、追ひ縋るやうに側に來て、

「君、旅は面白かつたか。」

と、先刻と同じ事をいひながら、椅子を並べて腰かけた。

「エディンバラはよかつた。町全體が岡の上にあつて、石造の家が崖のふちに立つてゐる景色は素晴しかつた。それから、ダブリンから歸る船では、愛蘭土劇團の連中と同船したよ。」

近代劇の一分派として、地方色の強さを特色とする此の劇團は、日本の劇作家にも大きい影響を與へ、模倣者や剽竊者を出した位だが、農民のやうな粗末な服裝で、頭から毛布をかぶり、星の降る夜船の甲板に立つてゐた。女優は船室に引込んでゐたらしかつたが、ロンドンの劇場でも度々見た一座の立者(たてもの)、オドノバン、ケリガン、シンクレア達は、柘植の身近にかたまつてゐた。

「さういふ連中がゐるかと思ふと、一方には、休暇を貰つて歸國した兵隊が、又戰地へ引返さなければならないので、やけになつて醉拂ひ、けだもの丶やうにわめき歌つてゐるのがあつた。若しも獨乙の潛航艇に見舞はれたら、かういふ連中といつしよに、海の藻屑となるんだなと思つた

よ。」

熱心に聽く相手があると、實際の旅よりも話の中の旅行の方が柘植の感興に熱を與へた。各地で見た名畫、殊にバアミンガムの美術館にはラファエル前派の作品が夥しく、ロセッチやバアン・ヂョオンスの下繪百數十枚を見た事など、後から後からとつけ足して話した。

「時に、こつちには何にも變つた事はないのか。茅野はどうしてゐる。」

「あの男は例の小娘と手紙のやりとりがはじまつたので、もう一歩だと勇みたち、あせりにあせつて通ひつめてゐる。あんまり馬鹿々々しいから、僕はその話なら一切聞き度ないと云つてやつた。先生ひどく憤慨して、それつきりやつて來ないよ。」

高樹は高樹らしい心構で、今更遊戲じみた戀愛ごつこに、一生懸命になつてゐる友達のおつきあひなんか出來るものかと、腹立たしい色を示した。

「それよりもね、あの獨探が、こゝのうちの妹の方にも手を出したか出しかけたかで、かみさんが怒つて、大喧嘩をやつた事件があつた。獨探にも猛烈に喰つてかゝる、半馬鹿の妹にも、お前がうきうきしてゐるからいけないのだと叱りつける、手のつけられない荒れ方だつたが、結局仲直りの爲に獨探と二人で、どこかの海岸へ泊りがけで出かけたさうだ。」

それは墺太利人の下僕からきゝ込んだ顚末だつた。

「それから君の留守中に、英吉利人の夫婦者がやつて來た。これは頗るいゝ夫婦で、こんな下宿に落ちて來る人品ではないんだ。すくなくとも知識階級の人間で、僕はその夫人を美術館に連れて行つて說明してやつた。」

三階の一室にゐるといふ新來の客の噂を、高樹はかなりの興味をもつて傳へ、柘植も期待をかけて聞いた。いつ迄も盡きない話をとりかはす二人の眼の前の高い空は暮れはじめ、遙か向ふの教會のゴシックの尖塔の上あたりに、星がちらちら光り出した。

夜の食卓には主婦もヘイドンもゐなかつたが、英吉利人の夫婦者は高樹や柘植と向合つた席に着いた。良人のグレイは半白の稍長い髮をきれいに分け、口髭を蓄へた瘦身の紳士で、グレイ夫人は荒れた皮膚に小皺の多い、發育不全といつたやうな小柄な人だつた。

高樹が紹介すると直ぐに、

「あなたは方々旅行していらつしやつたさうですが、いかゞでした。」

夫人は虛弱の爲か、育ちの爲か、ひどく物柔かな態度で話しかけた。

此の夫婦は柘植にも好感を與へた。一般の英吉利人が異國人に對して示す高慢な無關心や輕蔑

の色を示さず、寧ろ異國人である爲に、自分達とは違ふ思想、文化を持つてゐるのではないかといふ謙譲な好奇心で、一語々々にも心を働かしてゐる事がわかつた。常に安下宿で貧しい生活をし、無智な人間としか口をきく機會の無い者にとつて、よしありげな夫婦者のあらはれた事は少なからぬ興味だつた。何を勉強してゐるのか、いつ此の國に來たか、いつ迄滯留するつもりか、歐羅巴大戰についてはどういふ考へを持つてゐるか――きまりきつた質問も、たゞ口先の會話でなく、日本といふ遠い不可思議な國から來た若者が、いかに英吉利を見、いかに感じてゐるか、彼と我とを比較して見ようとする用意が含まれてゐた。

食後も高樹と柘植は食堂に殘つて夫婦者と話してゐた。

「あなたもあの二階の人の行動を不審に思つてゐらつしやるのですつて？」

突然、夫人は聲を低くして柘植に訊いた。その顏面には憎惡よりも恐怖の表情が著しかつた。

「えゝ、最初におやしいと思つたのは私ですけれど、それは全く無責任な、據所のない想像に過ぎません。果してあの人が……」

もう高樹が喋つてしまつたのか――これは事件が大事になるのではないかしらといふ豫感が柘植を惱ました。

「でも、をかしいではありませんか。獨乙人の爲に郷土を奪はれ、身ひとつで逃げて來たといふのが、毎晩お酒に醉つて、遊び歩いてゐられるものでせうか。それに、あれ程贅澤な人が此の家で一番狹い室を借りてゐるのは、その室の窓がおもてに向いてゐるからではないでせうか。第一、獨乙に散々な目にあはされた白耳義人として、飛行船の目標となる燈火を消さず、窓かけをおろさずに平氣でゐるといふ事があるものでせうか。」

グレイ夫人は低い聲ながら、何處迄も追及しないでは止まない熱心を籠めて、深く窪んだ眼を異常に鋭くしてたゝみかける。

「その點は全く私達も不思議には思つてゐるのです。」

「いゝえ、そればかりではありません。この間迄こゝにゐた佛蘭西人のいふには、あの人の佛蘭西語は訛が強過ぎて、白耳義人とは思はれないといふのです。ねえ、さういふ話でしたねえ。」

夫人の言葉の後見人のやうに、默つて寄添つて、ひそかに力をつけてゐる良人をかへりみて同意を求めた。

「さうです。私も別段證據を握つたわけではないので、此の場限りの話ですけれど、若しも吾々の想像の通り、あの男が獨探だつたとして、先づ第一に知らなければならないのは、彼が獨乙人

であるか、或は白耳義人でありながら敵に內通してゐる者であるか、それを確め度いと思ふのです。それには幸ひ此の家には、墺太利人がゐるのですから、あれに訊いてみたらどうかと思ふのですが……」

グレイは妻と同じく自分も疑をかけ、しかも妻よりも自分の方が遙かに思慮深い考察を廻らしてゐるのだといひたさうに口を切つた。

「この人はあゝいふのですよ。けれども、あの墺太利人にそんな事を訊くのはあんまり無謀だと私は思ふのです。だつて、墺太利も吾々の敵國ではありませんか。」

「なあに、あのこどもはいたつておひとよしの正直者だ。それに本來ならば敵國民として拘留される筈なのを、寛大な處置で斯うして働いてゐられるのだから、英吉利と英吉利人には感謝こそすれ敵意は無いよ。」

「そんな事を云つて、あなたの方がよつぽどおひとよしですわ。」

夫婦は高樹や栢植をそつちのけにして、何時迄も二階の小部屋の客の身柄について、疑惑の網をひろげるのであつた。

グレイ夫妻は、一日々々と、高樹拓植の二人に親しみをもつて近づいて來た。良人よりも讀書好きで、知識的な夫人さへ、一般の英吉利人と同じやうに、日本については何も知らなかつた。ラフカディオ・ハアンの日本も、ピエル・ロティの日本も知らなかつた。

「正直にいひますが、私は日本の方とお話したのはこれがはじめてなのです。往來で見かける東洋人の、どれが日本人か支那人か、私どもには區別がつきません。私の知つてゐる日本は、マダム・バタフライとミカドと、二三の浮世繪だけですもの。」

それが此の宿へ來たおかげで、遠い未知の國にもよき教養をもつ人のゐる事を知つたのは何よりの喜びであると、夫人は眞正面からほめたてゝ、屢々二人を苦笑させた。

或日の朝の食卓では、一枚の世界地圖をひろげて夫妻が待つてゐた。

「おゝ、昨晩はあなた方の御國を探し出す爲めに、午前一時半迄かゝりました。支那がこれ程大きい國とも知らなかつたが、日本がこれ程ちひさいとも想像しなかつたのですよ。」

グレイは地圖の一點に、眞紅の虫のやうな帝國を發見した驚きを、下宿の主婦にも、その妹にも、墺太利人の下僕にも分たうとした。誰も彼も額を集めて、グレイの指さきを好奇と輕蔑と微笑をもつて眺めた。その人々の眼には、二人の日本人はたゞ顏色の黄色い、體格の貧弱な、風采

のあがらない、そのくせ變に氣むづかしく、理窟つぽく、頭の高い人間としかうつつてゐなかつたのだ。グレイ夫人は自分達の心持を汲み取らない人達の耳に聞えよがしに歎息した。
「あゝ、このちひさい島國に、どんな固有の文明があるか、いかに賢い人間が住んでゐるか、自負心の強い英吉利人は知らないのです。」
「全く、全く。」
よくいつてくれたといふやうに、良人のグレイは妻の肩を輕く叩いた。
日本を知らないといふ事が、やがて反動的に日本人を買ひかぶる原因となつた。未開國の若者と思つてゐたのが、意外にも自分達より世界の大勢を知り、學問もあるのは驚くべき事であつた。その外に、言葉の不自由な事迄も、かへつて奥底に何かを藏するものゝやうに認めさせる所以となつた。
夫婦のものゝ身柄については、根深く訊くのは禮を失するやうに考へられるので、控目にはしてゐたが、自然に明かになつて來た。
一あのおやぢは競馬の仕事に關係して、はでなくらしをしてゐたんださうだね。僕にはその方の事はちつともわからないが、競馬會社の重役なのか、馬劵でも取扱ふ人間だつたのか、兎に角宵

越の錢は身につけた事も無いやうな贅澤をしてゐたらしいんだ。」

直接グレイからきゝ込んで來た事を高樹は栢植にも知らせた。

「競馬屋なんていふとばくちうちみたやうに考へられるが、そんな人柄ではないぢやあないか。」

「何しろ戰爭のはじまる前は、サヴォイに泊つてゐたといふんだから、一寸つきあひかねるね。」

夫婦のものが彼等の噂をのべつするやうに、二人もグレイ夫妻の身の上に少なからぬ興味をもつてゐた。

サヴォイは一流のホテルの名前だが、子供の無い夫婦は家を持たず、其處に暮らしてゐたのださうだ。競馬と、骨牌と、芝居と、歌劇と、音樂會と、飲食店と、旅行と――それが長い間の生活の大部分を占めてゐた。ところが、突然大戰爭が起り、競馬どころの騷ぎではなくなつたので、收入の途の無い不安から、あせつて手を出した株式相場で痛手を受け、夫人が亡父から貰つた遺產にまでも手がついて、たつた一年の間に宿所の格がずり落ちて、たうとう此の下宿に逼塞する身の上となつたのだ。

「この戰爭がすみさへすれば、又むかしの景氣のいゝ日がかへつて來るのだから、ほんのしばらくの辛抱たよ。」

下宿住居の不如意や、宿の主婦のつれなさをかこつ夫人をなだめて、グレイはほんとに樂しい日が明日にも戻つて來るやうに信じてゐるのだつた。

「いゝえ、この戰爭はそれ程簡單には濟まないさうですよ。ねえ、あなた方の御意見では、聯合軍が獨乙を打破る事は不可能だといふのでしたねえ。」

夫人は母親の懷でねむたがる子供のやうに、橫に頭をふりながら、高樹や柘植の同意を求めるのであつた。

「そんな馬鹿な事が……」

グレイは妻の心をやすめる爲にも、又ほんとに英吉利の力を信じてもゐて、此の場合には若い異邦人の說をこゝろよく思はなかつた。

「僕達も聯合軍の最後の勝利は信じてゐます。しかし、大砲や飛行機や軍艦で、獨乙を降服させる事は出來ないと思ふのです。」

柘植に交戰國に在りながら、誰の前でも自說を公言して憚らなかつた。

「大砲や飛行機で獨乙を降服させる事が出來ないといふと？」

「つまり非常に長い年月の間四方に敵をうけてゐれば、食物の不足か、財政的破綻か、革命でも

起るか、そんな事が直接原因となつて負ける事は想像出來るのですが、幾度突貫しても、肉彈を叩きつけても、伯林迄進軍する事はあり得ないといふのです。」
「たぶんその説は正しいでせう。しかし、私は信じてゐる。既に戰備の完成した聯合軍は、早晩總攻擊を開始し、遠からず敵を粉碎するに違ひ無い。」
それは戰つてゐる國民のすべてが望んでゐる事ではあつたが、いつ迄たつても決定的に勝利を得るきざしはあらはれなかつた。反對に、獨乙は潛航艇で海上を荒し、飛行船で海に近い地方を度々脅し、ロンドンも何時襲擊をうけるかわからない不安が、人々の心を暗くした。
戰爭の長引く事は、グレイ夫妻の生活に、陰影を濃くするばかりだつた。眞夏の暑い日中も、グレイは諸方の知人をたづねて職業を探し歩いた。夕方、高樹や柘植が圖書館から歸つて來る頃、グレイと扉口で落合ふ事が度々あつた。日に燒けた赤い顏をし、帽子をとつて汗を拭きながら、
「今日も一日歩いたけれど、こんな年寄をやとつてくれるところはありはしない。」
といつもの通り微笑しながらいふのが吐息のやうに聞とれるのであつた。
「あの人はいゝ人です。たしかに善良な人です。けれども有能の人かどうかは疑はしいと思ひます。」

何事にも批評的な態度をとる夫人は、自分のつれあひの苦勞には同情しながら、客觀的に見る餘裕を失はなかつた。若い者は兵隊になり、人手は不足して來たが、到るところで女が働きはじめ、半白の老人が雇はれる餘地は乏しかつた。肉體勞働の經驗も、それに堪へる筋骨も持合さず、銀行會社のきちんとした仕事にさへ半生の經歴が不適當にしてしまつた人間に、さうやすやすと職業の見つかる筈はなかつた。

或晩、柘植の部屋をグレイが訪れた。夫人は仲善の友達に誘はれて寄席に出かけたといふ事で、しばらく無駄話をしてゐたが、突然改つた様子で切出した。

「こんな事を云つて、氣を惡くされてはすまないのですが、全く困つてしまつたものですから、づうづうしく御願に來たのですけれど……」

いひしぶる樣子を見て、金の問題だなと直感すると、柘植は共々赤面してしまつた。

「實は先週の宿料がまだ拂つてないので、宿のかみさんに口ぎたなく催促されて弱つてゐるのですが、十日以内にはきつと御返ししますから、助けると思つて貸して下さるわけにはいかないでせうか。」

羞しさの爲に上氣して、つとめて平靜を裝はうとしながら、グレイの膝の上の手はかすかに震

へてゐた。
「さあ、お金ですか。金となると私にもちつとも餘裕はないので……」
柘植も唇が乾いて樂には言葉がつゞかなかつた。
「私も毎月父親から送金して貰つてゐる身分で、しかもその金高は、やうやく喰つて行かれるだけで、贅澤をしたり、他人を助けたりする程のものは無いのです。」
「だから十日以内にはお返ししますよ。」
何とか云つて斷らうとする出鼻を、相手は無雜作に叩いてしまつた。
「一週間や二週間の宿料なら、家内に話せばどうにかしてくれるのですが、何分あれにも迷惑をかけたので……」
グレイはくどくどといひわけをはじめた。妻が父親から貰つた遺産は相當の額だつたが、大部分は自分の手違ひでなくなしてしまつた。あと少しは銀行に殘つてゐるが、それを引出させるのは情に於て忍び無い。だから一時の融通をつけてくれといふのであつた。
柘植はそこに自分達とは全然違ふ西洋人のこゝろを見た。良人と妻とが別々に財産を持ち、良人は一文もなくなつてしまつたのに、愛する妻に心配をかけまいといふ心づかひから、妻に救ひ

を求めるかはりに、まだ知合つて間もない異邦人に頭を下げて頼むのは、頗る勝手違ひに感じられて、斷りの言葉を見出すのに迷つた。結局彼はグレイの手に、一週間分の宿料に相當する金子を渡した。グレイは幾度も感謝の言葉を繰返した後で、

「もうひとつ御願ひして置き度いのは、どうか此の事を家内にはないしよにして頂き度いのです。一時なりともあなたから金を借りたなどゝいふ事を、あれが知つたら何といひますか、私の立場がなくなつてしまひます。」

長い間手の中に握つてゐた金を懷中に納めると、グレイは固く柘植の手を握つて、部屋を去つた。

十日以内には必ず返すといふ約束ではあるが、もともと困りに困つたあげく、借に來たのに違ひ無いのだから、萬一返せない場合には、月末になつて、自分も宿料を拂へない事になりはしないか――柘植は相手に金を渡した瞬間から、不愉快な心配が胸に殘つた。翌日から、グレイ夫妻に逢ふのを避けようとする氣持に煩はされた。先方はどうにも融通がつかなくなり、恥を忍んで年の若い異邦人にも縋りついたのだ。さぞかしばつの惡さに惱んでゐるであらう。又夫人の方は、

亭主がそんな相手に金を借りたと知つたら、一層恥入るに違ひ無い。グレイはきつと自分と顔を合せ度ないだらうと思つたのだが、意外にもグレイの方では、わざわざ柘植を探し求めるやうな態度で近づいて來て、今迄よりも親密の度を加へて來た。

數日たつと、約束通り金を返したばかりでなく、その晩は柘植と高樹を晩餐に誘つた。多く酒をたしなまないグレイは、少量の葡萄酒で眞赤になり、著しく雄辯になつた。彼はロンドン一流の料理屋の名前を並べ、料理の通を聞かせ、いぜんの贅澤な思ひ出に醉ひ、上機嫌だつた。そして、食後は寄席に案内するといひ出した。

「行かう、行かう。私は久しぶりで、昨夜は骨牌で勝つたのだから。」

喜びをかくしきれず、どうして金が手に入つたか、正直に喋つてしまつた。

「それから、まだ確定といふわけではないけれど、火災保險の代理店で人手が入用だといふので、つとめがきまるかもしれないのですよ。幸運はやうやく吾々に廻つて來た。さうは思はないかね、フロシイ。」

圓卓の向側の妻に唇を持つて行くといつた様子で、グレイは有頂天だつた。

「さあ、いかゞでせうか。幸運は不運よりも吾々を訪れる事が少ないやうですよ。」

夫人は他愛のない良人の上機嫌をたしなめて置いて、二人の方に話を移した。

「あたしは此の人がたまに骨牌で勝つたからつて、決して喜ばないのです。勝つよりも負る方が多いのですから……」

「あゝ、フロシイ。それをいつてはいけない。」

グレイは兩手で妻の言葉に蓋をした。

「これが家內のいつもの癖です。私にいはせると、たちのよくない癖なのです。何故かといへば、家內はいかなる場合にも、喜びを喜びとして、單純に喜べない性質なのです。何の益もない事なのに、裏の裏を考へてしまふのです。それは家內の思索的な性格の爲でせう。しかし悲しむべき性格ではありませんか。」

人間といふものは嬉しい時は嬉しがる丈で、何も外に考へる必要はない、それがしあはせといふものだと、始終夫妻の間でいひ爭つてゐるらしい事を、ひとかどの哲學でゞもあるやうにもつともらしく說明するのだつた。それは妻を非難するよりも、寧ろ尊敬する心の表現であり、同時に妻に對する好意のからかひでもあつた。

「兎に角、私は骨牌で勝つ事が、負る事よりもいかに少ないかを知つてゐます。少なくとも吾々

の結婚した日以來、それは事實に相違ないのですもの。」

夫人の諧謔がみんなにうけたので、グレイは一層上機嫌になり、附近の食卓の人が密かに振向いて見る程笑つた。

「あなた方は骨牌はなさいませんの。」

良人の笑ひを消すつもりで、夫人は栢植に話を向けた。

「時々ブリッヂをやります。しかし賭けた事はありません。」

「まあ、ブリッヂをして賭けないのですつて。」

のみこみにくい顔つきできゝかへした。

「僕達は賭事を好まないのです。偏見かもしれませんけれど。」

「骨牌をして賭けないといふのは、砂糖を入れずに珈琲を飲むやうなものさ。はつはつはつは」

恰度運ばれて來た珈琲に沈めた砂糖をかき廻しながら、グレイは又しても笑ひ崩れるのであつた。

結局、グレイはみんなを連れて寄席に行かないでは承知しなかつた。戰時の事で客の入りも少なく、舞臺も寂しかつたが、戰争あてこみのうたうたひや、諷刺の後で、戰線の實寫の活動寫眞

が撮され、聯合各國の元首や將軍の寫眞の中には、大正の御代の天皇の御姿や、日章旗をひるがへす軍艦も映し出され、グレイは誰よりも熱心に拍手を送つて、二人を款待するこゝろもちを表現した。

一週間とたゝないうちに、グレイは又柘植の部屋を訪れ、一週間分の宿料を貸してくれと申入れた。火災保險の方の仕事がきまりかゝつてゐるから、決して長くは借用しない、恐らく三度とは迷惑な御願はしないであらうと、最初の時よりも尙深く恥入つた樣子で賴むので、柘植も亦自分の懷に餘裕の無い事を繰返したあげくに、それ丈の金を渡した。

「矢張幸運は不運よりも廻つて來る事が少ないやうですね。」

いはないでもいゝ事をと、いつてしまつてから自分でも氣がとがめたが、其の場の拍子でつい口にした。グレイはひどく參つた態度で、

「あゝ、柘植さん迄そんな事をいつてはいけない。」

と忙しく手を振りながら、逃げるやうに去つた。

夫人は良人が二度迄も柘植から金を借りたとは知らなかつた。朝、高樹や柘植が圖書館へ出かけるのを見ると、いつしよに宿を出て、みちみち話をして步くのを樂んだ。二人が散步に出る時、

邪魔でなかつたら自分を誘つてくれと、幾度となく云ふのであつた。
歐米人一般の通念で、實際よりも一層貧弱な國だと思つてゐる日本から來た、體格も顏つきもみなりも惡く、おまけに金廻もよくない學生に對し、輕蔑かあはれみか、何にしても對等にはつきあはないのがあたりまへなので、はつきり意識するしないは別として、誰しも人情に飢ゑてゐるのがならひだつた。そこへ、夫人のわけへだての無い、少しも偏見を持たない態度を見せた事は、少なからず二人を喜ばせた。英吉利人には珍しくこまやかな理解力を持つ夫人に對して、めいめい自分達の憧憬讃美するものを押賣りした。高樹は自分が陶醉してゐる文藝復興期の美術の特質を說き、博物館や畫廊に同行して觀賞を共にし、柘植は好んで讀むトルストイやドストイエフスキイの小說を勸めて、英吉利の通俗小說を夫人の手から奪つた。そして、化學者が實驗の反應をみつめ、園丁が蒔いた種子の發芽を、成長を、開花を待つのと同じ興味で、夫人がいかに理解し、味讀するかを見極めようとした。
「あれ程ものわかりのいゝ英吉利人は珍しいなあ。」
「あれでもう少しきりやうがよければ申分ないが。」
二人はそんな事を繰返して噂した。

下宿の客は頻繁にかはり、一番の古顔は印度の學生と高樹で、次が柘植、それからへイドン、グレイ夫妻といふ順だつたが、新たに二十三四の英吉利娘二人と、オオストラリアから軍人志願で歸國したといふ若い男が加つた。

娘達はひとつの部屋に二人で住んでゐた。パイパアといふのは脊がひよろ長く、腰圍は相當の發育を遂げながら、上半身は頗る貧弱で、胸が薄く、前屈みになり、頭部がちひさく、首が長く、駝鳥の姿勢だつた。髪も眼も黒く、皮膚も焦げた麥色をしてゐた。ボイスといふのは脊の低い、がつしりした體格で、胸が厚く張り、一枚肋の感じのする、顏の道具も大きく、強い性格を示すものがあつた。一方があまり化粧もしず、みなりも無頓着らしいのにひきかへ、この方は濃い化粧をし、衣服も派手好みだつた。この娘達がどういふ身柄で、親達の家をはなれて共同生活をしてゐるのかは、忽ちみんなの疑問となつたが、直に聯想の浮ぶやうな街上の女らしいそぶりは少しも見えなかつた。甲斐性のありさうなボイスの方は、市中のオフイスに勤めてゐるのだと云つて、朝は規則正しく出て行つたが、パイパアの方は勤口の無いのをかこちながら、別段あせつて探す風も無く、無性つたらしい體を、下宿の客間の長椅子に任せてゐた。

若者ペエジは、頓狂でおしやべりで、臆面なく、誰もきゝもしないのに身の上話を好んでした。

オオストラリアは、人も鳥獸も共に樂しく遊び暮らしてゐる自由の天國だと、お伽噺のやうな景色を紹介し、その天國を見捨てゝ自分が英吉利へ歸つて來たのは、故國の危急を救ふ爲で、志願兵の手續が濟めば、直に陸軍士官として劍をとつて敵地へ乘込むのだと宣言した。

新來の人々に對して、グレイ夫妻は年配からいつても、過去の生活がつくつた格からいつても、當然尊敬されてよかつた。人のいゝ、親切氣の多分にあるグレイ夫妻は、此の下宿に於る一切の事を話して聞かせるのであつた。たとへば、主婦はむら氣で禮儀を知らず、時には無禮の言辭を弄する事もあるだらうが、それは無教育のさせるわざだから我慢しなければいけないとか、その妹は體ばかり大きいが智能の發育は遲れてゐるから、要領を得ない事があつても叱つてはいけないとか、下僕のアドルフは敵國の墺太利人ではあるが、まだこどもに等しく、殊に戰前からロンドンにゐるのだから寬容にとり扱つて差支ないとか、心得てゐてもゐなくても、どつちでもいゝやうな事が多かつたが、高樹や柘植の事も勿論言葉を盡して紹介した。いかに此の二人の日本人が教養深く、學識廣く、親切であるか、自分達が曾て知つてゐる此の國のよき人々に比べて、まさるとも劣らない人間であると。しかし新來の人々は、目前に見る貧弱な東洋人に對して、グレイ夫妻が強要するやうな尊敬の念を抱かなかつたばかりでなく、明かに嘲笑を含んで應對した。

そこ迄は未だよかつたが、グレイ夫妻は進んでヘイドンの身柄に對する豫てからの疑を、殘らず喋つてしまつたのである。現在敵國の蹂躙に任せてゐる白耳義人で、しかも壯年血氣のものが、國を後にして他國で遊び暮らし、酒場とダンス・ホオルと寄席とナイト倶樂部に通ふ外に仕事がなく、それ程贅澤をしてゐるかと思ふと下宿の部屋は物置同然で、その小部屋の窓は常に深更迄燈光に輝き、飛行船襲來のおそれのある今日此頃、恰も敵に標的を與へるやうな不用意を敢てしてゐるのだが、これを疑はないで誰を疑ふ事が出來るであらうと、論旨は極めて明白であつた。その上に、グレイ夫妻は自分達の言葉の裏書人として、必ず高樹と柘植の名を出さないでは承知しなかつた。あの思慮の深い二人の日本人も、いちはやく此の男に嫌疑をかけてゐるのだと。

大都の夏の色彩も日毎にうすれはじめた或日、白耳義の詩人モオリス・メエテルリンクの演說會が開かれた。久しく顏を見せなかつた茅野も來て、三人は連立つて出た。この世界的に有名な詩人は、恰も三人が日本をたつ數年前に、象徴派の詩人として、戲曲家として、思想家としてさかんに紹介され、感激性の強い青年の心に、少なからぬ影響を與へた。メエテルリンク張の詩や戲曲が、雜誌にあらはれ、舞臺に上り、幾多の模倣者を生んだ時代を、三人は陶醉感をもつて呼

吸した。殊に茅野は、手酷しい批評家から、ダヌンチオとホフマンスタアルとメエテルリンクの三角關係の私生兒だと罵られた事もある。

「どうだい、なつかしいだらう。」

みちみち柘植のからかふ言葉の意味は、誰にもはつきりわかるのだつた。

「うん、なつかしくない事もないなあ。」

茅野は歐羅巴に渡つてから、俄に強い意思をもつて、近代自然派以後の文學を否定し、古典に復らん事を主張して來た。曾ては非常なる熱情を以て崇拜した人に對しても、悔恨に似た想ひ出の方が多かつた。その古傷に遠慮なくさはられて、顏を紅くするやうな性格もあつた。

薄暗い會場に、聽衆はまばらだつた。それも英吉利人は少なく、戰亂地から身をもつて逃れて來たやうな人が多かつた。詩人は想像を裏切つて、地味なみなりの、肩幅の廣い、がつしりした老人だつた。優麗な詞華を弄び、神祕象徵の世界に想ひを馳る人とも見えず、寧ろ英吉利型の實業家か、工業家といつた風采だつた。それよりもなほ意外だつたのは、その訥辯だ。歐洲大陸の人には珍しく、身ぶり手ぶりが少なく、一切見榮を切るやうな態度に出ず、稍うつむき加減に、恥らふやうに、嗄れた低聲で、白耳義の立場を、人道を、正義を說くのであつた。徹頭徹尾寂し

く、陰鬱な演説會だつたが、最後にメエテルリンク夫人が歌劇「ペレアスとメリサンド」の一節をうたつて、僅かに聽衆を喜ばせた。

ほつと歎息するやうに、三人は會場の出口から戸外へ吐出された。晩夏の暮れ切らない雲の多い空に、うつすりと夕日がさし、市中の物の音が、その空に反響するやうな、静かな夕方だつた。

「驚いたねえ、メエテルリンクつて、まるで造船技師みたやうぢやあないか。」

「しかしかへつてあの方がいゝぜ。素晴しい雄辯で、身振澤山で、センチメンタルな表情でもされたら堪らないからなあ。」

もつと大きい昂奮を期待した三人は、力抜けのした感じをいだきながら印象を話合つた。

「お茶でも飲まうか。」

茅野は町角で足をとめて、二人を誘つた。

「君達に是非きいて貰ひ度い話もあるんだ。」

「又例の臺灣茶へ行くんだらう。僕はいやだよ。」

高樹はこだまするやうに答へた。

「いゝや、それがその行きにくい事になつてしまつたんだ。あそこの支配人の奴、來てくれるな

といふんだ。」

茅野はてれかくしもまぜて、自分の役の惡さを笑つた。

「何？　足ぶみしてくれるなと云ふのか。馬鹿な。」

腹立たしさうに云つて、高樹ははげしく唾をした。

「さうなんだ。だからあそこには行かない。何處かほかのうちへ行かう。詳しい物語はそこでするよ。」

「いやだ。僕はメエテルリンクで充分疲れた。この上君の戀愛事件なんか聞かされて堪るものか。僕は失敬する。」

「柘植君、君は歸らないか。」

病氣以來一層白くなつた額に、ほんとに疲勞の色を見せて、高樹は何と云つても應じなかつた。

氣早に歩き出したのが、ふりかへつて訊いた。

「僕は後學の爲にのろけを拜聽しよう。下宿に歸るよりは幾分朗だらう。」

「さうか。」

高樹は自分の輕蔑する事には、友達にも關與させたがらない強い根性を持つてゐた。嘲るやう

にいひ捨ると、少しも上體を動かさない姿勢の、首筋から兩肩に、孤獨の影を宿したやうな後姿を見せながら、さつさと行つてしまつた。

「同情の無い奴だな。」

茅野は友達の生一本の性情を、心から面白がつて、よく響く聲で笑つた。

二人は、下宿とは反對のハイド・パアクの方へ歩いた。公園の入口には、いつもの通り募兵の演說をする者があつた。勞働者らしい體格の若い兵士が、さかんに拳骨を振上て絶叫して降壇すると、次には中年の、こゝろを用ゐてみなりを質素にした上流の婦人らしいのが登壇して、しきりに愛嬌をばらまきながら、祖國の危急を救へと訴へるのであつた。そんな風に、街上では、人を昂奮させ、激昂させる言葉を盡して銃劍を執れと叫んでゐるのに、廣く圍む鐵柵の內側の芝生には、幾組かの男女が、いひ合せたやうに顏と顏とをくつつけ、堅く抱合つて横つてゐた。男は大概カアキイ服の兵士で、相手は近所の女中達であらう、黑い服の襟や袖口に白いレヱスをつけたのが、中には乳母車に幼兒を殘したまゝ、我を忘れてゐるのもあつた。

二人は池のほとりのベンチに休んだ。貸ボオトを漕ぐものも少なく、さゞ波もたゝない水面に、白鳥や鵞鳥の群が悠々と泳いでゐた。同じ交戰國とはいひながら、先刻メヱテルリンクが慘禍を

訴へた白耳義や佛蘭西と、この國との相違の著しさを象徴するやうな平和な景色だつた。

「どうしても島國の人間には戰爭の急迫した實感は起らない。僕達だつて、たとへちひさい時の事たとはいへ、日清日露の戰爭といふものを、殆んどお祭のやうにしか感じなかつたが、國境を接して戰つてゐる同盟國が、英吉利の態度に不滿を感じてゐるのは無理はないと思ふね。」

「しかし、出來るだけ少ない犧牲で濟ませたいのはどの國でも同じだらう。これが若し獨乙の軍隊が此の國の一部を占領したとか、ツェペリンがロンドンを爆破したとかいふ事になれば、いくら英吉利人だつてあわてるだらう。要するに四圍の狀況の相違さ。」

「さういへばさうだが、佛白の悲慘にひきくらべて、この國の高慢ちきな奴等にも、砲火の洗禮を施したい氣がするね。」

柘植はメエテルリンクの訥々たる演說と、その同國人の聽衆の暗い陰影をしよつたみじめな有樣を想ひ出して、何か英雄的な行爲に身を投じたいやうな衝動に驅られた。

「まして況やこの非常時に、喫茶店の少女に夢中になつて仕事を放擲してゐる人間なんか呪はるべきだよ。」

「なんの事かと思つたら、ひどい事になるものだなあ。」

茅野の朗な笑聲は水面を遠く迄走つて行つた。

「しかしね、僕の方も決してそんな呑氣な現狀ではないのだ。非常時といへば非常時なんだよ。だから君と高樹にきいて貰つて、力を借ようと思つたんだが……」

「高樹君には一蹴されちやつたね。」

「あいつ、自分の關係しない事には頗る冷淡だからね。」

茅野は高樹に逃げられた丈、柘植に賴りたい心持が強かつた。

「先刻も一寸話したけれど、ほんとに喫茶店の支配人に木戸をつかれたんだ。それといふのがねえ……」

茅野はその後の彼の戀愛事件について、一生懸命に話出した。彼は相變らず毎日茶店に通ひ、遠くから意中の人と目顏で挨拶したり、手紙のやりとりをして、完全に少女の心をつかんだが、外の四人の女が嫉妬を起し、監督の年增迄も態度を一變して、敵意を露骨に示すやうになつた。それも茅野を憎むだけではなく、相手の娘も仲間からつれなくあたられ、監督には茅野から來た手紙を皆の前で開封するやうに強要されるやうになつた。遠い異鄉に來て、今迄きやうだいのやうに仲よくしてゐた友達にも汚らはしいものゝやうにつまはじきされ、白い眼で見られる事にな

つては、日毎々々が悲しく苦しく、ゐたゝまれないと訴へて來る。斯ういふはめになつたのを、茅野は彼一流の解釋で見た。四人の少女がやきもちをやくのは爲方が無いが、監督は怪しからん、あの年增はひそかに自分に好意を寄せてゐて、自分があの娘に近づかうとするのを知り、中途迄は取持顏を見せはしたが、ほんとに二人が接近したとなると、忽ち嫉妬に堪へられなくなつたのだ、あいつはいやらしい位體を擦つけて來た事がある、あいつは別れの握手のふりをして堅く堅く手を握つて離さなかつた事がある――と、女といふ女は自分のやうな美貌の詩人には好意を持つものだといふやうな口吻さへまじへるのであつた。

「ところが、つい一昨日の事なんだ。例の通り茶店へ行つて、隅つ子に陣取り、いつぱいの紅茶でねばつてゐると、時々あの店で見た事のある支配人といふ奴が、妙ににこにこ笑ひながらやつて來やあがつて、馬鹿叮嚀な態度で名刺を出し、初對面の挨拶をしてから、僕の眞向の椅子にかけた。薄禿のいゝ年をしながら、年中眼尻に微笑を湛へてゐるといふいやみな奴なんだ。そいつが、まことに御無禮な事を申上て御氣持を惡くなさつては相濟まないがと、無闇に御の字澤山で切出した。聞けば此の店に働いてゐる娘の一人を大層御贔負になすつて、御手紙なども頂戴するさうだが、あれ達は普通の給仕人ではなく、相當の親許から堅い約束であづかつて來てゐるのだ

から、無事に見學させて日本へ連れて歸る義務がある。間違を避ける爲に、日本人の客にはサアヴイスさせない位注意を拂つてゐる。だから此の店を最負にして毎日來て下さるのはありがたいが、あの娘の爲に來てくれるのなら迷惑だ。あなたさまも御出世前のおからだゞし、日本には親御さまも無事の御歸朝を御待兼だらうから、雙方に間違の無いやうに、今後は此の店には來てくれるなと、實にはつきりいやあがるのさ。」

都會育ちのものゝならはしは、我身の事を話す時、相手に冷かされるのを豫期して、わざと先へ廻つて冗談めかすのが普通なのだが、茅野は次第に眞劒になり、憎惡をこめて話すのだつた。

「ふうむ、おもひ切つた事をいふものだな。それで君はどうしたんだ。」

柘植も友達のその時のばつの悪い立場に我身を置いてみて、事の理非よりも先に、その支配人を憎んだ。

廣い公園も隅々迄黄昏の色に包まれた。ボオトはみんな岸につながれ、水鳥の姿も木立の影の暗い中に消えてしまつた。何處かで、かすかにがつくがつくと鷲鳥の啼くのが聞えるばかりだ。

「僕も全く豫期しなかつた相手が突然眞正面にあらはれて來て、言葉は叮嚀だが腰を据ゑて要求を切出したので、一寸手の下しやうも無かつたが、こんな事で負けて堪るものかと思つたから、

自分は決してあの娘を誘惑するものでは無い、曾てはふしだらな行跡のあつた自分ではあるが、今は清淨な生活に入らうと堅く心をきめてゐる、あの人に對しても、本人が承知してくれるなら、綺麗なつきあひをつゞけ、日本へ歸つてから結婚するつもりなのだ、だから誰に恥る事もないのだと云つてやつた。しかし向ふはそんな事では引込まない。結婚をするならするでいゝが、その話はあの娘が日本へ歸つた後の事にして貰ひ度い、今は自分が全責任をもつてあづかつてゐるので、よしんば本人が何と云はうとも、その親達との約束によつて保護しなければならない、其の重大な責任者としては大事の上にも大事をとらなければならないので、立派な紳士に對して氣の毒ではあるが、今後この店に出入する事は絶對に斷るし、又あの娘との文通も一切やめて貰ふ事にする、娘の方には既に嚴しく申渡したといふのだ。さういふ押問答をしてゐるのを、監督も娘達も事態を察して、遠くから注視してゐるし、一番弱つたのは、當の本人が、內心は悄氣てゐるのだらうけれど、さも何も知らないやうな風で、あつちこつちの卓子の給仕をしてゐるんだ。流石に僕も參つた。」

「それで君は閉口して引下つたのか。」

「いゝや、勿論僕は何の言質も與へず、結局うやむやのうちに物別れとなつたのだが、それにつ

いて君達に是非力を借りたいと思ふのだよ。」

茅野はなほ言葉を續けようとしたが、ふと思ひかへして、

「やあ、すつかり暗くなつちやつた。何處かで飯を喰ひながら話さう。今日は久振でお茶といふものを口にしそこなつちやつた。」

公園を出た二人は一番最初に目に入つた家へ上つた。階下は喫茶部で、二階へ上れば手輕な食事の出來る粗末な家だつた。時間をはづしたので、ほかには客も少なく、話をするにはもつて來いだつた。百貨店の賣子のやうな質素な服を着た娘達は、註文の品を持つて來ると、室の隅へ行つて編物をはじめた。茅野は食慾を忘れたやうに、自分を主人公とする話に夢中だつた。

「それでだね、僕はあんな支配人なんか相手にしたつて爲方が無いから、直接本人へ手紙を出したんだ。どんな邪魔が入つても自分を信頼してくれと云つてやつたんだが、本人の手に入つたか入らないか、返事が無い。それで昨夜はあの連中のゐるアパアトの前で歸るのを待つてゐて、本人の意中を確めようとしたんだが、監督の奴が邪魔をして、直接口をきく事を拒むんだ。押問答をしてゐるうちに、本人は外の娘達といつしよにうちの中へ入つてしまつた。あく迄も逢はなければ歸らないといつてやらうかとも思つたが、それよりも一應君達と相談して、力を借りようと

思つてね……」
「ありがたくないな。」
柘植は空腹にしみ入る麥酒で口が輕くなつてゐた。
「流石に高樹君は悧巧だ。形勢を察知して逃げたからね。」
「それでだね、僕は君と高樹君と二人に頼まうと思ふ事があるのだが、あの様子では高樹君はいやだと云ふに違ひ無いから、是非とも君にひと肌ぬいで貰はなくてはならないのだが……」
彼は柘植に支配人にあつてくれと云ふのだつた。逢つて、今度の事が決して浮氣でなく、眞劍に女をおもひ、眞面目に結婚を望んでゐるので、本當にいつしよになるのは二人が日本へ歸つてからの事にするが、それ迄自由の交際を許してくれと頼めといふのだ。
「どうだらう、君としては隨分迷惑な話だらうが、僕はあの女を奪はれては、又墮落する外に途がないんだから……」
ふいと、茅野は自分の激情にうち負かされて、聲がかすれた。
「そいつは弱つたな。第一僕なんかゞ何を云つたつて、支配人が信用するわけがないぢやあないか。」

「そんな事はないよ。少なくとも僕以外の誰かゞ、僕の心持をよく知つてゐてくれると云ふ事さへわかればいゝんだ。僕は今度こそ墮地獄を脱出（つがれだ）さうと努力してゐるのだから、その僕の心持をだね、第三者が說明してくれゝばわかると思ふんだ。」

「駄目だよ。それは君のいつもの流儀で、他人を全然無視した考へ方だ。見も知らない娘を勝手にえらび出して、自分の魂を清め、救つてくれるのは此の人の外にはないといつたつて、誰が正氣と思ふものか。殊に相手は文學青年ぢやあないんだぜ。あきんどだぜ。」

柘植は自分の迷惑とか、茅野の虫のよさとかを感じるより先に、此の友達の世間知らずの、夢想に醉ふ性格に驚いたのであつた。

「君のいふのも尤もだ。しかし僕にとつては一生のわかれ路なんだ。結果のいかんは問はないよ。兎に角支配人に逢つてくれないか。最善の努力を盡さなくてはならないと思ふんだ。」

「勝手な事を云つてら。そんなだゞをこねたつて駄目だよ。」

「だゞをこねるはきびしいな。」

茅野はなかなか承知しさうもない友達の態度に當惑し、その當惑をまぎらすやうに、例の朗な笑聲をあげたが、突然その笑は中斷された。

「なんだ？」

二人は一齊に立上つて、窓の外の空を見た。殷々たる砲聲が次第に高く聞えて來た。

「ツヱペリンか。」

「まさか。」

冗談のつもりで云つたのであるが、あわたゞしく階下から馳上つて來た喫茶部の客や給仕は口々にツヱペリンだ、ツヱペリンだと騒ぎ出した。幾筋も入りまじる探照燈が雲の多い空を未來派の繪のやうに照らし出した。何處となく、全市がうわあつといふ物音につゝまれた。あとからあとから、二階へかけ上つて來る人數が殖え、忽ち室內は身動も出來ない混雜を呈した。往來を歩いてゐた人達が、命の危險に脅えて逃込んで來たのだ。探照燈の光でツヱペリンを見たといふ者がある。來襲機は十數機だと叫ぶ者がある。何處其處に爆彈が投下され、家屋は破壞され、多數の人間が死んだと報告するものがある。その度每に、室內の何處かで女の泣き叫ぶ聲が高まつた。砲聲は愈々さかんになつた。それは上空を飛翔する敵機を擊落さうと懸命になつてゐるものだつた。英國機が追擊を開始したと傳へるものがあつた。突然市の眞中あたりに、大きく火の手があがつた。室內の人は思はず知らず叫聲を發した。つゞいて又少し離れた見當の空が不自然に赤く

なつた。火事だ、火事だと人々は歎息するやうにつぶやいた。

「あれは僕の下宿の方角ぢやあないかしら。」

「なあに、もつと遠いさ。」

それつきりで、又窓の外の物凄い光景を見守つた。

約一時間の後、砲聲は途切々々にしか聞えなくなつたが、室内にぎつしり詰つた人達は失神したやうに言葉もなく、身動もしなかつた。栢植と茅野は、ひとかたまりになつて泣いてゐる給仕の女にいゝ加減の金を渡して外に出た。探照燈の活動はなほやまず、行手の火事のあかりは雲を染めてすさまじかつた。街上には、無言で走る人が充滿し、その人波の中を、巡査を滿載した自動車や、消防自動車が疾驅した。茅野は郊外の宿の婆さんと孫娘が心配してゐるに違ひ無いと云つて、地下鐵道の乘場へ來ると、俄にあわてた樣子で別れを告げ、地下の階段へかけ込んだ。

栢植は少しも命の危險を感じないのを、自分ながら不思議に思つた。この大都市の隅から隅迄、素晴しい緊張感の張つた光景が、かへつて痛快だつた。それは、自國を離れ、肉身の者の足手まといが無いからであらう。よしや自分が爆彈の犧牲になつても、左程悔いないで濟みさうな心持だつた。彼は、夕方公園で茅野と話合つた時、この國にも砲火の洗禮を施し度いと放言したのが、

嘘でなくなつたのを得意に思ふ程のたかぶつた氣持で眞暗な夜道を歩いた。砲聲は全くやみ、ツェペリンは無事に逃げ去つてしまつたらしく、探照燈だけが絶間なく大空を照らし出してゐた。
火事は二箇所で燃えつゞけ、一方は意外にも下宿から一二丁しか離れない場所だつた。爆弾の落下した附近の家々の窓硝子は、微塵になつて落ちて街の鋪道を埋めた。その邊は夜の女の巣窟だといはれてゐた。或家の前に自動車を乗つけた若い男と、女優のやうな厚化粧の女が、何處かへ避難する景色を見た。いつたん自動車に乗つた女が、泣き叫ぶやうに犬の名を呼びつゞけると、雇女らしい白髪の婆さんが一疋の狆を抱いてかけ出して來た。女はそれをうけとると、ひしと頬擦し、自動車は人を分けて走つた。
柘植が下宿に歸ると、入口の扉を大きく開き、一歩入つたところで、壁にくひつくやうな形で女中がすゝり泣いてゐた。
「おゝ、どうした。無事だつたかい。」
奥からかけ出すやうに高樹が出て來て、いきなり堅く握手した。
「何處に行つたかわからないし、あんまり歸りが遅いものだから、やられたんぢやあないかといつて、みんな心配してゐたんだ。」

高樹は明かに昂奮し、友達の無事を喜んで、眼には涙さへためてゐた。止宿人も宿の者もみんな食堂に集つてゐた。それが先を爭ふやうに出て來て、彼の無事を祝した。
柘植はあまりに平氣で、火事場の見物迄して來た自分の爲に、から迄みんなが心配してくれたのかと思ふと、調子の合はない自分の處置に當惑した。彼は手短に、公園の側の料理屋で茅野と共に食事をし、そこで砲聲を聞き、その小止みになるのを待つて歩いて歸つて來た事を話した。
「こんな近くに爆彈が落ち、火事があらうとは想像もしなかつたものだから……」
「そんな事をいつて、この家の前にも二發落ちたんだ。幸ひに不發彈だつたさうだが……」
彼はみんなに取圍まれて食堂へ入つた。
「あゝ柘植さん。」
室の隅の長椅子につつ伏してゐる夫人の介抱をしてゐたグレイも、待構へてゐて手を差延ばした。
「フロシイ、柘植さんが歸つたよ。無事で。」
良人に抱起されたグレイ夫人は、蒼白の顔に涙でへばりついた前髪を拂ひもせず、放心したやうな眼をみはると、いきなり柘植の胸に縋りついて、はげしく泣出した。

翌日のロンドンは、平生のおちつきを失ひ、何となく騒然として、人心の不安は街上の景色を一變させたやうに思はれた。新聞は戰時檢閲の爲に詳しい記事も誇大な文字も禁じられ、正確な報道は見られなかつた。それだけ人の噂はさまざまに語り傳へられた。

襲來した敵機の數も明かでなかつた。或者は僅かに一機に過ぎないと確說し、或者は三機だといひ、他の者は五機だと云つた。中には、探照燈に照らし出された雲の切目に、はつきりとツェペリンの姿を見たといふ者もあつた。ツェペリンは決してそんな低いところを飛びはしなかつた、それはツェペリンを追擊した英國機を見間違へたのだらうと反對するものもあつた。爆彈の被害を受けた場所丈は誰の目にも歴然とわかるので爭ひの餘地はなかつたが、不發彈は市中到る所に投下されたやうに噂された。バツキンガム宮殿も狙はれた、議事堂も狙はれた、英蘭銀行も狙はれたと、あらゆる重要な場所や有名な建物は、あやふく難を逃れたやうにいひはやされ、その噂は忽ち實話風の形をとつた。英蘭銀行を狙つたものは、僅かにねらひがはづれ、折柄銀行の前を走つてゐた乘合自動車の上に落下して乘客を鏖殺したとか、議事堂を狙つたものは、トラフアルガア・スクェアに落ち、一人の通行人を粉碎したが、今朝になつてみると、ネルソン將軍の銅像

の脚柱の下に、長靴をはいたまゝの片足がころがつてゐたといふやうな、はつきりした話がひろまつた。

朝の早い栢植は、同宿の人達の起きて來ないうちにおもてに出て、噂と噂のいりまじる市中を歩き廻つた。爆彈の落下した地點は、路面のアスファルトを碎き、大きな凹みを穿ち、石や煉瓦で造られた家屋は空洞をあけられて、腦天をはげしくなぐられた動物のやうに、無感覺に突立つてゐた。彼はあてもなく歩き、或る町角の喫茶店で、一片のパンと珈琲を飲んで朝食を濟ませた。この儘下宿に歸り度くない、誰とも顏を合せたくないと、自分の中に潛むちひさい自分が、絶間なくそゝのかした。同宿の者の誰の顏を想像しても、その眼は鋭く自分を射るのであつた。

何といふ事だ、あのしまつは――彼は自分で、昨夜の事が悉く忌々しく想ひかへされるのであつた。突然の出來事に失神した位心の顚倒したグレイ夫人だとはいへ、みんなの視線に取圍まれながら、自分の胸に全身を任せ、たゞならぬ力を兩腕にこめて縋りつき、いつ迄も嗚咽して止まなかつた姿は、はつきりと眼に殘つてゐる。出來たてのプディングのやうに、なまあたゝかく、ぶよぶよしてゐる女の肉體は、むせび泣く度にこつちの體へ波動を傳へ、二つのからだが一つになつたやうな感覺も、胸や腕に殘つてゐる。それよりも、ぐるりと取卷いた澤山の眼が、いちい

ち違つた光を帶び、いぶかり、あやしみ、嘲笑ひ、非難し、叱責するのであつた。その中で、グレイは柘植にも增さる當惑にまごまごしてゐた。なだめても、すかしても、柘植の胸に顏を押つけて泣きじやくる妻をもてあまし、なさけない苦笑で僅かに人前をつくろつてゐた有樣は、無言の中に柘植を難詰するものゝやうだつた。何にも自分にはやましい事はないと、自分で自分にいひきかせても、その場の光景は誰の眼にもあやしく映つたに違ひ無いのだ。全く意外の事だつた。それはみんなを驚かしたが、誰よりも一番驚いたのは柘植自身だつた。

彼は全く不必要な時間を費して、あつちこつち步き廻つたが、結局下宿へ歸るより爲方が無かつた。しかも其處に、彼を待兼てゐたのはグレイ夫妻だつた。

「何、もう被害地の實地踏査をして來たのですつて。あゝ、吾々の若き勇士ペエジ君は、たつた今パイパア孃を誘つて、多分貴方と同じコオスを、冒險の旅に出立したところでしたよ。貴方が先鞭をつけたとは知らないから、前人未到の地へ赴くやうな、悲壯な決心を面にあらはしてゐました。」

柘植が一番あひ度ないと思つてゐたグレイが、いつにもましてはしやいだ調子で出迎へた。それがいかにもわざとらしく、不自然に見えるのであつたが、グレイとしては傍の椅子に青ざめて

埋もれてゐる萎れた草花のやうな妻の心を引立てる爲のつけ元氣に相違なかつた。
「昨夜の今朝だといふのに、爆彈の落ちた地點を見極めに行く人があるかと思ふと、ごらんなさい、我が親愛なる妻は、よつぴて一睡も出來ず、今でも未だ頭の上をツエペリンがぶうんぶうんと飛んでゐるやうな氣がして、ゐてもたつてもゐられないといふのです。」
夫人は時候違ひの長い毛糸の肩かけを上半身にまきつけ、血の氣の失せた顏は、一夜にして憔悴の陰影を深くした。
「ほんとに貴方は現場を見ていらつしやつたのですか。どんなにか怖ろしい、悲慘な光景だつたでせうね。家を燒かれ、澤山の人は殺され……」
「えゝ、往來で聽いた話ですけれど、ネルソン將軍の銅像の下に、長靴を穿いた儘の片脚がころがつてゐたさうです。」
「長靴を穿いた儘の片脚？　おゝ何といふ……」
夫人は心なく云つた柘植の言葉に身震ひして、
「人間といふものは、何故お互に殺し合はなければならないのでせう。」
といふかと思ふと、兩手で顏を覆つて、うめくやうに泣き出した。

グレイは、困つたものだと口に出していふかはりに、兩手をひろげ兩肩をすくめる佛蘭西流の表情をして見せたが、直ぐに後から夫人を抱いて長椅子へつれて行き、無理に横にして置いて、又柘植のところへ戻つて來た。

「今もみんなで話してゐたのだが……」

彼は急に聲をひそめ、足音を忍んで戸口へ行き、廊下に人のゐないのをたしかめた。

「柘植さん、貴方はどう思ひます。あの獨探の奴二三日前からゐないのですよ。昨夜のあの騷ぎの最中、此處にゐなかつたのは貴方と彼の男です。貴方は結局歸つて來たけれど、あの男は今朝も未だ姿を見せない。あんまり不思議だから、墺太利人のアドルフに訊いてみると、旅行で留守だといふぢやありませんか。ふだん度々窓かけを下す事を忘れる男がですよ、ツェペリン襲來の晩に限つてロンドン以外の地にゐるといふのはをかしいぢやありませんか。貴方の賢明なる判斷にまち度いのですが、どう思ひます。」

グレイは重大事件に直面した人の態度で話すのだつた。

「へえ、昨夜あの人はゐませんでしたか。」

柘植も流石に驚いて、自然と聲は低くなつた。

ゐませんでしたよ。それは彼の男の事だから、一晩や二晩うちをあける事は珍しくないかもしれないが、ふだんとは違ひます。たゞさへあやしいと睨まれてゐる男が、昨夜のやうな非常時にゐないのですよ。しかも此の附近が一番多く爆彈を落されてゐるのです。何か特別の信號をしあひ、愈々襲撃決行の日が定まると、自分は任務を果したから姿をかくしたといふ筋は無いでせうか。高樹さんもをかしいと云つてゐましたがね。」

グレイは愈々眞劍だつた。

「をかしいといへば最初からをかしかつたが……」

柘植は自分の直感が、夙に彼の素性を觀破したのだと公言したい得意を感じた。今になつては、疑は疑のみでは濟まされないと思つた。この事については、彼はかねてから、何故英吉利人といふ奴は、斯う迄うすのろなのだらうと齒がゆがり、自分がこの國の人間なら、徹底的に調べあげてやるのだがと憤慨してゐた。

「實にをかしいと思ひますよ。私個人としては、もう何らの躊躇なく、彼を獨探だと斷言する事が出來ます。アドルフのいふのには、荷物は其の儘部屋に在るといふのですが、鞄の中に何が入つてゐるかは、神様以外に誰が知るものですか。私はどうしてもあいつの尻尾をつかまへなければ

ば承知しない。此のロンドンを破壞しようとする獨探を、うつちやつて置くといふ法はありませんよ。」

グレイは強い決心を示す爲に、拳骨の背で卓を叩いた。

「たゞ邪魔になるのはこの家の雌鷄です。あの女は何といふ恥知らずでせう。」

下宿の主婦とヘイドンのたゞでない關係に言及して、忌々しさうに舌うちした。

探偵的興味に夢中になつたグレイは何時迄も同じ問題を論じつゞけたが、その間長椅子にうつ伏になつて横つてゐる夫人は、背中に波を打たせて、病苦を訴へるものゝやうに、間歇的にすゝりあげてゐた。貧弱な肉體は何の魅力もなく、意氣地なくきゝわけなく脅えてゐるのは寧ろ腹立たしく、踏躙つてやり度い位だつた。

それでも柘植は、彼がおそれてゐた事には少しも觸れず、グレイは日頃の信賴を持つゞけ、些かも變つた氣色を見せないので、すつかり氣持が樂になつた。

グレイはまだなかなか話を打切りさうにもなかつたが、其處に墺太利人の下僕アドルフが、日本の紳士が柘植をたづねて來たと取次いで來たので、いゝ機會にして立上つた。

玄關には中年の男が立つてゐた。

「あゝ、あなたが柘植さんで。」
いんぎん過るものごしで、
「今日はちよつと御友人の事で御相談にあがりましたのですが、しばらく御邪魔させて頂けませうか。」
いひながら差出した名刺を見て、柘植は忽ち參つてしまつた。茅野が通ふ喫茶店の支配人だつた。やつたな――何をやつたのかはわからないのだが、何か不吉な事が、いやな事が、煩はしい事が、迷惑な事が起つたに違ひ無いと思つた。
「失禮ですが僕の部屋へ。」
柘植は客を二階へ連れて上り、椅子をすゝめたが、客は腰かけるより先に、
「こちらには高樹さんといふ方もゐらつしやるさうですが、出來る事なら其方にも御目にかゝらせて頂き度う御座いますが。」
と申出た。
「さあ、只今ゐますかしら。」
口ではさう云つたものゝ、自分一人で不快な話にぶつかるよりも、一人でも味方の多い方が氣

強いので、彼は又階下へかけ下り、期待をかけて扉をノックした。高樹は椅子の背に全身をもたせかけて、本を讀んでゐた。カラアもネクタイもつけず、ナイト・ガウンを着た姿は、青白い額と共に病人らしく見えた。

「茅野の事で、例の喫茶店の支配人といふのが來て、君にも逢ひ度いと云ふのだが……」

「僕はいやだ。」

相手の言葉を中斷して、高樹は露骨に不機嫌になり、半分起した體を又倒した。

「昨夜はよく眠れなかつたから、今日は休息の必要がある。下らない話はきゝ度ない。」

いやだと云つたら、いくら勸めても駄目とわかつてゐるので、柘植は何となくむつとして、その儘手荒く扉をしめた。

高樹君もゐるにはゐるのですが、病後の事で、おまけに昨晩の騷ぎで熟睡してゐないので、ひどく疲れてゐるさうですから……」

「いゝえ、貴方にきいて頂くだけで結構なので。」

茅野が言つた通り、この支配人は始終眼尻に微笑をつくる事を忘れず、若い者を相手にしながら下手に出る態度を守り通さうと努めてゐるのだが、その癖奧底には、ねばつて押さうといふ下

心を持つてゐた。

昨晩茅野は柘植と別れてから、自分の宿には歸らず、喫茶店の娘達のアパアトメントに出かけて行つたと云ふのだ。ツエペリン襲來に震へてゐる女を慰め、守る爲にかけつけたのだ。監督の年増が應接に出て、規則として逢はせる事は出來ないと拒んだが、茅野は承知しない。ふだんならば兎に角、此の非常の際に、そんな無情な規則が何になる、萬一爆彈がこの場に落下すれば、誰の命もなくなるのだ、その危險にさらされてゐる折柄、自分の命にもかへがたい人と離れてゐなければならないと云ふやうな馬鹿々々しい事はない――この際自分は起るべき可能性のある危險に對して、愛する人を守護する義務があるといひはつて肯かない。しまひには、扉越でも窓越でもいゝから本人と一言話をさせてくれと云つて、無理にも押入らうとする。監督は茅野の權幕のはげしい丈不安を感じ、どうしても逢はせるわけにはいかないと拒む。折柄爆彈騷ぎで昂奮してゐる同じアパアトメントの他の止宿人達もあやしんで出て來て、結局茅野は見も知らぬ人間の爲に戸外へ押出されてしまつたのだ。

「といふやうな次第でして、學問のある方の事ですから、まさかに刄物三昧などゝいふ事は御座いますまいが、あの御様子では何をなさるかわからないと監督も當の娘も怖がつて居りますし、

手前共としましても女の子達の親許と堅い約束がありまして、充分保護しなければならない立場に居りますので……」

支配人はつとめて微笑を浮べた眼の底で、じつと相手の顔を見つめながら、繰返して茅野の行動の迷惑を訴へた。

柘植は話の中途で幾度となく笑を堪へた。茅野一流の自分勝手な、我慢のない遣口が、自然とをかしみを持つてゐるのだ。

結局支配人が、柘植に求めるものは、常規を逸した茅野に意見をし、おもひ切らせてくれ、それが雙方の身の爲だと云ふのであつた。

「それは御困でせうが、あの男は吾々のいふ事なんかきゝませんよ。それにその娘さんも自分を想つてゐると確信してゐるやうですから。」

「いゝえ、それがその茅野さんの御考違ひで、娘の方も今では手紙を差上た事などを後悔して居ますし、再々アパアトの附近で待伏してゐらつしやるので、どんな目に逢はされるかとびくびくして居りますのです。」

若い女の身で、遠く異郷に在る心の寂しさから、つい求愛の青年に心を動かされたが、それは

全く一時の迷ひで、今は茅野の追跡を如何して逃れようかと苦心してゐるばかりだと云ふのであつた。萬一自分の言葉を信じないなら、當の本人にあはせるから、確めてくれと、支配人は確信をもつて斷言した。

晝食の用意の整つた事を知らせる鉦の音に驚いて、喫茶店の支配人が辭去すると、柘植は高樹に報告して置かなければならないと思ひながら、先刻の彼の態度を忘れ兼ねた。自分に直接かゝはりの無い事には少しの同情も持たない人間に、何を話す必要があるものかと反抗する心に負けてしまつた。どうせ食卓でいつしよになるのだが、その時も先方から口をきいて來る迄は何も言ふまいと思ひ、友達の部屋の扉をノックしずに食堂へ入つた。主婦とその妹と、グレイ夫妻と、ペエジとパイパアが、冷酷な感じのする薄い肉片の盛られた皿にむかつてゐた。高樹の姿は見えず、たつた今何處かへ出て行つたと、アドルフがさゝやいた。

食事の間中、ペエジは一人で喋つた。今朝パイパアと二人で見て來た被害地點の慘狀を極度に誇張して話した。いかにツエペリンの爆彈が強力無慙であるか、それは石でも鐵でも防ぐ事が出來ない、まして況や人間の如きは人間が虫けらを踏つぶすよりも手輕に、一度に數十人數百人が

骨も残さずけし飛んでしまふであらう、それは戰場に於てなら爲方が無いが、何の抵抗力も無い都市の住民を襲ひ、婦人小兒を殺戮するに至ては人道上許して置けない、しかも一度味を占めたツエペリンは二度三度來襲するに違ひ無く、二度目は最初よりも破壞力を加へ、三度目は二度目よりも更に大仕掛になり、遂にはロンドンを全滅するやうな事にならないとも云へない、全英國民の立つ可き時は今だ、自分はこれから直に役所へ行つて、募兵係に督促し、一日も早く士官に任命されて國家の危急を救ふつもりであると、肉刀の柄で卓を叩いて論じた。

グレイ夫人は昨夜の恐怖を再現して、食物も咽喉を通らないといつて食卓を離れてしまつたが、外の者は又ひとしきり、獨乙の非人道的行爲を、ツエペリンの暴行を非難攻撃した。いつもは止宿人達と口をきく事を好まない主婦も釣込まれて、共々に獨乙を膺懲しなければならないといひ張つた。

「時にあの二階の白耳義の御客が見えないやうだが、何處かへ引越しでもしたのですか。」

その主婦にむかつて、突然グレイが質問した。言葉つきは柔かだつたが、底に含む針を感じて、座にゐるものは緊張した。

「いゝえ引越しなんぞなさるものですか。ロンドンにも倦きたから二三日旅行すると云つて、あ

れは一昨々日でしたかしら、御出かけになつたのですよ。もう一兩日したら歸つていらつしやるのでせう。」

主婦は相手の質問に深い意味のある事は感じないで、無雜作に答へた。

「ふうむ、ロンドンにも倦きた？　何といふしあはせな人だらう。自分の國は滅茶々々にやられてゐるのに、ロンドンの隅々迄享樂し、それにも退屈して旅に出て、ツェペリンの襲擊も知らないのだから……」

「えゝほんとに幸運な方ですわ。」

主婦は未だグレイの言葉に惡意を感じないで、寧ろ其の自由に旅行を享樂する客のある事を誇るやうに相槌をうつた。

「たがあの人、ほんとに歸つて來るかしら。」

横あひから、ペエジが明白にからかひ面できいた。

「何故ですか。歸つて來るに違ひ無いぢやありませんか。四五日の旅行で、御部屋にはちやんと荷物も御預りしてあるんです。」

流石に主婦も自分と彼との關係をからかはれてゐるのだと感づいて、顏をあかくし、聲を高く

して答へた。

「しかしですね、留守中にロンドンが爆彈の御見舞を受けたと知つたら、もう英吉利なんかいやになりはしないでせうか。何故かといへば、彼の人は自分の國の自耳義が敵に攻め込まれたので、いやになつて逃げて來たのでせう。自分の國でさへそれなんだから、他所の國へ爆彈が降るとしたら、とても辛抱出來ない筈ではないでせうか。」

ペエジは相手に反應があつたと見ると、益々調子に乘つて冷かし度なつてゐた。

「失禮ですけれど御言葉が過ぎやあしませんでせうか。彼の方は紳士なのです。」

「紳士？　勿論ですとも。」

山高かぶつてステツキ持てば

ジョンもチヤアリイも立派な紳士

葉卷くはへてタクシイに乘れば

ジョンもチヤアリイも立派な紳士

ペエジはいきなり立上ると剽輕な顏つきで、床板を踵とつまさきでことこと踏鳴らして踊つた。

食事の終つた人々は一齊に笑ひ出したが、中でも腹をふたつに折つてげらげら笑つて笑ひ止まな

いのは主婦の妹だつた。その妹を叱責しながら、主婦は奮然と立つて去つた。
ロンドンを見舞つた爆彈は、市街と市民の生命に加へた慘害よりも大きく市民の心に衝擊を與へた。それは手近いところにも、いろいろの形となつてあらはれた。下宿の人達が今日迄密かに疑惑を抱き、かげ口をきいてゐたヘイドンに對する態度は、忽ち此の儘には放つて置けないといふ處迄のぼり詰めた。萬一彼が旅に出たまゝ歸つて來ないとすれば、最早疑の餘地は無いが、それではむざむざ逃がしてしまふ事になるし、さりとてはつきりした證據をつかんではゐないのだから、狼狽てゝ訴へ出るわけにも行かない。どうかしなければならないのだが、どうすればいゝのか、誰も彼もいらいらし、その不快と無念と心配が、事毎に主婦への反感となつてあらはれて來た。
茅野が何時迄も時機を待つてゐる辛抱を失ひ、喫茶店の娘達のアパアトへ押かけて行つたのも、爆彈の衝動がせき心にさせたと見ても間違ひはないであらう。人生を、戲曲制作と同じく自分の意志の儘に組立てようとする彼の性格は、敵機襲來といふ素晴らしくはなばなしい外的條件を利用して、一擧に娘の心をしつかりつかまうと企てたに違ひ無い。
栢植は人々のたゞならぬ昂奮に取圍まれながら、極めて冷々たる自分を物足りなく思つた。廣

い都會の四五の地點に爆彈が投下され、多少の災害を與へたとはいへ、ロンドンは殆んど何の變りも無く日常の活動を營んでゐる。恐らくツェペリンは今後頻々と襲來するであらうが、何時何處を襲ふか豫測の出來ない危險に對して、あわてたところで爲方が無い。グレイ夫人は神經をたかぶらせ、半病人になり、虫の起つた幼兒のやうにきゝわけなく泣いてゐるが、自分は頭の上をツェペリンの飛過る音響も、夕立に濡れる程の動搖しか感じなかつた。夫人は前夜來の自分の態度を、豪膽だ沈着だと英雄をほめる言葉でほめ立てるが、それは自分にとつては寧ろなさけない事なのだと、柘植は自己厭惡の心持さへ持つてゐた。自分には何時の間にか、死んでも左程惜くない命だとする虛無の心が根深く巣を喰つてゐるのではないか。自分の將來には、幼い日に描いたやうな大きな夢は無い。自分の天賦の才能は、力は、大概見透しがついてしまつた。色彩の豐かな人生は、靑い鳥よりも見つかるまいと多寡をくゝる根性が、自分を無感動にしたのだと考へた。

いつ迄も同じ憎惡と憤慨の言葉を繰返して止まない人達に愛想をつかして、柘植は食堂を出た。

今日は休息するのだと云ひながら、籠居の無爲に堪兼ねて、高樹は平生通り圖書館へ行つたのだらうが、自分も日課は休み度ないと考へ、讀みかけの本や筆記帖を抱へて出た。讀書室は常と變らず靜かに勉強する人でいつぱいだつたが、高樹の姿は何處にも見えなかつた。

夕方下宿へ歸ると、廊下から階段へかゝる足音をきゝつけた高樹が、異常に緊張した顏つきで追かけて來た。
「君々、僕愈々伊太利へ行く事にしたよ。」
眞劍な樣子で、眼鏡の中の細い眼をきらきらさせた。
「昨夜も考へたのだが、先刻一人で薄暗い部屋の椅子に横になつてゐたら、もうロンドンなんかには一時たりともゐられない氣持になつてしまつた。僕は直ぐに領事館に行つて旅券の手續をして來た。」
さつきの不機嫌とはうつて變つて、旅券を見せ、それに貼附けた一時間寫眞の出來榮を語る高樹は、遠足の前の日の子供の喜びを湛へておちつかなかつた。
「まだあぶないぜ。少し氣が早過ぎやあしないかしら。」
柘植は吃驚して友達の顏を見た。額の廣い蒼白の面上に、躊躇してゐた事を決行する勇氣と歡喜が、あぶらのやうに光つてゐた。
「あぶない？　あぶないのはロンドンも同じだよ。いつたん警戒線を突破したツエペリンは、あく迄もロンドン威嚇の計畫を進めるに違ひ無いよ。奴等がどんどん來るやうになれば、此處にゐ

るのも非常に危險だからねえ。運命に惠まれない人間は死を免れない。元來僕は英吉利には來る氣が無かつたのだが、これが歐羅巴の唯一の安全地帶だと思つて信賴して來たんだ。それが旣に安全で無いとすれば、何もこんな薄暗い都會の不愉快な下宿なんかに逼塞してゐる事はないと思ふんだ。第一僕はこんなところで死ぬのはいやだよ。萬一死ぬ運命ならば、巴里かフロレンスで死ぬ方がいゝぢやあないか。」

「しかし君の健康は未だ回復してゐやあしないのだぜ。表面には何の徵候もないかもしれないが、此間の咯血の時に、醫者は相當重大に考へたやうだつたよ。」

「それも考へ樣さ。こゝに不愉快に暮してゐて、間も無く霧の深い季節になると、かへつて健康には惡いだらう。しかし、そんな事よりも何よりも、僕は一度伊太利へ行き度い。伊太利を見ないうちに、病氣や爆彈で死ぬのはいやだ。大事に大事をとつたところで、今夜にもツェペリンが二度目の攻擊にやつて來て、運惡く爆彈の下にゐればそれ迄だ。又此處に愚圖々々してゐたつて、僕の體が頑健になるわけもない。兎に角何等かの危險に脅かされてゐるのは事實なんだから、一刻も早く目的地へ急ぐのが肝心だといふ結論に到達したのさ。僕にとつてロンドンは、最初から何の魅力も持つてゐなかつたんだからなあ。」

自分を引留る語氣をもらし、何時迄も煤烟と濃霧のロンドンに平氣でゐるらしい友達を憐れみ、さげすみ、非難するやうに、高樹の言葉は強く響いた。

素早く黄昏の忍び込んで來た食堂には、もう人々が暗い顔を寄集め、今夜も亦ツェペリンが來るのではないかと脅え切つてゐたが、伊太利旅行を決行する肚をきめた高樹は、俄かに英吉利嫌の度を強め、鈍感な連中といつしよに、あぢきない下宿の飯を喰ふ氣はしないと云つて、柘植を戸外へ誘ふのであつた。帽子をかぶり杖を手にして扉口へゆく二人を見つけて、グレイが背後から聲をかけた。

「あなた方は何處へ行くつもりなんです。今晩も亦ツェペリンが來やあしないだらうかと、ロンドン中が騒いでゐるといふのに。」

わざわざ食堂から出て來て、若い者の血氣を咎めるやうに云ふのだつた。

「一寸散歩して、直ぐに歸つて來ます。大丈夫ですよ、昨晩の今日で、こつちの飛行隊も防備を嚴重にしてゐますから、ツェペリンだつて用心して來やあしません。」

「それがいけない。こつちは來ないと思つても、すべて裏をかくのが戰爭です。それに家の中ならまだまだ安心だけれど、往來は一番危險ですよ。およしなさい、およしなさい。」

君達は未だ思慮が足りない、年長者のいふことはきくものだといひたさうに、おだやかに、しかし力強く引留るのであつた。
「御注意はありがたう。なるべく早く歸りますから許して下さい。吾々は吾々の運命を信じてゐるのです。」
柘植は素早く切抜けて、高樹の後を追つた。
「柘植さん、みんなに心配させるものではありませんよ。私の妻もどんなに心配するか……」
追ひ縋つて聲を浴せかけるのといつしよに、鋭い泣聲で、夫人が彼の名を呼ぶのを聞いたが、拍車をあてられたやうに柘植は背後の扉をしめて往來にかけ出した。
昨日と同じ雲の多い空が、何か不安な豫感を伴つて頭の上に暗く覆ひかぶさつてゐたが、煩はしい下宿をぬけて來た氣安さと、安料理とはいひながらおもひの儘の食事の出來る樂みが、二人の靴の音を鋪道にこゝろよく響かせた。
顏馴染の伊太利料理屋で、藁に包まれた葡萄酒の瓶をまん中に、二人は心置きなく話した。今朝喫茶店の支配人が來て話した事については、高樹は例の通り、
「馬鹿な。」

と先づ吐き出すやうにいつてから、

「茅野といふ男は實にをかしいよ。あれは現實と芝居との區別がつかなくなつて、自分勝手な役廻をきめ、自分は必ず王樣の役をとらないでは承知しない人間なんだからね。」

鋭く批評して、それつきり其問題は打切つてしまつた。

久しく口にしなかつたゝめ、僅かの酒で眞赤になり、唇を病的に滑かにして、高樹は近く旅立つ伊太利について、光り輝く計畫と想像を、何時迄も語りあきたなかつた。巴里で伊太利入國の手續を濟ませ、聳え立つアルプスの山懷をくゞり、初秋の廣野を汽車はジェノワへ走るであらう、いかに伊太利の空は靑く、ロンドンの薄暗い霧の中で眠つてゐた感覺を呼びさましてくれるであらうか、しかしジェノワやピイサに長く滯在してはゐられない、それは食前のアペリティフに等しく、一呼吸したら花の都フイレンツェへ急がなければならぬ、神や聖母や使徒や天使が到る所の街角に生きてゐる此の古き都こそ、自分の一生を生甲斐あるものにしてくれるであらう、自分は先づアルノの河岸に宿を求める、窓をあければ綠の丘が見え、寺院の塔が望まれるであらう、この美しい環境に包まれて、文藝復興期の美術鑑賞に精根を盡し、やがて秋深い羅馬に休息の場所を見出すつもりである——と眼底に歡喜の涙を湛へた。

「君、僕は僕の未來を信じるよ。僕はこの感激を思索と學問に融合させる事に一生を捧げるつもりなんだ。」

嗚咽するのではないかと思はれる程の感動が、高樹を若々しく、健康に見せた。

その晩はツェペリンが來るといふ恐怖で市中は愈々暗く、人通りも早く絕えた。宿へ歸るとみんなは食堂に居殘つて、不安をまぎらしてゐる樣子だつたが、愚にもつかない會話のとりことなる事を惧れて、二人は足音を忍んで各々の部屋へ引上げた。

爆彈騷ぎが促進したのか、豫て募兵に應じながら、なかなか埒のあかなかつたペエジも、次の日の晝食の頃、何の前觸も無くカアキイ色の軍帽軍服を身に着け、卷ゲエトルでおもてから歸つて來た。

「あはあ、吾等の勇士あらはれたり。」

昨夜も亦衣服も變へず、一睡もしなかつた夫人のヒステリイに惱み、片時も傍を離れる事の出來ない退屈に閉口し切つてゐるグレイは、氣分の轉換の爲にはしやいで、

「どうです皆さん、此の人には軍服が實によく似合ふぢやありませんか。なんだか急に丈が高くなり、肩幅も廣くなつたやうだ。」

抱擁するやうな形で歡迎の辭を述る(のべ)と、他の人々も口々に、お目出度う、お目出度うと祝福したが、それにも拘らず一座の空氣は決して愉快なものでは無かつた。ペエジは漸く願望がかなつて、かねがね憧れてゐた軍服を着る事が出來たのだが、それは彼が自慢氣に豫告した士官の制服では無く、普通の兵卒の、體に合はないだぶだぶのものであつた。それが皆の心持をつまづかせ、ペエジ自身にも人の眼に背中を向け度い氣まづさを與へたのである。彼は、すつかりてれて、眼の置所に困じてゐた。

そこに、ふかしたてのじやが薯の入つた大皿を兩手で捧げて、宿の主婦があらはれた。

「まあ、誰かと思つたら……」

仰山に胸を張り、反身になつて驚いて見せ、

「ほんとに結構でしたわねえ、あなたがうちへ見えた時から、一日も早く軍服を着せてあげ度いと思つてゐたのですよ。その爲に遙々オオストラリアから歸つていらつしやつたといふのですし、あなたのやうな若く、強く、勇氣のある方が軍人になつてこそ、英吉利も安全といふものですからね。」

早口に喋りながら、執拗く(しつこく)ペエジの立姿を、頭のてつぺんから足のさき迄見上げ見下して、

「ですが私にはわかりませんわ。何時の間にか士官の制服が變つたのでせうか、何か戰略上の意味でもあつて……」

無敎養の強さを露骨に見せた意地の惡い質問が、恰度食卓へ着いた人々を吃驚させた。それは誰しもつつこんで聞きたゞし度いと思ひながら、きゝ兼てゐた事だつた。

「あゝ、それは私も不思議に思つてゐた事なのです。」

更にみんなを驚かす殘酷な言葉が、パイパアの口をついて出た。先刻から一言も口をきかず、人々のかげにかくれてペエジを見詰てゐたのが、主婦のはげしい詰問にせきたてられ、思ひ決した聲を震はせたのであつた。

「あゝ、これは士官の制服ではありませんよ。」

ペエジは主婦の肚の底にわだかまる邪惡な意地にたじろいでゐたところへ、更に横合から伏勢があらはれたので、かへつて度胸を定めた樣子で、自分で自分の腕を見、胸を見て答へた。

「御承知の通り、相當の學校敎育を受けた者は、當然士官になれるのですが、役所の方が愚圖々々してゐて、何時迄たつても埒があかない、もう少し待つてくれもう少し待つてくれで、しびれを切らしてしまつたもんだから、雜兵でもなんでもいゝから早く取つてくれと強談判に及んで、

やうやく此のていたらくなんですよ。」
誰も首肯しないいひわけに、主婦は直ぐさま追及した。
「それではあんまり馬鹿々々しいぢやありませんか。默つて待つてゐれば士官になれるものを、何も好んで兵隊になる事はないでせう。」
「いや、もともと資格はあるんだから、いつ迄も兵卒でゐるわけはないのですよ。いつたん軍籍に入つてしまへば、直に拔擢してくれますとも。」
「でも、その拔擢の機會の來る前に戰地へやられたら大變ぢやありませんか。」
「戰地へ行く前には充分教練を受る期間があるから、そんな事にはなりつこないけれど、しかし萬一事態が差迫つて、直ぐさま出かける事になれば、それも爲方がありませんよ。祖國の爲に盡すには、士官だつて兵卒だつて變りはありません。私は甘んじて一兵卒として忠義を盡しませう。」
次第に語氣を強く、一死國に報ゆる赤誠を見てくれといふ態度を示した。
「よし、よし、その覺悟があれば立派なものだ。だが吾々は、軍部が君の才能を認めて重用する日の速かならんことを祈りますよ。」

雙方がつのめだちさうな形勢を見てとつて、グレイは年長者の義務と考へたのであらう、柔和な笑顏を右と左に送つた。
「ですけれど、私共ではあなたが士官になるといふ御話だつたので、特別の御便利もはかつて來たのですから……」
主婦はなほとつちめないでは置かない氣勢を見せたが、グレイは一言にそれをうち消した。
「商賣の話なら食後の事にして下さい。」
いろいろの氣まづい感情が交錯して食卓の上を流れ、今日も亦變らぬ冷肉が一層あぢきなく、大きい皿の中に薄く乏しく切られて、各々の前に分配されるのであつた。
食事が濟むとさつさと立上つて、いつたん廊下へ出た主婦が戻つて來て、扉口からペエジに聲をかけた。
「一寸御話したい事があるのですが……」
ペエジは不快な顏つきでうなづき、澁々立上つて主婦の後について行つた。扉がしまると同時に、外の廊下で甲高く詰責する主婦の聲が聞えた。何を云つてゐるのか、一語々々は聽取れなかつたが、誰しも宿料の滯りを催促してゐるのだと想像した。ふだんから、主婦の素行をからかつ

たり、いやがらせをいひ度がるペエジに對して含むところの多いのが、平素の高言に似ず、だぶだぶの兵隊服を着て肩身狹く思つてゐるひけめに乘じ、嵩にかゝつてまくしたてるので、いひわけも出來ず、時々何かつぶやくやうなペエジの聲がまじるばかりだつた。

いつ迄たつても果しが無いので、グレイはきくに堪へないといふ表情で舌うちしながら仲裁に出て行つた。たけりたつ主婦をなだめてゐるのであらう、扉の外の聲が急に低くなつた。

しばらくすると、グレイがペエジの肩を叩きながら戻つて來た。

「かんにん、かんにん、あんなものを相手にして怒つたつて爲方が無い。」

ペエジは自分の立場の惡さに、怒るよりも悄氣る方だつたが、さういはれてみると、いかにも正しい者が邪しまな者に虐げられたやうな憤慨の態で、堅く唇を嚙み、兩腕をしつかり胸に組んで、兵隊靴で床をこつこつ鳴らしながら、肩を聳やかして立つてゐた。

面白くない芝居の大詰の幕の下りた時の空しい感じをいだいて、柘植は自室へ引上げた。あんまり事の多いのに疲れて、圖書館へ行く氣も起らず、讀みかけの小說本を手に、椅子の背に全身を托して、ぼんやり時間を消した。

扉をノツクする音に驚いて立上ると、グレイが吹出しさうな顏つきで入つて來た。

「あゝあ、えらい事になりましたよ。」

空椅子にぐつたり腰を落し、大袈裟に額の汗を拭いた。

「あなたが引上げてから、ペエジの奴パイパア嬢にアッパア・カットを喰ひましたよ。私もかねてをかしいとは思つてゐたが、あの剽軽者め、士官になるといふのを餌にして、まんまと野鴨を羽交締にしてゐたんです。勿論女の方もどういふ過去を持つてゐるか、神様の外御存じないのですがね。しかし兎に角士官だ士官だと前觸は賑かだつたから、いざ出來上つた軍人がだぶだぶ服ののどた靴では、いかにも見た目がよくないし、期待はづれが大きいから、反動は物凄かつた。何故自分を欺いたかと云つて詰ると、ペエジは先刻の辯解を繰返して、直きに士官に取立てられるのだと云つてゐたが、今更誰が信じるものか、なんだかんだと爭つてゐるうちに、あの女もペエジに小遣錢位は立替てゐるので、そんな事までさらけ出し、なだめるやつをいきなり横面を引ぱたく、さんざんのていたらくで、たつた今私がパイパアを三階迄送つて行つたところです。」

グレイは更に追加された一幕を、寧ろ面白さうに話したが、急に眞面目な顔つきで、

「ペエジの御難はそればかりではないのです。かみさんはかみさんで、宿料の滯りがとれなくなりはしまいかと心配して、猛烈な催促をし、若し明日迄に拂はなければ荷物全部を引渡して出て

行けといふので、あの男も立つ瀬がありません。もともと本人が惡いには惡いので、あんな無教育の男が士官になれる筈は無いのです。しかし兵士となつて戰場へ行けば、生きて歸れるかどうかわからない身の上だから、精々今の中に人生を享樂させてやり度いと思ひますよ。その勇士が荷物を差押へられて追出されては、可哀さう過るぢやありませんか。何とかして救つてやり度いと思ふのですが……」

持つて生れた世話好で、グレイは自分自身柘植に宿料を用達て貰つてゐる身で、何とか心配してやり度い、自分の懷に少しでもあればわけはないのだが、それが御承知の通りの次第で、逼迫しきつてゐるので、今更賴める義理ではないが、愈々火災保險の方の仕事も確定して來週には必ず働きはじめ、相當の收入にもありつく筈だから、前のとあはせて返濟する約束で、ペエジ救濟の金を一時貸してくれといふのであつた。

天成の樂天家で、窮迫してゐながら未だに金錢を大ざつぱに取扱ふグレイの心持に、かなり不安は感じながら、柘植は心弱く紙入を開いて、自分自身の處置に歎息しつゝ相手の掌の上に札を載せた。

あくる朝、柘植は扉を叩く音で起された。高樹は寢坊だし、そんなに早く訪れる筈の人はないのだが、誰だらうと我耳を疑つてゐると、又こつこつ叩く。それは起きろ起きろと威勢よく催促する音ではなく、他人の耳を憚かるやうなひそやかな音だつた。寢衣のまゝ顏を出してみると、ひどく眞劍な顏をしてグレイが立つてゐた。彼は隣の小室の扉を指差してから、その指を唇に押あてゝ、聲を出してはいけないといふ合圖をし、足音を忍んで入つて來た。

「あいつが戻つて來ましたよ、あいつが。」

隣室との境の壁を指頭でそつと突いて、さゝやいた。

昨夜もグレイ夫人はツェペリンの飛來を怖れて寢床に行き度がらず、萬一爆彈を見舞はれた時醜體を示さないやうにと着物も換へずに食堂に居殘つた。外の止宿人は夫々の室に引上げても、空を飛ぶ敵機に少しでも遠い階下の方が安全だといつて、三階の自室へ行くのをいやがるのだつた。グレイも殆んどもてあまし、なだめすかしてみるのだが、直ぐに泣出してしまつて手がつけられない。やつとのおもひで抱起し、階段を上る途中で、突然玄關の重い扉の開く音を聞いた。ふりかへつてみると、暗いあかりを浴びて、鞄をさげた大男が蹣跚として入つて來た。それを見るとグレイ夫人は、良人の胸に取縋つて呼吸が出來なくなつてしまつた。

「今晩は。」

酒臭い息を吐いて、後から通りぬけ、先に二階へ上つたのは、數日來行衞のわからなかつたヘイドンだつた。グレイは、殆んど失神した夫人をやうやく三階迄抱上げたが、夫人は自分の足の下に獨探がゐると云つて震へ上り、よつぴて眠らず、今朝は微熱と頭痛で全くの病人になつてしまつた。

「どうも實に弱つたが、あなたは彼の男の歸つて來たのに氣がつきませんでしたか。」

「ちつとも知りません。昨夜は熟睡して夢さへみませんでした。」

「それはしあはせだ、足音をきゝつけたとみえて、間もなくかみさんが忍んで行きましたよ。」

グレイは低く聲を忍ばせて、嘲るやうに笑つた。

「いや、かうしてはゐられない。親愛なるグレイ夫人は、五分間と一人ではゐられない。すつかり精神が顚倒してしまつてね。」

彼は又唇に人さし指を持つて行つて、足音を忍ばせながら三階へ上つて行つた。

朝の食卓は又してもそぐはない氣分に占領されてしまつた。ペエジも、パイパアも、ボイスも、印度の學生も、怪しむべき三階の男の歸來を知つてゐて、殊更に聲をひそめ、重大事件に關與し

てゐる自分達だといふ緊張を見せ合つた。恐らくグレイは、今朝早く柘植の室の扉を叩いたやうに、ほかの皆の室にも觸れて廻つたのであらう。誰もその人の噂をしながら、ヘイドンと呼ぶ者は無く、獨探々々といふのであつた。微熱があり、頭痛がするといふグレイ夫人も、一人で三階の室に殘つてゐるのは氣味が惡いので、良人に扶けられて降りて來た。

「柘植さん、私達はどうなるのでせう。この家に住んでゐて危險な事は無いでせうか。」

いきなり胸の中へ飛込んで行きさうな夫人の樣子に、一同の眼は忽ち鋭く光つた。

「何も危險な事はありませんよ。よしんば彼の男が獨探だからといつて、爆彈をポケットに入れてゐるわけでもないし、此の下宿を爆破したところで、軍事上の手柄にもなりますまいから。」

柘植は人々の視線を避ける爲にも、夫人の臆病を輕蔑する調子を出し度かつた。

「それにしても何といふづうづうしい奴だらう。爆彈騷ぎの晩を中心にして身をかくし、騷ぎが濟むとのこのこ出て來て、知らん面をしてゐやあがる。確にあいつは獨探なんだが、殘念ながら證據が無い。若も證據があがつたら、僕はあいつを叩き斬つてやる。」

調練に出かける爲に、だぶだぶの兵隊服を着、どた靴をはいたペエジが、無腰の腰から劍を拔く眞似をして、洋劍術の身構をして見せた。

そこへ主婦があらはれたので、一同は急に不自然な沈默に歸つて食卓に着いた。

「時に、二階の御客が歸つて來たさうですね。」

しばらくは口を愼んでみたものゝ、直に我慢が出來なくなつて、ペエジは主婦に話かけた。

「えゝ、昨晩遲くお歸になつたやうでした。疲れてゐらつしやるのでせう、今朝は未だ御目ざめにならないやうです。」

「へえ、まだあなたも逢はないのですか。」

惡意の露骨な質問に主婦は忽ち顏色を變へた。

「夜遲く御歸になつたのですもの、御目にかゝれないのがあたりまへではないでせうか。」

「でも大事な御客だから……」

「何ですつて。えゝえゝあの方は私共の大切な御客さまです。宿料もきちんきちんと拂つて下さる大切な御客さまです。その御客さまに對してあなたは何をいふ權利があるのです。あなたみたいな……」

「何をいふのだ。吾々の前でさういふ口のきゝ方はつゝしんで貰ひ度い。」

グレイが横手から聲をはげまして叱責した。

「私は正直に申上るだけです。私こそ外の御客の陰口をきく方とは同席致度く御座いません。」
いひ切ると、泣出しさうな表情でペエジとグレイを睨みつけ、あらあらしく席を立つて行つてしまつた。
「あゝあ、爆弾騒ぎ以來、ロンドン人は兎角昂奮したがつて困る。」
グレイは持前の諧謔を取戻して、隣席の夫人の肩を叩きながら笑つた。
主婦はゐなくなつても、薄野呂の妹がゐるので、悪口をいふ者もなかつたが、食事が濟んでその妹もゐなくなると、又ヘイドンの噂が、前よりもはげしく取替はされた。
「君はどう思ふ。矢張あいつは臭いと思ふがね。」
柘植は食堂を出て、はじめて眞劍になつて高樹に訊いてみた。
「勿論怪しいさ。僕が英吉利人なら夙に警察へ訴へてやる。」
「英吉利人でなくたつていゝぢやあないか。交戰國にゐて、敵國のスパイをつかまへるなんて素晴らしい事だぜ。」
「どうでもいゝや、僕はもう伊太利へ行つてしまふから。」
高樹は全く冷淡に、何の興味もなく、寧ろうるさいといふ語氣で答へた。柘植にはわけもなく腹

が立つて、それつきり何もいはず、自分の室へ引上げた。何といふ利己主義だ。あの男を最初に獨探と睨んだのは自分に違ひ無いが、それを肯定し、一番憤慨し、どうしても尻尾をつかまへてやらうとたくらみ、露骨なさぐりを入れて相手を不快がらせ迄したのは誰だ、それが近く伊太利へ行くからといつて、俄に自分には關係の無い事だから勝手にしろといふのは我儘勝手過る、よし、自分はあく迄も彼の獨探の身柄を警察へ引渡してやるぞ——栢植は高樹への面あてにも、斷然獨探捕縛の功名をあらはしてやらうと決心した。

だが、其の手段は? 彼はその日圖書館に行つても、その事で頭がいつぱいで、本なんか讀む氣にはならなかつた。自分で警察へ出かけて行くのはまづい、萬一ねらひのはづれた場合に、自分が全責任を負ふのは馬鹿々々しい、それは卑怯では無い、この戰時に少しでも怪しい奴は一應調べるのがあたりまへだ——栢植は自分で問ひ、自分で答へて段々態度をきめて行つた。結局彼は警察宛に投書するのが一番利口なやり口だと考へた。晝の食事にも宿へは歸らず、投書の文案をノオト・ブックに書いては消し、書いては消し、異邦人の身で獨探を捕へるロマンスの空想に醉つた。それは全ロンドン中の評判になるであらう、彼こそは獨探の首魁で大都爆擊の手引をした張本人に違ひ無い、彼の室から重要な密書が發見され、それによつて敵の空軍の本據がわかり

一掃される、あの大男はめかくしをされ、英吉利の華麗な服裝をした兵の銃口の的となり、畑の中に倒れるのか、この出來事は日本にも傳はつて、父も母も喜ぶであらうと、空想は何處迄も伸びて行くのであつた。

ひとつの樂しさと、大事を決行する恐怖とで、身内にはげしい血を感じながら、柘植は日の暮に下宿へ歸つた。今晩手紙を認めて投函すれば、明日か明後日は捕縛されるであらう、さうなつた曉は、流石の高樹も驚き、利己主義を恥るに違ひ無いと思ふと愉快で堪らなかつた。

今晩が彼の男の顏を見る最後かも知れないと思つたが、ヘイドンは夜の食卓にも出て來なかつた。主婦は今朝の事を根に持つて、一言も物をいはず、外の者もその氣分に拘泥して、多く口をきかなかつた。肉の皿がかたづき、干からびた果物と珈琲が出ると、主婦は俄にあらたまつて、一同に呼びかけた。

「一寸承り度いのですが、どなたか今朝、警察へいらつしやつた方はありませんでせうか。」

わざと何氣なく、寧ろふだんよりもやさしい聲をつくつてきいたが、一座はぎよつとして、互に相手の肚を探るやうに顏を見あはせた。

「どなたかいらつしやつた方はありませんですか。」

もう一度同じ事を繰返したが、誰も返事をする者は無かつた。すると、主婦は一寸のび上るやうにして、一番遠い席にゐた高樹にむかつてきいた。

「失禮ですけれど、あなた警察へいらつしやりはしませんか。」

「いきませんよ。」

高樹は憤に顔色を變へて、ぶつきら棒に答へた。

「柘植さんは。」

主婦は隣の席に聲を移した。

「決して。」

柘植は自分の聲の滑かに出ないのに苦しんだ。決して行きはしないと口では立派に答へたけれど、腹の中を見透されるおもひに悩んだ。警察には行かなかつたが、密告してやらうと決心してゐる自分だ。しかもその文案迄出來上つて、二階の自分の室の机の引出の中にあるではないか。いつたい誰が先んじて訴へ出たのかしら――その時柘植は高樹が決行したのではないかと思つた。口ではつれない事を云つたが、間も無くロンドンを去るといふ強味で、行きがけの駄賃にやつたなと思つた。

主婦は陰險な目つきで、二人の日本人の顏色をうかゞつてゐた。
「失禮ですがもう一度伺ひます。どなたか今朝警察へ行つた方はありませんか。」
「一寸御待なさい。何の爲に警察へ行く必要があるのですか。」
グレイは堪り兼て、抗議するやうに反問した。
「さあ、あたくしも何の必要があつてそんな眞似をなさるのかわからないのですが、私共に獨探がゐると云つて警察へ密告した人があるのださうです。
つとめて冷靜を裝つてゐた主婦は、そこ迄行くともう我慢が出來なくなり、怒つた聲は震へ、愼みの無い高調子に急變した。
「獨探？　それは容易ならぬ事ではないか。」
グレイも語氣強く主婦にきゝかへした。
「さういふ事を密告した者があるとして、何故あなたは此の日本の紳士の名をさして、警察へ行つたかどうかをきくのです。失禮ではないか。無禮ではないか。
「いゝえ、別段その御二人を疑つてどうかういふのではありませんけれど……」
主婦はグレイの權幕に打たれ、うつかりした事をいつて言葉尻をつかまへられては困ると思つ

た樣子で、話を横にそらし、みんなの同情を求めるやうにいふのであつた。

「でも何といふ卑劣な人間がゐるのでせう。御氣の毒なのは彼の二階の白耳義のお客さまです。根も葉もない事を云はれ、その爲に警察へ連れて行かれました。あの方を獨探だなんて、何といふ出鱈目でせう。えゝ出鱈目ですとも。寃罪です。むじつの罪です。あの方が獨探か獨探でないか、あたくしがよく知つてゐます。」

一座はすつかり白けてしまつた。グレイの詰問に主婦の鋒先は鈍つたけれど、二人の日本人が疑をかけられてゐる事は明白なので、誰も彼もさぐりを入れる眼ざしで、じろじろ二人を見るのだつた。高樹は此の場の空氣に我慢が出來なくなり、

「行かう、馬鹿々々しい。」

と柘植を促して、さつさと食堂を出てしまつた。柘植は此の場合、敵に後を見せるやうなやり口は、一層相手の疑惑を深くするものだと考へて、腰をあげなかつた。

「はゝあ、それであの白耳義から來たといふ人はどうしました。」

ペエジはいかにもふざけたやうな顏つきで、主婦をいやがらせた。

「警察へ引張られて未だ歸されないのですか。」

「え丶未だ御歸になりません。それはあなた此の際かりにも獨探だなんていはれゝば、警察の方では何もわからずに重大に考へて、直ぐに戻してはくれませんわ。ほんとに御氣の毒な……」
「實に氣の毒だなあ、明日にも寃罪だといふ事がわかつて歸つて來たら、雪寃會を催して慰めるんですね。」
ペェジは、いかにも氣の毒だといふ表情を誇張して、つくり聲を出し、逆效果をねらつたが、もう彼の男は二度と歸つては來ないぞといふ肚は、はつきり讀みとる事が出來た。
主婦は忿懣のやり場がなく、惡意に取圍まれてゐるのを知つて、堅く口を閉ぢ、やがて妹を促して退出した。
「いつたい誰が警察へ行つたのだらう。」
ペェジは座長氣取で一同を見廻した。
「神樣が知つてゐらつしやる。」
そんな事はどうでもいゝぢやあないかといふやうに、グレイはすかりと切つて落し、心のうつろになつたやうな隣の妻をかへりみて、
「さあ、今夜はあの獨探がゐないから、安心して眠られるだらう。」

といたはるやうにいふのだつた。
「でも許されて歸つて來たら、あの人はみんなに疑をかけて仇をしやあしないでせうか。」
「なあに許されて歸る事なんかありはしない。あの男は地獄へ行く、吾々は天國へ行く、永久に御目にかゝる事はないのさ。」
爆彈騷ぎ以來毎夜眠れないで病人になり切つてしまつた夫人の、不自然に硬直した顏を、グレイはあはれみ、いとほしむやうに見守つた。
一方では、ペエジもパイパアもボイスも印度の學生も、めいめいの思ふがまゝの意見を述べて盡きなかつた。ほんとに此の宿の止宿人が密告したのなら、それは誰だらうといふのが第一の問題だつた。或は彼の行動が怪しいので、此の宿の外の誰かゞ密告したのではないだらうか、それとも警察自身が彼に目をつけ、密告者があつたといふのを口實にして引張つて行つたのではあるまいか、いつ迄話あつてもきりのない事だつた。そのくせその連中は、矢張高樹と柘植の仕事だと睨んでゐた。何故ならば、此の二人の日本人こそ、一番最初にヘイドンの擧動に不審をいだいた者で、且又たつた今宿の主婦から名ざしで訊問された者であつたから。
柘植は嫌疑の的になつてゐる自分を、人々の眼の前にさらして置くのがいやだつた。いくら打

消しても打消せない自分の立場を、誰よりもよく知つてゐた。あの男を獨探だと、みんなに信じさせた發頭人は自分に違ひ無い。或は自分がゐないでも、誰かゞ同じ疑を起したゞらうとは思ふけれど、その場合果して事を此處迄追ひつめたかどうかは疑問だ。自分はほんとに彼の男を獨探だと思つてゐるばかりでなく、若しも今朝警察へ行つたといふ密告者が、もう一日躊躇してゐたら、たしかに自分が進んで其の役目を引受けた筈なのだ。疑はれる資格は充分あると自身でも思ふのだが、矢張嫌疑をうけるのは不愉快だつた。何時迄もヘイドンを廻つて盡きない話の輪をぬけて、彼は高樹の室の扉を叩いた。

高樹は机にむかつて本を讀んでゐたが、未練なくそれを捨てゝ、非常に待兼てゐたやうに喜んだ。

「やつたね、君。」

その言葉が何を意味するか、柘植には直ぐわかつた。

「僕ではないよ。僕は君かと思つてゐたんだが。」

「どうして。」

「どうしてつて、君程條件のいゝ人間はないぢやあないか。數日中に巴里へ行つてしまふのだか

ら、外の獨探の復讎を受る心配もないし、萬々一間違ひだつたとしても、あとの面倒がないんだもの。」
「馬鹿な。あれが君、間違ひだなんて事は絶對にないよ。しかし、ほんとに君ぢやあないのか。」
高樹は眼鏡の底で細い眼をきらきらさせた。
「僕ではない。しかし僕も正に密告しようとは思つてゐたのだ。」
彼はその朝の高樹の冷淡な態度に義憤を發し、斷然やつてやらうと決心した事を話した。
「ふうん、君でないとすると誰だらうなあ。」
ペエジかグレイかと名前をあげてみたが、あのおつちよこちよいや、おひとよしが、其處迄突込んで行く勇氣を持つてゐようとは考へられなかつた。
「矢張これは君以外にその人はないよ。」
高樹は柘植の胸の邊を指さして笑つた。
その次の日の朝も、止宿人達は顏を合せると直ぐに、ヘイドンが戻つて來ないのは、彼の身柄がはつきりした爲で、愈々自分達の眼に狂ひの無い事が證據立てられたのだと云つて喜んだ。誰も彼も、獨探を憎む愛國心と同じ程度で、下宿の主婦に對していゝ氣味だと思ふ心が強かつた。

あんな獨探をかばひ、あんな獨探と深い關係を結んだのは誰だと、罵り度い心持でいっぱいだった。

食事が濟むと、グレイは今日こそ例の火災保險の話がきまるのだと云つて、いそいそして出て行つた。いつもの通り圖書館へ行く高樹と柘植は、誘ひあつて出かけるところだつた。柘植が先に、高樹が後で、扉を引くと、外からも出あひがしらに扉を押して入つて來た男がある。ヘイドンだ。ぎよつとして立止る二人の眼の前に、脊の高い、肩幅の廣い大男が近々と迫つて立つた。顎の張つた赤ら顏には憎惡の色が深刻にあらはれ、今にも大きな拳骨が面上に飛んで來る氣勢を感じた。知らん面をして、擦れちがつて出て行かうとすると、後から、

「待て。」

と震へを帶びた強い聲が呼止めた。

「君達はいゝことをしてくれたねえ。」

ヘイドンは兩の拳を胸の邊に握りしめて、鬪爭の意志を示した。

「何が？　吾々は何もしやあしない。」

柘植は心の底に何か恥るものを感じながら、平氣を裝つて答へた。

「何もしない？　警察へ行つたのは誰だ。君達のしわざだつて事はわかつてゐる。」
「吾々は警察なんかへ足踏みした事は絕對にない。」
「きつとか。」
「ない。」
柘植は相手の氣勢の弛んだのを見ると、高樹を促してさつさと戸外へ出てしまつた。追ひかけて來るかと思つたが、來なかつた。ふりかへつて見ると、一人を呑んで二人を吐出した玄關の扉は堅くしまつてゐた。
「どうしたんだ、あいつは。證據不充分で許されたのかしら。」
高樹は柘植に追ひつくと、怒つた樣子で云つた。
「矢張、獨探ではなかつたのかな。」
柘植は、若しもさうならば氣の毒な事だつたと悔む心が動いた。たとへ自分が警察へ行つた本人ではなくても、疑をかけた第一の人間として彼の前に謝罪しなければならないと思つた。
「なあに、そんな事があるものか。英吉利の警察なんて手ぬるいんだ。あいつにうまくごまかされたのさ。」

高樹はあくまでも彼は獨探である、いつかは證據があがつてつかまるに違ひ無いといひ張つた。

獨探の嫌疑で警察へ引張られたヘイドンは歸つて來たが、二階の部屋に閉籠つたきりで、外の者といつしよになる食堂などには決して顏を出さなかつた。朝晩の食事は宿の主婦が大きな錫の盆にのせて、自分で運んだ。

主婦は、彼が無罪で歸つて來たので、すつかり滿足し、いゝ着物を身につけ、化粧を濃くし、いそいそと階段を上り下りして、止宿人の反感を愈々つのらせた。どうしてあんな擧動不審の人間を手輕に釋放したのかと、額を集めて噂しあつたが、進んでどうするといふ手段も無かつた。

この事件はこれでおしまひと思はれたが、一人の犧牲者を出した。その卷添をくつたのは塊太利人の下僕アドルフで、敵國の者ではあるが未だ大人になりかけの若者ではあるし、戰前から此地にゐた事が證明され、何の咎も無く働いてゐたのが、突然差紙が來て、敵國人收容所に入れられる事になつた。

アドルフは其の身の不運を、一番古顏で、おまけに獨乙語で話の出來る爲、誰よりも馴染の深かつた高樹のところへ訴へに來た。

「あの獨探が許されて、この善良な薄野呂がつれて行かれるなんて、こんな馬鹿々々しい事があるものか。」

誰かゞ密告したおかげで、意外の結果を招いてしまつたのを殘念がつた。

「可哀さうだからいくらか出しあつてやらうぢやあないか。」

高樹と柘植は相談して、心ばかりの錢をアドルフの掌に握らせた。

「タンキユウ、タンキユウ。」

廻らない舌で幾度も感謝し、涙と水鼻といつしよにすゝりあげたが、たつたひとつ鞄を手に持つたゞけで、みんなに別を告げて行つた。氣のいゝ若者であつたが、獨探事件の犧牲者として、自由と職を失つた。

高樹の立つ日も迫つた。

「だんだん霧の深くなる頃で、ロンドンの一番ロンドンらしい時だが、愈々御別れとなると多少名殘が惜まれるだらう。」

「馬鹿いつちやあいけない、僕は霧や雨は大嫌だ。伊太利の青空の下こそ、僕の健康を完全に回復してくれるだらう。皮膚も血液も、こんな國ではくろずみ、停滯するばかりだ。」

すつかり荷造も終へた高樹は、行先の旅の樂しさに胸を躍らせてゐるのだつた。

「ロンドンもひどく嫌はれたものだなあ。しかし、これが最後といふ晩には盛大な送別會をしよう。僕が追かけて行つて、巴里か羅馬で逢ふ日があるかもしれないが、兎に角當分の御別れだ。茅野君も呼んで大に喋らう。」

「それはありがたい。僕は久しぶりで日本料理が喰ひたいな。」

「それから、いつか御馳走になりつぱなしだから、グレイ夫婦も列席させてやらう。火災保險の仕事にありついた御祝も兼て。」

「よからう、あれ程僕達を理解してくれた英吉利人はないからね。」

「理解といふよりも買ひかぶられた方だぜ。」

「殊に君はね。」

高樹は細い眼を一層細くしてからかつた。

「しかし氣をつけないといけないぜ。」

「何を。」

柘植にははつきりわかつてゐるのだが、わざと反問した。

「あの夫人さ。」

「大丈夫だよ。」

冗談のやうにいひながら、意外に眞面目な二人の視線がかちあつて、二人ともてれて眼をそらした。

その日高樹は買物や、銀行の用事をすませて會場の日本料理屋へ定刻に行く約束だつた。グレイも新しい仕事に不馴なので、少し遅くなるかもしれないから、その積りで待つてゐてくれといひ殘して行つた。

夕方、栢植はグレイ夫人を誘つて出た。日の暮のあわたゞしくなつた九月末のロンドンは、つめたい薄霧にしめつぽく、街路樹の落葉の步道に踏まれて朽ちてゆく微かな香が漂つて、時々鼻先を撫でるやうに感じられた。夫人は爆彈騷ぎ以來全く外出しなかつた。殊に日が暮れると飛行船の襲來が刻々迫つて來る感じに脅かされ、心の安靜を失つてしまふ位だつたから、高樹の送別會に誘つても、多分出席しないだらうと思つてゐたのが、意外にも非常な喜びで、日本人同志の親しい會合に自分達夫婦を招いてくれる親切を繰返して感謝した。黑いきものゝ胸に雪白のレエスのついた外出着、黑い毛皮を肩にかけ、黑い帽子を斜にかぶり、いつもよりも濃く白粉を刷い

て、珍しく元氣で步いた。踵の高い靴は敷石の上にかつかつ響き、時には落葉を踏んで滑る事もあつた。さういふ時、柘植は夫人のぐにやぐにやした體を支へなければならなかつた。それは全く運動や勞働の鍛錬にあつた事の無い、寧ろ病的な程柔軟な肉體だつた。

「タクシイでも呼びませうか。」

「いゝえ、步く方が好きです。」

夫人は自分の方から體を寄せかけるやうにして來た。英吉利人には珍しくのろい步調が、一層同伴者を步きにくゝした。

「高樹さんは愈々明日おたちになるのださうですが、あなたは何時迄もロンドンにゐて下さるのでせうね。」

「いゝえ私も長くはゐない積りです。年とつた父が此の頃健康もすぐれないさうで、なるべく早く歸つて來いといつて來ました。多分私も近いうちに、高樹君と同じ道を通つて歸る事になるでせう。」

「まあ近いうちですつて。近いうちとは何時の事です。」

「いつときめてはゐませんけれど。」

「いけません、あなた迄行つてしまつては。」
恰度車馬の通行のはげしい四辻を横切る時で、栢植は夫人の腕をとつて向側へ渡つた。
「みんな行つてしまつては、あたし一人ぼつちになつてしまふぢやありませんか。」
向側へ渡つても、夫人は腋の下へ栢植の手を挾みつけて離さず、夜霧の中で顔を傾けて見せた。體溫のあたゝかさを含んで、香料が強く迫つた。栢植は振はなすやうに腕を自由にし、二人の間に間隔を置いた。
「あたしは何時かきいて頂からうと思つてゐたのですが、私の生涯のうちで、あなた方のやうな方に御目にかゝつた事は曾てありませんでした。私は何故自分も日本人に生れなかつたかを恨んでゐます。出來る事ならば、あなた方の御國、日本へついて行き度いと願つてゐます。」
直ぐに又からだを寄せて來て、いかに二人の日本人と知合つた事が、自分の教養を高め、思考を深める機縁となつたか、僅に此の夏以來の事ではあるが、自分は人生の歡びを沁々感じた、ぜいたくなホテル住居をしてゐた頃よりも、貧しい下宿住居の今の方が寧ろ心樂しいのは、偏にその新しい友達の賜であると、異常に熱烈な調子で話すのであつた。
「そのあなた方がゐらつしやらなくなつては、私の世界には何もなくなつてしまひます。」

夫人の執拗な辯舌は柘植を苛々させた。我儘な、駄々兒のやうな相手に對して、不當な評價をされてゐるゐたゝまれなさは、いくら說明してもわからないに違ひない。彼は嘲るやうに答へた。

「吾々がゐなくなつても、あなたは一人ぽつちになんかなりはしないぢやありませんか。あなたを深く愛してゐるグレイ氏がゐるではありませんか。」

夫人は不意にたちどまつて、柘植の顏を見守つた。手應へがあつたなと思はせたが、全然反對だつた。

「そのグレイといふ人を、私は見損なつてゐたのです。あの人はあなた方も自負にして下さる通り、恐らく善良な人に違ひないでせう。けれども、競馬と骨牌と玉突と賽ころと、そしてお金があるならばホテルの食事と上等の葉卷とレヴュウの外に何も無い人です。シェクスピアがこの國の偉い劇作家だといふ事は人に聞いて知つてゐるでせうが、自分では一頁も讀んだ事はありますまい。バイロン、キイツ、シェレイの名も知つてゐるでせう。けれども競馬の馬のやうに悉しくその特質を知つてはゐません。あなた方に御目にかゝつてから、不幸にして私はグレイがいかにも平俗な人間だといふ事を、つくづく感じるやうになつてしまひました。」

夫人の語氣は鋭く、いきゞれのする樣子で、殆んど平生のその人とは思はれなかつた。柘植は

さういふ昂奮狀態にある相手をもてあまし、話題をかへる事に努めた。

「もうそれ程遠くはありませんけれど、疲れはしませんか。あなたはあのツェペリンの晩以來、往來を步いた事はないのだから。」

「いゝえ、何ともありません。私はあなたが側にゐて下さるなら、決して爆彈を恐れません。」

夫人の體のあたゝかみがはつきりと傳はる程寄添つて來て、首に卷いた毛皮の柔かい毛が柘植の顏を撫でた。

「柘植さん、あなたは宗敎を信じないといふのでしたね。さうすると、吾々が死んでから天國で逢ふといふ事はあり得ない事なのでせうか。」

何を下らない事をと思ひながら、柘植は返事に當惑した。下らない口頭の質問ではなくて、夫人の眞意のある所を直感したからだ。でも、はつきりと答へた。

「私には天國なんか信じられません。」

突然、夫人の體は前のめりに倒れかゝり、あやふく柘植の支へた手につかまつて踏み止まつたが、その儘風船のしぼむやうに、步道の上に膝をついてしまつた。

「どうしました。」

兩手で顏を覆つたまゝ、一言の答もなかつた。繁華の町を少し離れた場所なので、人通も少なく、鎧戶の下りた家が並んでゐて、人目にはつかなかつた。柘植は手のつけやうもなく、次第に深くなつた夜霧の中につつ伏してゐる女を見下してゐた。かねて夫人の心の中にひそんでゐる邪念には感づいてゐたが、それが今夜は露骨に、積極的に迫つて來て、逃場に迷ふ位置に追込まれて來たゞけ、うしろめたさに惱まされた。夫人の柔軟な肉體のあたゝかさや感觸や、香料の匂はたつた今しがたの記憶にある。夜の路上に失神した女を眼前にして、息苦しい慾情が身內をかけ廻つた。これが若し美しい人だつたら——柘植は忌々しさに敷石を靴の尖で蹴つた。

ぽかつぽかつと高く足音をさせて、大兵の巡査が霧を破つてあらはれた。二三間行き過ぎてから、戾つて來て、

「どうしたのですか。」

と叮重に訊いた。

「腦貧血を起したらしいのです。」

言葉の訛ではじめて異國人だと知つて、巡査は俄に態度を改め、うさんくさゝうに柘植の顏をのぞき込んだ。

「そして、あなたは此の婦人のおつれですか。」
「さうです。つい此の先の横丁の日本料理屋へ行く途中なのですが……」
巡査はそれを信じない様子で、いきなり夫人の肩に手をかけて抱起さうとした。
「大丈夫です。何ともありません。うつちやつといて下さい。」
夫人はうるさゝうに巡査の手を振拂つたが、矢張氣力はなく、大きな手で扶け起された。
「あゝ、突然めまひがして、足がいふ事をきかなくなつてしまつたのです。すみません。」
巡査にではなく、柘植にあやまつて、半巾（ハンケチ）で額の冷汗を拭いた。巡査はまだ合點のゆかない様子で立去らなかつたが、夫人は柘植を促して、元氣らしく歩き出した。それつきり何も口をきかず、巡査の眼を背中に感じながら、水底のやうな霧の中を、細い横丁へ曲つた。
日本料理屋の一室には、夙（とう）に高樹とグレイが待ちあぐんでゐた。
「どうしたんだ、君達は遲いし、茅野はやつて來ないし、心配しちやつた。」
辛抱氣のない高樹は顏を見ると直ぐに不平をいつた。
「僕の方は、夫人が途中で氣分が惡くなつたものだから遲刻してしまつたのだが、茅野君も來てゐないのか。」

「をかしいな、來ないなら來ないといつて來ればいゝんだ。」

鉾先が茅野の方に向いたので、柘植はわづらはしい釋明をしないで濟んだ。

「いゝえ大した事はないの。あんまり久しぶりでおもてに出たものだから、めまひがして柘植さんを驚かしちやつたんです。」

夫人は存外晴々とした顏つきで、良人の心配を押さへ、室内を飾る浮世繪や、京人形や、せともものや、蒔繪の硯を物珍しさうに見て廻つた。

いつまで待つても茅野はやつて來ないので、たうとう來ないものにきめて食卓に着いた。さしみ、吸物、酢の物と順々に膳に並び、夫妻は一々說明をきゝながら、はじめての手に箸を持つて丹念に味つた。料理屋の方で氣を利かした積りのフオオクやスプウンは拒んで、夫人は杉箸の美しさと、その觸覺の柔かさに感服し、漆器や陶器の纖細な趣味に驚嘆した。酒も味はひ、どうかと思つたさしみさへ、醬油の深い味と共に讃美した。グレイもかねて舌の贅澤をして來た男だけに、夫人程のつぼにはまつたほめ言葉は持合せてゐなかつたが、一般の英吉利人のやうに頭から輕蔑してかゝる風は無く、鰹節のだしの味までもおろそかにはしないで、高樹と柘植を滿足させた。

「あゝ、日本といふ國は、何といふ創意に富み、微妙な感覺と、洗練された趣味を持つ國なので

せう。」
「驚くべきものだ。全く驚くべきものだ。」
夫婦は心からたんのうして、食事が終つても日本にかゝはる話題は盡ず、長々とおちついてしまつたが、どういふきつかけからか、又しても下宿の二階に巣をくつてゐるヘイドンの身の上に話は落ちて行つた。あれ程、誰の眼にも怪しいと映るのに、どうして簡單に許されたのだらう、警察ではどこ迄突込んで調べたのか、たつた一晩か二晩留置した丈で歸されたのは、證據不充分の爲なのか、全く身のあかりが立つたのか、何時も繰返してゐる事だが、どうしても怪しいといふのが此の場の一同の意見だつた。
「それにしても、誰が警察へ密告したのでせう。」
夫人は考へ深さうに一人々々の顏を見廻した。
「あの男は吾々二人だと思つてゐるやうです。警察から歸されて來た日に、偶然扉口で出つくはした時、まさにぐわあんとやられるところでした。」
栢植は自分の拳骨を、眼と眼の間に擬してうしろに反つて見せた。
「まあ、あなた方に對して……」

「えゝ、僕は全くあの男の一撃でひつくりかへつたと思ひましたね。それ程彼は復讐心に燃えてゐましたよ。」

「あぶないぢやありませんか。ですが、どうしてあなた方を密告者だと思つてゐるんでせう。あの男にしても、宿のおかみさんにしても。」

「それは爲方がありますまい。最初に怪しいと睨んだのは僕ですし、高樹君なんかわざと獨乙語で話しかけたりなんかするんですもの。」

「それだつて、あなた方は決して警察へなんかいらつしやりはしないのでせう。」

「決して。しかしあの宿の人達、今居る人でも、曾て居た人でも、彼の男を怪しいと思ふやうになつたのは、吾々の深い疑念を分けられたからなのです。吾々が其の疑を口に出しさへしなかつたら、誰も彼の男の行動に疑惑の眼を向けなかつたかもしれないのです。なぐられても爲方がないやうな氣がしますよ。」

「何をおつしやるのです。あなた方が密告もしないのに、したと疑はれて、手荒な復讐をされたらどうするのです。とりかへしがつかないではありませんか。そんな馬鹿々々しい事つてあるものぢやありませんわ。」

　夫人はヘイドンの殘忍性を帶びた顏貌を想ひ描いて身震ひした。
「ねえ、危ないぢやありませんか。あゝいふ男は何をするかしれませんわねえ。」
　良人の同感を求める夫人の顏は暗かつた。
「どうでせう、いつそ警察へ行つて、誰が密告者だか調べて來ては。それでなければ此の御二人では無いといふ證明書を貰つて來ては。」
　夫人の昂奮をなだめるやうにグレイは妻の肩に手を置いた。
「まあいゝ、まあいゝ、その密告者はわかつてゐるよ。」
「わかつてゐるのですつて。それは誰です。誰なのです。」
　一刻も早く二人の日本人の寃罪をはらさなければならないといふ意氣組で、夫人は良人に返事を迫つた。
「まあ、おちついて、おちついて。」
　グレイは高樹と栢植の方に向直つて、
「實は私です。此のグレイその人なんですよ。」
　間の惡さを微笑で覆ひかくし、夫人を納得させるつもりで、兩手をつかんで引寄せようとした。

「なんですつて。あなたですつて。あの密告者は。」

夫人は良人の手を邪慳に振切つて、大きく眼をみはり、良人の顏色で眞僞を確めようとしてゐるうちに、涙が白粉の頰に筋を引いてあふれて來た。

「それなのにあなたといふ人は、あの宿のおかみさんが、誰か警察へ行つた人は無いか、高樹さんか、柘植さんかと訊いた時に、何故自分だと云はなかつたのです。あなたのした事の爲に、此の方達は疑はれ、もしかすると彼の男に危害を加へられたかもしれないのぢやありませんか。何といふ卑怯、何といふ恥知らず……」

夫人の聲は激情に震へて續かなくなり、兩手で顏を覆ふと自分の膝の上につつ伏してはげしく歔欷(すすりなき)した。

誰も、一言もいふものはなかつた。すゝりあげる度に薄つぺらな耳朶(みゝたぶ)を飾る金の輪が、きらきら搖れた。

高樹は、その翌日ロンドンを立つた。落葉を追ひかけて秋風の白く流れる町を、たつた一人の見送の柘植と、タクシイに同乘して停車場へ向ふ途すがらも、彼の心は既に伊太利へ行つてしま

つてゐた。

「君も早くやつて來たまへ。うかうかしてゐるとあぶないぜ。」

何があぶないのか、相手のいたづらつこらしい笑顔で、栢植にもはつきりわかつた。

「大丈夫だよ。」

「何が大丈夫なものか。昨夜のけしきだつて隨分眼にあまるものがあつたぜ。」

それを心配するよりも、寧ろ無責任に面白がる程、旅へ出る喜びに醉つてゐた。

「それでは御機嫌よう。」

「さよなら。」

汽車は無表情に驛の構外へ滑り出した。高樹は窓の外の風をいとつて、直ぐに顏を引込めてしまつたが、栢植はもう一度友達の顏のあらはれる事を期待して、汽車の見えなくなる迄たつてゐた。病弱の體で、血を吐いて間もないのに、學問と藝術に全精神を打込んで、歐羅巴の古い都を訪れる喜びの外には何も感じないひたむきな熱情をいだいて行つた高樹を、ひどく悲壯なものに思つた。

下宿へ歸ると、茅野から高樹と栢植と連名の手紙が着いてゐた。折角の送別會だから、是非出

席するつもりでゐたところ、俄に加つた朝夕の寒さに風邪を引いたのか、突然發熱したので、たうとう約束を果さなかつた、惡く思つてくれるなと、寢床で書いたらしい走書だつた。もぎだうに人を乘せて行つてしまふ汽車の別れの後で、人なつかしく、栢植はその手紙を讀了ると直ぐに、郊外の茅野の宿へ見舞に行く氣になつた。市中とは違つて、靑空のゆたかな傾斜地に、日光のあふれる芝生にとり卷かれた小ぢんまりした家が並んでゐた。

おさげの頭に大きなリボンを結んだ小娘と、神經質らしいフオツクス・テリアが扉口に出迎へた。

茅野は寢床の中から手を出して握手を求めた。彼は心の感動を屢々さういふ形で表現した。

「又やられちやつた。」

發熱の爲か、ふだんから子供のやうに頰ぺたの紅いのが一層あかく、熟しはじめた果物のやうにつやゝかだつた。

「風邪か。」

「風邪だらうとは思ふのだが、咳も何も出ないで熱のあるところは少しあやしいんだ。」

既往に胸を患つた事があつて、いつ再發するかわからない體だつた。彼は自分で作つた溫度表

を見せて、高低の著しいのをさし示した。
「高樹君も今日たつたよ。」
「彼遂に目的を達したな。」
茅野は病人とは思へない朗な聲で笑つた。醫者が止めようが、友人がいさめようが、どうしても伊太利へ行くのだと宣言し、その外の一切の事に振向きもしず執拗に押通した性格を、稱讃すると同時にこゝろよくひやかし度かつたのだ。
柘植は茅野の枕もとに椅子を引寄せて、その後の出來事の數々を話した。ツェペリン襲來の夜茅野と別れてからの事、下宿を騷した獨探事件、高樹の送別會の事、そして最後に喫茶店の支配人がたづねて來た事もつゝみかくさなかつた。
「え、あの支配人が君のところへ行つたつて？　君に逢つてどうしようといふんだ。」
「君も僕にあの男と逢つて、君の戀愛が不眞面目でない事のあかしを立てゝくれといつたが、向ふでは僕から君へ意見をしてくれといふのさ。」
「意見だつて。失敬な事をいふ奴だな。」
茅野は又持前のよく響く聲で笑つた。

「それは向ふにして見れば無理は無いよ。君はあの晩又女の子達のアパアトメントに押かけて行つて一芝居打つたといふぢやあないか。」

栢植は冗談が冗談でなくなつて行く氣持で、茅野の輕擧を非難した。

「芝居はひどいよ。そんなつもりぢやあなかつたのだが……」

「そんなつもりではなかつたかもしれないが、好機逸すべからずといふ氣持はあつたらう。」

「それはあつた。」

茅野は枕に沈んでゐる頭を更にのけぞらして、愉快さうに笑つた。

「それで君は支配人になんといつてくれたんだ。」

「僕か。僕は茅野といふ男は自分で一人ぎめにきめてしまふ性質で、他人が意見をしたところで決してきゝわける男ではないから無駄だと答へたさ。」

「それはいけない、そんな事をいつては困るよ。それよりも、これは僕にとつて非常にいゝ機會なんだから、もう一度彼奴に逢つて、僕の心持をわからせて貰ひ度いな。」

「駄目だ。君の心持は僕にもわからないのだから。」

「冗談ぢやあない、本氣なんだぜ。場合によつたら彼の娘にも逢つて貰ひ度いな。支配人立會ひ

なら逢はせるに違ひないからね。」
「逢ふ必要は無いよ。あの娘も君の擧動をあやしんで、刄物ざんまいにでも及ばれはしないかと怖れてゐるさうだから。」
「支配人の奴そんな事を云つてるのか。馬鹿にしてやあがら。」
茅野は支配人を憎むよりも、娘の心が既に自分に傾いてゐる事を知らない迂濶さをあはれむものゝやうだつた。いかに自分がその娘を愛し、その娘も亦自分の熱情に動かされて、機會があれば雨手の中に飛込んで來る筈であると、茅野は自分の言葉に感激して、微熱のある顏をあかくし、涙ぐんで來るのであつた。
元來此の戯曲家の組立てた戀愛に同感を持たない柘植も、何處迄も自分のこしらへあげた氣持を追及して止まない熱心には、むげにしりぞけ難いものを感じた。柘植はたうとう彼ののぞむ儘に、もう一度支配人に逢ふ事を約束した。そして、いつ迄も引止る茅野に、あまり長居をして喋らせては、熱度が高くなるであらうとなだめて、ふり切つて別れた。
夜の食卓にヘイドンのゐないのは元よりだつたが、その日は珍しくグレイ夫妻の姿も見えなかつた。柘植にはその方が氣が樂で、忙しい日の後に休息日の來たやうな肩の輕さを思ふのであつ

たが、かねて夫妻と親しく、信頼され、尊敬され、最大級の言葉でほめたてられてゐる日本人に反感を持ち始めた人々は、何かからかつてやり度い心持で結ばれてゐた。

「柘植さん、グレイ氏と夫人はどうなさつたのでせう。あなたはきつと御存じでせう。」

と主婦が先づつくり笑を浮べて訊くのだつた。

「へえ、あなたも知らない。これは珍しい。昨夜も夫人といつしよに御出かけだつたぢやありませんか。」

ペエジが直ぐにその後につゞいて、主婦に媚るやうな目くばせまでした。

「昨夜はいつしよでした。しかし、今日の事は知りません。」

柘植は中腹(ちゆうつぱら)で、きつぱり答へた。誰の眼もあやしく光り、誰の口邊にも意地の惡い微笑がかげを見せてゐた。恰も昨夜の路上の出來事を、みんなが知つてゐるやうな不安で、柘植は不覺にも動悸の高まるのを感じた。食事が濟むと早速自室に引上て机に向つたが、何か頭腦を統一する事の出來ないものがあつた。

そこへグレイ夫妻が、たつた今おもてから歸つて來たばかりの外出着の儘で、自分達の部屋に行く前に立寄つた。

昨夜の禮をあらためて繰返し、晝間たつた高樹は今頃何處迄行つたらうか、もう海峽を越る船の中にゐるのであらうかと、本題に入る前の話を、夫人は綿々と續けるのであつたが、グレイはその途切れるのを待兼て、

「これはまあそれとして、栢植さん、あなたの御意見を伺ひ度くて、斯うして二人揃つてやつて來たのですが……」

妻の口を封じ、椅子といつしよに體を乘出した。

「例のあの獨探事件ですが、家內は警察へ密告したのが此の私だと昨晚はじめて知つてから、あなたや高樹さんに疑のかゝつたのが申譯無い、早くその疑を解く爲に、宿のかみさんかへイドンの前で、眞實の密告者が誰であるかを告白しろと云つてきかないのです。」

それは夫人の正義感から、獨探の嫌疑の晴れた以上は詫びなければならないといふのではなく、高樹や栢植に迷惑を及ぼす事を惧れ、當の本人である良人にはどんな事があつても止むを得ないから、いさぎよく名告つて出ろといふのだつた。

「これのいふのも尤もです。尤もだとは思ふけれど、さて私としても困りますからねえ。」

グレイは鼻の上に皺を寄せて、どうも弱つたといふ表情をして見せた。

「およしなさい、馬鹿々々しい。あんな奴の前に頭を下る事があるものか。」

柘植は寧ろ腹立たしく、吐出すやうに云つた。

「第一、あの男の嫌疑が果して晴れたかどうか、それが問題ぢやありませんか。」

「でも、この儘うつちやつて置くと、あの男はあなたに危害を加へはしないでせうか。」

夫人は良人に話を任せてはゐられなくなつて、横から割込んで來た。

「大丈夫ですよ。危害を加へるつもりなら、既に加へられた筈です。あの男だつて一日々々と冷靜になつて行くでせうから、今更何をするものですか。」

「でも、あゝいふ陰險な男は、人しれず機會をねらつてゐるかもしれませんもの。」

「若しもそれ程執念深く恨んでゐるとすれば、此の際グレイ氏が名告つて出るのこそ危險ではありませんか。」

「だつてグレイは爲方がありませんわ。自分で蒔いた種子なのですから……」

柘植は、無理に自分をかばひ、自分に親切を見せようとする夫人の態度にむつとして、相手の顏を凝視した。天性發育不全の、最初から若さを持つてゐなかつたやうに小皺の多い顏に、異常な艶と光を帶びた眼が、自分をまともに見返してゐた。何か、すさまじい、けがらはしさを感じ

て、柘植は一層不機嫌になつた。

その晩はそれで濟んだけれど、ツェペリン襲來以來の夫人のヒステリイは、獨探事件の密告者として他人に迷惑をかけ、知らん面をしてゐる良人に對して苛立ちはじめた。誰の前をも憚からず、つれなく當りちらしたり、いつしよに外出する事を拒んだり、理由もなく反抗したりする事が度重なつて來た。さういふ場面に行きあたる毎に、柘植は自分がグレイを惱ましてゐるやうな心苦しさに責められた。いつ頃からか、やがて來る結末だとは想像してゐたもの丶、斯う迄はつきりと、ぬきさしならないはめに陷らうとは思はなかつた。歐羅巴の小說に見るやうな人妻のあくどい情慾が、機會のある每に執拗に押迫つて來る。そこには良人をはゞかり、怖れる心は微塵も無く、良人を厭ひ、拒み、しりぞけ、侮蔑する態度が露骨だつた。我儘ではあるが敏感な夫人は、自分の此の頃の良人に對する態度を、他人の眼が如何見てゐるか知つてゐた。知つても何の躊躇もなく、却つて逆に出て、自分の態度を是認させようと努めた。同宿の者達にむかつて、良人がおひとよしで、働が無く、稼ぐ事は知らないで、浪費癖があり、賭事に凝つて自分の物も失くなした――といふやうなことを、非常に重大な悪德として數へ立てた。それでも聽手が夫人をなだめ、グレイの善良親切な事をいひ立てると、かへつて機嫌が惡くなつて、これでもかこれで

もかといふやうに、いふ可らざる事迄喋つてしまふのであつた。その脱線のはげしさに柘植は或日驚かされた。彼が、朝の食堂に出てゆくと、直ぐ後からボイスとパイパアが、手輕な化粧を濟ませた浮々した氣分で入つて來て、

「柘植さん、この間警察へ密告したの、あなた方では無かつたんですつてねえ。」

「あたし達も矢張あなた方のしわざだと睨んでゐたんですよ。御免なさい。」

二人は祕密の寶庫の鍵を握つたやうな、まだ知らない他の者に一歩先んじた得意さを見せて云ふのだつた。

「それは僕達ではありませんよ。ほんとは密告者なんか何處にもゐないのではないでせうか。警察自身が彼の男に疑をかけたんだけれど、表面は密告者があつたといつてばつを合せたのではないかと思ひますが。」

「駄目よ、そんな事いつたつて。あたし達知つてるのよ。」

「すつかりグレイ夫人に聞いちやつたわ。」

いたづらつ兒らしく笑つてゐる二人に對して、柘植は沈默を守れといふ合圖に、人差指を脣にあてゝ見せた。

その事があつてから、三日とはたゝなかつた。或晩グレイが何時になく昂奮した樣子で柘植の室を訪れた。

「はつはつは、たうとう私も此の家から放逐される事になりましたよ。」

酒氣を帯びてゐるのでは無いかと疑がはれる程あかくなつた顔に、かくし切れない怒氣が眉目を險しくし、聲も一調子高かつた。

「たつた今、かみさんが話し度い事があるから別室へ來てくれといふので、又少し宿料の支拂が遲れたから、それを愚圖々々いふのだらうと思つて行つてみると、どうでせう、いきなり此の家を出て行つてくれ、明日にも立退いてくれといふのです。」

さういふ侮辱を心外がつて、グレイは呼吸をはずませ、ふだんの柔和な微笑は眼尻にも口許にも見えなかつた。

「どうしたんです、それはあんまり亂暴ぢやありませんか。」

「どうしたも斯うしたもいはずに立退けといつたつて、おいそれと立退く馬鹿はないから、先づ其の理由をいへといふと、そのわけは云はない方が雙方の爲だらうといひます。そんな馬鹿な事はない、いやしくも紳士にむかつて理由なく侮辱に値する言葉を吐く事は許されないと詰問する

と、そんならいひ度はないがいひませう、私の家の大事なお客さまの身柄に無實の疑をかけ、警察へ密告するやうな人は一日たりとも置く事は出來ないといふのです。これには私も參つた。どうして彼の女が知つたか、不思議に思つたのですが、栢植さん、このおしやべりを誰がしたと思ひます。」

栢植の眼の前には、いたづらつ兒の笑を見せた二人の女の姿が浮んだが、若かするとグレイは自分に疑をかけてゐるのかもしれないと思つた。

「どうしてかみさんが知つたでせう。あの事は私と高樹君の外には誰も知らない筈だし、その一人は既に此の國を立去つて……」

「いゝえ、それがですよ、矢張家内の口からもれたのです。はつはつはつはつ。」

笑ふより外に爲方の無い立場を、グレイはやり切れながつた。主婦に立退の宣告を受けたグレイは、直ぐに夫人にその話をして、いつたい誰が喋つたのだらうといふと、流石に夫人も蒼くなつて泣出し、うつかり自分がボイスとパイパアに喋つたが、堅く口止をしたにも拘らず、二人は更にペエジにも話してしまつたから、恐らくあの口の輕い男が、何かの拍子にかみさんに喋つたのではないだらうかといふ返事だつた。

「たしかにペエジに違ひありません。」

グレイは、どいつもこいつも思慮の足りない爲方のない人間だといふおもひを籠めて、空虚な聲で笑つた。

「でも、いくら口の輕い男だつて、何の爲にそんな事を喋つたのでせう。」

「それはつい二三日前、私があの男を叱りつけてやつたのです。例のパイパアとの關係ですが、奴さんしきりに金をねだるものだから、パイパアもやりきれなくなつて、家内に相談を持かけて來る、年中いざこざが絶えないので、私が奴さんをたしなめてやりました。それが不平だつたのですね。あゝいふてあひといふものは、目をかけてやつても爲方がありませんよ。」

グレイの激も昂段々靜まつて來て、何事もあきらめる外は無いといふ心持が、ものいひにも深くあらはれて、聲もやうやく低くなつた。

「それで此の宿の方はどうなさるのです。」

「これは止むを得ないから、二三日中には立退かうと思ひます。今更此處にゐるわけにも行きませんからね。」

かうなつては、萬一ヘイドンと顏を合せるやうな場合の氣まづさ、宿の主婦との折合ひもつく

筈はなし、どうしても轉宿の外はないのであつた。

「ところで、又してもこんな事はいへた義理ではないのですが、さあ引越すとなると、こゝの宿料も綺麗にして行かなければならないので、此の前拜借のが未だその儘になつてゐるのに、重ねての御願は面目ない事だけれど、折角ありついた今度の仕事も、固定給でなく成功報酬なので、馴れないうちは一寸收入になり兼るやうなわけで、どうしてももう一度、これを最後に助けて頂かなければ、どうにも爲樣がないのです。なあに、それも長く拜借する必要はありません。火災保險の方の計畫も立てゝありますから、來週からは愈々昔の友人知己をたよつて成績を擧る見込も立ちました。決して間違ひはありませんよ。尤もあなたの方から見れば、信用出來ないといはれても爲方が無いのです。いつぞやペエジを救つてやる氣で拜借したのも、あの男がオオストラリアから送金して來る筈になつてゐるといふのを輕々しく信用して、つい引かゝつてしまつたのでした。あれも私が拜借したものなのだから、いづれいつしよにお返しする事にします。全く金の苦勞といふものは氣持のよくないものですなあ。」

結局グレイは二週間分の宿料を一時たてかへてくれといふのであつた。柘植にとつては、グレイ夫人のうるさゝが、寧ろ不氣味にさへ思はれて來たやさき、此の夫婦が立退いてくれるのは何

よりありがたかつたが、此の前貸した金が何時かへつて來るかわからないのに又貸してやるのは不安でもあり、懷勘定も苦しかつた。きりつめきりつめてやつてゆく生活だから、こゝでグレイの申出を承諾するのは、この冬の外套をつくる事を見合せ、ぼろ靴で我慢し、下宿以外のところで飲食する事を廢し、本を購ふ事を思ひ止まるのと同じ事だつた。それは迷惑千萬だが、グレイの立場を考へると、何とかしてやらなくてはならなかつた。彼が密告者だと知られた以上、この宿にゐたゝまれないのは當然過ぎる事だ。えゝい、爲方がない、まさか返さない事もあるまいから、追拂ひ賃として承知してやらう――柘植は咄嗟に心を決して、その申入を引受けた。グレイは心から感謝し、幾度も繰返して禮を述べ、間違ひなく返濟する事を誓ひ、その上に何時もの通り、この事丈は妻に知らせてくれるなと念を押した。

翌日、柘植は朝も晝もグレイ夫婦の姿を見なかつた。獨探事件の密告者がグレイだとわかり、宿の主婦から立退を強要された以上、その儘こゝで主婦と顏を合せ、その顏合せを他の者に見られるのもいやに違ひ無かつた。柘植にとつては、夫人の姿を見ない丈でも氣が輕くなり、グレイ夫妻がこの家を出て行つたら、下宿の居心地は樂になるだらうと思はれた。

ところが、其の日の午後、彼の室の扉を靜かに叩くものがあつた。內側から引くのと、外から

押すのといつしよになつて、倒れるやうに入つて來たのはグレイ夫人だつた。何か思ひ決してゐる様子に壓されて、柘植は安全な間隔を保たうと努めたが、夫人はそれを知りつゝ無視して、ふだんよりも濃く化粧した顏が近々と眼前に迫つて來た。

「柘植さん、私達はこの家を立退かなければならなくなりました。」

夫人の眼は異様に輝き、まばたきをしずに柘植の顏を直視するのであつた。年甲斐もなく濃く染めた唇が、濡色に光つて實際の距離よりも一層接近して見えた。

「それといふのもグレイの思慮が足りなく、輕率に警察なんかへ出かけたからいけないのです。私はあなたのゐらつしやる限りは、いつ迄もこの家にゐたいと願つてゐたのです。」

「それはグレイ氏が惡いのでは無くて、あなたがお喋の女どもに、聞かせないでもいゝ事を聞かせたのがいけないのです。」

柘植は年増女の厚顏に苛々して、叱責するやうに云つた。

「あなたも私を非難なさるのですか。」

夫人の眼には忽ち涙があふれ、聲を震はせて叫ぶやうな早口に變つた。

「私はたゞ正直に、ほんとの事を話した丈なのです。いつ迄もあなたを密告者だと思はせて、知

らない顏をしてゐる事が出來なかつたのです。私を咎めないで下さい。私を非難しないで下さい。私が惡かつたのなら、どうぞ許して下さい。私はあなたに逢へなければ一日も生きてゐたいとは思ひません。だから、この家を出て行くのはいやなのです。でも、出て行かなければならなくなりました。私達が此の家を去つても、一日に一度は逢つてやると誓つて下さい。私達の家へ來て下さるとも、何處か、あなたの好きな所で逢つて下さるとも、それは御隨意です。私はあなたに逢へない位なら死んでしまひます。」

きちがひのやうに泣聲で口說き立てながら、いきなり兩手を延ばして柘植の二の腕をつかんで引寄せようとした。驚いて振放さうとすると、吸ひつくやうに片手を柘植の首に廻して、眞紅な唇を接しようとあせつた。

柘植は相手のからだの何處をつかんだのか、力任せに持上ると、足をばたばたしてもがくのもかまはず、ぐにやぐにやして生溫かい女の體を、むしり捨てるやうにベツドの上に投出した。力があまつて、机の上の水瓶とコツプを床に落し、とくとくと水の流れ出るのを見た時、はげしい物音を不審に思つた宿の主婦が、扉をあけてのぞき込んだ。ベツドの上には裾のまくれあがつた姿でつつ伏したグレイ夫人が絕入るやうに身を揉んで嗚咽し、片々の靴は脫げて飛んで、高い踵

をそのまゝに室のまん中どころにころがつてゐた。

柘植は主婦の眼の中に、この光景が如何にうつつたかを、瞬間に感知したが、いひわけをする場合では無かつた。彼は亂れた髮を五本の指で掻き上げ、ネクタイを直すと、壁にかゝつてゐる帽子と外套を取り、出口を塞いで立つてゐる主婦を押のけて廊下へ出た。そのまゝ眞直に戸外へ出ると、いつから降出したのか冷い秋雨の顏にかゝるのを寧ろこゝろよく思ひながら、あてもなく歩き出した。

グレイ夫妻はあわたゞしく引越して行つた。引越先はあまり遠くない裏町のしもたやの二階で、今迄の下宿のよりももつと貧しい部屋だつた。

その引越の翌日、柘植は夫妻のしつつこい勸說に負けて、お茶によばれて行つた。同じ下宿にゐる間も、こつちからは一度もその部屋をたづねた事のない無性な柘植にとつて、この招待は一層迷惑な事だつた。つい二三日前のグレイ夫人との出來事以來、下宿の人達とも出來る丈顏を合せないやうにしてゐたが、主婦の眼の色には、明白に意地の惡い冷笑と、卑しい興味が輝いてゐた。ゴシツプ好のてあひの事だから、それからそれと話を大袈裟に語り傳へたに違ひ無い。若し

かすると、グレイの耳にも入つてゐるかもしれないのだ――と思ふと、あの時の忌々しい景色がまざまざと眼に浮ぶのである。とりみだした姿で、ベッドの上にうつ伏になつて泣いてゐる夫人、片々の靴は脱げて床の上にころがつてゐる、机や椅子は位置をみだし、水瓶の水は足下に流れ、自分は呼吸をはずませて立ちはだかつてゐる、誰が見てもたゞならず、怪しからぬ部屋の有様に相違ないのだ。どう疑はれても、いひのがれられない光景だつた。

それなのにグレイはいつに變らぬ態度で、新居の最初の客として柘植を迎ひに來た。行けば煩はしく、行きたくなかつたが、別段斷る理由も無いのに斷るのは、かへつてグレイの疑惑を増す事のやうにも思はれ、こつちにはうしろめたい事は無いのだと自分自身にいひきかせて、結局なりゆきに任せる考へになつた。それにしても、夫人のあのぐにやぐにやした肉體の感觸は、おしつけがましく今でも消え失せない。自制を失ひ、慾情の發作と同時に起る生理的現象そのものゝやうな淫卑な蛞蝓(なめくぢ)となつた夫人が、今日は果してどんな様子で自分を待つてゐるといふのか。柘植の足は重かつた。

「ははあ、賓客よ、いざこなたへ。」

扉を叩くと、待構へてゐたグレイは、古典劇中の人の身振で出迎へた。

「あなた、さういふ悪ふざけは柘植さん大嫌ひですつて。」

良人の背にかくれた小柄な夫人が、これもいつもと少しも違はない調子で、手を差出した。客を待つ心で、よき衣服をえらび、化粧に念を入れた事が直ぐに認められた。だが、強い握手と、生あたゝかい感觸が、忽ち不快な聯想に導くのだつた。

「さあ吾々の新しい城郭を見て下さい。これが客間であり、寝室であり、食堂であり、居間であり、時には又臺所でもあるのです。」

グレイは此の新居のみすぼらしさを嘆くよりも、妻にかくして柘植に負目をおつて敢行した引越のあかしを立てる事に一生懸命だつた。吾々はこれ程貧しい生活に落ちたのです、無理を願つて金を借りるのも止むを得ない事として同情して下さいといふのに等しいのだつた。

部屋の片隅には二人にひとつの寝所があり、鏡臺も衣裳棚も古ぼけた備つけのものばかりだつた。脇机ともいふべきちひさい卓の上に、茄子紺色の壺に白いカアネエションばかりをさし、それを圍んで三人の席がきまつた。

夫人が紅茶をいれると、グレイは自分が買つて來たのだといふ菓子を勸め、パンをすゝめた。しかし、柘植は三度の食事の外に、パンに牛酪をぬり、水芹を添へて喰ふ英吉利風のお茶うけを

好まなかつた。つい卓上に手が出ないので、夫妻はそれをしきりに氣にした。
「矢張柘植さんには酒精分(アルコホルぶん)がなくてはいけなかつた。」
「いゝえ、私は間食をしない習慣なのです。尤も英吉利人にとつては、五時のお茶は間食ではないかもしれませんが……」
「さうです。吾々にとつては三度の食事と同程度に必要缺く可らざるものです。だから、ついあなたの飲料の方に氣がつかない事になるんですね。どうもおちぶれると萬事につけて氣がきかなくなりますよ。」
グレイは妻をかへりみて苦笑した。
「ほんとに氣がきかないで爲様がありませんねえ。角の酒屋まで行つていらつしやいな。」
その事はグレイ一人の手落でゞもあるやうに、夫人もいふのだつた。
「さうだねえ、さうしようか。」
グレイは明かに當惑の色を見せたが、それが金錢の心配だといふ事を柘植は直感した。
「僕はいりませんよ、それ程の飲助ではないつもりです。」
グレイに出て行かれては又いやな場面に遭遇しさうな豫感があるので、柘植はあわてゝ打消し

た。

「でも、折角來て頂いて、何もおもてなしがなくては私どもの氣が濟みませんもの。」

夫人はさういひながら、素早く良人の方に命令の視線を送つた。グレイはあまり氣の進まない樣子だつたが、壁にかゝつてゐる帽子をとつて廊下へ出て、又思ひ切り惡く引かへし、

「柘植さんはウヰスキイでしたね。」

ときくのだつた。

「いゝえ麥酒の方が結構です。それも頂くのは僕だけでせうから一本で澤山です。」

ウヰスキイと麥酒の代價の相違が、いかに現在のグレイの懷に大きく響くかを、夫人は知らず、柘植は知つてゐた。

「わかつた、わかつた。」

安心したやうな笑顏を見せ、グレイは階段に鈍い足音をさせて去つた。殘つた二人はしばらく言葉も無く、柘植は自分に直射されてゐる視線を感じながら、さて自分の眼のやり場に弱つてゐた。

「柘植さん。」

今か今かとおそれてゐた聲が少し震へて來た。

「あなたは私を憎んでゐらつしやるのでせう。不埒な奴、いけない奴、畜生のやうな奴とさげすんでゐらつしやるのでせう。さうに違ひありませんわ。ですけれど、私はあなたに憎まれさげすまれては、此の世にゐたゝまれないのです。どうぞ私を許して下さい。私は馬鹿です。無智な、無教養な、自分で自分をどうする事も出事ないあはれな女なのです。どうぞ憎まず、さげすまず、私を導いて下さい。あなたが斯うしろといへば必ずそれを守ります。あなたのいけないといふ事は決して致しません。だから、これからも以前のやうに、へだてなくつきあつて下さい。そして、少なくとも毎日一度は私に逢ふ事を約束して下さい。あなたの寛容な心にお縋りして、自分の精神を清め度いのです。でなければ、私は生きてゐる事にのぞみがなくなつてしまつたのです。」

語尾が調子はづれになつたと思ふと、兩手で顔を覆つて咽び泣きはじめた。肱をついてゐる卓上の白いカアネエシヨンが、すゝりあげる度に微動するのを見ながら、柘植は何ともいひ兼て、いつ迄も無言だつた。又しても自分を當惑させ、悩ます場面におとしいれた相手――その相手の年とつた醜さに對して、堪へ難い憤を感じた。

「どうぞ私の願をきいて下さい。もう二度と失禮な事はしませんから、私を避け、拒み、しりぞける事丈はしないで下さい。私を助けて下さい。救つて下さい。教へて下さい。導いて下さい。」

何か耶蘇教的臭味を感じさせる歎願のことばや身振に辟易し、素早く此の場を立去るのが一番利口な道かと考へた。人妻との間違ひで、良人の銃口を胸に受けて死んだ外國の小說作家の事などが、混亂して頭に浮んだ。

そこへ、グレイが歸つて來た。

「お待遠さま。」

威勢よく入つて來たのが、目の前のけしきに驚いて、兩手に一本づゝ持つた麥酒瓶をその儘、呆然として立つてゐた。

「どうしたの、フロシイ。」

やうやく、妻の耳へ口を寄せてきくと、栢植に疑がかゝつてはならないといふやうに、夫人は淚で斑に濡れた顏をあげ、途切れ途切れにいひとくのであつた。

「私が栢植さんに無理な御願をしてゐたのです。いつ迄もいつ迄もこの國にゐて、毎日私達に逢つてやると約束して頂かうといふのです。それがどんなに御迷惑だか、どんなに無理な事であるか、私にもよくわかつてゐるのだけれど……」

「あゝその事か。それは私からも栢植さんに御願しなければならない。」

グレイは麥酒瓶を卓の上に置き、帽子をとつて妻の背後に引添つた。

「家内は全くあなたを尊敬してゐるのです。世なみも惡いには惡いけれど、私に意氣地が無く、滿足なくらしもさせられないので、昔の友達ともつきあはなくなり、今ではあなたの外に信賴する人も無いやうなわけで、平生も家内はいふのですが、柘植さんのやうなお友達が出來たと思へば、おちぶれた事も悲しくない、かへつてしあはせだつたと繰返してゐます。今度も私の輕率から、下宿を追出される事になつたのですが、これはあなたと同じ屋根の下にゐる幸福に別れるのはいやだといひ張りましてね、それではせめてあまり遠くない所に越さうといふので、この邊に家を探したのでした。私は讀書もしないし、高尙な趣味も無い、家内の好きな方面の事はまるつきりわからず、御承知の通りの骨牌と競馬なのだから……」

年齡の力で忽ち平素の自分を取り返し、諧謔をまじへる餘裕さへ見せ、どうか妻の孤獨をあはれみ、よき友達となつてくれと、グレイは懇々といふのである。柘植は全く閉口してしまつた。多分この善良なる良人は、妻の心の內の姦淫を怒つてゐるのだらうが、こつちはそれ以上にいやな立場なのだ。萬々一この夫人が若く、美しかつたなら、自分に今の態度が守りつゞけられるかどうか、恐らくは否定するより爲方の無い事に立至るに違ひ無いが、さりとて此の眼の前の夫人

との間を疑はれるのは、疑はれるだけでも侮辱であり、心外である。第一斯うまで膝詰でものをいはれては、何と答へる術も無いのだつた。

「はゝゝゝ何といふ事だ、吾々は栢植さんを御招きして置きながら、栢植さんを困らせてゐるのぢやあないか。かういふ話は男同志の方がいゝ。いづれ又私からお願する事にして、さあ一杯飲んで下さい。」

コツプをとつて栢植の前に置き、なみなみと滿たした。栢植はそれをぐつと飲んで、

「勝手ですけれど今日は歸らして下さい。奥さんは少し昂奮してゐらつしやるやうだから……」

立上ると、有無をいはさず手を差出して握手を求めた。グレイも大きくうなづいて、堅く握返した。

「では引止めますまい。いづれ明日御詫に伺ひます。」

又はげしくすゝりあげて泣く夫人のあらはな背中の肉の波打つのを見たが、栢植は一禮して夫妻の新居を辭した。

次の日、グレイは勤務先へ行く前に、栢植のところへ立寄つた。

「どうも此の家は閾が高くて來にくかつたが、昨日の事が氣にかゝるし、家内も是非行つて來い、

行かなければいけないといふものだから……」

この間アドルフがゐなくなつてからかはりに來た愛蘭土種の無口な女中が、折よくおもての石段を洗つてゐるところだつたので、それに口止めし、運よく主婦に見つからなかつたしあはせを、持前の柔味のある諧謔でいひあらはしてから、俄に眞面目になつて、聲を落した。

「扨て何からいつていゝか、私は言葉の持合せが乏しいので、うまく聽とつて貰へるかどうかわからないが、まあ辛抱して聞いて下さい。」

グレイがいふのは斯うだつた。夫妻が贅澤な生活に見放され、曾て想像もしなかつた貧しい下宿に落ちて來てから、生來健康の勝れない爲め、我儘いつぱいに育つた夫人は、まゝにならない其の日其の日をかこつてゐたところへ、おもひがけなく栢植と高樹を知り、はじめて逢つた日本人に對する好奇心が段々尊敬に變り、深く心を捉へてしまつた。

「家内の心持にしてみれば、同じ家に住み、食卓を共にし、散歩に連立ち、年中いつしよに暮せるなら、それが最大の幸福だといふのです。そちらにとつては御迷惑な話で、あなたの貴重な時間を奪ひ、勉強を妨げ、うるさく、しつつこく……」

どうも困つた我儘者ではありませんかと云ふやうに、グレイは鼻の頭に皺を刻んで笑つた。彼

には、駄々をこねる妻を憎む色は無く、その我儘をいとしがる程のゆとりがあつた。

「つまり、家内があなたにお願ひし、私がともども御願ひしようといふのは、汚ない私共の住居ですが、あなたの家の一室と思ひ、私がゐようとゐまいとおかまひなく遊びに來て頂き度いのです。家内は私とは違つて學問とか藝術とかいふ事に心をひかれる性質なのに、私はまるつきり其の方はわからないのだから、甚だ失禮ないひ方ですが、つまりあなたに家内の心の友達となつて頂き度いのです。どういふものでせう、柘植さん、承知しては下さらないでせうか。」

グレイは膝を乘出して、卽座に返事を迫るのだつた。

「それは困ります。第一僕は夫人が考へてゐるやうな値打のある人間ではありません。これといつてまとまつた學問はなし、世間の事も知りません。他人を敎へ導くといふ柄ではなく、自分自身をどうしていゝか迷つてゐる人間なのです。」

「いゝえそんな事はない。そんな事はないが、よしんばあなたのいふのが眞實だとしても、こつちでは高く評價してゐるのだから、默つてその儘にして置けばいゝぢやありませんか。お互に人間は、安く見られるよりも高く見られる方が得ですよ。これは冗談ですがね。」

柘植が愉快でない顏つきをしてゐるので、グレイは又柔和な笑を滿面に浮べて、弛緩した冗談

をいつた。

「そればかりではありません、私はあなた方にあまりに馴れ、近づき過ぎたとさへ考へてゐるのです。それがあなた方の爲にも、私の爲にも、決してよい事でないと思ふのです。」

柘植ははつきりといひ切れない事を、自分ではつきり感じて、この人の前で顏の赤くなるのを止め兼た。

「何も吾々と親しくして下さつて、それが吾々の爲にならないなんて事はありませんよ。」

「いゝえ、たしかによくないと思ひます。」

何故よくないのかといふ質問の來るのを惧れて、柘植の不快は一段と濃くなつた。何といふ煩はしい事件なのだ、女房に不義の心のきざしがあるのに、この男は何處迄もおひとよしの亭主の役目を果さうといふのか——苛々する胸の中を靜める爲に、彼は口を閉ぢてしまつた。

「柘植さん、私は何も彼も知つてゐるのですよ。」

グレイは手を差延ばして固くなつてゐる相手の肩を叩いた。

「昨晩、家内の口からきかされたのですが、大變失禮な事があつたさうで、何とも申譯ありません。本人も悔い、あやまり、わびる心持が強く、今後は決して間違つた事はしないから、せめて

一日に一度吾々の住居へ來て頂き度いと、それぱかりを願つてゐるのです。家內は、あなたが此の約束をして下さらないと、何をしでかすかわからないやうな精神狀態なので、あなたには徹頭徹尾御迷惑の事なのですが、家內をあはれと思ひ、吾々を助けると思つて、まげて御承知願ひ度いのです。私は私で度々金錢上の面倒をかけ、家內は家內で……」

グレイは不意に自身の感動で聲がふさがれ、言葉がつゞかなくなつてしまつた。栢植も重苦しい心持におさへつけられ、何をいふ氣もなくなつた。向ふが勝手に一人相撲をとり、言葉の出來ない事、國情の相違、あらゆるくひ違ひをかへつて高く買ひかぶり、勝手にうやまひ、勝手に尊敬し、勝手に思慕の情をもつて働きかけて來たのだが、その評價に値しない自分にとつてこれ以上の迷惑はない、それにも拘らず、更にこの先どうしようといふのだ、誰がおめおめいふ儘になるものか――と思ふと、あの小皺の多い、軍鷄の咽喉部のやうな皮膚の、年上の女の病的に執拗な慾情が、たまらなく不潔に想はれるのであつた。

やゝしばらくの沈默に堪へられなくなつて、グレイは相手の同情を求めるやうな吐息をつき、再びたづねて來る事を約束して、歸つた。

グレイは、次の日も、また次の日もやつて來た。

「どうしても、家内が行つて來いといふのです。あなたに機嫌を直して貰はなくてはすまない、若もこの儘嫌はれるやうな事になるのなら、死んでしまふなんて他愛のない事をいひましてね、私も實に弱つてゐるのですよ。」

鼻の上に澁い笑を刻んで、招かれない客のばつの悪さに同情を求めるのであつた。

夫人はグレイをあやまりに寄越しても甲斐がなく、柘植が遊びに來ないので、駄々をこね、苛々し、怒り易く泣き易く、食事も進んでは喰べないやうな有様で、正氣の沙汰とも思はれないが、本人は柘植が毎日遊びに來てくれゝば、すつかり心を入れかへて良人に對してよき妻となると云つてゐるから、是非氣持を直してくれ、若しも自分の留守中に妻に逢ふのがいやなら、自分が勤務先の歸りに誘ひに來てもいゝと、グレイはまるで仲人のやうに熱心に言葉を盡すのであつた。

柘植は自分の意志の強さをためし度い心持も充分あつたが、この氣の毒な良人の立場に對し、むげに拒絶するのも意地が悪る過るおもひがして、たうとう引ずられて行つてしまつた。

「あゝあ、やつとこさでうちの息子も御歸還だ。」

先づ冗談を先にして、グレイは自分達の住居の扉をあけた。

「おゝ、ほんとに。」

病人らしくナイト・ガウンを着て、椅子に埋もれたやうに沈んでゐた夫人は、立上ると手を差出した。眼のふちに不健康な隈を持ち、疲れ切つた皮膚には光澤がなく、年齢の皺のくろずんだ醜さが、柘植の厭惡の念を深くした。彼は差出された手を握らずに、帽子を膝に置いたまゝ、扉口に近い椅子にかけた。

「ほんとによく來て下さいました。でも、あなたは未だ私に對して不快におもつてゐらつしやるのですね。私を許しては下さらないのですね。それは無理もないとは思ひますけれど、私はほんとに惡かつたと悔てゐるのではありませんか。ですから、どうぞ……」

いぜんのやうに親しくしてくれと、又してもしつつこく同じ事を繰返してゐるうちに、例の通り顏面筋肉が痙攣し、眼には涙が光つて來た。

もうわかつた。いふ事はわかつてゐる。勝手に人を買ひかぶり、勝手に挑み、勝手になげき、勝手に悲み、勝手に駄々をこねてゐるのではないか。それにかゝりあつてゐた日には、きりがなく、どんな犧牲を拂はなければならなくなるかわかつたものではない。こんな奴にかゝりあつてたまるものか――と柘植は心の紐を堅く結んで、一言も物をいはなかつた。

「もうい丶、もうい丶、折角柘植さんを引張つて來たのに、さうしつつこくしてはいけないではないか。それこそ柘植さんの嫌ひな事だ。」

無理やり引張つて來た客に、その客の喜ばない事を強る妻の態度に辟易し、グレイは持前の諧謔でたしなめた。それは柘植さんの嫌ひな事だ――とは、豫々夫人が良人の惡ふざけを咎める時の言葉だつた。夫人は良人のその言葉と態度にむつとして、憎惡の視線を投げ、今にもヒステリィの發作が來さうな氣色を見せたので、柘植はもうこれ迄だといふやうに、ぶつきら棒に立上つた。

「いづれ又……」

長居は無用といふ心持を形に示して、さつさと室を出てしまつた。グレイは狼狽して追かけて來て、

「又してもあなたを惱まして申譯ありません。全くあれは平生の精神狀態ではないので……」

耳のうしろでさ丶やきながら、ともども階段を下り、その儘いつしよに往來へ出た。冷い夜風が落葉と共にかけ歩く歩道に高く響く靴の音で、柘植は自分も昂奮してゐる事を知つた。

「どうも弱つた。あ丶迄想ひこませるとは、あなたも罪な人だ。」

グレイは、まるで他人の家の出來事のやうに輕い口をきいて笑つたが、それは此の場合、眞面目くさつていふよりも相手の心を柔らげるよすがともならうかと察した心づかひに違ひなかつた。

それから又繰返して、妻の願ひはたゞ親しくつきあつてくれといふ丈の事だから、安心して自分達の住居へ來てくれ、それが落ぶれて心の寒い夫婦の者をいかに慰める事であるか、若し又この願ひをきゝ入れてくれない場合には、妻は益々手のつけられない女になり、自分は愈々苦しみ、手こずらなければならないだらう、そればかりではなく、あゝまでとりみだした有樣では、どんな短氣な眞似をするかもわからないから、自分達を救ふ心持で、自分達の希望をいれてくれといふのだつた。いつの間にか柘植の下宿の前迄來てしまつたが、結局柘植ははつきりした返事を與へる勇氣がなく、氣まづいまゝで別れた。

おひとよしのグレイは、その後も妻の命を受けて、度々誘ひに來るし、夫人は每日のやうに手紙を寄越して柘植を惱ました。いつもいつもきまり文句で、自分をあはれんでくれ、自分の心の中を汲みとつてくれ、一日に一度は逢つてくれと繰返した。それよりも、柘植が圖書館へ通ふ時刻を見はからつて、下宿の附近をうろうろしてゐる夫人の姿を見た時は、彼はその儘往來から引返して、終日家の中に籠居した。

「いつそ自分も巴里へ行つてしまはうかしら。」
異人種の動物的に執念深い慾情のひしひしと身に迫るのを感じ、自分を中心に何か不吉な事の起る豫感を消す事が出來なかつた。巴里へ着くと直ぐ、高樹が書いて寄越した其の地の風光が、忽ち輝しく想像されるのであつた。
郊外に病んでゐる茅野は、微熱がとりきれず、段々寒さに向ふ此の頃の、この國のしめつぽい空氣をひどく恐れてゐた。彼は彼で、かねて柘植に頼んで置いた例の喫茶店の支配人との面談を、早く取運んでくれ、もう逢つてくれたかと、再三催促して來るのであつた。柘植にしてみれば、相手は病人だといふ事に同情し、いつたんは約束したのであるが、役の惡さに氣が乘らず、ついその儘になつてゐたのだ。しかし、催促されてみると、今更いやだとも云へないので、或日喫茶店に支配人を訪問した。
「これはこれは、よくいらつしやいました。さあ、どうぞ、こちらへ。」
愛想よく迎へた支配人は、客のたてこまない時間だから、店さきの一卓で、商賣物の紅茶と菓子を運ばせた。
「先日は突然御宿へ伺ひまして、つまらない愚痴ばかり御耳に入れましたが、その後あの先生は

どうしてゐらつしやいます。」

明かに茅野を輕侮した態度が栢植を不快がらせたが、先方はそんな事には頓着なく、揉手をしながら、慇懃叮嚀を表面に見せる事を忘れなかつた。

「その先生が病氣でして、その爲かひどく氣を揉んで、是非あなたに御目にかゝつて來いと私を攻め立てるのです。あなたの方では私を通してあの男に、こちらの娘さんの事はあきらめろといふ御話だし、あつちはあつちで、あきらめるどころではなく、二人は堅くいひかはしてゐるのだから、その點あなたの諒解を得てくれといふのです。」

栢植は相手の腰の低さと反比例に、何をこの若僧がといひ度いものゝ潛んでゐるのを感じて、茅野の爲に盡してやり度い氣持があつた。

支配人の方では、こゝの娘もはじめは茅野の熱心な求愛に心を動かしはしたが、何分常規を逸した振舞に薄氣味惡くなり、今では全く輕はずみを後悔してゐるといふ。

「それでなければ私も、無理に憎まれ役は買つて出ませんので……」

あちらこちらにかたまつてひそめいてゐる日本人と異人と、それぞれの給仕の娘達が何事かと驚いて一齊に視線を集めた程、支配人は心地よさゝうに笑つたのである。その給仕の娘の中には、

今噂されてゐるひともまじつてゐた。蒼白い、輪郭の柔かい顔に、うるんだやうな大きな眼――それが心配さうに見てゐた。

「ところが茅野君の方では、決してそんな筈はない、それはあなたが二人の仲をさかうとする手段で、あの人は自分を信じてゐるから、直接逢つてきいてくれといふのです。」

「それは直接御話になるのも結構ですが、いつたい茅野さんといふ方は、本氣であの娘を細君になさらうとおつしやるのですか。」

「さうだと云つてゐます。茅野君にいはせると、自分の半生の不淨な生活を一切清算して新生活に入るには、あゝいふ初心（うぶ）な、清淨な感じの人の身心によつて救はれる外に道は無い、その道に入らなければ自分の藝術は伸び無いといふのです。」

「はゝは、私共俗人にはよくのみこめませんが、いつたい彼（あ）の娘がそれ程の人間かどうか、こいつはちつと先生方の御買ひかぶりが過ぎやあしないかと存じますが。」

女の子などゝいふものに、人を救つたり向上させたりする力があるものか、あれは綺麗で安價な品物にひとしいのではないかと云ひ度さうな嘲笑をほの見せた。

「その點は私も疑はしいと思ひますが、兎に角友人に頼まれて來たのですから、直接本人の口か

ら、ほんとの心持を聞き度いのです。若しもあなたの御許（おゆるし）があるなら……」
「えゝ御安い御用ですとも。」
支配人は無雜作に椅子の背に反（そり）かへつて、背後に聲を投げた。
「雪江さん、ちよつと。」
聲には出ない返事をして、小柄な日本娘は、底の厚い草履の音を立てゝ急いで來た。
「一寸君に逢ひ度いとおつしやるので。こちらは柘植さん。例の茅野先生の御親友。」
日本人には給仕させないといふ店の掟の爲に、口こそきいた事はないけれど、茅野とつれだつて時折は來る顏見知（みしり）だから、娘の方も知つてゐますといふ顏つきで會釋した。
「こちらが今日御出になつたのは、茅野さんに頼まれて、君の心持をきゝにいらつしやつたのだが、何も後々迷惑になるやうな事はないのだから、はつきりと君の立場を御話し申上げるといゝ。」
「それは駄目ですよ。」
柘植は、自信のありさうな口をきく支配人を遮つた。
「失禮ですが、あなたがゐては、私の方でもきゝたい事もきゝにくいし、又この方（かた）にしても一寸

具合が惡いでせう。尤もあなたがゐらつしやらなくても、旣にあなたを通しての會見なんだから、ほんとの事はいひにくいかもしれないけれど。」

「いや、そんな事はありますまい。何しろ茅野さんの奥さんになるかならないかといふ大問題なんだから。」

支配人は明かに不快の色を浮べたが、口では至極平靜に、

「では邪魔者は退散しますかな。」

と冗談めかして座を立つて、店の奥の方へ姿を消した。

「かけませんか。」

「えゝ。」

折角二人にはなつたものゝ、外の給仕の娘達が、眼の黒いのも碧いのも、何か重大事が起つたのかと、あやしみ見守つてゐるので、當の娘は腰を下すどころでは無かつた。支配人は計畫的に、わざと店頭で會談したのだつたかと、柘植は思ひ當るのであつた。

「茅野君は今病氣で寢てゐるのですが、知つてゐますか。」

「まあ、御病氣ですの。」

蒼白い顏にぼんやりと血の色を見せて、
「この頃やかましいものですから、御手紙も頂きませんの。」
と、すこし舌たらずのやうな口のきゝ方で云つた。
「私は茅野君に賴まれて來たのですが、それより先にこゝの支配人が私のところへやつて來て、茅野があなたを追かけ廻し、本人も困つてゐるから意見をしてくれ、思ひ切らせてくれといふのです。ところが茅野君にいはせると、あなたとは堅い約束があつて、自分の心持はよくわかつてゐる筈だ、それを支配人や監督や、その外の人が邪魔して逢はせないのだといふのです。あの先生が口癖のやうにいふのは、自分の今日迄の墮落した生活から救ひ出してくれるのはあなたの外には無い、あなたに救はれ、あなたの力を借りて自分の藝術を完成したいといふのですが……」
柘植にとつては、斯ういふ空漠たる詩人の夢を、たとへそれが他人の言葉にしろ、若い娘に對して口にするのが羞しかつた。
「はあ、あたくしにも始終さういふ事をおつしやるのです。はじめのうちはよくわかりませんでしたけれど、たしかにあたくしの力でさういふ事が出來るとおつしやるものですから……」
娘は、自分がたなびく霞の上に乘つてゐるやうな話に一層顏を紅くした。

「それで茅野君は、あなたを失つては自分の生涯は破滅だといふのですが、支配人の話では、あなたの方はそれ程におもつてゐないとかいふ事で、それを確めて來てくれと私にいふのです。」

相手は支配人のかけてゐた椅子のよりかゝりに兩手をかけて、身の置所にも弱つてゐる風情だつた。

「あたくし、よくわからないのですけれど、なんだかあの方のおつしやつたり、なさつたりする事が恐いやうな氣がしまして……」

「では、はじめはよかつたけれど、今は後悔してゐるといふやうな……」

「後悔つて事はないのですけれど、困りますわ、あたくし。」

いつ迄たつても埒のあきさうもない相手の樣子に當惑してゐるところへ、支配人は如何にも事務家らしく忙しさうに戻つて來て、

「いかゞです、お話はすみましたか。」

といひながら、元の椅子にかけてしまつた。それで話は否應なしに中斷された。

「矢張茅野先生の御註文通りには參りませんでせう。」

支配人はどうだい負けたらうといひ度い肚の底を、おもはずさらけ出した。

「それは無理ですよ。こゝはあなたの支配下にあるのだから。」
柘植はあつさり應酬して、
「御忙しいところをありがたう御座いました。」
と支配人よりも寧ろ娘の方へ叮重に挨拶した。解放された娘は仲間の方へ走つて行つたが、忽ちみんなに取圍まれて、何か報告し、何か問ひたゞされてゐた。
柘植には娘の心持がよくわからなかつたが、多分、遠い異鄕で心寂しい折柄、むやみに自分を讃美崇拜する同胞の青年に出逢ひ、心を甘やかされ、嬉しがらせられてゐたのが、周圍の者の白い眼と、當の男の我儘勝手な求愛に脅かされ、どうしていゝか只管弱つてゐるのではないかと想像した。たしかに綺麗は綺麗だが、あんなこどもをつかまへて、自分を救つてくれとか、その救がなければ藝術が完成しないとか云つてゐる茅野の文學青年らしさが、どうしても眞實性を帶びたものとしては考へられなかつた。何といふ他愛の無い會見だらうと、自分の役廻を嘲笑しながら、直ぐその足で茅野に報告を持つて行つた。
茅野はめつきり寒くなつた朝夕の氣候の變化が障つたのか、又熱が高く、不健康に紅潮した頰邊を枕につけて眠つてゐた。柘植はそのベツドに近く椅子を寄せて、白い額を小一時間も見守つ

た。

「あゝ君か。」

ぽつかり眼をあいた病人は、夢の中の事かと思ひ迷ふやうなうるんだ眼をして、しばらく栃植の顔を見つめた。

「どうだい、よくないのか。」

「よくない。」

茅野はいつもの、何事にも自信を持ち、光明を信じる態度に見放されて、無氣力な返事をした。

「今日はたうとう使命を果して、例の茶店へ出かけたよ。」

「さう、それはすまなかつたなあ。」

眼尻と口尻に子供のやうな微笑を浮べた。

「それでどうした。」

「さあ、何といつていゝかなあ。元來あの店に行つて、あの娘に逢つて話をするといふのは不自然だからね、大した期待は持たなかつただが、外に方法もないし、君からは再三の御下命だから……」

先づいひわけをして置いて、一部始終を話した。

「僕の解釋を許してくれるなら、あの娘は君が勝手に作りあげた人形で、ラファエルの聖母だとか、その愛の力こそ日本にはじめて生れる大戲曲を完成させるものだとか、最大級の形容詞を浴せかけておだてるものだから、何が何だかわからないが、無上に嬉しくなつてしまつたのさ。ところがはたの者が承知しない。あんな不良詩人にだまかされてはいけない、ひどいめに逢ふぞといはれ、成程さうかと思つてゐるところへ、君の方は君の方で、もう手に入つたと思ふし、せかれゝばせかれる程あせつて肉迫するものだから、處女の本能としてもおつかなくなるのは極めて自然だと思ふのだが、どうだらう。」

茅野はもとより不滿足なのだが、いやな役目をおしつけて賴んだ控目もあるので、苦笑しながら聞いてゐた。

「まあいゝさ、僕には僕の考がある。それよりも、もう一度君を煩はしたいのだが、君は支配人にも信用があるし、あの娘とも公然と話をして來たのだから、何とかしてこれを手渡ししてくれないか。」

枕の下から取出したのは封書だつた。

「こつちから手紙をやる事はむづかしいが、向からは葉書一枚書く位、誰にも見つからずに出來るだらう。それに對して返事があれば僕の勝利だ。勝利つてやつもないけれど。」

茅野は例の朗な聲で笑ふつもりだつたが、咽喉にからんでかすれてしまつた。

茅野に托された手紙は、ひそかに喫茶店の少女の手に渡す事が出來たが、監督がきびしい爲か、本人がつゝしんでゐる爲か、いつ迄も返事は來なかつた。茅野は病牀で苛々し、果して柘植が先方の手に手紙を渡したかどうかを疑ふ口吻さへもらした。柘植もむつとして、元來自分はそんな役目を喜んで引受けたわけでは無く、病氣の友達の爲に、いやがる自分の心を抑へつけ、不愉快を忍んでやつてやつたのに、さうまで云はれるのは心外だ、自分にいはせれば、未だに返事の無いのは、恐らくは少女の心が既に遠ざかつた事を證據だてるものではないかと、はしたなく爭つた。

「失敬々々。」

茅野はふだんの強情にも似ず、手もなく折れて出たが、それが心からあやまつたのか、もう一度柘植を煩はして先方の心を探らうとする下心か、どつちにもとれた。彼はしつつこく柘植を口

說き、是非もう一度喫茶店に行つて、返事を催促してくれと、外聞もなく賴むのだつた。柘植は、相手の心の底を見透しながら、見透されてゐる事を知りつゝ一筋に賴む熱心に根まけして、不承不承に承知してしまつた。

一人の友達は病んで、いつたん確實に得たと思つた戀愛が、段々心許なくなつてゆく不安に惱んでゐる時、一人の友達は多年夢に描いてゐた伊太利の旅先から、歡喜に醉ひ、感傷に堪へない通信を頻々と寄越した。高樹は、古典藝術の研究に沒頭してから、極端に排斥し、排斥する事に誇をさへ感じてゐた天地自然の風物さへ、それが伊太利の國土を包む時は、十七八の少年にひとしい感激をもつて讃美するのであつた。佛蘭西の國境を越えて、空と海と山と、すべてが金粉を散らして光り輝く伊太利へ足を踏入れてからの歡喜は、汽車の中、停車場の歩廊で認めた繪葉書の狹い紙面にあふるゝばかり豐富だつた。途中の小驛で、汽車の窓から手を差延べて買つた荷入の葡萄酒の味迄、批判を忘れて稱讃した。彼はその樂しい旅に醉ひながら、目的地フロオレンスに着いて、かねて憧憬したアルノの河岸の宿におちついた事を知らせて來た。

たうとうおもひを達したか——柘植は誰もゐない室の中で大仰に嘆息した。こゝろざす事に對してはひたむきな童心をもつてのぞむ友達の意氣に打たれるおもひがした。虛弱な、血を吐いた

からだで、強烈な日光の中を美術巡禮に出立つ姿を想像すると、又ひそかに微笑も止めかねるのであつた。

栢植は、病氣見舞旁々、高樹の感極まつてうたひ出したやうな手紙の束を持つて茅野の宿へ急いだ。玄關の呼鈴を押すと、いつもの通り小娘とフオツクス・テリヤが先を爭つて顏を出したが、意外にも茅野はゐなかつた。

「あら、あなた御存じないんですか。茅野さんは急に海岸地方へ轉地なさいました。」

あんまりおもひがけなかつた事なので、栢植はうすいそばかすのある小娘の顏を見て暫時佇んだ。犬は彼の足許を嗅ぎ廻り、時々前脚をあげてふざけようとした。

日を經て、やうやく茅野の消息を得た。

僕は突然こゝにやつて來た。何時までも微熱がとれず、これから霧の深くなるロンドンにゐるのは健康上よくないと思つたのであるが、それよりも正直のところ、あの女から僕の豫期しなかつた返事に接した事が直接原因である事を告白しよう。僕はあの處女の力に縋つて新生活に入り、劃期的の作品を世に問ふ考へであつたが、今は逆に、僕の作品によつてあの女を獲得する事に努力するつもりである。僕は自分の健康さへ許すならば、輝かしい未來の待

つてゐる事を信ずるものである。向ふ一年の間に、僕は英語で戯曲を書く。舊約聖書から大きな材料をつかんだ。これが出版されゝば、ロンドンの劇場で上演される幸運が僕を待つてゐるであらう。あの女がどんな驚きをもつてその芝居を見るか。僕は僕の心に受けた打撃にへこたれるよりも、寧ろこの愉快なる希望の深く大いなる事を樂んでゐる。

柘植はその手紙を繰返して讀んだ。自分の汚濁の生活を他力によつて清算しようとする茅野を、一人相撲をとるものだと笑つたが、今日この破局に來てみれば、茅野には茅野一流の自信が力強く張つてゐる。空中に樓閣を描くものとばかりはいへない情熱が、その短い手紙から、匂ふやうに感じられた。

霧の都は毎日々々鬱陶しく、晝も燈火がなくては本も讀めないやうな日が續く中で、秋はあわたゞしく更けて行つた。獨乙のツェペリンに襲撃されてから、市街は一層暗く、夜は酒場の戸さへ早くとざされ、行人の數も少なかつた。下宿も出て行くものがあるばかりで、後から來る者もなく、おかみさんの機嫌は愈々惡く、したがつて客扱ひも益々ひどくなつた。獨探事件以來、みんなの集まる場所には一切顔を見せなくなつたヘイドンは、何處へ行くのか宿にゐない日が多く、その行動はあくまでもあやしかつたが、前の失敗にこりて、誰もおもてだつて非難する者もなか

つた。

　ペエジは毎朝重たい靴を穿いて練兵に出かけたが、いつ迄たつても彼が豫告した通りの士官にはとり立てられず、それが唯一のいひわけのやうに、しきりに軍部の不信を鳴らしたが、結局兵卒は兵卒のまゝで戰線へ送られる事になつた。

「あゝ、愈々カイゼルを生捕に出かけますよ。」

　口では月並な諧謔を賑かにいひ立てたが、流石に生死の別目(わかれめ)に追ひ詰められた運命を前にして、沈痛な様子で默座してゐる時が多かつた。先づいつたんは兵營に收容され、それから何處か目的地のあかされない戰場へ運ばれるのださうだつた。しかも此の勇士は、又しても下宿の支拂が滯り、かみさんにぎやんぎやんわめきたてられてゐた。兵營に行けば一文も支出はないから、貰ふものはみんな送つて寄越すと約束してもきかれなかつた。パイパアに頼んでも、もともと豊かでない上に、これ迄に幾度も小出しにせびられてゐるので、なかなかうんとは云はなかつた。二人の間に激しい爭まであつたが、結局ペエジの要求は拒絶されてしまつた。彼は栢植にも縋つて來た。人間は出鱈目でも、おつちよこちよいでも、よしんば兵士を志願したのも手當を目あての事だつたにしろ、生命をかけて戰場へ行くものが、僅かに二週間位の宿料の滯りで、斯うまでみじ

めに扱はれるのは、あんまりひど過るとは思ひもしたが、柘植自身の懐都合も悪く、グレイの頼みで一度ならず金子を用達て、その中にはペェジの窮迫を救つたのもあるのだし、その金の返つて來ない爲にどの位不自由したかしれないのだ、結局あれを餞別にやつたものと見做せば充分だと考へて、今は自分の手許も全く不如意だから、用達てようにも用達てられないと云つて斷つた。しかし、斷りはしたものゝ、何か人道上爲す可らざる行爲をしたやうな心を咎めるものを感じた。

ところが、その次の日にはグレイがやつて來て、ペェジが昨夜來ての話に、愈々戰場へ行く身として、下宿料の拂へない爲に所持品を差押へられては堪らないから救つてくれといふのだが、御承知の通り自分も金には縁が無いし、ペェジの爲には迷惑もうけてゐるので、斷るのが本當なのだが、何しろ相手は祖國の爲に戰ふ若者だ、自分は既に年老いて銃劍を身に帶びるわけにはいかない、つまり自分達になりかはつて戰ふのが彼なのだから、せめては何の心配もないからだで出征させ度い、其處で自分も半金を出すから、柘植にも半分の負擔を引受けてくれといふのである。

「恰度私の仕事の報酬として貰つた金が少しあるので、本來ならばこれはあなたに御返ししなければならないのだが、あなたの方はもう少し猶豫して頂いて、あの若者を喜ばせてやり度いので

すよ。」

グレイはさういひながら、あかしをたてる心持か、懐の紙入から紙幣を抜出して卓子の上に置いた。柘植は此の人の、窮迫しながらも他人の貧困を救はないではゐられない善良な魂に觸れて、どうしてもいやとは云へなかつた。又こゝで氣が弱く、餘計な男氣を出しては、後で苦しむばかりだぞと、自分を戒める心も充分ありながら、たうとう自分も紙入の中の紙幣を取出して、グレイの置いた上に重ねてしまつた。

「あゝ、これで立派な兵卒が一人出來上つた。感謝します。感謝します。」

我身の上の事のやうに喜んで、直ぐにペエジの部屋へ上つて行つたが、間も無くカアキイ服の本人をつれて來て、共々に禮を繰返した。

そのペエジも、雨のびしよびしよ降る寒い朝、みんなに別れを告げて兵營へ赴いた。誰の目にもかくす事の出來ない仲だつたパイパアは、その朝こそは涙を流したけれど、直ぐにけろりとして、厄介拂ひをしたかのやうに晴やかになつた。數日後にはボイスと共々、これはほんとに學生出身らしい粹な士官が誘ひに來て何處かに出て行つたが、その晩柘植が散歩から歸つて來ると、消燈令の爲に暗い玄關の石段に腰かけて、二組の男女が相抱いて眠つたやうに動かな

いのを見た。それは完全に入口をふさいでゐるので、柘植は宿の前の共同園の鐵柵の外を一周して戻つて來たが、相擁した男女は依然動かない。もう一度廻り、三度廻つた時、先方でも氣がついて、あわてゝ離れ離れになつたが、二人の女は逃れるやうに家の中へ入り、二人の軍人は靴の音高く、鞭を鳴らしながら立去つた。

グレイ夫人は相變らず、執拗(しつこ)く手紙を寄越した。柘植がわざわざ時間を違へ、遠廻りして行くのを知らずに、往來で待伏してゐる事もあるらしかつた。あれ程物わかりのいゝ、教養のある人が、どうして斯う迄あくどく、人困らせをするのかと、柘植は殆んど閉口して、この人あるが爲ばかりで、ロンドンを去つて巴里へ行かうと考へる事も度々あつた。

十一月の寒い夜の事であつた。柘植をたづねて來た人があるといふので玄關へ出て見ると、暗いあかりを浴びて、油と石炭で皮膚も衣服も汚れた薄ぎたない婆さんが立つてゐた。向ふでも見馴ない日本人の顏をじろじろ見てから、何もいはずに紙片を差出した。開いてみるとグレイの走書で、至急來てくれとだけ書いてあつた。何か用事ならば自分で來る筈なのに、つひぞ無い事で、見も知らない婆さんを使に寄越したのがをかしく、不吉な豫感が胸をついた。彼は、一片の銀貨と共に、直ぐに行くといふ返事を婆さんに與へた。

いつたん自分の部屋に戻り、外套を着ておもてに出ると、珍しく晴れた高い空に、星屑が意味ありげにまたゝいてゐた。異常な出來事が行手に待つてゐるのではないかと思ひながら、グレイの宿へ急いだ。待兼てゐたグレイは握手した手を放さず、室内へ引入れたが、目の前のベッドには蒼ざめた顏をして夫人が寢かされてゐた。柘植の姿を見ると、仰臥したまゝの姿勢で、はげしく歔欷しはじめた。

「どうかしたのですか。」

柘植はわざと夫人の方に背を向けて、グレイに訊いた。

「劇藥を呑んだのですよ。」

もう危險は過去つたのだといふおちつきを見せて、全く過去の事のやうに靜かに答へた。

「私が少しばかりの仕事の報酬を貰ふ中から、かねて拜借の金を御返ししようと思つてはゐるのですけれど、生れつきだらしがないものだから、ペエジが泣きついてくればやつてしまふし、此の家の室代もたまり勝で、いつになつたら餘裕が出來るか、あなたからの借金を完濟出來るか、見當もつかないので、もう二度とは手に觸れないと家內に誓つた骨牌の仲間に飛込んで行つたのです。それが落目になると運が惡く、すつかりとられてしまつたので、約束の日が來ても室代が

拂へない。度々の事なので、こゝの主婦が私の留守に家内をつかまへて泣言を並べる。家内は家内で私に喰つてかゝる。何故誓を破つて骨牌に手を出したかと、あんまりはげしくやられたので、今迄かくしてゐたあなたからの借金の事を喋つてしまつたのです。今の私には骨牌に運を托す以外に返金の道が無いと。すると俄にきちがひのやうになつて、いかに自分達が困つたからといつて、柘植さんにお金を借るとは何といふ事だといひ出して……」

グレイは幾度も妻の方に氣を配りながら、その日の夕方の出來事を話すのだつた。いくら事をわけていひ聞かせても、たゞ泣き叫び怒るばかりで、手のつけやうもなかつたが、突然鏡臺の抽出から、ツェペリン襲撃事件以來時々用ゐてゐた催眠薬をとり出し、ありつたけ口にふくんで嚥下しようとした。咄嗟にグレイは妻の咽喉を扼し、あばれもがくのを押へつけて、あぶなく大方は吐出させた。それから、今迄かゝつてやうやく平靜になつたが、是非とも柘植に逢つてあやまらなければならないといひ張るので、迷惑は承知の上で使を出したといふのだつた。

「それでも、少しは咽喉を通つたのですか。」

「大した事はありません。それよりも精神的に參つたのでせう。」

グレイは、自分自身にも氣の疲れを見せて、力なく話を結んだ。その間、夫人はかけぶとんの

胸のあたりに波を打たせながらすゝりあげてゐた。眼の下にも、兩頰にも暗い隈のある醜い顏を、淚は容赦なく一層醜く汚した。

柘植は此の室に在る自分の不快な立場にゐたゝまれなかつた。いつ迄もいつ迄も泣いてゐる夫人を見てゐると腹だゝしくなり、グレイの自分に對する思惑を想像すると、やりきれなくなつた。逃げよう、この場を逃げるばかりでなく、ロンドンにおさらばしよう、下らない人情にとらはれて愚圖々々してゐるべきでない、自分が此の國を立つた後で、果して夫人が死ぬなら死んでも構はない、逃げよう、斷然逃げよう――と肚をきめた。肚がきまると、不快な室にゐる事も辛抱出來た。

「それでですね、柘植さん。家內はあなたにお金の迷惑迄かけてゐては、もうおつきあひを願ふ事も出來ないといふのですけれど、どうか吾々を救ふと思つて、時々は遊びに來て頂けないでせうか。それは家內の唯一の願であり、又私の希望なのです。」

グレイの心は、それを當の柘植よりも、寧ろ妻の耳にさゝやくものゝやうだつた。

「承知しました。」

柘植は自分の立場の芝居がかりなのに閉口したが、夫人の寢臺の側へ行つて手を差出した。

「どうか心を靜め、おちついて聞いて下さい。私は修業中の者です。自分の勉強をかきみだされるのが何よりいやなのです。お金の事なんか問題ではないのですから、そんな事は氣にしないで下さい。」

夫人もかけぶとんの下の細い手を出して、無言で強く握手した。

「では、今日は靜におやすみになるのがいゝでせう。又明日うかゞひますから。」

相手のうなづくのを見て、手を振放し、グレイに送られて辭した。

…柘植はその翌日、運送屋を呼んで來て、書籍を荷造して日本の汽船會社に托し、その足で佛蘭西領事館に行つて旅劵の手續をした。あとは一つのトランクと、一つのスウツ・ケエスだけだ。何時でも旅へ出る事が出來る。彼は安心して、その午後にはグレイ夫妻の宿を見舞つた。妻の身を心配して勤めにも行かないグレイと、旣に床ははなれたが病人のやうな夫人は、柘植の約束の堅い事を稱讚し、感謝し、何のもてなしも出來ない事だけを嘆いた。

「又明日も來て下さい。」

——といふ言葉にもそむかず、何氣なく別れたが、柘植は次の日には海峽を越えて巴里へ渡らうと決心してゐた。

愈々ロンドンにも別れる日が來た。一週間分の宿料を前拂して、突然立つ事を告げると、主婦はすつかり驚いて、この頃客のすくない折柄、又頭數の減るのは打擊である、萬一何か不滿の點があるならば遠慮なく云つてくれと、俄に愛想よく引留るのであつたが、柘植は小旅行をするのだといつて、他の止宿人に挨拶もせずに、あわたゞしく宿を出てしまつた。

彼はステエションから、グレイ夫妻宛の手紙を出した。

私は今正にロンドンを立つて巴里へ赴かんとしてゐる。私が突然此の地を去るに至つた心境は深く穿鑿しないで下さい。私の不信を許せ。

誰一人見送る者もなく、柘植はフォルクストン行の汽車に乘つた。さきには高樹が、血を吐いて程(ほど)もない虚弱なからだにも拘らず、古典藝術の研究の爲に命を賭けて、眞劍な歡喜に醉ひながら此の驛から立つた。方角こそ違へ、失戀の惱みと病氣を一身に擔ふ茅野は、世界を驚かす戲曲の完成を夢みつゝロンドンを去つた。今自分は、醜惡なる年增女の執拗な慾情を逃るゝ外に、行手に如何なる抱負を持つてゐるか――彼は何もない自分の寂しさを、一人ひそかに恥ぢた。それでも、汽車が構内をはなれると、流石になつかしくロンドンを振かへつた。大都の上には戰時らしく、雲の絕間に軍用輕氣球が浮び、幾臺もの飛行機は大きく圓を描いて警備の任にあたつてゐ

た。見る見るうちにロンドンは、どんよりと低くかぶさる煤煙の底に沈んでしまつた。（昭和八年三月五日）

随筆

伊太利亞の女優

伊太利亞の女優 Mimi Aguglia がボストンのハブ・セアタアに四日間出演する、出物（だしもの）は初日がデュマの「椿姫」二日目がホフマンスタアルの「エレクトラ」三日目がサルドウの「フェドラ」四日目がワイルドの「サロメ」だと云ふ芝居消息（しばゐだより）を新聞で見つけたのは恰もその初日と云ふ正月五日の朝であつた。

一年前ケムブリッヂに到着した第一夜に、此の町が禁酒地（ドライ・タウン）で酒を賣る事は法律で嚴禁されてゐるのを少許（すこし）も知らず、ハアヴアアドを中心にしたちひさな學校町の四辻に買物に出たついでにカフェと書いてある家を三軒廻つた。カフェには酒のあるものと思ひ込んでゐたので、不思議さうに自分を見ながらおあいにくさまを云ふ給仕人を此方（こつち）からも不思議に思つたのである。三軒目は伊太利亞人の店だつたが、其處で初めて此の町では酒を賣る事は許されてゐないと教へられた。

その日定めた下宿の二階にかへつても、まだ荷物は停車場に預けてあつて明日の朝でなければ來ない筈だから何を爲る事も出來ない、一層芝居にでも行つて見ようと思つた。通りすがりの若い學生らしい男を呼止めて、芝居を見度いのだが劇場の所在を教へて吳れないかと云ふと、その男も亦不思議さうな顔つきで自分を見下しながら、此町には劇場は一つも無い、芝居が見たければボストンに行けと云ひ捨ててサツサと行つてしまつた。學校の門を潜つて楡の木立の暗く茂る校庭の方に消えて行く丈高い後姿を見送りながら、酒も飲めず芝居も見れない土地に來た自分が賴りなくあぢきなく感じられてひとしほ旅の愁を強くした。地下鐵道を取れば僅に十分で行かれるボストンさへその時には遙かなる他郷のやうに自分には思はれたのである。

其後一年の間にボストンの重立つた劇場には屢々通つたのであるが、ハブ・セアタアと云ふのはつひぞ名前を聞いた事もなく、日々の新聞の廣告や芝居消息にも一度も見かけたことがなかつた。

當日の新聞には簡單に Aguglia の事が記してあつた。それによれば此の女優はシシリイの生れで、現代伊太利亞の女優の中でも聞えた一人であるといふのであつたが、此の地の新聞の芝居消息は總纏頭主義で、なんでもかんでもほめるのだから、果してほんとにいゝ女優であるかどう

かこればかりでは信じかねる。ハブ・セアタアの廣告も其の日に限つて載つてゐたが、これは伊太利亞語で書いてあるので自分には讀めなかつた。ただその劇場がワシントン街の下手にあると云ふ事だけわかつた。

晝飯の時食堂で卓を共にする伊太利亞語の讀める男に新聞廣告の切抜を見せたら、「伊太利亞隨一の女優出演」云々と云ふのだと聞いた。これはもとよりミツワ御園の類であらうと決めてしまつたが、しかし女優が上手だらうが下手だらうがそんな事には頓着せず自分は見に行つたに違ひない。四日間の出物が自分の心を誘ふのに充分力強いものだつたからである。

「椿姫」はひと昔前、長田秋濤氏の譯が新聞に出た頃恰も自分は小説と云へばなんでもかんでも夢中になつて讀んだ時代だつたので、男女の關係殊に佛蘭西のあゝ云ふ種類の女とそれに對する男の關係などは、はつきり頭に入らなかつたが、それでも毎朝學校に行く前に忙しく讀んだものであつた。芝居としてはつい先頃帝國劇場で所謂新派の役者が演じたが、如何したものか氣が向かないで見よう見ようと思ひながら見に行かないうちにおしまひになつてしまつた。そんな事も「椿姫」を見度いと思ふおもひに少なからず力を添へたに違ひない。

「エレクトラ」は英譯で讀んで大變好きだつた。あれを松居松葉氏が譯して河合小織が演ると聞

いた時は、自分は既に此の地に來てからだつたから到底見られないのではあつたが、原作者と原作を尊重する心から何となく心もとない氣がして他人事ながら氣づかはれた。さうして其の芝居を指揮監督する人に對してあてもなく不快に思つたりした。けれども又その當時の時事新報紙上で地下一尺生事木下杢太郎氏が松居氏に對し「前掛風情が」云々と無禮な言葉を用ゐたのを見ては頼まれもしないのに義憤を發して評者の態度を憎み、反動として「エレクトラ」の上場にたづさはつた人達に同情したくなつてしまつた。

それから間もなく、紐育の芝居と云ふ雜誌に「日本人の演じたるマクベスとエレクトラ」と云ふ寫眞が出た。マクベスの方は如何にも素人らしい身體中空隙だらけな一人立ちで、エレクトラの方は髮を振り亂して地上に倒れてゐる姿であつた。その雜誌を自分に見せて吳れた女は、日本人がマクベスやエレクトラを演つたと知つて非常に驚いたらしく、多勢集つた席で頻りに吹聽したり、更に又自分に質問したりした。さうして人々は美しいエレクトラが男優の扮するところと聞いて一層驚いたのであつた。

「フェドラ」と云ふ芝居はどんな芝居か自分は全く知らなかつた。

四日目の晩の「サロメ」は一番待ちかまへたものである。自分はよく畫工、詩人、小說家、音樂

家などの傳記や逸話を讀むと、今迄別段感心もしなかつたのが急にその作品迄好きでたまらなくなる事がある。それと反對に傳記や逸話を讀んだ爲めに今迄好きだつた作品を嫌ひになつてしまふこともある。オスカア・ワイルドの場合は後者であつた。何故ワイルドの傳記や逸話を讀んでいやになつたか簡短に云つて見れば、若し友だちにして一緒に往來を歩いたらさぞ冷汗の流れるおもひをさせられるだらうと云ふやうな氣持のする人間に思はれたからである。それにもかゝはらず「サロメ」は嫌ひにならなかつた。英語のと、森鷗外先生譯のと兩方で、度々繰返へして讀んだ。近く藝術座の公演に松井須磨子がサロメに扮した噂は、新聞雜誌等の評判で知つた。

こんな風に四日間の出物の中の三つ迄が最近に日本で日本の役者によつて演ぜられたと云ふ事から、自分は特別の興味を呼び起したのであつた。

自分の行く食堂の食卓に並ぶ男女の間には殆んど毎日芝居の噂がとりかはされる。多くはハアヴアアドの學生、卒業生、教職員、女は一人住みの學校教師などで、知ると知らざるとにかゝはらず提供された話題については必ずひとかどの說を立てなければ承知しない國民性から、時には互に眞赤になつてバアナアド・シヨオは眞面目なりや不眞面目なりやを論じたり、ミユウジカル・コメデイの價値如何をあげつらふ連中である。

その夕べ自分は食卓に居並んだ人々にハブ・セアタアの所在を尋ねたが誰一人知る者もなかつた。食後直ぐにボストンに出かけて、新聞廣告に書いてあつたのをあてにして、最も繁華なワシントン街（ストリイト）を下町の方に下つて行つた。

伊太利亞と云へば空の色迄も他の國とはちがつて一際鮮かに輝き、鳥は梢に囀りかはし、花は地に咲き亂れ、熱情に滿ちた男女は美しき聲を合せて歌ふ國と、早くから印象されてゐた自分は此の地に來てからはヂヤツプ、チヤイナマン、アイリツシユ、デユウ、ニグロなどゝ共に、イタリアンと云へば人の擯斥する國民なる事を知り、道普請の土方、往來の靴磨き、物乞ひ等あらゆる賤業にのみ從事する彼の國の移民のみすぼらしく不潔なのを見て驚いた。オペラ・ハウスで見る歌うたひのすぐれたるは皆伊太利亞の男女であるが、オペラ歌ひのならひとして聲ばかり美しく、顏も姿も肥り過ぎて美しいのは稀なので愈々うらぎられた心であつた。實のところ自分は伊太利亞の女と云へばいづれもヴイナスかマドンナのやうな氣高い顏をしてゐるものと一人できめてゐたのである。

それにもかゝはらずハブ・セアタアに急ぐ時は又もその空想を心に樂んでゐた。シシリイ生れの女優と云ふのはきつと美しいに違ひない、亞米利加に來てゐるのは多くは勞働者と共の家族だ

からうす汚ないので、オペラうたひは大なる聲量を要するので肥大な體格の者が多いのであらう、あれから推してすべての伊太利亞人を美しくないとするのは早まつてゐる、伊太利亞の女は矢張り美しいに違ひない、殊に女優は美しいに違ひない、Mimi Aguglia もすぐれたる美人に違ひないと考へる丈でも、その華やかな舞臺が想像されて胸がをどる。自分は音樂繪畫文學に培はれた想像の南歐の景色を再び夢み、曾て愛誦した「即興詩人」の中の忘れぬ記憶も更に新しく光を増して輝いて來るのであつた。

狹いボストンの町は東西南北何の方面に向つても、少し歩くと直ぐに場末になつてしまふ。自分は間もなく繁き人通りの中を自然と抜けて、見るから暗い場末の町を歩いてゐた。

一昨日の雪にケムブリッヂはまだ白く埋れてゐたが、ボストンは既に取去られて其處此處の道の凹みの雪解の泥水に燈火を映してゐる。暗い曇り空を風の走る夜で、繁華な區域を離れると俄に寒く感じるのであつた。

その町はまだ自分の來た事のない方面で、汚ない酒場や料理屋やランチなどの無闇と立ち並ぶ間々に場末におきまりの仰々しい立て看板を出した活動寫眞小屋があるのである。其處ら邊をさまよふ男女はあさましい服裝をしてゐる移住民で、醉拂ひの多いのも目に立つた。好みもなんに

もないけばけばしい裝ひをしてやたらに身體を振り立てゝ歩くお白粉の厚い通りすがりの女に、あつちからもこつちからもからかひかけると、女の方でも負けてはゐないで罵り返へしながらサッサと切拔けて行く。

そんな町のとある町角にハブ・セアタアはあつた。

切符賣場の前に集つてゐるのは何れも常に往來で見かける種類の伊太利亞人で母音の多い言葉で騷々しく話し合つてゐる。自分は二階の安い席を求めてうす暗い階段を上つて行つた。

芝居小屋は有樂座位の大きさで三階迄あるけれども電氣も充分には用ゐてゐないので、どんよりと暗く古ぼけてゐる。入口に立てかけてあつた看板を見ても、舞臺をかくしてゐる緞帳に貼りつけてある次の週のパアフオマンスの廣告を見ても、ふだんは芝居をやる小屋ではなく活動寫眞や輕業や流行唄などで客を呼ぶヴオヲデビルの中でもあまり上等でない部類のものらしく思はれる。つひぞ今日迄新聞に廣告も出ず、誰しも知らなかつたのも無理はないと思ふと、かゝる小屋に來る役者はいかにもケレン澤山な可哀さうな旅役者であるらしく考へられ、又しても美しく夢想した事は傷けられてしまふのであつた。

見物は悉皆伊太利亞人らしく、亞米利加人らしいのは一人も認められない。殊にその伊太利亞

人と云ふのが矢張り始終往來で見かける汚ならしい連中であるから、まだ開かぬ序幕の待遠しさに頻りに手を叩いて催促し、醉拂つた高聲で亂雜に怒鳴り合ひ、どいつもこいつもチユウインガムを嚙んでは眞赤な唾をところかまはずペツペツと床の上に吐き出し、そいつを更に靴のうらで踏みにじるので不愉快な物音は絕間なく自分を苛々させるのである。おまけに場内すべて伊太利亞人らしい中にたつた一人自分が現はれたので、いかにも珍らしさうに遠慮もなく四方八方から視線をそゝぎかけ、チヤイナかヂヤツプかなどゝ聞こえてもかまはずにさゝやきかはすのであつた。

自分は隨分我慢してゐたけれども、恰も隣席に來た若い男がのべつ幕なしにチユウインガムの唾を吐き出すので胸が惡くなり、たうとう辛棒しきれずに、切符賣場に行つて土間の中程の席に移る事にしてしまつた。

流石に二階の客とは違つて多少行儀もいゝのであるが、それでも取り濟した他の芝居の見物とは比べられない程騷々しく落ちつかないのであつた。

幕開き前の音樂はしきりに各國の國歌などを奏してゐたが、それがやむと客席の電氣は消えて緞帳は靜に天井に卷きあがつた。

その時、今迄空いてゐた自分の右隣りの二つの椅子にあわたゞしく來て坐つた男女があつた。女の方が自分に近かつたので、手ばしつこく帽子針を拔き帽子を取り、外套を脫ぐ順序の間に柔撓に動く手をほの白く眺めた。ほつそりした橫顏が暗いあかりに美しく想像される。

幕が開いて第一に目に觸れたのは背景衣裳道具すべてが間に合せのみつともない安物だつた事である。毒々しい駄菓子の色で塗られた背景は全く活動寫眞の看板である。古び汚れた衣裳はつづらに押込れて田舍の村々の祭に招かれて行く忠臣藏の衣裳に劣らぬものであつた。さうして其の舞臺に現はれる役者逹は一二を除いては悉皆往來の伊太利亞人と同じ顏付きをしてゐた。

舞臺の上の會話が始めて耳に入つた時吃驚した程迂濶にも自分は其の時迄「椿姬」が伊太利亞語で演ぜられると云ふわかりきつた事に些かも考へ及んでゐなかつた。自分は伊太利亞語は全く知らないのである。シニョーレ、シニョーラ、シニョリーナがミスタア、ミセス、ミスに相當し、度々繰返へされるシ、シと云ふのはイエス、イエスと云ふのだらうと見當をつけた位のもので、自分は彼等の身ぶりと聲の高低緩急によつてすべての意味を想像する他はなかつた。

やがて Agoglia の椿姬が華美な卵色の衣裳に數限りもなく寶石を輝かして現はれた。見物は一齊に拍手し且つ喜悅に堪へぬらしくワアーツと云ふ聲を立てゝ、彼等が捨てゝ來た故鄉から遙

々廻つて來た女優を歡迎した。

その歡迎に舞臺は暫時行き惱み、椿姬は椿姬としてゞはなく生地の女優として舞臺から見物の熱烈なる歡聲に感謝の意を表し、あまたゝび腰をかゞめ、あまたゝび濃き紅の唇に掌を觸れては接吻を撒き散らすのであつた。

女優は全く肉體の美を缺いてゐた。美しくないと云ふよりも醜いと云ふ方が正直である。額に低く前髮を押しつけて無理に形をつけてはゐるけれども大きなお凸はかくしきれなかつた。頰骨の張つたゴツゴツした顏の形は自分の最も嫌ふ猫の顏である。さうしてその高い頰骨の上に大き過ぎて愛嬌にはならぬ黑子がある。太い首、柔かみのない肩腰の肉づき、と一々數へて行つて何處にも取りどころを見出さないのみか、その立姿は極めて低い脊の如何ともする事の出來ない不可抗の缺點を示してゐるのである。且又醜い女ながらひどくコケテイツシュに見えるのが、其時の自分には惡女の深情けと云ふ連想を起させた。

序幕は見物を失望せしめた。感情を抑へる事を知らぬ伊太利亞人の客ばかりであるから、あつちでもこつちでも故意とらしくざわめき、聞えよがしに欠伸をする者がゐるのであつた。

女優は容貌が美しくないばかりでなく聲も亦決してチヤアミングなものではなかつた。不快な

聲ではないけれども所謂澄み渡つた清い聲でもなく、人の心に押迫る力ある聲でもなく、至極ありふれた聲であつた。かくの如くあらゆる點に於て美しくない女優が、お粗末な舞臺裝置の前で動きのない此の幕の間我儘な見物をして緊張した心地にあらしめる事は至難の業に違ひない。幕が下りても拍手も起らず、二三人お義理に手を叩いた者もあつたがそれさへ直ぐに叱々の聲に葬むられてしまつた。そして見物は吾れ勝に外套を着、帽子をかぶつて場外に出て行くので、自分は彼等が立去つてしまつたものと思ひ、その氣の早いのに驚いたが、自分自身もあんまりあつけない芝居らしいので駄目だとあきらめて居た。

あかりがつくと隣席の女の横顔がくつきりと目の前に浮んで來た。目鼻口耳すべてが細い線でなりたつたいゝ顔立ちで、皮膚も英米の女にはない底にうすく濁りを帶びた色なのがかへつて情深く思はれる。黑い天鵞絨の着物の胸にうす卵色の薔薇の花をさしてゐるのが單純で力強い效果を與へてゐる。どうかして正面から拜み度いと思つたが、他の有象無象のざわめく中で、その人ばかりは身動きもしないので、あく迄も正しい横顔の大理石に刻んだやうな鼻のさきにあかりがさして透き通るやうなのを面白いと思つて盗み見た。

亭主らしい男は頑丈造りの色のどす黑い勞働者によく見る型の男だつたが、みなりは立派で且

つものものしいカイゼル髭を蓄へてゐる。絶えずそれをひねりながら女にむかつてしきりに何か話しかける。女の方はそれに對してもあまり返事もしず口數の少ないのが、なんとなくありがたかつた。

二幕目の幕があくと、先刻場外に出て行つた連中がぞろぞろ歸つて來た。下等なブオヲデビルのならひとして幕合ひ毎に戸外に出ては、酒場で引かけて來る自由を客に與へてゐるのであつた。此の幕も亦最初は見物の倦怠を招いた。女優の注意深い、あて込みのない藝風は、肉體の美を缺く爲めに、いたづらに陰氣な單調なものになり易かつた。けれども其の間に自分は此の女優の特徴を少しづゝ見出して行く事が出來た。

Aguglia は誰よりもよく自分自身の特徴と缺點を知悉して居るらしく見える。一擧一動にも細かく氣を配り、かりそめの手足の置きどころも工夫苦心の結果らしく考へられる。しかし其の苦心も苦心負けがして舞臺は暗く寂しく生氣を失つて行く傾が無いとは云へない。

何處となく此の女優の寂しい藝風は喜多村緑郎のそれに似てゐるやうに思はれた。喜多村の芝居と云つても五つか六つ位しか見た事はないのだけれど、有名な工夫屋だと聞く彼の舞臺は消極的で時に細かい味ひの到底他の役者の企て及ばない寂しみを出すけれども、その寂しさはともす

ると單調なくすんだ色合ひのものになりやすい。動作(しぐさ)の多い時には他の役者のやうに演過(しすぎ)るいやみがなく度をはづす恐れのないかはりに、動きの少ない時には考へ落ちに落ちて舞臺の暗くなる事がある。 Aguglia の場合にも自分は同じ物足りなさを感じた。此の時の自分は女優の苦心が持來した舞臺上の效果を味ふよりも、苦心そのものに興味をつないでゐたやうである。

けれども劇が進むに從つて、女優の持つてゐる力は次第に強く押廣がり、工夫に工夫のあとを止めず極めて自然な動作として現はれて來た。同時に女優の全身は情熱に燃え初め、底力のある壓迫を見る者の胸に加へて來た。騒々しい行儀の惡い見物も尊き技藝の持つ威に打たれて靜まり、舞臺の上の女優のまばたきをさへ見逃さぬ緊張した心持が場內にすべて行きわたつた。

さうして人々の心が次に起る可き事件を息を殺して待ち構へる迄誘はれて行つた時、恰も舞臺は悲劇の頂點(クライマツクス)に達せんと加速度で進んでゆくところであつた。

椿姫はアルモンドの手紙を讀んで居る。女優の技巧は俄に光輝(ひかり)を加へて來た。文字を讀み下す目蓋(まぶた)は震へ、堅く結んだ唇は乾いて痙攣し、指輪の輝く白い指は蛇のやうに微妙に動いた。

今迄他人だつた見物と役者とは既に全く相觸れて居た。女優の一擧一動が直(ただ)ちに見物の一擧一動であつた。工夫と結果とは融合して力強く押迫るのが、喜多村のあく迄も消極的なのとは全然

性質の異なるものとなつて現はれて來た。

女優の黑い瞳の流るゝまゝにひきつけられて從つて行く見物は、咽び泣きに震へる殆んど聽き取り難い程かすかな苦悶の叫びをさへ聽きもらさなかつたに違ひない。舞臺の片隅の長椅子に顏を埋め、見物に背を向けて嗚咽する女の露なる肩の肉――その一片の震へる白い肉が、すべて彼女の内心の苦悶を語つてあまりあるものだつた。

此の時の女優の苦痛の表情は非常に肉感的だつた。その笑ふ時よりも人をひきつける力の強く思はれる複雜な表情だつた。且吾々は女優の技藝の高潮に達した時には、女優の肉體の美しからぬ事、衣裳のお粗末な事、背景の劣惡な事を一切忘れた。ただ目の前に迫るものは一人の女――悶え泣く女であつた。

幕が下りると見物は一時に吐息をした。その後に堪へきれない急調な拍手が起つた。一度下りた幕が卷上つて舞臺の中央に女優が現はれた時は抑へても抑へきれない喝采が熱狂した人々の間に湧上つた。

女優は今方の全身の力を盡した演技に疲れて、胸の鼓動の高く波打つまゝ幾度となく呼び出されては身を低くして挨拶した。

四幕目の幕があくと自分は再び背景の極端に粗惡なのに驚かされた。思ひ切つて眞赤な室內の壁紙、思ひ切つて濃き栗色の板扉(いたど)は安繪具の毒々しさを極めて、その背景の前に立つ一切の物を壓倒した。自分の目に迫るものは役者の演技ではなく、たゞ赤と栗色を見詰める上目の痛くなる色彩であつた。

椿姬の愛人の役をつとめる Agnglia の相手役者 Sterni は肩幅の廣いがつしりした若者であつたが容貌は極めて美しかつた。自分は彼の美貌を好む。

敢て芝居と限らず、路上を行く時でも行き違ふ男女の中に自分の知つてる誰かに似てる人を見つけるのは自分の一つの樂しみである。極めてよく似た人を探した時の嬉しさはなんとも云へない位で、あんまりよく似て居る時なぞはうれしいやうなくすぐつたいやうな氣持がして思はずしらず笑ひ出してしまふ事もある。ケムブリツヂの下宿の直ぐ近くに住んでる學生で、友人梶原可吉氏に歩きつき迄そつくりなのがゐる。度々路で會ふ生徒の一人に、澤木梢氏を想ひ出させるのがゐる。その人々に出會ふのを每朝の樂しみにして、逢へなかつた時は何か惡い兆(きざし)でゞもあるやうに心がゝりを覺えもする。つい此間友だちに誘はれて見た探偵芝居に出て來た女優の中に、日本の或閨秀作家にいきうつしなのがゐた。あゝ云ふ顏は每日違つて見え、髮の結ひ方で他人かと

思ふ程見違へる顏立ちである。春になると虫齒が痛み其の頃は一層女らしい感じのする顏立ちである。あんまりよく似てゐるのが面白く、又何となく心がゝりで、そのつまらない芝居を二度見たりした。

Sterniが初めて舞臺に現はれた時、直ぐに誰か自分の知つてる人に似た顏だと思つた。誰だらう誰だらうと、その事ばかりが氣になつて、かんじんの芝居をお留守にして考へた。なかなか想ひ出せなかつたのは彼に似てゐる人が男性でなかつたからである。それはつい先頃自分の友だちと結婚した他所の令孃に似てゐたのである。けれども彼がその令孃に似てゐると云つて、決して彼の顏立ちは女性的ではなく、その美人の評判の高かつた令孃が男らしい顏立ちだつたのである。

漸くにして誰に似てゐるかを想ひ出して自分は安心した。Sterniは力のあるほがらかな聲を持つてゐる。自分の氣儘に描くアルモンドにしては強過ぎるやうにも思はれ、殊に四幕目の女の心變りを怒る場では、度に過ぎた感情の激發を示して稍ともすると無闇に狂暴なる憤怒に終らうとする恨みがあつたが、それでも南歐の血の氣の多い人に特有なパツショネートな藝風を自分は寧ろ好ましく思つた。

けれども幕が下りた後、最も鮮明に自分に殘つたものは、椿姫でもなくその愛人でもなく、彼の赤と栗色の不快なる安繪具の眩惑である。

さもあらばあれ大詰の死んで行く椿姫は女優の量り知られぬ細密な技藝を最もよく示すものであつた。蒼ざめた顏の目蓋の邊りは暗くかげり、泣き濡れた後の今は熱病む乾いた瞳、これはつて滑かには動かぬ唇、その唇をもるゝ嗄れ嗄れの聲、すべての苦心は苦心のあとを止めず自然のまゝに陰鬱なる臨終を描き出した。

日本の役者の演じた椿姫の死は必ず滿場の女客の淚をしぼつたに違ひないが、Aguglia の椿姫の臨終は淚を誘ふ寂しみのまさつた哀れさではなかつた。女優のもたらした舞臺效果は決してさうセンチメンタルなものではなく、生ける生の亡びて行く肉體の苦痛を強く感ぜしめた。苦痛の中の女は幾度となく己が病み亂れたる髮をかきむしり床の側に膝まづく愛人の方に惱亂せる震へを帶びた手を差し延べた。死の瞬間にも忘れぬ執着の惱みに震へた手であつた。

芝居がはねて歸る時に二日目三日目四日目の切符を買ひ求めた。

自分は非常に疲れてゐた。何時でも芝居に行けば疲れるのは誰しもの事であらうが、其の夜の疲勞は自分自身が劇中の人と同じ痛苦に惱み疲れたのだと思はれる程であつた。

二日目の夜は昨日にひきかへて靜かに冴え渡り、凍てついた家々の窓に町の物音の反響する風の無い星空だつた。

自分は芝居に急ぎながら、既にホフマンスタアルの情熱の詩を華々しいものにして幻想しつゝあつた。我が伊太利亞の女優はあの美しいせりふを如何に熱烈なる調子で聽かせるであらう、例によつて熱狂的な憧憬に自分は胸ををどらせてゐた。

自分の席は昨夜とは違つてゐたのに、隣席には再び昨夜の夫婦が來た。今日は自分の方が通路に近かつたので、カイゼル髭の亭主の方が直ぐの隣りに坐つた。一人間を置いた方が反つて女の形のいゝ横顏を見るのに都合がよかつた。

女は昨夜と同じ服裝だつたが胸にさした薔薇の花はもとより一夜で散つたであらう、今宵は紫の菫の束であつた。誰の小說だつたか忘れたが、父を失つた娘が黑い喪服には何の花が一番似合ふかを鏡の前で考へた末、僅か二三本の紫の菫を胸にさして、やがて慰藉に來る筈の戀人を待つと云ふ一節があつた。心憎い巧みな描寫だと思つたが、隣席の女の姿をそれに結びつけてうれしく思つた。

幕があく。狹い舞臺を一層狹く限つた庭の書割はお粗末を極め、むかつて右手の建物も、左手

によつた石造りの井戸もすべて貧しい景色であつた。その黃昏の井戸の邊りに二人の召使の女が水瓶を持つて立つてゐる。一言二言せりふの取りかはされると、直ぐに Anglia のエレクトラが小走に現はれる。見物は其の姿に旣に血を湧かして歡聲をあげ、どうしても舞臺を他所にして挨拶させなければ承知しない。

エレクトラは蒼いと云ふよりも灰色に近い顏色をし、髮をふり亂し、鼠色の布をぐるぐる身體に卷きつけ、露はな足には草鞋に似た金色の靴をはいてゐる。二度三度喝采に報いた後エレクトラは舞臺を退く。

ただ一瞬間ではあつたがエレクトラの肉體は衰へて行きながら復讐の恨みに燃える一念にのみ生きてゐる姿が暗い舞臺に浮上つてゐた。

原作によれば召使ひの女は五六人出たやうに記憶するが無人の此の一座ではやむを得ないのであらう、僅に二人丈だつた。それが引込むと直ぐにエレクトラが再び現はれて長いせりふになり、さうしてエレクトラの殆んど一人芝居とも云ふ可き芝居が始まつた。

激烈なエモオションを表白するのに女優は三尺四方の舞臺さへあれば足れりとしたであらう。大げさな運動なしに、內部に波打つ感激はあらゆる變化を以て現はされた。よく動く顏面の筋肉

は絶えず起伏する情緒とともに移りかはり、さうしてその動くがまゝに動く復讐の念は次第に強度を強めて行く。かゝる感情の表白に肉體を苛む Agglia の胸の鼓動は如何にも苦しく、聲は自然に嗄れて行き、物狂はしく倒れ伏して地上をかきむしる時は女優の息は絶えるのではないかと思はれた。

エレクトラの妹は Zoppetti と云ふ若い美しい女優だつた。昨日の芝居の仕出しにも出てゐたに違ひないが自分は認めなかつたのだ。濡れ色の瞳のよく動く顔立ちが自分の嫂に似てゐた。どうかして伏目になるとロセツチの繪の女にも似てゐた。いきいきした目を持つてゐるにもかゝはらず、細そりした姿形から眉根の影を帶びやすいのが寂しい風情だつた。けれども自分をひきつけたのはその寂しい風情だけで舞臺の上の役者としては全く物足りなかつた。自分の番が廻つて來ると、暗記したせりふをそのまゝ讀みあげるやうな素人くさいところが目立つ。

姉妹の母になる肥りかへつた Angeloni は極端に人の好さゝうな藝の無い女であつた。

Agglia のエレクトラは全く情熱の燃ゆるが如き強き表現であつた。此の忍耐強い女優の藝風は、それを一時的に誇張した表白に取らず、連續して執念深く抉つて行くやうな深刻な効果を與へんとつとめてゐた。

しかしながら長い時間を取る芝居の始めから終り迄、全力を盡して內部の苦悶を現はす事にのみ傾注してゐる女優の限りある肉體は次第に疲勞して來たやうに思はれる。

自分の勝手に想像するエレクトラは、身の丈は高く、備はれる氣高さをも持つ女であつたが、その點に於て Aguglia は自分の描くエレクトラの資格を全然缺いてゐる。脊は低く、それを補ふ爲めに一インチ以上もある靴をはいたのでかへつてをかしかつた。幾度見直しても醜く、且つ下品な顏である。聲は美しい詩的なせりふには適してゐず、時々は病的に咽喉につかへる惱みさへあつた。女優が最も苦心を極めるのは、如何にして先天的の肉體の缺點に打勝たうかと言ふ點にあると思はれる程、その姿は災した。かゝる事を考へ得る餘裕のある時は、女優の舞臺は重苦しく色彩を失つて行く時である。女優の苦心が全き力となつて現はれ、見物をしてその缺點を忘れしめた時は卽ち女優の情感的な演技の高潮に達した時なのである。Aguglia の態度には他の多くの女優に見るが如き、舞臺の上の役を忘れて單に役者を商賣にしてゐる女として見物に媚びるところが少しもなく、與へられたる役を命賭けでつとめる熱心と苦心の他に心のない有様に見える。

女優の全力的演技——それを自分は肉體の缺點とあく迄も努力を續けて打勝たんとする技藝と

の闘爭だと思ひもする――は見てゐても傷ましい思ひがあつた。殊に女優の精力が弱つて來て顏面の表情にも疲勞が現はれて來てからは、一層此の感を深くした。

自分は見てゐてもハラハラして來た。聲はいたづらに粗く亂れんとし、父の仇敵を呪ふせりふも路傍の女の漫罵に近くならんとして來た。狂熱は藝の範圍を越えた。一度女優の演技に魅せられ吾を忘れて頂點迄のぼりつめた見物の心に、再び批判を思ひ出す冷めたさに襲はれて來たのであらう、何處となく場內の氣配は緊張を失ひ、騷々しい衣擦れの音がうるさく耳について來る。

かくてその苦しい闘爭――どうしても技藝の完全に達せんとし、漸くつのり來る疲勞に打勝たんとする努力に一層精力を盡すため、身心の力のすべてを失つたものゝ如く、Agugliaのエレクトラは地上に倒れ、その動かざる姿を靜にかくして幕は下りた。

再び喝采裡に捲上つた幕のうしろに頭をたれて立つた女優の疲勞しつくした姿は見るも殘酷なものであつた。波打つ胸を押へ、亂れたる額に強ゐて笑を湛へて喝采に應へる女優の目は、愛嬌をつくつて笑を浮べんとしても、なほエレクトラが復讐の表情をとゞめてひきつつてゐた。

一杯の麥酒に乾いた咽喉をうるほし、かへりの地下鐵道に身を置いた自分は昨夜よりも更に疲勞を重ねて、氣はものうく身體は重く、それでゐて頭は妙に冴えてゐた。

三日目の「フェドラ」を見に行く時は、自分は少し氣分が惡く額に手をあてゝ見ると多少熱もあつた。ふだんは丈夫なくせに、ふとした風邪にも必ず發熱し、發熱すれば直ぐに四十度近くのぼるのをおきまりとする自分は些か不安になつて體溫器を檢して見た。その體溫器は日本を出る時母が注意深く心にかけてくれたものである。病氣になれば直ぐ醫者に見て貰ふからそんなものはいらないと拒んだけれど、かさばるものでないからと云つて、下熱劑催眠劑その他四五種の粉藥と一緒に無理に鞄の中に入れてくれた。氣候の變化の激しい土地に馴れぬためケムブリツヂに來ると直ぐ病氣をして樣子のわからない旅の心細さを知つた時も、自分はその體溫器を用ゐなかつた。高度の熱をたしかめるのがいやだつたのである。それなのに今日は外出をひかへてゐるので人中でみつともない事があつてはと思つて檢して見たのである。ところがまだ一度もつかつた事もない中に、母の心づくしの體溫器はこはれてゐて水銀は固つたまゝどうしても上らなかつた。

行かうかよさうかと暫時考へてゐたが、たうとう足はボストンに向いてしまつた。心の底にはAgugliaのすぐれたる舞臺を想像するばかりでなく、今日もあの天鵞絨の女は來るだらうかなどと考へてゐた。

自分は天鵞絨を好む。その淡い光は夕凪の海の落着いた深さ柔かさを持ち、その指さきに觸れ

る溫かさは、母の乳を探つた心地を思ひ出させる。着物としても天鵞絨は好きである。步むがまゝにひだをつくる女の裾の、絹のやうにキスキスした響をたてず、しつとりと波打つのがゆきずりの女の姿ながら嬉しいものに思はれるのであつた。

彼の伊太利亜の女には殊にその黑い天鵞絨が似合つてゐた。細面の蒼白い顏は際立つて美しかつた。胸にさした一昨日の薔薇も昨夜の菫も心憎い風情であつた。今宵は何の花をえらぶだらうか、矢張り天鵞絨の同じ服がいゝ、あのまゝの服裝でたゞ花のみは新らしい調和を見せて貰ひ度い、そんな事迄想つてゐた。

芝居の客は相變らず伊太利亜人ばつかりで相變らず酒氣の顏にあらはれた連中が多かつた。土間の客は大概初日から續けて來る連中で、たつた一人の見馴れないヂャツプをいかにも珍しく思ふらしく、自分は屢々人々の視線の避け場所に困つた。

不思議にも天鵞絨の女は今夜も亦自分の隣席だつた。自分が希つた如く同じ服裝で、胸には白いカアネーションを一輪さした。あの花の香は蟲干の日になつかしい母親の古風な着物にしみて殘つてゐる麝香の匂ひである。女は花屋の店頭に立つた時、あの金の腕輪の光るしなやかな手をさしのばし、きやしやな指さきに細い莖を持つてその花の香を試みたに違ひない。幕あきを待つ

間に自分は美しい横顔をたのしみながら想像した。

幕合に女の夫なるカイゼルは自分よりも一層拙い英語で、毎晩隣り合ふのは不思議だと切出し、それから Aguglia の偉大さを國を愛する熱情を籠めて說き初め、亞米利加には役者らしい役者は一人もゐない、亞米利加人は藝術を解さぬ國民である、と日頃の不平を加へて熱心にどもりながら云ふのである。さうして自分が伊太利亞語も知らずに毎晩ケムブリツヂから通つて來ると聞いてひどくよろこんでゐた。女は英語を解さぬらしく、カイゼルが伊太利亞語で自分の事を紹介してゐる樣子であつた。

「エレクトラ」は自分には「椿姬」よりも深い印象を殘したが、それは主として Aguglia 一人にかゝる興味である。全體としては決してすぐれた出來ではなかつた。一座の者の出來榮えから見たならば「椿姬」の方が遙に上であつた。此の點に於て「フエドラ」は一層よかつた。「椿姬」では椿姬「エレクトラ」ではエレクトラ、と殆んど Aguglia 一人にばかり興味が集注されてゐたのに此の芝居では Aguglia のフヱドラのよかつたのはもとよりとして、他の役々殊に美しき Zoppetti の伯爵夫人、Sterni のロリの如きも光彩を加へたものだつた。想ふに Zoppetti はコメデイエンとして相當の技倆を持つてゐるらしい。容貌の美しい事、聲のいゝ事はありふれた會話のや

りとりにも人をひきつける一得がある。その上に亞米利加の女優が專一に心掛ける場當り、無意味に見物に向つて笑顏をつくり、媚を賣る厭味がなく、自然にして巧まざる快い心持を舞臺の上に漂はした。Sterni はアングロサクソンの民の持たぬ熱情を持つてゐる。

役者の衣裳は流石に變つたけれども背景は持合せが無いと見えて「椿姫」の時と同じものも用ゐられた。彼の駄菓子の繪の具で塗られた赤と栗色の壁紙を以て圍まれた室内で、又他の悲劇が演じられたのである。

Aguglia は再び喜多村を想はせた。殊に初めの二幕は控へ目にと心掛けたので一層その感が深かつた。けれども此の女優の忍耐強い演技は始めからしまひ迄漸增的に力を加へて三幕目のクライマツクスを過ぎてカタストロフに至る迄決して舞臺に空隙を殘さなかつた。

曾て本鄕座で伊井喜多村藤澤と云ふ顏觸の一座が泉鏡花先生の小說「白鷺」を脚色した芝居を演たのを見た。幾幕目だつたか舞臺では伊井が厭味な動作をして泣いてゐた。すると隣の桝にゐた銀杏返しの町娘が自分もハンケチで淚を拭きながら、伊井はほんとに泣くところが上手だわねえと連の娘にさゝやくと、その娘も貰ひ泣きしながらうなづいた。自分はその場の伊井の動作を頗る不快に思つてゐたので、まんざらでもない娘だつたが憎らしいおちやつぴいだと思つた。

Agglia の咽び泣く姿を見てゆくりなくもその時の事を想ひ出した。今度は自分が此の女優の咽び泣きを賞讃したい心持ちだつた。女優の泣く姿は哀れとかしをらしいと云ふ風情ではなかつた。ほんとに涙が咽喉に詰つて泣いても聲の出ない苦しさである。ほんとに泣き死ぬのではないかと不安になつて來る苦しさである。

最後の幕は殆んどパントマイムに近いせりふのない幕だつたが、刻一刻と殆んど限りなき變化をつくす微細にして豐富な感情を示し、復讐に對する忿怒の怖ろしい結果から人間が耐へ忍び得らるゝ極度に達した苦痛を、女優は吾々の目の前に描き出した。嫉妬忿怒恐怖悔恨憐憫あらゆる感情の起るがまゝに女優の肉體は鋭くそれを感じるやうに見えた。

子供の時分に見せられた芝居で最も長く記憶に殘つたのは、殘酷な殺し場や切腹場で血まみれの役者が手足をもがきながら極力示さんとする死際の光景であつた。舞臺の上に血まみれを見る事をよろこばぬ西洋の芝居の斬合ひや自殺の手輕なのは、凄い殺氣立つた芝居ばかり見て育つた者にはをかしい位である。

然るに Agglia は毒藥の體内に廻り行き、最後の息の絕える迄の經過を日本の芝居の細かさで演じた。振り亂した髮をかきむしり、自の唇を裂かんとする程の極端な型も見せた、手と足と

あらゆる苦痛の姿體を示す間には齒ぎしりの音も高く響いた。自分はそれを度に過ぎた細工だと思ふ反感を持ちながらも、眞に全身毒に惱む苦痛を力強く感じた事を否定する事は出來ない。

フェドラは悶え苦しんで死んだ。その死骸は寢臺から落ちて床の上に横はつた。誰一人として物音を立てた者もなかつた。幕が下りて暫時してから初めて思ひ出された狂熱の拍手喝采が幾度となく女優を幕外に呼出した。

カイゼルは歸り際に自分に握手を求めて Good night を云つて別れた。女は默つて笑顏で會釋して行つた。

氣づかつた熱はのぼつたとも思はず、たゞ連夜の芝居見物の爲めであらうか疲勞は一層甚はだしく、場外に出ると冷い冬の夜を殊更強く感じた。

次の朝目覺めた自分は深き疲勞に起き上る氣力もなく、愚圖々々して正午近く迄寢床の中にゐた。

氣分の惡いのは今日も引きつゞき、確かにまだ熱がある、それにしても此の疲勞は Aguglia の芝居の爲めのやうに思はれる。女優の演技はどうしても見物をして他人の心では見せしめぬ力がある。冷かに悧巧さうに批判しつゝ見る事を許さない力を持つてゐる。女優の情熱的な、感覺

的な特點は直ちに見る者の上にも襲ひかゝり、實際幕のあがつてゐる間に人は女優をうまいともまづいとも考へる餘裕を持たなかつたゞらう。たゞ女優の動作表情のまゝに共に動かされてゐたに違ひない。自分の疲勞も其の爲めに強いのであらうと思つた。

午後から學校の授業に出席して見たが講義は少しも頭に入らず、ぼんやりしてゐると魔睡劑のきいてゆく心持に陷るのであつた。その間にも自分は今夜の「サロメ」の強烈な舞臺を想像してゐた。四日間の出物(だしもの)の中でも最も期待されたものである。銀の皿に盛られた豫言者の首に接吻する半裸體の女はありありと目の前に浮んで來る。

夕方食堂に行くと今日の夕刊新聞で讀んだ記事を話題にしてゐた人達の中で、女學校で英詩を講義してゐる老孃(オールドミス)が「サロメ」の上場が禁止されたと云ふ話を持出した。二三日前ハブ・セアタアの所在(ありか)を尋ねたのを覺えてゐて、皆(みんな)が自分に話を向ける。自分はあらん限りの稱讚をAgugliaの爲めに惜しまなかつたが、ピカピカした劇場でキャンデイを喰べながら不作法に笑ふのをよろこぶ米人の常として、貧しい場末の町の名も無い芝居に行く事は見榮にも樂しみにもならないので伊太利亞語で演(す)るのではわからないとか、又は米人の得意とする云ひぐさ——芝居はエンタアテインメントを目的とする場所だから悲劇(トラヂエデイ)はいけない、と云ふ意味の言葉をうるさく繰返へし、そ

んな芝居に興味を持つ者はいかにもレファインされてゐない人間であると云はんばかり、生意氣を鼻のさきに浮べてゐるのであつた。そして「サロメ」の禁止は道德宗教藝術等あらゆる方面から見て當然だと云ふのであつた。

自分は部屋にかへると戸口に置いて行かれた夕刊を開いて一大事のやうにその記事を求めた。「サロメ」禁止の記事は簡短である。

今晩ハブ・セアタアに於て伊太利亞の女優 Mimi Aguglia によつて演ぜらる可き筈なりしオスカア・ワイルドの「サロメ」は其の筋より禁止されたり。王はサロメに求められて豫言者の首を斬らしめたるが、「サロメ」の上場を禁止するに至らしめしものは誰ぞ。道德的ヒステリアにかゝれるボストンの市民ならずして誰ならん。

それから「サロメ」のかはりとしては現代伊太利亞の作家 Roberto Bracco の悲喜劇 Nemmeno un Bacio(Not Even a Kiss)が上場される筈だと書いてあつた。

自分はがつかりして寢臺の上に横になつた。横になると疲勞は更に重く押し迫り、抵抗力の無い睡眠に捕はれて來る。今夜は芝居はやめにしようと思ふと何だか責任を免れたやうな氣安さもあつたが、又殘り惜しくも思はれて來る。これつきり二度とは Aguglia の芝居も見られないか

も知れないと思ふ側から、天鵞絨の女の横顔も誘ひかける。今夜はもつと近しくなるに違ひない、あのなだらかにふくらんだ胸にはカアネーションの次ぎに何が匂ふであらうか。自分は暫時決しかねてうつらうつらしてゐたが、一度やはらかな枕の上に親しく置かれた頭は益々重くなつて、今は持上げる氣力もなくなつてしまつた。

寢たまゝ胸のかくしに手を入れて今夜の芝居の切符を探り出すと、思ひ切つてきれぎれに破いて室内にまきちらした。

それで一方の心を片附けた安堵を得て、自分はかへりみる事もなく疲勞の眠りに身を任せた。再び熱が額にのぼつて行く氣持がする。（大正三年四月二十五日）

ロバアトソンの一世一代

はしがき

自分が日本を發つて北米合衆國マサチユセツ州ケムブリツヂに落着いて、間もなくの事であつた。丁度同じ頃にこれも初旅のロンドンに行つた小泉信三氏から Sir Johnston Forbes-Robertson のハムレツトの繪端書を送つてくれた。有名な役者の事とてロバアトソンの名は自分でさへ餘程以前に聞き覺えてゐたし、何かの雜誌にその舞台面の寫眞の出てゐたのを見たこともあるやうに思ふ。けれどもそれがどんな寫眞だつたかは明瞭しないから、小泉氏の繪端書で見たのが自分の心に刻まれたロバアトソンの姿の最初のものだと云つてもいゝ。

その端書のハムレツトは半身でいかにも寫眞の爲めに特にレンズにむかつたものらしく正面から撮したもので、ロバアトソンは稍顔をうつむけ氣味にして、目は少し上目だつた。

一目見て自分はロバアトソンが大好きになつてしまつた。好きと云ふよりももつと尊敬の念の伴ふ特殊の感情の湧起るのを止めかねた程力に充ちたいゝ顏である。

思慮の深い廣い額、鋭い光と柔かな笑を含む目、小鼻の締つた正しい鼻、大きく一文字に引いた意志の強い唇、豐かな耳とひとつひとつ數へるよりも一目見て直ちに感じたのは崇高な人格を持つ人の顏である。若い時からあつたか如何かは知らないが顏面のところどころに極めて思ひ切つた深い皺の描かれてゐるのも自分には好ましかつた。眉際の立皺、小鼻から口尻をかすめて長く延びた一線など非凡な彫刻家の羨望する顏ではないか。

壁に掛けて毎日見て飽かなかつた。學校から疲れて歸つて來た時も、その力ある眼光の自分の方に向いてゐるのを見ると新しい元氣を回復するやうな氣もした。

どうしても高貴な、面と向ふと威に打たれる顏である。どうしても馬鹿に出來ない顏である。自分はフト我が父の顏を想ひ比べて似てゐると思つた。

ロバアトソンは筋立つた細面であるが父は豐頰の丸顏である。ロバアトソンの稍角張つた幅の割に薄い胸は父の厚い胸とは全く違ふ。脊の高さうなのはロバアトソンで父は寧ろ低い方である。かくの如く大體の輪郭は全く違ふけれども直ちに人に迫る顏面の感じに否む可らざる相似を見た

のである。

父の顔にもロバアトソンと同じやうな深い立皺がある。ロバアトソン程大きくないが堅く締つて容易に開かぬ唇、物を見る時鋭い光を持ち、それでゐて笑ふ時は思ひも掛けぬ愛嬌皺の目尻に浮び出る事なども自分をして二人の間に似たところのあるのを認めさせるのに力があつたであらうが、それよりもその顔を見守る時、近づき難い氣持の起るところが最大の共通點である事に自分は直ちに思ひ到つた。

父の前に出ると口がきけなくなると云つた人が澤山ある。自分は父の前では戯談（じやうだん）を云ふ氣持になれない、どうしても膝を正して眞面目になつてしまふ。父に叱られた記憶を辿つて見ても、自分は叱られながら父を尊敬してゐた。どうしても生意氣な口返答をする餘裕はなかつた。若し反抗するならば直ちに腕力に訴へるほかにないと思ふ壓迫を感じた。さうして自分は曾て父を馬鹿にする氣になつた事は一度もない。

自分はロバアトソンの寫眞を父の寫眞と並べてかけた。時にはあまり嚴（おごそ）かな氣持になつて堪へられぬ事もあるが、又時には意氣地のない貧弱な自分をしてその前に膝まづかせ度く思ふ宗教的感情を起して長く見詰める事もあつた。

小泉氏には手紙の度毎に禮を云つた。自分の好きな顏はあれなんだと繰返へして書いた。それ程自分は興奮してゐた。

小泉氏からは、ロバアトソンが氣に入つたと聞いて調子に乘り今度は誰某のを送るなど丶書いて他の名高い役者の寫眞を引續いて澤山寄越してくれた。子供の時からの友だちで我儘者の自分を許してつきあつてくれる人であるから自分の片寄つた好みはよく承知してゐて、どれもこれも自分の好きなものであつた。しかし世に尊いものは稀である。いかに小泉氏が心を盡してくれても無いものは得られやう筈がない。自分はロバアトソンと比ぶ可き立派な顏の持主のないのを寧ろよろこんだ。

そのフオオブス・ロバアトソンが一世一代としてボストンの Shubert Theatre に來ると云ふ芝居消息(だより)を或朝の新聞で見た時は自分の胸はをどつた。

一月二十六日月曜日より二週間シュウベルト・セアタアに於てフオオブス・ロバアトソン一世一代として出演、

こんな風な短い文句だつたが繰返へして讀んだ。此の英吉利の名優はロンドンに於ける Farewell Appearance を終つてから大西洋を越えて、紐育を始めに亞米利加の重なる都市を順々に

廻り、更に加奈陀の興行を濟せ、それを最後として永久に舞臺から退く筈である。そして紐育の次ぎにはボストンに來ると云ふのであるから、自分は恰も此の國に來てゐて、かゝる名優の舞臺を見る機會に遭遇した幸ひを限りなくよろこんだのである。

HAMLET

未だ文字の讀めない頃はお話を聽くのが何よりも樂しい事であつた。話の上手な祖母や母の膝を枕にして面白い悲しいいろいろの昔噺を聽きながら眠つた心地は今も忘れる事が出來ない。父は殆んど無駄話をした事のない程無口だつたから話は極めて拙かつた。それでも自分は祖母や母の話の種の盡きた時や、祖母や母にうるさがられる時には父にせがんでは無理にも話をきかして貰つた。

祖母や母のとは違つて教訓を含む話が多かつたゝめか、或は父に對する畏敬の念の幼心にも深く刻まれてゐたゝめか、自分は父の話をきく時は膝を正してゐたものである。側にきいてゐる者も皆々行儀よくしてゐたのを見ると父自身が決して膝を崩さぬ人だから自然と他の者も改つてしまふのかもしれないが、それよりも父には人に迫る特殊の力があるのであらうと思ふ。多くは支

那の英雄豪傑君子義人の話であつたが中には西洋の偉い人の逸話もまじつた。ワシントンが父のいつくしんだ木を伐り倒した話、フランクリンの凧の話、ニュウトンが梢の林檎の落るのを見て大なる發見に想ひ到つた話など、錆のある父の聲でポツリポツリ無技巧に話されるのを聞くなつて聽いたものである。中で一番面白かつたのは「リップ・ヴァン・ウインクル」の話であつた。晩酌の醉ひに機嫌のいゝ時、又リップかとせがまれては笑ひながら語り出す父の、リップが山路に迷ひ入つたところで何處ともなくリップの名を呼ぶ聲が聞えて來ると云ふ段になると父は殊更聲を低くして其の聲を眞似た。父の口から如何にも拙く、如何にも迷惑さうな物眞似をきくのを待ちかまへてゐて座にゐる者は笑ふのであつた。

かゝる話の間に自分は父からハムレットの話——恐らくは話の筋を子供に聞かせてもいゝやうに變更して——を聽かされた事を覺えてゐる。ものゝ本などを讀みならふやうになつてから何時とはなしに沙翁に就いての朧氣な知識さへ持つやうになると、好んで集めた西洋の名畫集などの中に屢々彼の黑い服を着た王子の姿を見出してなつかしい心を覺えた。

中學に通つて英語を習ひ初めてから、或年の夏の蟲干に父の書齋の書棚を整理させられた時、古い經濟書の間に小形の皮表紙帙入の沙翁全集のあるのを見出した。沙翁と云へば世界一の文豪

なりと簡短に覺え込んでゐたから如何かしてそれを讀み度いと思つて先づハムレツトの第一頁を開いた。しかし其の頃の自分にはいくら熱心に字引を引いても到底讀める筈はなかつたのである。今日、自分は沙翁の戲曲の中でハムレツトが一番好きである。或はもつと押切つて、所謂古い芝居と新しい芝居を通じてハムレツトは自分の最も好む戲曲だと云つてもいゝ。

芝居としてハムレツトを見たのは帝國劇場で文藝協會の連中の演じたのが初めてゞ、あの時の自分の失望の度の強かつた事も忘れられぬ。新聞や雜誌の批評では同協會の土肥東儀二氏の如き頗る評判がいゝのであるけれども、自分には所謂舊劇と喜劇の臭味が強くて全然感心出來なかつた。

ボストンに來てから見たハムレツトは Robert Mantel. E. H. Sothern 及び John Craig の三人であつた。

何の役を演ても、たとへばシイザアたるとオセロたるとを問はず、生地のクレイグ以外に出る事なく、且つその生地がいかにも武骨で不器用ですべての點に於て Delicacy を缺いてゐるのであるから、ボストン居つきの故を以て其の土地の人から特別の愛顧を受くる風變りの役者ヂョン・クレイグは暫く措き、此の國の沙翁役者としてもてはやさるゝ他の二人について云へばソザアン

には熱心努力に對する報酬として或程度迄同情を強要されるけれども遂に努力に止つて光りある技藝としては現はれず、殊にハムレツトの裝ひをしハムレツトの身ぶりをしハムレツトの臺詞を口にするけれどもハムレツトの心の惱ましさはうかゞひ知る事が出來ず、ともすればドン・キホオテの役を引受く可き役者のやうに見えるのであつた。世間うけはソザアンに比べて稍劣るらしいがマンテルのハムレツトの方が自分には遙によく思はれた。けれども彼のハムレツトも何役を演ても必ずついて廻る特有の冷靜に沈着に過る恨みがあり、これも亦強い意力と腕力から直ちに劍を執つて立ちさうな勇ましいハムレツトであつた。とは云ふものゝソザアン、マンテルのハムレツトを見た時自分は彼等に著るしく缺けたところのあるのを認めながらも相應に立派なハムレツトとして受入れる事を否まなかつた。その缺點を追及するよりもそれより以前に見たハムレツトの貧弱な姿を想ひ出して、彼に引比べてこれら二人が如何に立勝つてゐるかを考へるのに忙しかつたのかもしれない。臺詞にも動作にも癖の多い、品格の無い、チヨコチヨコと鼠のやうに動き廻つた痩つぽちのハムレツトの九州訛も忘れられなかつた。さうして自分は單にソザアン、マンテル等がそのハムレツトの裝ひをした姿を見る丈でもいゝと思つて同じ芝居を二度三度續けて見に行つた。

然るに今ロバアトソンのハムレツトを見るに及んでは彼等が殘した印象も忽ちその色彩を失つて初めに擧げた物足りなさのみが今更明になつて來た。

名優の齢は既に還暦を越え、その皺は深くその聲は若々しい響を失つてゐる故を以て若きデンマアクの王子にふさはずと皮相なる批評を下す者もあつたが、彼らはロバアトソンの表情動作に よつて暗示さるゝ感じ易くかへりみ勝な王子の姿を詩と情熱と思想の世界に認める事の出來ないのを先づ恥辱と知らなければならない。もとより自分とても彼の顏面に、姿體に、殊に膝つきに、足取りに爭はれぬ寄る年の影の迫るのを認めるのである。彼の聲に高く響くところのないのも若い者の身に知らぬ事であらう。しかしその年齡が持ち來つた缺點も名優の身邊を包む光彩を覆ふ事は出來ない。

自分は彼の沈んだ落着いたしかもよく人の心に迄とほる聲を叉なく好む。その聲には若々しさはないけれどもオルガンの深さを有して、ハムレツトの惱ましさを描き出す上にかへつて效果のあつた事を信じて疑はない。殊にゆるく長い獨白の場合に強く壓迫る力の波を描いて延びて行く美しさは比ぶ可きものゝありとも思はれぬものであつた。

自分がハムレツトを好むのは Sensitive であり Reflective である若き王子の常に惱みわづら

ふ震へ易き心の故であらう。此點に於てロバアトソンのハムレツトはソザアンに比しマンテルに比して寧ろ若々しい。

彼のハムレツトは王、后、ポロニアス、レアテス、オフエリア、ホレエシオ、其他その身の廻りに動く人々の心を一々身みづからの心に感じたであらう。或は又あらゆる物、心あるもの心なきものの心に觸れそれを身にしめて感じたであらうと思はれる。他の役者のハムレツトには自分の持役以外に同情がゆきわたらず、相手の臺詞のきれるのを待つて自分の臺詞を云ふ事にのみ專らであつて、相手が如何なる心にあるかには頓着しなかつた事を今にして氣がつくのである。

物にふれるにつけてその瞬間の心は此の瞬間の心ではなく此の瞬間の心は次の瞬間の心ではない王子の思慮は、時には反省を伴ひつゝ深く惱み、時には已れを控へる力を失つて燃ゆるがまゝに燃えさかる。沈痛なる獨白は嚴かに暫時の間保たれるけれども忽ち又泣くが如く恨むが如く訴ふるが如く祈るが如くその聲は高まり、その聲の震へるまゝに全身も亦おのゝく。かゝる時ロバアトソンのオルガンの調を帶びた聲が微妙なる震動を起して吾らの耳に訴へる。

更に又記憶すべきは最もよく內部の苦悶を明かに強く現はしたロバアトソンのハムレツトは、めまぐるしく動き廻つた九州のハムレツトはもとより、ソザアン、マンテル、クレイグ等に比べ

て一番動きの少なかつた事である。玆にロバアトソンの特質の最も偉大なるものがうかゞはれる。即ち彼の演技の特質は形として現はれる運動の簡短なことである。動作の簡素である。力に充ち暗示に富む簡素である。その簡素なる動作の中に一瞬毎に異なるムウドを明瞭に描き出す偉大なる簡素である。凡人の所有する事を許されぬ奥祕の力に觸れた簡素である。熱情に燃ゆる簡素である。

一座の役者の一人一人についても自分は他にこれ程粒の揃つたのはないだらうと思つた。殊に感謝すべきは彼等は些かも自分を現はさうとする臭味がなく、持役に對して忠實な事である。或はロバアトソン一人を浮上らせるために他の役者はすべてその背景以上には考へられてゐないものと見てもいゝ、あくどくなり勝なポロニアスも極めてつゝましく邪魔にならずに冥途に行き、屢々わざとらしい滑稽に安價な喝采を求める墓地の場の墓掘も其日の勞働に忠實な神妙な人足であつた。曲解すれば彼等は自分一個の完全なる舞臺上の存在を持つてゐなかつたとも云へる。ロバアトソンの爲めに甘んじて奴隷となる從順さを示してゐた。それが一層ハムレツトの如き戯曲に於ては有效であつたと思ふ。自分は平民的な近代劇の寫實主義をよろこぶと共に一人の名優の爲めに他を犧牲にする貴族的な舞臺の存在をも否定しない。寧ろハムレツトの如き戯曲に於ては

それでなければいけないとさへ思ふのである。

オフヱリアをつとめるロバアトソン夫人 Gertrude Elliott は、未だ若い上にお凸の目尻の下つた顏で身體つきも締つてゐるいかにも子供々々した人であつた。舞臺に執着の無いのが物足らなくも思はれ、些かもいやみのないのがうれしくも思はれたが、要するに悲劇の役者ではないやうに見えた。

ロバアトソン、ロバアトソン、自分は大詰の幕のしまつた後もなほ明かに目に殘るハムレットの姿をいつくしみながらケムブリツヂに歸へるみちみち、我が部屋の壁にかゝるロバアトソンの寫眞を送つてくれたロンドンの友だちを想つて如何にも生甲斐のある緊張めた心地であつた。

THE LIGHT THAT FAILED

キツプリングの「森林物語」から飜譯した「狼少年」と云ふのは幼時愛讀した「少年世界」に連載され最も自分の愛誦したもので、少し長じてから一巻一號からのその雜誌の積みたまつたのを紙屑にしてしまつた時も「狼少年」の出てゐるの丈は捨てるに忍びないで取つて置いた。今でもそれは自分の本箱の中にある筈である。キツプリング、キツプリング、その名まへからいかにも耳に心

地よく響いた。

それにもかゝはらず自分は今日に至る迄その「狼少年」の飜譯以外にキップリングの作品を讀んだ事がない。

此の地に來てから知合ひになつた人の家などを尋ねると、絶えず何かしら話題を捕へて會話の途切れないやうに心掛けるならはしから、殊に女等は音樂美術文學の嗜好はあるかどうかと云ふやうな事を尋ねる。日本にゐた頃は家の內外何れに於てもこれらのものに心を寄せる事はいたづらに爪彈きされさげすまれる周圍の狀態から自然と口にするのもはゞかり度いやうな氣持になつてゐて、たまたま劇場の廊下や珈琲店の二階などで所謂文壇の士であらうと想像される人々が聲高に藝術論をたゝかはしてゐるのを見聞きする丈でも、他人事ながらヒヤヒヤした。さう云ふ風に馴らされた自分は右のやうな問をかけられる度每に何と答へようかと暫時は思ひ迷ふ癖がついてゐた。それでも噓をつく程の事でもないから文學を好むと云ふと、それでは誰の作品を最も愛するかと次ぎの質問は續いて來る。何と限らずすべての物事に對し好き嫌ひを明かにし、且つ好きときめたら無理にも極度迄好きにしてしまひ度くなる性質の自分も、扨て誰が好きかと問はれて一人一人の名を擇んで答へるのはあまりに大ざつぱに過ぎて後の心が悔るにちがひないから流

石一寸答へしぶる。すると向ふから誰彼の名を擧げて彼の人は好きか此の人の作品を讀んだかと性急にたゝみかける。

さう云ふ風にして屢々人々の口にのぼり其の作品を讀まなくては共に語るに足りないと云ふやうに話されるのはケムブリツヂの事とて詩人ではロングフェロウに及ぶ者はないが、小說家ではスティイブンソンとキツプリングであつた。スティイブンソンのものは學校の教科書として二つ三つ讀まされたが英語の文章の面白味を細かく味ふに足る丈の力の無い自分にはどれもこれも都合のいゝ話でつまらなかつた。キツプリングに至つては前記の「狼少年」が唯一のものであるから到底調子を合せることは出來ない。自分は正直に英吉利の作家のものはあまり讀んでゐない、若し強ゐて自分の好む作家の名を擧げよと云ふのなら今のところ死んだトルストイを第一に數へて置き度い、戯曲の作家ならチエホフである、その他ドストイエフスキイでもツルゲネフでもゴルキイでも露西亞の作家は一體に英吉利はもとより佛蘭西の作家よりも、自分にはよく理解し得られるやうな氣がすると云ふと、人々は仰山に眉をひそめて露西亞の作家は懐疑的で陰鬱でいやだと云ふ。

誰も彼も、女學校でフツトボオル、ベエスボオルに熱中する娘も、來世を信じて疑はぬクリス

チアンサイエンスの姿さんも、スティブンソン、キップリングを讀んでゐる、恰も日本の女學生で「不如歸」を讀まない者のないやうに。

よく我國の教育家や洋行歸りの紳士が、西洋人は職業階級男女を問はず何れも文藝の趣味があつて大作家の作品を讀んでゐると如何にも感服して說くのを屢々聞いたが、かくの如く新聞小說を讀む心持又は單に人も讀むから讀むと云ふ態度で讀み、且つ有名な人の作品だからいゝに違ひないときめてゐるやうな有樣を自分は羨しいとは思はない。寧ろ日本の現在の狀態卽ち父母の時代に屬する者は純文學に對して強き偏見を持ち、少數の專門家が少數の讀者を相手にしていかにもいぢけた繼子根性でやつてゐる方が遙に氣持がよく尊いやうに思はれる。自分が愈々キップリング等の作品を讀む氣のなくなるのもひとつにはかゝる世間一般が愛讀してゐると云ふ事實に對する反感にも負ふところが多いのである。

直き近所に住んでゐて、姉はピアノを教へ妹は女學校に教鞭を取りながらかたはら劇の創作などもしてゐる姉妹の、姉は古典が好き妹は近代のものが好きで自分が遊びに行く度に姉は姉で自分の好む本を持つて來てはこれを讀めあれを讀めとすゝめ、妹は妹で自分の好きな本を持ち出して讀め讀めとすゝめる。そんな風にして無理に貸つけられた本の多くは學校の課業の忙しいのと

あまり興味を引かないのとで暫く手許に止め置いては、讀んだふりをして返へす事にきめてゐたが、それらの本の中に The Light That Failed もあつて讀後の所感を問はれて返事の出來なかつた事があつた。それは餘程前の事だつたがロバアトソンのレパアトリイ中にあると知つたら讀んで置くのだつたと些かは悔まれもした。

其の日夕食の卓子でロバアトソンの話が出て自分にも見に行くかと云ふから、自分は昨夜ハムレットを見、今夜もこれから出かけるところだと云ふと、今夜の出物はキツプリングだから是非見る可きである、自分も來週は必ず行くつもりだ、他のは見なくてもこれ丈は見度くてしかたがない、とその小說を讀んだ時の面白かつた事から說き出して胸を叩いてよろこんでゐる女があると、他の者も之に和してキツプリング、キツプリングと欽仰の聲を張上げて語り合ふのであつた。自分はさう云ふ人々と、他方には芝居に行く事を罪悪視する傾きのある日本人留學生との間に立つ事ををかしく思ひながら寒い夜をボストンに急いだ。

原作を讀まずに初めて見る劇では幕のあがるにつれて少しづゝ現はれる背景、舞臺裝置が特別に注意を引き、知らぬ世界を展開してくれるよろこびがある。此の劇の序幕は埃及に於ける陣營と云ふ Kipplingsque Atmosphere を持つ舞臺に置かれた。けれども粗末な極めて拙劣な背景

は空の色迄もちがふ箬の遠い國の心地をあらはさず、折角の埃及が些かもエキゾテイツクな興味を刺戟しなかつた。

椰子樹の下の天幕を圍んで語り合ふ戰友の聲の絕間に時々幕屋の內から聞えて來る譫言、其人を魅する力ある聲は忽ちに人の注意をその片言隻語を捕へる事にのみ傾けしめる。我が歌舞伎に於て屢々見る揚幕から立役の現はれるのを待つ瞬間の心地で、何時ロバアトソンの Dick Helder が姿を見せるか、その期待ばかりが興味の著しいものになる。

遂に手探りでよろめき出るデイツクの姿に人々は待ちかねたよろこびに堪へ切れずに喝采する。さうして愈々仕出しの存在を危くしつゝロバアトソンの芝居が進行する。

顏面、目の上に負傷し繃帶に卷かれて光を見ぬ此の場のデイツクを演じるのにロバアトソンはその美しい力強い聲を用ゐるのに最もよき機會とした。怪我の爲めに病臥のためにいらいらしてゐる男の聲、その獨白の爲めの序幕ではなかつたらうか、銃をとつて敵にむかつて走り去つた戰友の銃聲を聞きながら高く低く急調に響く獨白、その獨白の爲めの序幕ではなかつたらうか。さうでないならば筋を賣る爲めとしてもあまりにつまらない序幕であつた。

二幕目は女主人公 Maisie の畫室でゲルトルウド・エリオツトのメイシイには持前の些かもい

やみのない極めて自然な演技のうちに、女に特有な無益に執拗な意志を持つところが面白い味ひを見せた、恐らく他の女優だつたらばもつとお芝居にして喝采を購ふ事に努力したであらう。それに對してロバアトソンの男らしい Tenderness を持つ聲と態度がつまらない戲曲に深味を添へた。一寸聞くと低過ぎて音階の少ない彼の聲は、殆んど動かないと云つてもいゝ位動きの少ない動作と俟つて廣く深く變化に富む暗示力を持つてゐる。ロバアトソンは決して鋭い線を以て目に訴へる人の形を描き出さうとはしてゐない、描かるべき人格を見る者の心に暗示するのである。

自分はロバアトソンの聲と動作には Tenderness があると云つたが、これはハムレツトを見た時にもおぼろげに氣がついてゐたが、此の劇の二幕目で殊に明瞭に認める事が出來た。而してそれが若い男女の間に生じる Tenderness でなく、親と子の間に見らるゝ Tenderness であると思つた。其爲めにデイツクとメイシイの間には戀愛よりも別の愛情の存するやうに見え、初めからしまひ迄二人の間に戀愛があるとは考へられなかつた。今になつて思へばハムレツトも后に對しオフエリアに對して親が子に對する慈愛に似た感情を持つてゐたやうな氣がして來た。これはロバアトソンと他の役者との關係、即ち年配も位置も技藝も或間隔をもつてゐると云ふ事からも一層強められたに違ひない。

役柄から見て此の親らしき Tenderness は缺點として擧ぐ可きものかもしれないが、あまり樂しからぬ此の戯曲の兎角散漫になり勝なのを引き締めてゆく上に此の特點が力を持つてゐたと思ふ。正直に云へば自分は舞臺を離れてそのしたしむ可くなつかしむべき心持を起させるやはらぎに老年の父に對する温さを覺えてゐた。從つて自分は自分の癖として又しても劇を批判するよりも劇から引起される殆んど劇とは關係のない感情に勝手に樂しみ耽つてゐたのである。

三幕目のディックの畫室は最も無理な舞臺であつた。男ばかりの宴會客を仕出しにつかつて筋を運ぶのが、ディック一人を浮上らせるためには幾度となく彼等を次の間へ立たせ、又必要な時には呼び出すと云ふやり方で、それは寂しいディックと他の人々の陽氣な心持とを照應させる手段としてもあまりに露骨で智慧がなさ過ぎる。

しかしながらロバアトソンの劇を型として見る時、自分の最も忘れられぬシインは此の一場であつた。

次の間に賑やかに酒を酌む人々の時々あげる高笑ひの通つて來る他には物音もないガランとした畫室に殘つてゐる失明のディックの姿は端然たる容貌である丈に哀れが深かつた。

その時窓の下の往來を過ぎゆく軍隊の樂隊の奏する進行曲が窓ガラスに遮られながらかすかに

聞えて來る。ディツクの胸には健全に光を見たそのかみの、埃及の陣營にさへ加つた時の若々しい血潮が湧きかへつて來る。彼は思はずしらず立上ると聞き耳を立てながら手探りで窓際にたどりゆき、漸くにして窓の扉を大きく開く。同時に流れ入る月光と共に John Rrowns' body lies(太郎がむくろも倒れたり)が一際高く聞えて來る。その曲に合せてディツクは握りしめた拳をあげ遙に窓外に感慨を走せながら"Soldiers! Soldiers!"とつぶやきつゝ足拍子を取つてゐる。その瞬間の稍々ふり仰いだ額から胸にかけて青白い月あかりを浴びた悲壯な美しさを忘れる事が出來ない。

自分は右にあげた場面の如きは一般の人の好みに適ふあり來りの使ひ古しのものである事を否むものではない、たゞかゝる陳腐な場面をも單純なセンチメンタリズムに陷らないで活々した力ある人生の一斷面として見せるロバアトソンを偉なりとするのである。

MICE AND MEN

Madeleine Lucette Ryley なる作者の名を自分は初めて聞く。

自分は文藝の作品に附さるゝ標題に特別の興味を持つてゐるが、Mice and Men と云ふのはい

かにもいき／＼した新しい感じがして嬉しかつた。けれども想像したとはちがつて劇は至極く甘いものだつた。

育兒院の孤兒なる少女を養女にして自分の考へ通りに教へ導き、やがてそれを自分の妻にしようとする浮世に遠い哲學者は結局自分の企ても若い女の萠え出る心を支配せず、たゞ恩愛の情のみが二人の間をつなぐ事を知つて、若き甥の手に娘を殘し、若き二人のピアノに合せて歌ふ歌の聲を後にして立去る、と云ふ筋で筋丈聞くと非常に面白いけれども、推察するに原作者は安値な喜劇として笑ひを購ふ事を目的としたらしくなくもがなと思はれる惡ふざけの場の多いため月並なものになつてしまつた。たゞロバアトソンの厳かな人格が到底惡ふざけを許さないので彼の姿が舞臺に現はれると、本來惡ふざけに陷る可き場も輕いペエソスを殘して特別の味ひを保つ事が出來た。更に邪推を逞しくすれば原作者の描いた心持で演ずれば主人公は馬鹿な學者となる可きを、ロバアトソンの舞臺に於ては世なれぬ學者として現はれたのではなかつたらうか。

年たけた男が初心な小娘を拾ひ上げ、それを自分の思ひ通りに教へ込んだ後で自分の妻にすると云ふのは、たとへ此の戯曲の哲學者の心持に些かも近代的なところはなくとも、自分にはひどく面白く思はれた。さう云ふ結婚ならば自分も試み度いと思ふ。

エリオツトの小娘は最もよく此の女優の特點を發揮した。子供らしいお凸も可愛らしく、ハムレツトのオフエリアの狂亂の時とはうつてかはつた出來であつた。輕いヒユモラスな持ち前の演技がわざとらしい動作(しぐさ)を用ゐずに、殆んど役者が持役を演じてゐると云ふ努力のあとさへ止めぬ程度迄自然に動いた。

昨夜のキツプリングの劇と同じく序幕二幕目三幕目はたゞ大詰の一場を說明するためだつたかの如くつまらなく筋を運んで行く。たまたま現はれる仕出しの見え透いたをかしみが見物をよろこばせるばかりで、淡々たるロバアトソンの哲學者はあまりにお芝居に遠い爲め寧ろ彼等を倦怠に誘つたらしい。そのために一層仕出しのくすぐりを待ちかまへてゐて思ひ切り笑ひませうと云ふ群衆心理が土間から三階迄漲り渡つてゐて、屢々度はづれな笑聲が湧きかへらうとする。けれどもロバアトソンの姿が再び現はれるとその笑聲は其場に不相當なものだつたと氣がつくらしくていい(ママ)これた調子で消えて了ふ。

歐羅巴諸國はいざ知らず亞米利加の芝居客は無智で行儀が惡くて心底から憎む可きである。彼等はどうかして笑ひ度いと待ち構へてゐるので、一寸した事にも聲を惜しまずに笑ひ出す、笑聲を張上げる事によつて自分の存在を舞臺の役者にしらしめんと思ふ色氣を持つてゐるのかと考へ

られる程わざとらしく廣告的に笑ふ。此の笑聲と、ところかまはぬ拍手とは芝居に行く度に癇癪の種になるのである。

それでもロバアトソンの芝居に於ては此のつゝしみのない笑聲が比較的に少なかつた。思ふに、ロバアトソンの前では馬鹿笑ひを恥かしいと思ふ氣持が自然と起るのであらう、習慣的に笑ひ出す者はあつても直きに忍笑ひになつて消えるのであつた。

自分は憎らしい亞米利加人に對してざまあ見やがれと云つてやり度い心持を感じ、且つ實にロバアトソンを尊敬した。

くすぐりを以て綾とした前三幕とは違つて、大詰は稍々古き時代の繪や音樂に引起される上品な淡い情趣につゝまれた。それは確かに花の散るを見て心はかなみ、夕べの雲のうつろひに歎くやうなあり來りの哀調だつたにちがひない。けれども自分はかゝるあり來りの哀調を今もなほなつかしとする。

エメラルドの芝生を圍んで咲き亂れる花の中に置かれた腰掛に哲學者は若い娘を伴つて來て、近く二人が結婚すべき事を告げる。ロバアトソンの落着いた眞面目な顏にあふれるばかりの慈愛が浮び出る。娘は無邪氣に簡短に義理と情に育てられた自分である事を思ふが、心には哲學者の

甥の活々した若くして派手に賑やかな姿を描いてゐる。エリオツトの初心らしいくゝり顎の顔に淡い儚さが漂つてゐる。

その瞬間には此の戯曲を全體として見る時に感じる不滿から離れて緊張した心持で見た。此場に於ける二人は誇張の伴はぬ純粹さからしみ〴〵湧いて出る力の中にあつた。

更に又若き甥と少女とが同じ腰掛に並んで、少女は母親が世にあるならば其の胸に縋つて泣じやくり度いやうな顔をして、自分はどうしても哲學者と結婚するのだと云ふ。それを片かげで聞いてゐた哲學者の再び現はれて來た古びた姿にも力ある寂莫があつた。

最後に、慈愛のやるせなさに自をはかなむ溫情を持ちながら少女の手に鍵を與へ、若い二人が家の中に入ると間もなく、ゆるく高く響いて來るピアノにつれて一切を忘れた若々しい聲で合唱する歌の聲を聞きながら、矢張り落着いて眞面目な顔つきで、靜に枝折戸の外に出て行く哲學者の稍かゞんだ背の後姿に寂莫は一層重い影を投げた。

THE PASSING OF THE THIRD FLOOR BACK

朝の食卓で幼稚園の先生をしてゐる女が、昨夜ボストンの町で自分の姿を見たが何處か芝居に

行つたのではないかと尋ねるので、又々シュウベルトだと答へると、女は仰山な聲を出して、實は自分も友だちの一家とロバアトソンを見に行つたのだと云つて聲丈は若々しいのがしきりに手ぶり身ぶりで話し始めた。間もなく勤めの時間が迫つて來たので卓を離れたが更に自分の側に寄つて來て、今夜の出物は昨夜のよりも面白いから是非見なくてはいけない、自分はロバアトソンが千九百八年の亞米利加興行の時見たがその印象はいまだに忘れられないと云ふ。自分はロバアトソンの芝居はすべて見るつもりで切符も既に買つてあると答へると、それでは今夜の戲曲の原作を讀んだ事があるかと聞き、自分が讀まないと云ふと、一寸待つてゐてくれと云ひ殘して二階の部屋に馳上つて行つたが、直ぐに下りて來て自分の前に厚ぼつたいその本を投げ出すやうに置くと今度は何も云はずに、あたふた馳け出して行つてしまつた。

學校から歸つて今朝借りた本を開いて見た。三幕の戲曲だと云ふから小説がかなり長いのだらうと思つたら、厚ぼつたいその本は作者 Jerome K. Jerome の短篇集で、戲曲にしくまれたのは卷頭僅に十頁ばかりを占めるものであつた。短いのは何よりも難有いと思つて直ぐに讀み始めたが、たんといつていゝかつかまへどころのない程簡短で、おまけにあんまり面白くない。小説ではなくて小説の梗概に過ぎないやうな書き方で且つ會話らしい會話もないのであるから、いか

なる職人的技能がこれを脚色したかと云ふ點に好奇心を誘ふ位なものであつた。

ジェロオム・ケイ・ジェロオムと云ふと自分は直ぐに慶應義塾のP教授を思ひ出す。丁度教授が初めて日本に渡つて來た當座だつたのだらうと思ふ、豫科の自分達の組を受け持たれた。英吉利にも雲突くばかりと云ふ形容が行はれるだらうと思はれる身長と姿勢を持ち、バアナアド・シヨオの顏を持つ教授は無愛想にその癖羞かしさうに教場にはいつて來られた。さうして其時初めて聞くので不思議と響いたジェロオム・ケイ・ジェロオムと云ふ戯談（じようだん）ぢみた名前の作者の Three Men in the Boat と云ふ本を教へられた。ひどくむづかしい本で、それを日本語を知らぬ教授が英語の力の極めて貧しい生徒に教へるのであるから、勉強家は苦しみ怠惰者（なまけもの）は氣をくさらしてしまつた。

まだ一週間もたゝない頃だつたが或日自分は一番後の席を占めて、その朝來がけに買つて來た雜誌を机の下にかくして讀んでゐた。教授の流暢な音讀が高く低く續いて行くのをあだに聞き過してゐるとその聲はピタリとやんだ。と思ふと同時に教授は思ひ切つていかめしい聲で自分の名を呼んだ。

吃驚（びつくり）して教壇の上の丈高き教授を見上（あげ）ると、震へる程怒つてゐるらしい顏の髯に埋もれぬ白皙

の部分にサットト紅が走つた。それが怒つて赤くなつたのではなく、大きな聲で生徒を叱つたのが差かしかつたために赤くなつたらしく感じられた。直ぐに又朗讀は續いたが教授は息がはづむと云ふ様子に見えた。

かう云ふとひどく自分は圖太く落つき拂つてゐたやうだけれど、實はかなり驚かされたのである。何時もかうして雜誌を讀んでゐても日本人の先生にはつひぞ見つかつた事もない程巧妙なのを見つけたのも、自分達の級に來てから未だ間もないのにチヤンと自分の名を覺え込んでゐるのも、教授の含み聲の癖に凛としてゐる聲と、特色のある容體とともに自分を畏服せしめた。其後間もなく自分達は教授の手を放れたにもかゝはらず、自分の頭にはその時の光景が妙にはつきりとこびりついてゐて、教授の六尺以上の後姿を凄いものゝやうに見送つた事もある。不思議なのはジヱロオム・ケイ・ジヱロオムの名を聞くと直ぐにＰ教授を思ひ出し、Ｐ教授と云ふと直ぐにジヱロオム・ケイ・ジヱロオムの名を思ひ出す。時にはジヱロオム・ケイ・ジヱロオムもＰ教授のやうな髯に埋もれた雲突くばかりであるに違ひないと思はれる事もあり、時にはＰ教授がジヱロオム・ケイ・ジヱロオム其の人なんではないかと云ふ疑ひが起きる事もあつた。

その夜。

The Passing of the Third Floor Back は英吉利くさいものである。道德的な、常識的にセンチメンタルな喜劇で、それ丈に英米の見物を嬉しがらせる要素を充分に備へてゐる。

多分舞臺はロンドンであらう、英吉利の中流階級の下宿屋に集つてゐる心の邪しまな人々、利己、貪慾、鄙陋、虛榮、我儘、いろ〳〵の惡い根性を持つた一群の中に、假の宿を求めて來た思ひも掛けぬ旅人の身に備はる德、近づく者の心に觸れる溫情、懇切なる言葉に影響されて、昨日迄の惡德から俄に寬容、博愛、誠實、あらゆる善き心根に變ると云ふのが此の戲曲の覗つた題目である。しかも此の奇蹟を英吉利らしい寫實的な形式で、英吉利らしい通俗な諧謔で運んで行くのが、大膽で風變りである。けれども此の風變りの味ひの出たのもロバアトソンあつての事で、若し平俗な役者によつて演じられたのならば太郎冠者作に隣りしたであらう。

ロバアトソンは例によつて僅少なる動作と臺詞から完全に美しい幻影を描き出す。感情の變化に伴つて變化する彼の顏が此の役に於ては動かなかつた。たゞヂツト相手を見詰める目に白熱の光が燃えて、その光に射られた者は最早や彼の言葉のまゝに從ふより他に途がない。しかもそれが威壓する力よりも溫く親しましむる力を強く持つてゐる。その聲に於ても低い太い聲が一層低くゆるく一筋に流れ出て波狀を描いて延びてゆく、黑い衣服、黑い外套、黑い帽子に杖を携へた

姿は些かもつくりあげた舞臺の人らしくなく、其の家に於てありのまゝなる感情から妻に對し子等に對して物語る時のロバアトソン其の人であるやうに思はれた。

さう見える程無技巧の偉大さから、邪しまなる人の心に透徹する溫情を以て相手をして善に赴かしめる力はロバアトソンの身に備つてゐる力であると思はれる。彼は必ず他人に對してゆきとどいた理解と溫情を持つ人に違ひない。

此の劇の如きは全く形に現はれた劇でなく、形としては現はれぬ內に潛在せる力の劇であつた。ロバアトソンの技藝の劇ではなく、ロバアトソンの人格の劇であつた。あまり面白くない筈の芝居を面白く見た事を感謝する。

MERCHANT OF VENICE

自分は此の劇を好まぬ。基督教國の民が執拗く執念深く意地惡く猶太を虐めて喜ぶのが面憎いのである。猶太に對する偏見を持たず、寧ろ落つく可き國もなく何處に行つても猶太々々と厭ひ嫌はれる漂泊の民には哀れと思ふ同情がある。何時でも此の劇を見る時は自分は猶太の方に同情する。殊にボストンに來てから見たシャイロックに於て殊に猶太に同情した。それは下は土間か

ら上は三階迄男女老幼を問はずたゞ一人の猶太を憎む集團を形ちづくり、ホオシアがうす唇のひるがへるまゝに拍手し喝采し、あくまでも猶太を迫害せんとする精神を露骨に見たからである。

ロバアトソン以前に見た米國の役者達に比して市川左團次のシャイロックは少しも見劣りがしなかつた。彼が今日迄踏んで來た筋道や役者としての態度から、人としては已れの信ずるところを貫く強い意志を持つ人らしく思はれてひそかに尊敬してゐるけれども、將來はいざしらず現在に於ては左團次を上手だとは思はない。けれどもシャイロックは傑作だつたと思ふ。丸橋忠彌よりも、藤枝外記よりも、ジョン・ガブレル・ボルクマンよりも確によかつた。彼のシャイロックは我儘な短氣な怒り出すと威勢のいゝさうして根は江戸ッ子らしい猶太だつた。それに比べて東儀氏のは憎くもなければ可愛くもないとぼけたおやぢで、大それた人肉を抵當に金を貸すやうな因業なんではなく、朝顔をつくりながら新聞に狂歌を投書しさうな猶太だつた。

ロバアトソンのシャイロックは何處迄も上品な猶太である。たとへ鈎なりに曲つた鼻をつくり鋭く物を見詰める目つきをしても、持つて生れた氣高さを覆ひかくす事は出來なかつた。自分は始めに此の劇を見るといかにも無慈悲にいぢめられてるやうな氣がして猶太を哀れみ同情すると云つたが、ロバアトソンのシャイロックを見るに及んで更に一層此の感を強くした。

ロバアトソンの身に備はる上品な威嚴のある容體の上に、それを包む溫かさと、それと反對に鋭い神經質さうなところとがいりまじつて、あり來りの扮裝に從つて猶太の老爺を裝つてもなほ且つ人の心に親しさを覺えしめるものがある。淸軀鶴に似たりと云ふ形容のあてはまるその姿迄が直ちに哀れと感じさせて、金貸をするよりも金貸にいたぶられる時世時節にあはないで落魄した士族の風情があつた。

それにもかゝはらず習慣的にシャイロックの姿を見れば直ぐと憎み嫌ふ心地になる見物は猶太の因業無慈悲慾張りのうらをかいた小氣味のいゝ劇として喝采するのであつたが、自分にとつては基督敎徒の惡だくみに娘をも奪はれた寄邊なき年老いし猶太の迫害さるゝ殘酷な悲劇である。若しも此の劇に於て憎むべき忌むべき猶太の虐待されるのを見て喜び嘲笑はんとするならばロバアトソンのシャイロックは其の目的に適はないものがあらうが、自分のやうに始めから猶太の方に同情を持つ者にとつては又とないシャイロックである。

彼が憎惡忿怒怨恨呪詛に熱して全身をわなゝかす時最も強く感じられるのは彼が孤獨の寂寞である。彼には何處にも落つくべき國もなく、賴るべき身內も友だちもなく、四方を圍むものは常に掛け罠に陷れんとするヴェニスの市人で正邪を決する法廷にさへも信賴を置く事の出來ない世

の中疑はしい哀れさが痩せた背中にまつはつてゐる。確實なるべき勝訴に復讐の熱情を煽られて寧ろ自の孤獨をほこる色の現はれる瞬間にも、か丶る事によつて僅に生甲斐ある人として、その背景の悲慘が先づ浮んで來るのである。殊にポオシアが詭辯とするよしもなく、愈々勝訴の確かさを想ひ歡び極つて其足下に膝まづきその衣の裾に接吻するところは哀れを盡した姿に見えた。

さうして彼はヴェニスの市人のよろこびのどよみの中を、失望と屈辱にうなだれてよろめき過ぎ、やがて戸の外に消えて行つた。

絕望のシャイロツクに於て他の役者と異つて著しく目立つたのは、ロバアトソンに備はる品位の爲めか屈辱の情の現はれた事である。それが彼のシャイロツクを最も鮮明に區別する色彩のひとつであつた。

思ふにロバアトソンのシャイロツクは沙翁の描いたシャイロツクではないであらう。少なくとも幾人の役者によつて演ぜられたるシャイロツクとは全然類を異にしたシャイロツクだつたに違ひない。

自分にはバアナアド・ショオの作品は最も理解しにくい。もとよりショオが何を書かうとしたかその意味を捕へるのは——時にはうるさくも思はれるショオ自身の序文によつても——容易であるが、一々とりかはされる會話の皮肉と機智につゝまれた樂屋落を理解する事が出來ないと云ふのである。憚らず云ふと自分が英吉利のブルジョアでない限りは到底も駄目だと思つてゐる。これは何時でも外國人の作品を讀む時感じる事で、その爲めに細い味ひを味へないかはりに充分買ひかぶつて滿足する事もあるに違ひない。さう考へる爲めであらうか自分には有名な歐洲の作家の作品よりも自分の生れた國の作家の作品を一字一句贅澤に味ひながら讀む方が面白い。

或國の公使館員として日本に長く居た所謂日本通の外國人が云つた事がある。日本の芝居を見て最も自分達外國人に解しがたいところは人々が舞臺に同情して泣く時ではなく笑ふ時である。殊に動作として現はれぬ臺詞のをかしみは到底其の國に生れた者以外には通じない。

自分がショオの劇に就いて同じ歎きを痛切に感じたのは、昨年ショオの劇を三つ「人と超人」「カンディダ」「馬泥棒」と引續いて見た時である。それ等の劇がその時迄にショオを讀んで得た感じと全然相違したものとして舞臺に現はされ、その相違のあまりに甚はだしいのに驚いたのである。

これよりさき大場惣太郎氏から頂戴した「自由劇場」と云ふ本の中に、英吉利に於ける自由劇場

と云ふ題だつたか或はそれに類似した他の題だつたか、兎に角小山内先生の筆になる紹介だつたが、文中に新しい劇の上演の際たまたまショオとイエーツの喜劇を二つ並べた時、初めからしまひ迄劇場内は樂しい笑ひ聲にみたされたと云ふ一節があつた。それを讀んだ時一體ショオの戲曲はそれ程笑ひ通して見らる可きものなのだらうかと思ひ迷つた。それ迄に夥しく雜誌に出たり單行本として出版された日本譯を讀んでも笑ふ可きもの丶やうには思はれず、井上正夫の「馬泥棒」を見に行つた時、有樂座の廊下で文壇知名の人々が集つて、井上の馬泥棒は沈痛な調子があつていゝとほめ合つてゐたのを傍へ聞きしたのも忘れられなかつた。あの人々は一度たりとも笑ひなんかしずにむづかしい顏をして考へ深さうに見てゐた。

實を云ふと自分の如きはショオを讀む時、時々は吹出し度いやうな箇所にも遭遇したのだがそんな時にも笑つては自分の沽券にかゝはるやうな氣がして無理にしかつめらしくしようと努めた傾きさへあつた。

それが上記三つの戲曲を舞臺の上に見た時に、見物人は始めからしまひ迄嬉しさうに笑ひ通しに笑つて居るので自分一人笑はないのがかへつて恥かしい位だつた。さうしてその笑ひはありふれたくすぐりの喜劇に對すると些かも違はぬ笑ひだつたやうに思はれた。

其の時からショオに就てひそかに自分が考へてゐた事を人前で云つても恥しくないやうな氣がして來たのである。それは自分はショオの戯曲はそれ程眞面目に考へないでもいゝもので、吾々にとつては意味あり氣に聞える臺詞も英語の國の人には存外くすぐりであり駄洒落なのではないかと云ふ事である。從つてショオの戯曲の面白みは樂屋落に傾く爲め自分達外國人には解りにくいのであると思ふのであつた。

「馬泥棒」を演じたのは彼の愛蘭土のイェーツ、シンヂ、グレゴリイ等に指導された一座でウイツトに富む愛蘭土人のならひであらうか、沈痛なる井上の泥棒に比していかにも氣輕なおどけた泥棒であつた。そして笑ふ事の嫌ひな自分は井上の太々しい泥棒の方がほんとなんだと思ふ心を禁じ得なかつた。

その人々の話の間にもショオと云へばいかにもふざけた頓智のいゝ作者だと云ふやうに、殊に女仲間に愛讀されてゐるのを見て面白くもをかしくも思つた。もとよりその人々はショオを正統に理解出來ないのには違ひないが、又ショオの惡ふざけをさへ惡ふざけと知る事の出來ない自分の如きも誤解の方向こそ違へぼんくらの點に於ては五十步百步の差に過ぎないと思つた。

一方に於て、ショオの戯曲が曾我廼家を見る大阪人の心持で見られてゐると云ふ事は、自分を

して愈々外國の讀書の範圍の廣く一般的なる事から生じる不快さを思はせ、又ショオ自身にも此の一般の讀者觀客をあてこむ、くすぐりのある事は否まれまいと思ふのである。

「シイザアとクレオパトラ」は現代の唯一人の古典役者なる故を以てフオオブス・ロバアトソンの爲めに書下したので、ロバアトソンがゐなかつたら書かれなかつたものだと、嘘か眞か知らないが、ショオ自身斷つてゐる。此の劇に於けるシイザアは古い舞臺の英雄に對し要求された信ず可らざる超人的英雄ではなく、普通人の肉と血を持ち、あまつさへ所謂英雄らしい英雄の殆んどすべてに缺けてゐた Humor を持つ人間である。

しかしながら紀元前幾年のアレキサンドリアの背景——たとへそれは近代印象派の影響を受けた色彩で塗られたりとは云へ——の前に姿を現はした時、ロバアトソンのシイザアの外觀は鑄の出た歴史的傳説的に傳へられたジュリアス・シイザアであつた。彼の輪郭の正しい男らしい顏に桂の枝の冠はうつりよく古典劇で鍛へた身體は力に充ちた美しい立像を描いて立つた。

けれども一度口を開いて極めて散文的な調子でヒュウモラスな臺詞を戯曲的でない身振で運び始めると、幾世紀の間繪畫彫刻演劇が與へた模型的英雄とは全く違つたなつかしむ可く親しむ可きシイザアが現れる。玆にショオのどうだ驚いたらうと叫び度くてたまらぬ歡喜は忽ち有頂天に

なるであらう。

時の進むに從つて此の近代の色彩を帶びたシイザアの著しく理智的である事が又明かになつて來る。

泉鏡花先生の作品を初めて讀んだ或人が、此の作者の小説に現はれる人間は、その江戸ツ子たると田舍者たるとを問はず男女老若を問はず立役たると敵役(かたきやく)たるとを問はず、何れも機智に富み警句のやりとりにひけを取らない事驚くばかりで、若し世の中がこんな人間ばかりだつたらどんなだらうと想像したらをかしくてたまらなくなつたと語つた事がある。ショオの人間も同じくめまぐるしい迄機智に富み警句に豐かであるが、それとともに彼等は何れも Fabian Society に屬して理窟を云ふ丈充分理智的なる事も顯著である。

シイザアも亦身邊の一切の事から、或は征服した民の取扱ひ方に於ても戰爭そのものに於ても浪漫的でなく實際的である。加之(しかのみならず)彼の言動は全く現代的である。此の一事から卽ち背景衣裳人物の輪郭の昔から型になつて人の心に刻まれて居るところに、現代の思想會話を注ぎ入れた事から豫期したある不調和を引起して、それでも直ちにヒユウモラスな空氣が舞臺に漲つて來る事をショオは始めから覘(ねら)つたに違ひない、見物はショオのもくろんだ通り輕い心持でさはやかに笑ひ

つゞける。シイザアの唇に思ひも掛けぬ輕い言葉を浮ばせる事はショオ自(みづから)最もうれしい事だつたであらう。彼の嚴格な又神經質な顏に一人よがりのいたづら者の人の好い笑ひの浮ぶのは想像するに難くない。

更にロバアトソンをしてシイザアを演ぜしめたのもショオの巧妙なる謀事(はかりごと)の一つであらう。ロバアトソンの持前の生眞面目さに諧謔は不調和のをかしさを持來すと共に、惡ふざけになる事から距離を保つて其處に新鮮な味ひが出た。

見てゐる間に自分はショオ一人が黑衣(くろご)を着て絲を引く人形芝居の氣がした。さうしてロバアトソンはショオの人形となる事を承知の上で苦笑ひしながら、手を動かし足を動してゐたやうに見えた。

幕の下りる每に湧起るさかんなる拍手喝采に酬ゆるため、ロバアトソンは三幕目が終ると簡短(かんたん)な挨拶をした。

友人バアナアド・ショオの戯曲が亞米利加に於ける藝術の中心とも云ふ可きボストンの觀客にかくも理解され稱讃された事は彼の爲めに自分の最もよろこぶところである。

と云ふ意味であつた。

OTHELLO

ロバアトソンのボストンに於ける一世一代の興行は二週間で終る筈だつた。けれども此の名優の舞臺から永久に退くのを惜む人々の熱心なる希望に、更に一週間延期となつたゝめ、自分は彼のオセロを見る機會を得た。

自ら此の國の最も知識あり最も藝術を愛好する市民と許してゐるボストニアンが曾てロバアトソンのオセロを見た事がなかつたと云ふのは彼等のほこりを全からしめぬ事であつたらしい。何故にロバアトソンはボストンに於てはオセロを演じないかと云ふ詰問や、此の名優のオセロを見ないで終るのは千秋の恨みであると云ふ歎願や、さまざまの形式で劇場に、ロバアトソンその人に、又新聞紙上に手紙を寄せた者が數知れなかつたと聞く。

一週間延期の記事の新聞に出た日、その朝の十時から次の週の切符を賣ると聞いて、その一夜をはづしては見られないオセロを萬一見逃してはと思つて、丁度十時頃にボストンに行つた。

晴れてはゐるけれど雪の後の寒い朝であつた。恐らく自分程早く切符を買ひに來た者はあるまいと思ひながら劇場の前に來て見ると、既に二街區（ブロックス）も列をなして待つてゐるのであつた。自分は

少し羞かしかつたけれどその列の最後に加つた。

芝居を見る客の大半が女である結果列をなすものゝ多くも女である。みんな寒さうに厚ぼつたい外套にくるまりマフに手を溫めながら佇んでゐる。中には氣長に落着いて小說本に讀み耽つてゐる者もあり、連れの人とロバアトソンをあたりはゞからぬ高聲に論じあつてゐる者もあつた。

一步一步と切符賣場に近づいて行くのをもどかしく思ふけれど、かへりみればまだ後からも後からも人が集つては自分の後につらなるのを見ると、何れも同じ希望を持つかゝる多くの人の中に在る事はお祭のやうな氣もするのであつた。約一時間も待つて漸く順番が廻つて來たのでオセロの晚と最終の夜のと二枚の切符を求めた。

それ程氣を入れてゐたのに肝心のオセロの晚に、自分は友だちと夕食を認めに行つた伊太利亞料理で無駄話の興に乘じて思はず知らず酒を過し、氣がついて時計を見た時は旣に開場時間の八時も少し過ぎてゐた。

そこで友だちに別れたが、酒の醉ひに落つきを失つてゐたゝめ一刻も早く行(ゆか)うと思つて折柄の人ごみを押分けて馳け出した。

劇場內の溫められた空氣と人いきれはたゞさへのぼせやすいのに充分廻つてゐた酒の上で馳け

出したゝめ一層酒も利いて來て、額には汗が流れ息ははづみ、序幕も半分は終りに近いて舞臺が朦朧として傷ついた活動寫眞を見るやうに判然しなかつた。かゝる有様でロバアトソンのオセロを見たのは名優に對する自分の尊敬からも禮儀を失した振舞ひとして悔まれる。

ロバアトソンの役々の中オセロは最も毀譽褒貶まちまちだつたものださうであるが、どう云ふ風に議論が分れてゐるのか自分は知らない。思ふにロバアトソンの創造的の天分が到底前代の名優達の殘した型によつて判斷せらるゝオセロとは全く違つたオセロを演出する事から起る見解の分岐であらう。

外觀からしてロバアトソンのオセロは他の役者のオセロとは異り、煤けたむくつけな怖ろしい形相でなく、たとへその肌の色は黒くとも高貴な感じのする、一見直ちに尊敬すべき將軍の風姿であつた。どんな女にも當然惚れらるべきオセロであつた。ロバアトソンの身に備はる貴族的な Ascetic な特質が當然かゝる相違をもたらしたであらう。自然の結果として彼には殘忍なところがなく、オセロに於て最も自分の興味を持つ嫉妬から起る激怒の中に現はれる肉慾的なところが見られない。寧ろ冷かにして且つ鋭い纖細な神經を持つレフアインされた人であつた。又時に自

分は此のオセロにハムレツトらしい鬱憂をさへ見出した。

衣服の好みに於てもロバアトソンは全く他をかへりみる事なく己れの道を歩んでゐる。深紅の下着に白い外套の姿、白と金絲の寛濶な衣服、それが宗教畫に現はれる人に見る崇高さを帶びてゐる。

それに對してヱリオツトのデスデモナも亦些かの肉感的なところのない楚々たる風情から、自分は此のロバアトソンの一座によつて演ぜられたオセロを、ロバアトソンの思ひのまゝに理想化され詩化されたオセロと呼び度い。

彼のオセロは獸の如く怒りうめく激しさを缺き、冷靜なる判斷の下に道德上許す可らざる罪として又自分の體面を維持するためにデスデモナに最後の懲罰を加へるらしく見えた。

自分はくりかへす。酒氣を帶びて我が尊敬する名優の舞臺を見た事を悔む。

最終の夜

フオオブス・ロバアトソンがボストンに於ける一世一代の最終の夜、二月十四日の夜の出物は一つの劇を通じて演じるかはりに彼のレパアトリイの中の數種の戲曲から一幕づゝを取つて、斷

片的に一幕物として見せた。卽ち The Passing of the Third Floor Back. のプロログ、Mice and Men, Light that Failed, 及び Hamlet の大詰である。

死せるハムレツトの姿をかくして最後の幕が下りると、名優の妙技をたゝへると同時にその名優の舞臺から退くのを惜むいりまじつた感情から止度なく起る拍手喝采の中にハムレツトの姿のまゝなるロバアトソンは現はれた。

彼は少しも役者らしく氣取つたり、見物に媚びたりするいやみなくしかも距てなき親しさを以て短い告別の辭を述べた。

彼は當然云ふ可き言葉として見物の自分に對する熱愛に深く感謝すると云ふ意味を述べてから進んで、

自分は劇の時代は既に過ぎて活動寫眞ミユウジカル・コメデイに當然道を奪はる可き運命にあると説く懷疑論者(ペシミスト)に耳を貸さぬものである。自分は樂天(オプテイミステイツク)的な考へを持ち戯曲(ドラマ)は(彼は Serious Drama と云ふ字を用ゐたと記憶するが確かでない)なほ將來の發展に向つて進みつゝある事を實際の經驗からも確信する。活動寫眞の如きミユウジカルコメデイの如き決して恐る可き勢力を永久に保つものではないと思ふ。

と云ひ更に亞米利加に於ける劇及び觀客の一昔前に比して全然趣きを異にした事から、近き將來に此の國にも立派な國民的戲曲の出現を豫想する事が出來ると斷じた。さうして終りにつけ加へて、

自分は愈々舞臺を退く。役者として諸君に見ゆるのは今夜限りである。けれども若し自分の演じたる役々が諸君の胸に永く印象されて殘るならば幸ひも甚はだしく、自分はなほ舞臺にあるものと云へるであらう。又自分の退隱は自分一人の退隱であつて我が最愛の妻ゲルトルウド・エリオツトは必ずや近く再び此の地を訪ふであらう。さすれば自分の一心を打ち込んだこの一座の人々の間に自分はなほ存在し、その人々の舞臺の上に諸君は過ぎし日の自分を明かに認めらるゝであらうと確信する。

最後に自分は諸君にむかつて Farewell を告げようとは思はない、單に Goodbye と云ふのみである。

再び湧起る拍手の中に舞臺のかげからゲルトルウド・エリオツトが現はれてロバアトソンと並んで立つた。

さうしてフオオブス・ロバアトソンの姿は靜に下りる幕のうしろにかくれて再びあらはれなか

つた。（大正三年八月十五日）

ファンニイの處女作

春の遲いマサチュセツの岡や野は未だ雪に埋もれて、晴れた日には青空の青ければ青い程雲は白く輝いてゐる。チヤアルス・リヴアは去年から凍つたまゝに流れず、氷滑りの男女の姿はうね〳〵と岡の間にさかのぼる川上からも、末はボストンに續く川下からも數限りなく滑走して來て彼方此方にゆきちがふ。何處を見ても寒く、何時になつたら綠は萌えるのだらうと、冬の風の殊に嫌ひな自分は終日閉ぢ籠つて居た部屋の窓から並木の楡の枯枝の彼方なる夕べの空に春を待つ心を寄せてゐた。其の時町角の方から何時もの夕刊配達の子供が跛を引いてやつて來る姿が見えた。弱々しいその子供は外套も着ないで鳥打帽子の下で鼻をすゝりながら歩いて來るのである。戸口に一枚の新聞を投げ捨てゝ又トコ〳〵と隣家の方に歩いて行つた。自分は階段を馳け下りて扉の外の雪のこびりついて溶けないポオチに置かれた新聞を拾つて又自分の部屋に馳け上つた。さうして煖爐の傍でそれを讀んだ。

ふと芝居消息の中に Park Theatre で Bernard Shaw の「フアンニイの處女作」(Fanny's First Play)が來週から Granville Barker の率る英吉利の役者によつて演ぜられると云ふ數行を見出した。

丁度食事時だつたので自分は骨身にしみる寒さの戸外に出た。餘程前に降つた雪が未だ往來に凍てついてゐて、その上を吹く風が目にしみて涙の滲み出る夕暮である。學校の紀念館の暗い塔上から鐘の音が冴えて響いて來た。

何時も行く食堂の食卓に着くと自分と向ひ合つて坐つてゐる女學校でテニソンを講じてゐる Miss A が、自分の姿を見るといきなりショオの芝居がボストンに來るのを知つてゐるかと問ひ掛けて、まだ本として出版されない「フアンニイの處女作」はどんな芝居だらう、昨年「人と超人」を見たがあれよりももつと面白いだらうかなどゝ肉を切る手を休めては話すのであつた。それは先頃此の女に自分の持つてゐるショオの著作の二三冊を乞はれるがまゝに貸してやつた時自分のショオに對する意見を尋ねられて、ふつゝかな英語をはかなみながら思ふがまゝの事を云つたゝめそれが話の緒口を與へたのである。

すると自分の隣席の Miss B も紐育にゐた時分「カンデイダ」と「シイザアとクレオパトラ」を見

たがあの面白さは忘れられない、丁度來週の水曜には友だちと何處かの芝居に行かうと約束してMajestic Theatre の Within the Law にしようか Plymouth Theatre の Under Cover にしようかと相談してゐたが、それよりもショオの方が面白いだらうからそれに決めようと、探偵芝居とひとしなみにして樂しみにしてゐるのであつた。

他の男女もその話に調子を合せてしきりにバアナアド・ショオのをかしさを語り合つたが自分のいやがるのを知りながら又しても Miss A は自分はショオの芝居をあらかた讀み、それに就いてきびしい批評をすると面白づくで紹介するので、右からも左からもどんな考へをショオに對して持つてゐるのかと湧き立つやうに聲が高くなつて促し立てる。自分は少し顏が赤くなつたなと感じながらグラスの水を飲んでまぎらしたりしてゐたが、あまりしつこくすゝめられるまゝMiss A に聞かれた時とは違つて短いお座爲りをしやべつた。

自分は此の夏愈々英吉利に行く事になつたが倫敦に着いて先づ第一に見度いのはバアナアド・ショオの芝居である。それはショオの戲曲が好きだからでは無く、自分がショオの戲曲について持つ疑問を解き度い爲めである。卽ち亞米利加人のショオに對する態度と英吉利人のそれとは全然違ふだらうと想像されるからである。

想ふに英吉利に於けるショオの芝居の觀客の大半も此の國のそれと等しくショオの惡ふざけを喜ぶ人々であらうけれども、ショオに特有な英吉利の社會殊にブルヂョアに對する鋭い諷刺は英米人にはそれ〴〵別種のものとして受け入れられるに違ひない。階級根性が強く、絹帽子（シルクハット）、モオニング・コオトで年中杖（ステッキ）を持つて歩く英吉利人を、多少嫉妬の意味を含んで虫の好かない亞米利加人はヴオオデビルの舞臺に於て屢々見る如く英人及び英國の社會制度家族制度をポンチにして喜ぶ傾向がある。若しそれを正面から攻撃する者があつたら米人は小踊りして喝采するであらう。卽ちショオは階級根性を攻撃し、絹帽子（シルクハット）を攻撃するものでそのをかしみに包まれた奇警な皮肉は米人にとつては全く痛痒を感じない他人に向けられた攻撃である。だから些かも顧る（かへりみ）事なく腹を抱へて笑ひ、故意（わざ）と聲を高くして笑ふ事が出來る。乍然（しかしながら）英人にとつては自分自身に對するあくどい諧謔として米人にははかり知られぬ不快さがありはしないか。

　これが自分の第一に確め度い事であると食卓らしい話にして結んだ、人々は自分の戲談（じようだん）に聲を合せて笑ひはしたものゝ、何事でも一度は反論を述べなくては承知しない連中の事とて、そんな區別はあるものかとしきりにあらそふ者もあつて更に自分に自説の辯護を促すので詮方なく下のやうにつけ足した。

少しく不適當な例であるがツイ此の間ボストンの或劇場にかゝつたコミツク・オペラの「ミカド」の如き此の國の人は無關心に高笑ひをする時自分達日本人は舞臺を正視する事が出來ない程羞恥を感じた。それは自分の生れた國に對する侮辱に堪へられないからばかりではない。殘念ながらあの誇張された惡ふざけの中に眞に吾々の心の中にかへりみて恥ぢる弱點を捕へられてゐるからである。始めて「ミカド」を見た時、同行の日本人は非常に憤慨して、その衣裳背景の故國のそれと相違した寫實的で無い點からしきりに攻擊してゐたが、しかし自分はその人と雖もそれは表面の論據であつて內心やましかつたらうと想像した。

自分は自分の愛する故國、自分の父母であり自分自身である故國を想つて何時の間にか話が眞面目になり、且つわきみちにそれかゝつたと氣がついたので突然話を切つてしまつたが、人々も異國人に對する禮儀から何んと云つていゝかわからず默つて自分を見詰めてゐるので更に結びをつけなくてはならない場合になつてしまつた。

「つまり此の場合にも一方には他國人の考へも及ばないところに思ひあたる事があるため無關心に笑つてはゐられないのである。ショオの芝居に於ても英人は恐らくは笑ひの底に何ものか銳い痛みを感じはしないだらうか。

かう云つて自分は冷くなりかけた珈琲を飲み、さうして話最中にひとつには滑らかには出て來ない英語を考へるみつともなさをまぎらす爲めに剝いてゐた果物を口にして人々に話をゆづつてしまつた。

ひとしきり賑かにショオ、ショオと云ふ聲が食後の卓を圍んだが、間も無く一人立ち二人立ち自分も寒い戸外の夜の風を想ひながら人々に別れを告げた。

その週の終りは早春の頃しきりに來る雨と風に暮れてしまつた。殊に土曜の夜から日曜の夕方へかけては全くの暴風雨になつて、〆切つた窓のガラスに雨のしぶきの音高く降りかゝるばかりでなく、烈風に吹き折られた並木の楡の枯枝もかなり大きい枝ながら飛び散るので、細心に家事を思ふ老いたる主婦は室々（へやへや）を訪れて窓ガラスの外に開閉扉（シヤツタア）をたて切つた。その爲めに晝も燈火の下で本を讀んだ寂しい日曜であつた。

翌日は嵐の後の思ひ切つて晴れた空に名殘りの雲もない春らしさに、學校の庭の木立には木鼠がけたゝましく啼きかはした。此の五六日つめて勉強したゝめ頭が疲れてしまつたので夜はボストンに遊びに行つた。地下鐵道の中で「フアンニイの處女作」の今日が初日なんだと思ひ出したが、自分は初日に芝居を見るのは落着（おちつき）がなくて嫌ひなのでマアやめようと考へてゐた。けれど或家で

食事をし、適度の酒の心地よさに促されて、その劇場の前迄行つて見ると、恰も食事の後の芝居時なのでワシントン街(ストリイト)の人通りの多い四辻に近い Park Theatre の附近は狹い往來を押しかへす人波で、何時の間にか自然と劇場の入口迄押されて行つた。ところが入口の大扉は閉つてゐて、その上に貼紙がしてある。「ファンニィの處女作」は今晩初日の筈だつたが、前日の暴風雨の爲め鐵道に故障があつて、背景の一部は未着、一部は雨に濡れて用ゐ難いためやむを得ず明晩迄延期すると云ふ文句である。其處いらに佇んでゐる人も大概は此の芝居を目的(あて)にして來たのであらう、中には切符を先週中に買つて置いたのが賣場で取りかへてゐるのもあつた。自分もその場の調子から明日(あした)の晩の席を取つて置く事にした。

火曜日の夕食の時自分は話の序(つ)いでから、今夜これから Park Theatre に行くと云ふと Miss B は自分達は明日の晩行くのだから今晩見た筋を明朝話してくれと云ふ。自分はそれを承知して食事を濟すと直ぐにボストンに急いだ。

劇場の前迄行つて見ると今日も亦扉が閉つてゐて、もう一日延期する旨が貼出してある。明晩も亦無駄足をしてはつまらないと思つて切符賣場で念を押すと明日は必然(きつと)大丈夫だと云ふのでその切符に取替へて貰つた。

風の無い靜かな夜で冴えかへつた空に鮮明な月が掛り、夜のあかりが遠く迄ほの白く流れてゐるのを望みながら旅から旅を廻る役者の身の上などをおぼろに想像したりした。

水曜の夕べは知人を尋ねて郊外に行つたので一度ケムブリッヂに歸つて出直すのもおつくうだから直ぐにボストンに行き、手輕な食事をしてから劇場に行つた。

少し時間は早かつたが幕開き前に充分時間を持ち、自分より後から入り來る人、殊に女の姿を見てゐるのは芝居見物と切離す事の出來ない慰樂のひとつであるから、オオケストラ・ストオルの後の方にゐて舞臺と自分の間の座席の間をゆきちがふ女等の、劇場内でのみ見る事の出來る稍昂奮したしかもとりすました他所行きの態度をあきずに眺めてゐた。

フト賑かに話し合ひながら自分の横手を過ぎた女の聲に引かれて見上げると Miss B が今日はその友だちらしい年下の若い娘と前後して自分のところから道路を距てゝ少しく舞臺に近い席を心ざして行くところであつた。

案内の女がはねあげてある椅子の腰掛けを二ツトン／＼と音させて下して立去らうとするのを呼びとめて Miss B はプログラムを受取つた。それから厚ぼつたい毛皮の外套を同伴の娘と一緒に重さうに脱いで椅子のよりかゝりに掛けながら視線をあげた時自分を認めて會釋した。直ぐに

同伴(つれ)の耳に自分の事を何か私語(ささや)いたらしくその人も振りかへつて無意味に笑ひ顔を見せた。まだ十八九の少し頬の肉の足り無い輪郭から云へばメランコリツクだが上氣したやうな顔色と大き過(すぎ)る黒い眼がかへつていき／＼した顔立ちに見せるのであつた。

二人の女は舞臺に向つて並んでプログラムを見てゐる。三十女の Miss B の獨身者らしい髮の結びやう、肥り過ぎてしかも色艶の惡い頸から肩にかけての肉色に比べて若い方の肌には電燈が思ひ切つて光を返へしてゐる。稍うつむいた襟つきとそれに匂ひかゝる光澤(つや)のある暗黑(ダアク)な髮が心ときめくものに思はれた。

間も無く場内は女七分男三分位の割合ひで充滿(いつぱい)になつた。低い聲ではありながら多くの人のさゝやきかはす聲と人いきれに心持が緊張して來る。どうしても入りが無くては芝居は面白く見られないなどゝ何時もきまり切つた事を考へながら、波も打たずに重く垂れてゐる舞臺をかくす緞帳のけばけばしい縫取りを見上げてゐた。

とかくして時もたち、三階から下迄光り輝いてゐた電燈が一ツ／＼消えて行くと直ぐにカタンカタンと板で板を打つ音がしてその緞帳はそろ／＼巻き上つた。

緞帳は巻き上つたけれどもそのかげには又垂幕が下つてゐる。此の殆んど黒に近い海老茶の垂

幕の前でプロロオグが始まる。
舞臺は Count O'dowda の家で、今その家のバトラアが喜劇らしい取り濟し方で下手から出て來て Mr. Cecil Savoyard の到來を告げた。續いて夜會服のこれも喜劇らしく下品な男が現はれる。ロンドンの或劇場のマネヂヤアである。二人の會話の初まりからショオは旣にその上機嫌の笑ひ顏を臆面も無くさらけ出してゐる。まことにいゝ氣なものである。
更に正面の幕の間から時代錯誤の服裝をした伯爵が更に一層安値に喜劇のをかしさで現はれる。かくして絕間もない笑聲の中にショオは巧みに觀客をひきつけながら此の芝居のなり立ちの筋を賣りつける。
伯爵は常に十八世紀に憧れてゐて十九世紀を喜劇的の極端さで憎んでゐる。今は二十世紀である事さへ問題にならない程十八世紀に續いた十九世紀は忌はしいものなのであつた。從つて十九世紀的になり切つた英吉利を嫌ひ、死んでも此の島に骨は埋めないと云つてヴェニスに住むのを好んだ。ヴェニスは彼の理想とする美しきものに對する渴仰を滿足させる唯一の土地である。
けれども此の喜劇の伯爵の愛孃フアンニイは之亦喜劇の都合よさで父親とは反對の道を步む所謂新しい女である。伯爵は自分の母校の所在地なるケムブリツヂに娘を置いて、僅に十八世紀の

殘つてゐるのは其の地ばかりだと信じてゐたのであるが、フアンニイはケムブリツヂ・フエビアン・ソサイヱテイに屬するばかりで無く女權運動にも肩を入れてゐるショオ好みの彌次馬である。恰も卒業の間際になつて娘は誕生日の贈物を父に要求する。勿論娘に目の無い父親はフアンニイが望みのまゝの贈物を與へる事を約した。其處で娘は在學中閑を偸んで書いた自作の脚本をロンドンの家で玄人役者に演じさせ、それをロンドン一流の劇評家に誰人の作か知らせずに見せて彼等の批評を聽き度いと希望する。伯爵はその脚本を讀みもしずに、自分の娘の書いたものなら必ずや十八世紀らしい芝居だらうと喜劇的迂濶さを持つて承知する。若し伯爵が生意氣な娘の無責任極まるあらさがしを社會批評の美名で包んだ三幕物を見たならば、そのあまりに十九世紀なのに驚き怒つて到底此の贈物は與へられなかつたであらう。その意味に於て論理的にも伯爵は迂濶でなければならなかつた。

セシル・サボヤアドは卽ち伯爵の乞ひに應じて役者を集めその役者等は今此の垂幕の奧で幕開きを待つて居る筈である。ロンドンの代表的劇評家の人選も此の十九世紀の紳士が引受けた。今朝のボストンの新聞によると此の選ばれたる批評家四人の中三人は眞實ロンドンの劇評家に模型を取つたもので Trotter はタイムスの、Walkley, Vaughan はデイリイ・ニユウスの、Baughan.

Gunn は劇作家としても知られてゐる Cannan で、他の一人 Bannal は其の他の數限りも無い最も一般的な劇評家を引つくるめて代表するのださうである。ショオは單に此の人々をお笑ひ草に引出したばかりで無く、その人々の人となりから批評の特徴迄さらけ出して樂屋落ち好きの樂屋落ち好きたるところを露骨に示してゐるらしい。

其處にファンニイが馳け出して來て批評家達がやつて來たと云ふ。さうして批評家達は誇張されたカリカチュアを描き出し、樂屋落ちに更に樂屋落ちを生んで、トロツタアの前ではアリストオトルの名を口にしてはいけないなどゝ云ふ洒落迄出て來て此のプロロオグは終りになる。

續いて劇中劇の幕が開く。デンマアク・ヒルと特別に場所を指定したのもロンドンを知らぬ者にはたゞなんとなくショオの皮肉の的になる廻り合せの下にゐる階級の住む一區劃だらうと想像されるばかりだ。

兎に角そのデンマアク・ヒルの Mr. Gilbey の家の食堂に主人夫婦は息子 Bobby の安否を氣づかつて居る。想ふに主人は世間の目から見て尊敬すべき金持であらう、此の善良なる人々は習慣的に宗教的であり、習慣的に貴女紳士（レディイヂェントルマン）であると云ふ理由から他人の弱點を誇張してよろこぶショヨオの爲めに一擧一動お笑ひぐさにされてゐる。

間も無くバトラア Juggins が Miss Delaney 別名 Darling Dora なる女が來訪したと取り告ぐ、ドラはギルベイ及び世間一般が貴女(レディ)とは呼ばぬ階級の女であるのみならず、ショオ一派がかゝる職業の存在は社會の罪だと叫ぶ職業の女である、自ら尊敬すべき階級に屬するものとして滿足してゐる樣子を示してゐる人々の前に、その人々が卑しむ階級の女を連れて來て禮儀作法と不作法との安價な對照をショオはゲラ〳〵笑つてゐるのだ。

ドラは簡短(かんたん)に初對面の挨拶を濟してからボツビイは無事である、これ以上安全な場所は無い、彼は牢屋に入つてゐると云ふ。意外の事に驚く老夫婦と、老夫婦の驚きをショオと共によろこぶドラとの會話が如何にしてボツビイは牢屋に入れられたかを物語る。

二週間前の或夜ボツビイは個人教授(テュウタア) Holy Joe 及びドラと一緒にミュウジツク・ホオルに行つた歸途三鞭(シャンペン)の醉ひに浮かれ心地になつてゐた。學生時代に百ヤアド競爭の選手だつた Holy Joe をどうかして馳け出させたら五磅の手風琴を買つてやると云ふボツビイの賭をドラは此の時せしめようと思つた。丁度町角に立つてゐた若い巡査(コッパア)にからかつたあげくそのヘルメツトを叩いた。怒つた巡査がドラを捕へる間に Holy Joe は果して急速力で馳け出した。遙かの行手で口笛を吹き鳴したが、それつきり彼の姿は稻妻のやうに消(きえ)てしまつた。つかまつたのはボツビイとドラで

ある。さうしてドラは今なほ牢屋に殘つてゐるボツビイの贖金を乞ひにその兩親を尋ねたのであつた。

ギルベイ夫婦は此の意外な報知に驚いて、尊敬すべき家庭の息子がそんな始末になつたのはドラの罪であると責めると、ドラは自分がボツビイを引張つたのではなくてボツビイの方から自分に近づいて來たのだ、家に引込んでゐるのは息子にとつて退屈極まる事だつたのではないかと答へる。更にギルベイ夫婦が、決して退屈な事は無かつた筈だ、自分達はボツビイを喜こばせる爲めにはあらゆる事をしてゐる。此の上何も望むものは無いではないかと云ふと、ドラは言下に He wants me と答へるのである。

ギルベイがドラの手から息子を救はうと思つて手切金の額を尋ねると、ドラはそんな事は無用だ、自分と別れても其處いらに澤山他の女がゐるではないかと答へる。成程それはもつともだ、それぢやあお前やお前のやうな種類の女のゐない所にボツビイをやつてしまはうと云ふと、ドラはそれでは世界の外にやる他は無いと揶揄する。

會話のやりとりが持ち來す紛糾した洒落の面白さに吾を忘れて多大の費用を拂つてゐる作者はドラの背後にかくれてギルベイをからかひ／＼通して幕になる。

第二幕はギルベイと共同で商賣をし、ボツビイと許嫁にされてゐる娘 Margaret を持つ Mr. Knox の家で、落語によくあるしくみで、第一幕と同じ出來事が起つてゐる。さうして最も安價な對照を求めてショオは、肥つた白髮の一見福々しいギルベイに對して痩せたごま鹽の一見粗野なノツクスを出し、無考へに人のいゝギルベイ夫人に對して考へ深くて宗教的なノツクス夫人を出し、肉體的にも意氣地の無い息子ボツビイに對して體力強健な娘マアガレツトを出し、前者に配するドラに對して後者に配する佛蘭西人を引出した。

ノツクス夫婦は娘マアガレツトが二週間前に家を出たつきり歸つて來ず、何處に如何してゐるかもわからないので心配し切つてゐる。數年間ギルベイ、ノツクス兩家では日を極めて食事に招きあつてゐたのが雙方ともに子供の行衞不明以來うやむやのうちに招待しなくなつてゐる、ギルベイはノツクスに息子は海岸に保養に行つてゐるとごまかし、ノツクスはギルベイに娘は叔母と一緒に田舍に遊びに行つてゐると噓をついてゐるのである。雙方ともに先方の出來事は知らないので自分の方にばかり落度があつたのだと信じ切つてゐて、事が露顯たら息子と娘の間の婚約はもとよりすべて今日迄兩家の間に存した關係は終りを告げるだらうと心配してゐるのである。

ノツクスは自分は地位と尊敬とを得る爲めに努力した、店に働いてゐる小娘の幾人を不品行の

かどで追出しもした、然るに今自分自身の娘が家出をして既に二週間になつてゐる、と歎いてゐる。その繰言を聞きながらこれは宗教的抑制から態度に於ては平靜を保つて窓の外を眺めてゐたノックス夫人が突然叫び出す。マアガレットが見も知らぬ男と歩いて來て今別れの際の握手をしてゐると云ふのである。ノックスは妻にせき立てられて其の男を捕へようと馳け出して行く。入れ違ひにマアガレットが馳け込んで來る。續いてノックスも佛蘭西の船乘り Monsieur Duvallet を引張つて來る。ノックス夫婦は此の男が娘を連れ出し怪しからぬ二週間を送つてゐたと思ひ込んでゐて、その二週間娘は何處にゐたかと手きびしく詰問する。すると佛蘭西人は佛蘭西人の英語で、マアガレットは此の上も無い安全な場所にゐたと答へる。恰もドラがギルベイに對する返答も同じで、斯う云ふ駄洒落もショオのなぐさみの一ツである。

間も無く佛蘭西人は別れを告げ、父親は事件の性質から詰問の役目を母親に殘して退場する。其處で娘は一伍一什(いちぶしじゆう)を物語るのである。

二週間前の或日マアガレットは Albert Hall で催された Salvation Festival に行つた。歸途家路へのバスに乘りは乘つたものの、廣い會場で多數の人々と天に導く黃金の階梯を登り行く心地で讃美歌をうたつた娘の心は有頂天になつてゐた。そのまゝバスに運ばれて家に歸るのはいか

にもつまらなく思はれ、もつと音樂を聞き度い、もつと樂しみを求め度い心地になつてゐた。娘は繁華を極める Piccadilly Circus でバスを捨てて Leicester Square の或劇場に入つた。其處で彼(か)の佛蘭西人と口をきいたのである。二人は劇場を出て舞踏場(をどりば)に行き、マアガレツトは浮かれ切つて三鞭を飲んでは踊つた。恰も其の夜はオツクスフオド、ケムブリツヂの端艇競爭(ボオト・レース)のあつた日で學生は醉拂つて暴れ廻つてゐたが、その連中もその場にやつて來て手當り次第に器物を叩きこはし初めた。巡査が飛び込んで來る、格闘が始まる、それに卷き込まれて佛蘭西人もマアガレツトも巡査と揉み合ひなぐり合つたあげく警察に引張られた。

母親は娘の話を聞き娘の行爲を恥辱と考へるが娘にはショオがついてゐる、マアガレツトは少しも悲しんでゐない、自分は些少(いささか)も惡い事はしないと云ふ。母がどうしてそんな事になつたのだらうと云ふと、それは祈禱會が自分を有頂天にしたのだと答へる。母がお前は自分をロオマンスの女主人公だと考へてはいけないと云ふと、自分はリアリテイの女主人公であると答へる。自分は自分自身を自由に置く、自分は父母よりも強い事を知つた、今迄自分を束縛したものも今後は自分を縛る事は出來ないと叫ぶ。

しかしあまりに娘のやり方が眞面目にイブセンに傾いたと見てとつて商賣上手なショオは直ち

に父親ノックスを出して笑はせる。此のごま鹽は事のなりゆきを別間で待つてはゐられないのである。

母親は娘はもう自分達の力ではどうする事も出來ない、今の自分は娘の爲めに禱る事さへ出來ないと云ふと、父親は祈禱なんかどうでもいゝ、誰人にも此の出來事を知られなければそれでいゝと云ふ。娘は又それに答へて自分は誰人にも打明けて話して了はう、此の出來事は誰人にも打明けなければならない事だと云ひ張る。父が怒つて家を出て行けと怒鳴ると、ハイ何時からでも出て行きますとほんとに出て行かうとするので父親は困つて引き止める。母親は禱らうとしても禱れない、娘はショオの後援に氣強い顏をして立つてゐる。幕が下りた。

面白をかしく都合のいゝ程度に於て紛糾した一つの問題のうらおもてを目出度し〳〵で結ぶ大詰めに戲曲中の人物を全部一場に集めるあり來りの技巧は新聞の續物の明日を待ちかねる程度の觀客をよろこばせる爲めにうるさい程繰返へされる。ショオももとより現代一流の通俗作者の事であるから見物をよろこばせる事に拔目は無い。

舞臺は再びギルベイの家である。ボツビイがバトラア、ヂヤツギンスを相手にマアガレツトと自分との婚約をどうすれば圓滿に破談にする事が出來るだらうと相談してゐる。ヂヤツギンスは

ショオの皮肉を盛るのにその經歴から云つても最も適當な型につくられた男の一人である。前者がかうすればどうかああすればよからうと慣習的な謀計を持出すのを彼は一々パラドクシカルな返事で打破つてゆく。斯う云ふ型の男をショオは常に好んでつくり上げ、自分が勝手な事をしやべらせる爲めにつくり上げた事實を忘れて、その人間にあらん限りの同情を寄せるのである。

　こんな問答最中にマアガレツトが訪れる。ショオのよろこびの一ツとして女は何時も男よりも押が強いが、マアガレツトも此の例に洩れずボツビイは蛇に見込まれた蛙である、マアガレツトの初めからテキパキと最近の出來事を打明けて解決を求めようとする態度に反して、見込まれたボツビイはビクビクしながら體裁をつくろつてゐる。さうして女が卓の上に腰掛けると、それに並んで自分も掛け內心はいやいやながら手を廻して女の腰を抱かうとすると、マアガレツトは手酷しく、いやいやそんな事をするには及ばないときめつける。斯う云ふ順序で女の方から、二人はお互ひに好いても好かれてもゐなかつたのだ、ただ許嫁の義務として相愛しあつてゐるやうな風をしてゐたのに過ぎなかつた事を觀客に呑込ませる。

　それから會話のをかしみで笑はせながら二人はお互ひに自分自分の出來事を語り出す。その間にも男より女は大膽に決定的にしやべつてゐる。此の女は男よりも強いと云ふ、人を意外がらせ

てよろこぶショオのあくどい洒落は、最後に二人の挌闘によつて頂點に達し、マアガレツトはボツビイを捕へて卓上に押倒し上からギュウギュウ押へつけるなどと云ふくすぐり迄持つて行かれる。かゝる惡ふざけが滿場の喝采を容易に呼起す事は夙の昔にピネロの域を超えて職人的作者の第一に位ゐするショオの萬々熟知するところである。

これより先きドラの訪問があつて顏を合せて見るとマアガレツトとドラは同じ留置所に入れられてゐた朋ばいだつたなどゝ云ふ手も用ゐられてゐる。

續いて佛蘭西人もやつて來る。此の男がギルベイの家に來るのはをかしいがマアガレツトが此の場に自分を訪問しろと前もつて云つてあつたのださうである。

四人が互に二週間牢屋にゐた事を話して打ち解けてゐるところにヂヤツギンスがギルベイ夫婦が外出先きから歸つて來たと知らせるので別間に逃げ出して行つて了ふ。

入れちがつて老夫婦が入つて來る。さうしてショオの大好きな插話が數分間展開される。卽ちショオの英雄ヂヤツギンスが突然ひまを貰ひ度いと申し出す。主人はしきりに引止めるがヂヤツギンスは自分の兄が寂しがつてゐて家に歸つて來いと云ふばかりでなく、兄は自分がバトラアとして働いてゐる事を好まないと云ふ。主人は自分で働いて衣食するのが男子の爲す可き事で、

兄に養はれるのは恥づ可き事だと云ふと、ヂャツギンスはそれはもつともだが弟が兄に頼るのは自分の家の習俗(ならはし)だからしかたが無いと答へる。主人が何氣なく Your brother isn't a duke, you know. と云ふと、ヂャツギンスは言下に Unfortunately, he is, Sir. と答へるので、此處で又滿場笑ひ崩れるのである。

どうして公爵家の息子がバトラアに住み込んでゐるのか、それが明かにされようとするところにノックス夫婦が尋ねて來るので、說明は暫時(しばらく)おあづけになる。ギルベイ、ノックス二組の夫婦はショオの爲めに不相變(あひかはらず)無慈悲に愚弄されるのであるが唯一人考へ深いノックス夫人丈は今迄の自分達の習俗的な生活には意味も力も無かつた事を悟つて來た事になつてゐて、稍々惠まれた人になつてゐる。その人の口をかりてさへ例の習俗罵倒が出て來るのである。又かと思はれる程此の點に於てショオはしつこく根氣がいゝ。

作者は又主人面した連中が公爵の弟と聞いてから態度が一變して Mr. づけでヂャツギンスを呼び、彼がお茶を運んで來ると主客ともに席を離れて迎へるをかしさなどを意地惡く見せてゐる。

突然別間から笑聲が湧き起るので、主客が驚いて尋ねるとヂャツギンスは Pantry で Tea Party があるのだと答へる。又二組の夫婦が月並を云ひ合つてゐると更に風琴の音さへ聞えて來

る。

直ぐに一同が上機嫌で飛込んで來て此處で戲曲中の傀儡は悉皆顏が合ふのである。さうして直ぐにお目出度い大團圓が到來する。

先づノツクスが佛蘭西人にマアガレツトと結婚する氣があるかどうかと聞くと、佛蘭西人は自分は既に結婚して二人の娘さへあると答へる。

ドラが自分は何時でもボツビイと結婚する氣だと云ふとギルベイが反對する。するとノツクス夫人はボツビイは義務としてもドラと結婚しなくてはいけないと云ふ。ボツビイも自分はドラと結婚する、若し許してくれなければもつと不名譽な事をしてやる、兵隊になつてしまふと駄々をこねる、ヂヤツギンスが兵隊になる事は不名譽ではないと云ふと、ボツビイはお前はバトラア風情だから兵隊になつても不名譽ではないかもしれないが俺は紳士だと口性ない。母親は狼狽ててヂヤツギンスに對して無禮な事を云つてはいけないなどゝ云ふをかしみもある。結局ヂヤツギンスがボツビイはドラと結婚しても將來尊敬さるべき人として立つて行けると一同に說くと、今度はノツクスがそれでは自分の娘はどうなるのだと云ふ。それはマアガレツトの自由意志に任すべき事だとヂヤツギンスは答へるのである。

それから彼は何故に自分はバトラアとして住み込んだかを說明する。彼は曾て眞面目な基督教徒をバトラアとして傭つてゐたが、或時その男はヂヤツギンスが卑しい階級の娘と戲れたのを知つて主人を叱責した。主人は權柄づくでバトラアを追出したが、自分の此の行爲は毒矢のやうに胸に殘つたのである。彼は自ら身を低くしてバトラアになつた。今はその男にも顏が合されると云ふのである。

其處でマアガレツトはヂヤツギンスの手を取つて古い二組の夫婦に新しい二組が出來上つて至極く目出度く都合よく幕になる。

戲曲の性質から當然ヱピロオグが無くてはならない。垂幕の前に伯爵が現はれて自分が期待したのとは打つて變つた戲曲だつたので、これは戲曲と呼ばる可きものではない、これが藝術と呼ばる可きものだらうか、と自分の娘がかゝる種類の戲曲を書いた悲しみと怒りに震へながら批評家に訴へ、彼等の意見を求めるのである。

第一に最も年少のバンナルに此の戲曲をどう思ふかと尋ねると、彼は一體作者は誰なのだ、作者が誰だかわからなくては批評は出來無い、加之これは Comedy なのか Tragedy なのか Farce なのか Melodrama なのか眞面目なのかふざけてるのかわからないと云ふ。しかし一體い

ゝ戯曲なのか下らない戯曲なのかと伯爵が重ねて聞くと、若しいゝ作者が書いたのなら當然いゝ戯曲である、下らない作者が書いたのなら當然下らない戯曲だと答へる。

ガンは此の戯曲にはプロットが無い、舊式な舞臺技巧を避けながら舞臺上の慣習は守つてゐる、人物も公爵や百萬長者を避けて中流階級に取つてゐる、中にはをかしみもあり、ショオの調子さへ含んでゐる。作者はグランビル・バアカアの他にあるものかと云ふ。

バウガンはバアカアではない、スタイルが全然違つてゐる、先づ此の戯曲は不愉快なものだから Barrie の作では無い、英吉利の中流階級の清教徒的僞善を暴露しながら攻撃は手酷(ひど)くなく、人物は何れも善良である、その上に並みはづれの女を出してゐるからこれはピネロに違ひないと斷定する。

バンナルは佛蘭西人の長つたらしいスピイチから推察してショオだと云ふ。バウガンは之を否定してショオではない、何故ならば此戯曲には兎に角熱情(パッション)がある、ドラは眞實ボッビイを愛してゐる。繰返へして云ふがショオは肉體的にも熱情を缺いてゐるのだと云つて承知しない。

一般の批評家を代表するバンナルは直ぐにそつちに引入れられて、そんな事は自分も知つてゐる、ショオは知識ばかりで感情が無い、偉大なる頭腦を持つて居るが心臓(ハアト)を持たないと同じだ。

バウガンは更に又、此の戯曲中の人物はそれぞれ性格を持つてゐるが、ショオの戯曲の人物はショオ自身の傀儡に過ぎない、たゞ役者がそれぞれ人間の相違を見せる丈だと云ふ。

ショオの年甲斐も無いいたづらは止度が無く、海の向ふの日本では昔から舞臺の上で役者や作者の名をせりふにかへて愛嬌にする洒落のあつた事を知らない人のよさが寧ろ無邪氣に思はれる程である。

最後にフアンニイも其の場に出て來て而してトロッタアの口から此の戯曲はフアンニイ其の人の作だらうと云はれる。批評家等は手ん手に簡略なお世辭を述べる。セシル・サボヤアドが出て來て役者達は相手の呼び出しを待つてゐると告げるので一同初めてそれに氣がついて舞臺の方に行く事になる。垂幕が上ると「フアンニイの處女作」中に現はれた役者がすべてそのままの姿で立つてゐる。伯爵、サボヤアド、批評家、フアンニイはそれらと握手して成功を祝す。

伯爵は改まつて、戯曲そのものについての意見は如何あらうとも演技の秀抜だつた事には誰しも一致すると述べ、批評家は口を揃へて Hear, hear! と叫び、喝采するのである。さうして今度こそほんとに幕になる。

どう云ふものか役者の技藝の巧拙は此の夜自分にとつて問題にならなかつた。ただ一人ギルベ

イ夫人に扮した Florence Haydon と云ふのが Spontaneity と Naturalness の極致に達した親切で温い技藝を見せてくれたのが故郷に自分を待つ母のやうになつかしかつた丈である。それは恐くは劇中の人のすべてが單にショオのあやつる絲につれて動き、其の人々の性格言行及び事件の紛糾がすべてショオのあくどい色彩で一色に塗られてゐて獨立した存在を持たないためであらう。自然興味の中心は作者ショオの上に集中されるのである。

凡そ社會の進歩は社會の誤れる思想を絶えず發見指摘して行く事によつて到達されると信じ、且つ藝術の爲めの藝術を嫌つて教訓藝術を看板にするショオは Comedy の使命は舊道徳の破壊以外に何も無いと云ふ結論を當然賣物にしてゐるのである。戯曲は人生の寫眞では無い、個人の意志とそれを取巻く周圍との鬪爭を展開するものである、故に當然問題である、と彼は云ふ。けれどもショオの問題劇はイブセンの問題提出劇とは等しくない。イブセンが眞劍に生一本に問題を提出して世に問ふ時、ショオはその問題を提出するや否や直ぐさま自分でそれを慰みものにしてゐる。さうして奇抜な解決を與へてゐる。徹頭徹尾イブセンに比して實際的で、より遥かに智的で且つ全然樂天的ないたづらつ子の所業である。ただいたづらつ子にしては如何にも該博な智識と鋭い理智の判斷を持つてゐるとこが身上である。

此の點に於てバアナアド・ショオはウイリアム・ヂエエムスが評したやうに Convention と Conscience の相違を吾々の目の前に明瞭に展開する丈充分の洞察力を持つ人である。しかし彼が所謂社會の誤謬を指摘する時、その眞に指摘しようとする事實の重大さを忘れて、かくしてもかくしきれないいたづらから結果は何時も問題外のおなぐさみになつて了ふ。ショオの看板廣告は多少化粧品のそれに類するから責任をもつて他人にすすめる事は出來ないけれども、彼が繰返へして云ふ彼の作劇の目的を眞に誠實な信念であるとして見れば、彼のとる形式はその目的に不適當なものである。自分の主張を人に聽せる爲めに故意と通俗なお笑ひに訴へるのであると云ふショオの辯解は到底信用出來ないものである。

ショオは自分の戯曲を見て笑ふ觀客の幾人の目に涙が浮ぶかを知り度いと云つてゐるが、如何に問題そのものが吾々の生活に密接な關係を持ち、吾々の生存に重大な意義を持つものであつても、それが適當な形式で提出されず、しかも提出者自身からゲラゲラ笑ひの中に已れを忘れてゐる時、どうして襟を正して考へる事が出來るものか。たとへお上の御政治にあきたらぬ思想を含んでゐても路上に貼られた川柳落首は暫時行人の足を停めるばかりで革命を惹起する力は無い。

ショオは全然イブセンの嚴肅を缺いてゐるばかりでなく、自分が攻擊しようとする社會の缺陷

をなぐさみにし、又それを戯曲にしくむ自分の腕前を限りなく樂しんでゐるのである。表看板は立派な社會改革論者であるが實は社會の缺陷を贅澤になぐさむ智識の上の成金である。ショオが「人と超人」を送つて批評を求めた時、人生は笑ひものにするべくあまりに重大であると答へたトルストイの言葉を忘れる事が出來ない。

ショオの此の人がいゝと云へば云ふ可き戯談めかしい心持は其の廣告の大上段である丈苦々しく、ショオその人は好老爺であると知つてゐても一人よがりにつけあがつてわめいてゐるのは面白くない。戯曲作家としては全然ショオに比ぶ可き人だとも思はないが寧ろ彼の堅苦しい道德家 Brieux の融通の利かない態度を自分は尊重する。

ショオが自分は曾て確固した印銘を人に與へた事が無い、何故ならば誰人も自分を信じてくれないからであると云つたのは卽ち此處にあてはまる。しかしショオは斯う云ふ事を云ふ時も、此の誰人にも信じられない事を歎くよりも寧ろ自分の詭辯戯談の勢力の偉大さに滿足してゐる態度が見える、愚痴ではない、自慢である。

ショオと自慢と云ふ取合せは直ぐに次のやうな無益な想像を逞しくせしめる。

幾年か前、ヘンリイ・ヂョオジの單税論に感激し、カアル・マルクスの資本論を聖書の如くあ

りがたがつた時代のショオは今日立派な邸宅を構へて自動車を驅るショオから見れば、恰も我が國の實業家が天秤棒をかついだ昔をほこるが如く、ハイド・パアクの一隅で大道演説をした姿と併せて何よりも自慢の思ひ出であらう。「ウオルレン夫人の職業」を書いた心持は、年が年中赤茶けた背廣一枚で、或時は劇場の入口で夜會服(ドレス)を着用してゐないと云ふ理由から入場を拒(こばま)れた時代の自分の姿と共に僅かに記憶に殘るものであらう。

即ち蓄め込んだ金にあかして奢侈の限りを盡しながらなほ昔からの口癖で勤儉貯蓄を説く彼等と同じく、ショオは既にアヂテエタアとしての熱を失ひながら、口癖になつて昔のせりふを繰返へしてゐるのではないか。戲曲作家としては初めから知識ばかりで感情が無いと非難された彼は今日に於ては更に益々 Sincerity を缺きつゝある。今日のショオに取つては戲曲の創作も社會主義の演説も自動車のドライビングと等しく彼の Hobby の一つに過ぎまい。

あらゆる點から見て彼は自作の戲曲を子供らしく享樂してゐる。たとへ皮肉は皮肉であつても樂天的な心持からショオは文壇の Peter Pan である。

殊に「ファンニイの處女作」にはショオの子供らしさが遺憾なく現はれてゐる。殆んど應接にいとまなく連發する洒落も詭辯も、あらさがしの根性をまじへてゐるとは云へ、子供の水いたづら

に過ぎないのである。飛び散る水のかゝるのは自分の顔である。

さうして以前のショオに見た特殊の觀察が無くなつて極めて平凡な常識的な議論である。しかも人間の幸福を Reason の多寡で量らうとする根本思想を捨てない限り、ショオの饒舌に自分はうなづく事が出來ない。

たゞ自分が非常に面白く思ふのは、社會主義者の通弊として人間を人間として見ず、階級として見る偏見に陷りながらもショオは他の同主義者の老孃的にひねくれたところがなく、階級根性の攻擊も無邪氣ないくさごつこの心持から來てゐると云ふ一事である。彼の皮肉は普通人の思ひも及ばぬ透徹した細かさを持つてゐるが、屢々彼の爲めに引合ひに出されるホイツスラアのそれの如く肉體的に避けがたい程の悲痛な銳どさは無い。

矢張り人はいゝに違ひない、と結局思ひながら自分は席を立つた。文字にすると長いけれども幕の下りた後で長々と其處に坐つてゐたのではない、戲曲の進行してゐる間及び幕合ひにこんな事をきれぎれに頭に浮べたに過ぎないのである。

觀客は何れも「フアンニイの處女作」のわかりいゝ戲談（じようだん）めいた部分ばかりを樂しんで笑ひつゞけたが、幕が下りても未だ笑ひ聲は場內に漂つてゐる。しかし數時間狹い屋內の人工的に溫められ

た空氣と人いきれに蒸され、觀劇に疲れた人々は、舞臺を見てゐる間はみんなの心が一つに結ばれてゐたが、今はそれぞれ別々の家路を思ふ人であり、別々に今夜の芝居を批判する心になつて歸つて行く。

自分もその間に押されながら狹い戸口から寒い戸外に出た。非常に咽喉(のど)が乾いてゐる。丁度何處の芝居もはねる頃の眞黑な人の流れにまじつて地下鐵道の停車場に急ぎながら途中のバアで冷い麥酒を飮まうと樂しみながら歩いた。

四辻に來て曲らうとすると、恰もゆき違ふ車馬のたてこんだ爲め遮られて行く事も出來ずにうごめいてゐる人數の中に Miss B とその同伴(つれ)の娘がもまれてゐるのを見た。自分は片側の店の玻璃窓(ガラスまど)にすれ／＼になつて切拔(ぬけ)て行く一列の中にゐたから追越してしまへば追越せるのであつたが、なんとなく先方の視線を引き度い心持からわざと愚圖々々して人波の中に入つてしまつた。さうして車馬の往來に絶間が出來、人波が四筋の町にわかれ／＼に崩れると、自分が期待した通り二人の女は丁度目の前で、ホツトした風で何かさゝやきながら肩を合せて町角を右に曲つた。自分も同じ道であるからもとよりその後にしたがつたが、如何かして振り向けばいゝと希つても、二人は足早に歸りを急ぐので空賴みになりさうである。自分は人につき當るのもかまはず故意(わざ)と知

らない風をしながら二人を追ひ越す手順にした。

それは丁度自分の志したバアの前ではあつたが、その場の調子からみす〳〵見過してしまつた。けれども廣く扉を開いたその家の內部からのあかりは自分の横顏をはつきり見せたので Miss B は忽ち認めて聲を掛けた。

一寸帽子を取つて直ぐに二人に並んで歩き出すとその若い娘は紹介も待たず、貴方も咽喉が乾いてゐやあしませんかとなれ〳〵しく聲を掛けた。自分も咽喉が乾いてゐる、よければ何處かで一緒に何か水を飮まうと云ふと、實は今自分達はその相談をしてゐたのだと娘が又答へた。けれども貴方はもうちつと苦い水の方がいゝのではないかと Miss B は承知してゐてからかふ。娘は仰山に笑つたがその時丁度藥屋の前に來てゐたので、あまり明るい電燈の光りと入りかはり立ちかはる芝居歸りの人々の手前急に姿勢を正して取りすました顏の目尻と口もとに笑ひのあとを殘しながら娘は活潑に店の中に入つた。

其處いらに不規則に置かれた椅子も卓子も先客でふさがつてゐるので自分達は片隅に立つたまゝでなければ詮方がなかつた。

Miss B はレモン・ソオダを飮むと云ひ、娘はチエリイ・アイスクリイムが好きだと云ふ。自

分はどつちかと云へば惡甘くないソオダの方が好きなんだけれど、その娘に贊成した方が嬉しい氣がしてアイスクリイムにしてしまつた。

二人とも上氣してゐるが、色艶のよくない Miss B は油が浮いて一層醜くなつたのに反し、娘は涙に濡れたやうな輝きをもつ大きな目、思ひ切つてうすい唇は紅く燃え、何處か均齊を缺いた顏立ちがかへつて心をひくのであつた。

麥藁でソオダを吸つてゐる Miss B の頰骨の高い頑丈な顏と並んで、娘のつまみ上げた鼻のさきにあかりの透いて見えさうな美しさを見せた橫顏を中心にして盜み見ると、五ツ六ツ砂糖漬の眞紅な櫻坊をのせて桃色の甘露をかけたアイスクリイムの皿を左に持ち、銀の小匙を輕くとりあげた右の小指のしなやかさが妙に肉感的に思はれた、先づひとつ櫻坊を匙にのせて口に持つて行つたが、うすい唇をもれて小粒の眞白に並んだ齒の何處かに塡めた金の光るのも見落さなかつた。

今夜の芝居は面白かつたではないかと話掛け、返事も待たずにをかしかつた動作せりふを思ひ出し思ひ出し娘はアイスクリイムの閑暇にはしやいでゐる。

日本人の年齢は一寸わからないから自分をまだ子供だと思つてゐるらしく姉らしい心やすさで親しく話掛けては面白かつたかと問はれると、如何しても面白かつたと同意しなくてはゐられな

かつた。少しも濁りの無い透明な聲は固く締つたうす唇の動くまにまに白齒の間からあふれて來る、娘はすぐれて早口であつた。

藥屋を出て直ぐ向ふ側の地下鐵道の入口に行く時も娘は先き立ちになつた。氣の輕い身の輕い娘らしい。

車室の中は時間が時間なので充滿（いつぱい）の人で坐る場所が無い、娘はオヤオヤと云つた表情をしてうなづいて見せたが、その時其處に坐つてゐた學生らしいのが二人立上つて席を讓つたので Miss B と娘はやうやく腰かけた。

隧道（トンネル）を走る車のすさまじい音にもかゝはらず娘は Miss B の膝を叩いたり手を引張つたりして「ファンニイの處女作」のおさらひをしてゐる。釣革につかまつてゐる自分にはきれぎれにしか聞きとれないけれども、せりふを覺えてゐてそれを得意の早口で口にしては自分から笑ひを押へかねてゐるのである。ドラとギルベイ夫妻との會話のをかしさを娘は最もよろこんだらしく、ドラのへらず口を眞似しては自分の方に視線を投げて笑ふ。四邊（あたり）の人がその笑ひ顏に注意すると急にすまして手に持つプログラムを擴げてそれに眺め入るふりをするが長くは續かないで又ドラにかへる、Miss B が年役に目つきでたしなめると反つて面白がつて繰返へすのであつた。

十數分の後ハアバアド・スクエアに着き、ボストンとはうつて變つて家も人も寢靜まつた學校町に出ると身に沁みて夜更けは寒く、厚い毛皮の外套に包(つゝ)まれた娘の姿は急にちひさくなつてしまつたやうに見える。校內の楡の木立の下をぬけて行く時も娘は又自分にむかつてショオはほんとに面白いではないかと幾度も〳〵も早口に繰返へしては同意を求めたが、其の間に二度、三度 Merry, Mellow Shaw と呼んだ。それが韻律を保つて美しく響いた。

紀念舘(メモリアル・ホオル)の前で右に行く二人をそれ〴〵その家迄送つて行かうとしたが、Miss B も娘ももうぢき其處だからそれには及ばないと云つて承知しない。自分は Miss B の宿よりも娘の家は遠いだらうと推察し Miss B を門口迄見送つた後で、更に娘を送り屆ける重い任務のやうにも其の場では考へられた空想を滿たしたかつたのであるが、強ゐてとも云ひかねて別れた。

左樣なら、左樣なら、と太くかれた Miss B の聲につゞいて娘のほがらかな聲が冴えて響いて、二人はさつさと闇に消えて行つた。

それとは反對の左に折れた自分は木立の暗い道を家路にむかひながら芝居よりも彼(か)の娘を深く印象されてゐた。

Merry, Mellow Shaw,

Merry, Mellow Shaw.

RとLの發音のはつきりしないにもかゝはらず、知らず〳〵自分の唇は娘の聲を眞似する。いゝ響きを持つ三字を繰返へしてゐるうちに、たつたそれ丈で彼の娘はヂヨオヂ・バアナアド・シヨオの全體を批評しつくしてしまつたやうにも思はれて來た。

Merry, Mellow Shaw,
Merry, Mellow Shaw.

しまひには歩調に合せてつぶやいた。

Meerry, Mellow Shaw,
Meerry, Mellow Shaw.

（大正三年三月五日――途中休止――四年七月八日稿了）

久しぶりで芝居を見るの記

滿四年ぶりで故鄕に歸る身となつた時、自分はその四年の短かつた事を感じた。日本を出た時の自分と、歸り行く今の自分との間に、外觀的には年齡(とし)をとり、內面的には本來自分の持つてゐたものが極めて遲々と成長したゞけだ。何も目覺しい變化は無い。

不適當な引例だけれども、中學時代のいたづら友だちで、中途退學して亞米利加に渡つたのが、六年たつて歸つて來た時、彼は停車場に出迎へた自分の手を握つて How do you do? と云つた。自分は驚いて彼の顏を見たばかりで一言も返事が出來なかつたが、忘れた日本語を考へる風をしたり、英語の單語を如何にも自然らしく會話の間に插入する彼を疑はなかつた。彼がそれ程變つて來たやうに見えたからである。自分の舊友だとは考へられず、全く新しい友だちが現はれたやうに思はれたのだ。勿論自分にはそれ程の變化は無い。

もう一人の友だちは僅かに一年の歐洲旅行で、極端な悲觀論者(ペシミスト)だつたのが、極端な樂觀論者(オプティミスト)に

たつて歸つて來た。何時迄君はそんな事を云つてるのだと、彼の眼も口も自分を嘲つた。自分にはこれ程の變化も無い。

旅の終には自分は巴里に居た。周圍にゐた同胞の多くは、自分より先きに歸朝する人達だつた。その人々は自分に比べては短い海外の滯在だつたにもかゝはらず、日本も變りましたらうねえ、日本に歸つたらどんなでせう、と口癖に云つて居た。故國の文物制度風俗習慣、あらゆる物事を悉く目新しいものとして受入れる事が出來ると云ふ期待を持つて居たらしい。それがいかにも所謂新歸朝者の輕薄な誇張であるかのやうに、取り殘される自分には思はれてしかたがなかつた。

自分は此の數年の海外生活の間に、自分が生れ育つた國を忘れたとは思へない。日本の風俗習慣を珍しく思ひ見る事は、思ひも及ばない事だと考へながら、何等珍しいものを期待せずに歸朝の途についた。

船がロンドンを出て一ヶ月半後、新嘉坡から俄に同胞の客が多くなつた。突然自分の世界は狹くなつてしまつた。

自分は彼等よりも、少しは巧みに英語の會話が出來た爲に、生意氣だと云つて嫌はれた。彼等が浴衣の尻をまくつて甲板を横行する時、整然とした服裝をしてゐた爲に、氣障だと云つて憎ま

れた。醉拂つて助平な話をしない爲に、交際（つきあひ）を知らない奴だと云つて排斥された。しまひには自分を惡罵嘲弄する爲に徒黨を組むに至つた。此處に到つて、船中おとなしい人で通つて來た自分も、此方がおとなしければおとなしい程無禮な態度を執る彼等に對して、遂に一夜啖呵を切つてしまつた。さうして後で赤面した。

自分は全く驚いた。自分の目の前に開かれた世間は一變してしまつた。我が同胞がこれ程嫉妬深く、意地惡く、野卑であつた事を知らなかつたのだ、自分を保護する爲には邪智深い疑念が必要であると思つた。正直な心を持つて居ては身が危ないと思つた。成程自分は長い間故郷に遠ざかつて居たと、その時初めて感じたのである。

些細な外見上の事で、しかも自分の豫期しなかつた初めての驚きは、上海の町で小學校の女教員であらう、海老茶の袴をはいた束髮の婦人を見た事であつた。その婦人は別段醜い容貌でも、みつともない姿でもなかつたが、自分は暫時（しばらく）ふりかへつて後姿を見送つた。日本に居た頃毎日見てゐた女の袴姿が、これ程醜惡なものだつたとは想像もしなかつたから。

數へればまだいくらでも例をあげる事が出來るが、こんなつまらない事から、自分は自分らが日本に居た時には氣の付かなかつた事が澤山あつて、その爲に新しい印象から成立つ故郷を見る

事が出來ると思ひ初めた。

しかしいざ歸つて見ると、あれこれの事が物珍しかつたのも束の間で、靴に馴染んだ足に足駄をはいても痛くなくなり、襟(カラ)をはづしても風邪を引かなくなると共に、何も新奇な事はなくなり、久しぶりの故鄕が珍しくも面白くもなくなつた。同時に初めの間は少し物騷に思はれた此の故鄕に永住する事も平氣になつてしまつた。過ぎ去つた數年の海外生活も別に長くはなかつたと、又しても思ひ返した。

無駄な事を書いたやうだが、友だちに誘はれて久しぶりで芝居を見た時自分はこれに似た經驗をしたのである。

劇場の內部(なか)に入つた時自分は物珍しくあたりを見廻した。芝居が珍しいと云ふ柄でもないのに、行き馴れた歌舞伎座に親しさを見出すよりも、寧ろ意外に目を見張つた、無闇にだだつ廣く見える火の氣の無い場內には、八方から白晝(ひる)の光がさし込んで、閑寂なお寺の氣持がした。野外劇場のやうにも思はれた。その中を行儀惡くゆきかふ客や出方(でかた)が、狐につままれて野原を步いてゐるやうだなど丶無駄な事を考へて獨りで笑つた。芝居の女客に特有な、妙に落着かないで、その癖樣子ぶつた小股走りの姿が、いかにもわざとらしいをかしみから面白かつた。初めて歐羅巴の物

好きが、日本の浮世繪に描かれた人物の珍しい姿態運動に目を見張つたのは、自分の此の時の面白づくの度の強いものに違ひなかつたらう。

後から後から送られて來る客を見て居ると、あらゆる種類の人がゐる。衣服や髮の流行の一端もうかゞひしられる。狹いところに割込んで坐るのに窮屈な洋服を着た男が非常に多い。平土間の眞中にフロツクコオトの一群が居たのには驚いた。その中に巴里のホテルで見た獨乙仕込みの醫學士のゐたのには更に驚いた。

直ぐに一番目「貞任宗任」があいた。

漁家と花の木と書割の青い海に少しは狹められてはゐるが、廣々とした舞臺が曾て見た事の無い程廣く思はれた。これ程馬鹿々々しく不必要に廣い舞臺を、自分は當り前のものとして見たのだつたらうか。

自分の空想は又、その青い海の邊りに梅櫻の咲く我國の微妙な春に誘はれて行つた。時々何處からか、建てつけの惡い戸のすき間から吹き入る風が、風邪氣の襟に氣味惡く觸れてゆくのさへ、舞臺の景色とひつくるめて、奥州外ケ濱の汐風のやうに思はれた。

日本程、春夏秋冬の推移の細やかなところは何處にもあるまい。衣食住の關係からも、そのう

つろひを沁々身にしみるのではあるが、歐米を旅行して、彼の國には冬と夏はあつても、日本の春や秋に相當する季節は無いやうに思はれる。自分のしばらく居た北米の都市は、冬は寒く夏は又思ひ切つた暑さだが、春秋は短くて雪解の下から草の芽が青々と萌え初め、見る間に並木の楡、柏、楓などの梢は鬱蒼として、外套を脫いだ人は早くも額に汗を覺えるのであつた。歐羅巴に渡つてからも、夏、冬服のまゝで通せた。冬もあまり寒くなく、自分が亞米利加でこしらへた外套は、北極探險にでも行くやうだと云つて笑はれた。從つてその間をつなぐ春秋の推移も、あまりにおだやかで、日本のその頃のやうに人の思想迄も支配するやうに心を誘ふものでは無い。

自分には序幕の舞臺が、たとへ芝居として珍しいものではないにしても、久しぶりで故國の氣候風物を目のあたりに見せられ、又如何に昔から吾々の戲曲は、自然の情趣によつて興味をつないで來たかを考へさせられて、面白かつた。

一體吾々の生活は、いかに氣候風物と密接に結びつけられてゐるか、日常生活に於てもいかに吾々が季節に神經質であるかは、歐米人のうかゞひ知る事の出來ない事實であらう。近頃のお天氣模樣は重大なる會話の材料である。物語を讀んでも、芝居を見ても、何時も吾々の主人公、女主人公は、雨に風に雪に嵐に、その生涯をあやつられてゐる、かゝる氣象の支配下に、吾々の存

在はあまりに心細く思はれる程だ。

さうして此の氣候風物に對して特に細やかな感覺を持つ人々は舞臺の上に於ても極めて巧妙に、或は知らず識らずに、上記の意味に於ける自然を背景として情趣を浮ばせる技巧を發達させた。吾々の如く自然に親しい生活をしてゐない歐米人の芝居に、此の要素を缺いてゐる事は當然の事である。

但し自分は此の技巧を條件無しに讚稱するものではない。これあるが爲めに吾々の戯曲は繪畫的にはなつても、彫刻的に、建築的にはならないのである。眞に偉大なる藝術の出現を妨げる可憐な趣味と云ふ可きであらう。

此の戯曲に於ても、自分の面白く思つたのは、貞任宗任兄弟の、一人は大勢の抗す可(べか)らざる事は知りながらも、自分の尊び愛して來た父祖の地を守つて最後の一人となる迄も戰はうと主張し、昨日(きのふ)に對する熱愛に執着し、自己の意地に生きんとして死を擇び、他の一人は聰明にも世の中の推移を知つて、親はらからを捨て、父の敵に歸順すると云ふ、作者の覘(ねら)つた對照ではなく、此の戯曲の背景を爲す歳時記の幾頁がもたらす淡い情趣に他ならない。

幕が引かれて、漁家の板廂に近く時を同じくして咲き匂ふ梅櫻の立木の邊(また)りから、浪打際に流

れ木を拾ふ濱の娘達の姿を見た瞬間に、故鄕の風物の戀しさがひしひしと迫つて來た。そのまゝ幕を閉ぢたら自分にはかへつて淡いながらも懷しい印象を殘したであらう。

しかし次の瞬間には不愉快な聲が連續して耳を襲つて來た、殊に女形の咽喉と鼻で無理に調子を取りつくろつた窮屈な聲が自分を苛々させた。以前から女形の不自然な聲は嫌ひだつたが、惡どく耳の底迄こびりついて來るこれ程執念深いものとは思はなかつた。恰度上海の町で女の醜惡な袴姿を見た時の不愉快を、今度は耳から受けたのである。

女形程無理の無い丈、男に扮する役者の聲は樂だが、それでも惡聲の持主ばかりだ、一人二人を除いては、聲によつて快感を與へ得る役者はゐないではないか。

一體吾々はどうしてかう聞き苦しい聲を持つて生れたのだらう。蕃地の民は知らないが、所謂文明國の國民中、吾々程不快な聲を持つ者はない。倫敦邊の料理屋などで、醉拂つた同胞の役人、軍人、勤務人などが度はづれの高聲で、その地の人には通じまいとたかをくくつて、日本人に特有な、ところ擇ばぬ助平話に興じてゐるのを苦々しげに見守る外人を見て赤面した。彼等の話の內容はわからなくても、あのわざとらしい笑聲、あの不愉快な高聲は人の神經を苛々させるに違ひない。

今、役者の咽喉にからんだいやな聲を聞いて、吾々がかかる惡聲の持主に生れたのを恥辱と思つた。舞臺に立つ人は少なくとも發聲の練習に努めて貰ひ度い。聲音救濟の一方法としては西洋の聲樂の稽古をしてみるのも何かのたしになりさうに思はれる。兎に角勉強すれば吾々の聲だつて、少しは聞きにくくなくなるだらう。

その惡聲の入りまじる會話の間に、哀れに優しい傳說を、惡聲の誰彼が物語り始めた。それは丹後の國の三莊太夫に、對王安壽が殺された怨恨が殘つて、丹後の者が入り込むと南部の海が荒れると云ふ丹後波の傳說や、毎年の秋渡る雁が廣い海の上で疲れた羽を休める爲に咬へて來た木ぎれを、外ケ濱邊に落して置く、翌年の春歸る頃渚に殘る木ぎれの多くあるのは、人に捕られたり死んだりした雁のある爲だと云つて、供養の爲にその木ぎれを拾つて焚いて、諸人に浴せしめる雁風呂の話である。かう云ふ懷しい插話は自分の心を誘ふ。けれどもそれは此の一篇の戲曲の構成には殆んど關係の無いもので、それは單に瞬間に消えるはかない情趣に過ぎない事は斷る迄も無い事だ。

正直に云へば自分は此の戲曲を此の作者のものとしても、あまり面白いものだとは思はない。附燒刃らしいいやみが他の作よりも一層強いからである。

それを演じる役者は如何だらう。自分は一言下手だと云ひ度い。少なくとも總體の聯絡の無い事は誰しもうなづくところであらう。

一體丸の内に帝國劇場が出來てから、役者の組合せに狂ひを生じた。羽左衞門の油の切れかゝつたのは、彼の技藝が行き詰つたのでは無くて、相手が無くなつたのだと考へ度い。年が年中帝國劇場の芝居のつまらないのは、幸四郎と云ふ大根の中の大根が上置きになつてゐて、他の役者を殺してしまふからだ。その上近年は、大阪の興行師が東京の芝居迄もその支配下に持つて行つて目新しいと云ふ事專一に、所謂東西俳優の顏合せをふんだんにやるので、水に油を注いだやうな調子の合はない芝居ばかり出來上るのである。一人一人離して見れば、かなりうまい役者の芝居が、一人よがりの素人芝居に類するのはその爲である。舞臺上の役者達の技藝を總合的に組織立てる事を忘れてゐるのだ。あまりうまいとも思へない一座ではあつたが、明治座に孤立して居た頃の左團次一座の芝居が、存外面白かつた一事の如き、ついて學ぶ可き生きた教訓である。

市川左團次と云ふ人が人格の人である爲か、彼の一座の人々は彼を中心とした強い結合力を持つてゐた。舞臺の上では役者同志がお互に一人勝手の芝居をしない丈の同情と理解を持つてゐた。さうして岡本綺堂氏の新作を演じるのに最も適當な特色を帶びた、實はあんまり感服しない一風

變つた藝風に陷つてしまつた程、此の一座以外の連中とはうつりの惡いものになつたのである。見よ、我童の丹後小次郎と松蔦の貞任妹松山を。延若の兄と左團次の弟を。どつちかと云へば素人臭い人々の間に羽左衞門は繼つ子の如く、更に歌六に至つては、あまりの時代錯誤に吹出したくなる。至純の藝術を尊重する自分は、此の混雜した一座を寧ろ氣の毒に思つた。

しつかりした舞臺監督の必要は、花道を歩く役者の足取りを見ても感じられる筈だ。

序幕では又五郎の岩手五郎が、むやみに力んで兩手を突張り、兩足をふんばつて豪傑がつて出て來る。日本に居た時は氣が付かなかつたが、海外で同胞を見ると、かへつてその特徴が明かな爲か、自分は役人軍人と商人、官立學校出の人と私立學校出の人の姿勢、殊に歩きつきに著しい相違のある事を發見した。卽ち前者は無理にも威儀を保たうとする根性が浸み込んだのか、肩肱を不必要に張つて、わざわざみつともなく固くなつて歩いてゐるのだ。此の時の又五郎はその不自然な姿勢を彷彿させた。

かと思ふと二幕目返し義家陣所の場では、家臣の一人が思ひ切つて無技巧に近代的な歩きつぷりを麗々と花道長く示したのである。

二幕目常光寺境内の場に於ても自分は背景をなす情趣と、仕出しの出て來る瞬間ばかりを興が

つた。夜の鐘樓に白く櫻の散りかゝる時、笛太鼓の音も賑かに囃し立てて、若者大勢が踊り狂つて出て來る一瞬が、本筋の怒りに震へる貞任の一生懸命の芝居よりも遙かに面白かつた。それがありふれた景色なのは勿論だが、それでもその方が心を引いたのだ。

とは云へ立廻りは面白かつた。歐羅巴の芝居には殆んど吾々の所謂立廻りに比す可きものが無いやうだ。決闘は果し合ひよりも簡短を極め、挌闘は立廻りの悠長に比す可くも無い。しかし時にはその簡短な決闘挌闘が、かへつて眞實性を以て物凄い。たとへば「ハムレット」の大詰は見るもむごたらしく、左團次延若がいつかやつたと聞く、彼の愛蘭土の作者マアレイが「長子の權利」(Birthright, by T. C. Murray)の兄弟の激烈な挌闘でも、ほんとの一瞬で兄は弟に殺されるが、その瞬間に自分は息が詰るやうに思つた。

吾々の芝居の立廻りは、これを遊戯化して、それがたとへ命のやりとりでも、一種立廻りの情調に低徊しないでは氣が濟まないのである。その立廻りを面白がつたのも、久しぶりの事だから無理では無いと思ふ。

義家陣所の場は面白さうで、その實面白くなかつた。その理由として二ケ條を玆に擧げる。第一は左團次がうまくなかつたのだ、それには相手の羽左衞門と二人が、互に取つつき場なく見え

た事も附加へられる。左團次は、默つて出て來て默つて舞臺に坐つてゐると、威自ら他を壓する氣持のいいところがある。傳へ聞くその人となりから想像して、自分はそれを此の人の人格に歸して尊敬してゐる。しかし口を開くとあの不快に濁つた聲が邪魔になり、動くと積極的に下手だと思はせられる事が多い。此處でも芝居をしないで坐つて居る時が、一番立派な芝居だ。

第二に自分は此の戲曲に現はれる宗任を好かない。分別臭いいやな奴だと思ふ。轉寢してゐる義家を見て、むらむらと殺氣を帶びて詰寄つた時は嬉しかつた。一刀の下に斬つて捨てたら、正義ではないけれども、自分は彼が好きになるだらう。斬り損じてもいゝ。事が破れた丈一層自分は彼に同情するに違ひ無い。彼が小悧巧な事を云つて、刀に掛けた手を放した時自分は不愉快だつた。

大詰は又、前二幕とは全然別の芝居のやうに思はれた。それは主として延若の藝風と、左團次及びその一座に長く居た人々の藝風との間に越ゆ可らざる溝の横たはる爲である。此の一幕では、所謂綺堂氏の新作の味ひが全く拔けてしまつた。

自分は貞任の母妹妻の一人一人が自害する度に撞く鐘の音の、最後のものが早く鳴ればいいと思つた程氣短になつた。兎にも角にも引きつづいて見て來た此の戲曲が、大詰に到つて全然違ふ

ものになつてしまつたのは、今迄はだまかされてゐたのだと云つたやうな氣を起させたのだ。

幕が下りてホツトした。

友だちに面白かつたかと訊かれた時、自分は主として東西の芝居の相違から目新しく思はれた事を擧げて、それ丈が面白かつたと答へた。さうしてそれは、再び芝居を見、三度芝居を見れば、間も無くつまらなくなるやうな取るにも足らぬ面白さだつた。

その證據には物珍しく運動場を一廻歩き廻つて、歸つてやつと中幕があいた時、自分はもう全く新奇を喜ぶ心から面白がつた態度に別れ、久しぶりで見た爲に珍しかつた事も珍しくなくなり、全く長い間見馴れた古い芝居の心持と融合して、主として役者の技倆の巧拙に興味が掛つてゐたのである。

女形の聲も耳馴れては左迄不愉快でなくなつた。此の息苦しい不自然な聲が、反つて本緣付の高二重、四つ目の紋散らしの幕や金襖の前に起る、思ひ切つてこんがらかつた忠義恩愛にのみかかはつてゐる一群の悲劇には、それでなくてはならない聲のやうに思はれてきた。

これは所謂新しい芝居と古い芝居との異る點であるが、昔からの型に縛られる爲、役者役者の穿き違ひや、演勝手(しがつて)がなくて自然に調和を保つのである。たとへ此の一座が混雜を極めたもので

あつても、此の理由から「盛綱」や「直侍」は「貞任宗任」や「鼓觀世」に於けるよりも役者と役者の間の脈絡が、よりよくついてゐるわけだ。

自分の心には次第に古い芝居の情緒が蘇つて來た。物珍しさがなくなつたと同時に、目觸りな事も減じた。久しぶりで芝居を見ても別段久しぶりらしい氣はしないものだと、先刻の事は忘れて落ついてしまつた。

自分はただ舞臺の上の世界、それは長い間の傳習が自然と作くり上げた一種微妙な情緒を起させる世界に引かれて行つた。極端に安靜な心持の時に限られる、涙ぐましい寂しさがうれしく自分を包んでしまつた。

「盛綱」「直侍」は面白く、「鼓觀世」が忌々しい程つまらなかつたのも、此の懷しい心持を彼は只管深くするのに、是はいたづらにかき亂す爲である。

自分が一番目でそればかりを面白がつた背景や插話が持つ情趣、殊に季節氣象が戲曲をいろどる技巧も二番目に到つては更に一層適切に、此處ではもう「雪暮夜入谷畦道」と藝題から斷つてゐる丈、或は雪の夜の入谷の情趣そのものが戲曲の全體かと思はれる程、筋ではこばれる人事の紛糾よりも主なるものとして考へられる。若しこれが雪の夜でなかつたら、此の芝居は想像も出來

ない程つまらないものになつたであらう。此處ではそれが既にいろどりではないのだ。此の點に於て默阿彌は古今獨歩の純一な才能を持つてゐた天才だと云ひ切る事が出來る。

降りしきる雪は自分の身の上にも積るやうに思はれて、羽左衛門源之助を他人ではないやうな親しさで見守つた。

そこにはもう全く、久しぶりで芝居を見た輕浮な面白がりは心の外に消えて行つてしまつたのである。（大正五年十二月十七日）

無名會の「夜の潮」

ジョン・メエスフイイルドの戯曲「ナンの悲劇」(The Tragedy of Nan, by John Masefield)を、「夜の潮」と云ふ藝題で、無名會の連中が有樂座でやりますと久保田万太郎氏が教へてくれた。それは同氏につれられて初めて麹町の泉鏡花先生のお宅へお邪魔した時、いろいろ雑談の間に聞いたのである。恰も先生が階下に下りて行かれた間に、自分は數年前ボストンでそれを見た時の印象を話した。英吉利マンチェスタアから來たホオニマンの一座だつた。

自分は久保田氏にむかつて、「ナンの悲劇」は現代英吉利作家の戯曲中最もすぐれたものゝ一つだと云ひ切つてしまつた。

數日後、三田の山で、「三田文學」の編輯に就いて編輯者と寄稿者とが寄合つて相談した歸途、自分は久保田氏を誘つて有樂座に行つた。

その芝居を見た頃の亞米利加生活もそぞろに想ひ出されて來る。あのケムブリツヂの二年間は

ほんとに寂しかつた。ほんとに話し合ふ友だちもなかつた。時たま面白い芝居でもかゝると、氣の狹い口さが無い同胞の學生を避けてはボストンに通つたなさけない姿、殊に芝居もはねた夜更けの地下鐵道にはこばれて下宿に歸る自分の孤獨な姿が、今更懷しく浮んで來る。

そんな回想を伴ふ「ナンの悲劇」を見る事をよろこんで、みちを急ぎながらも、ほんとにいゝ芝居ですよと、うるさく久保田氏の耳を傾けしめた。いかに詩人の描いた戲曲が、或種の社會問題などを取扱つた戲曲などとは比べる事も出來ない程、飜譯には不適當であるかと云ふわかり切つた事實さへ忘れて居た程自分はいそいそしてゐたのだ。それには此會の舞臺監督で且「夜の潮」の飜譯者なる坪内士行氏は、永らく英吉利で芝居を専門に研究した人だと豫て聞いて居た事も自分をしてその舞臺を疑はせなかつたのであつたらしい。

東洋軒でお辨當を喰べてもまだ時間がありあまつたので煖爐の側でぼんやりしてゐたが、その間にも「ナンの悲劇」をひとり想ひかへした。

舞臺はブリストル海峽の潮の上つて來るセヴァアンの川沿ひの村である。あの地方のはげしい訛を坪内氏はどんな日本語に譯したらう。Accident を Accidenk と訛り、Flower を Vlower と發音し、Hの響音(サウンド)に到つては殆んど全く發音出來ないやうな無學文盲の地方訛をどう取扱つた

のだらう。

Jenny. Us' ll' ardly ave the things ready.

Mother. Company be coming at dark.

Mrs. P. Things' ll' ave to be ready. Old your tongue.

と云つたやうな會話の一つ二つをぬき出しても、あたりまへに譯してはその人々を活かす事は出來ないのに、全體を通じてのかゝる會話の調子を出す事に譯者は如何に苦心したであらう。此の訛のはげしい會話は此の戯曲の中の人々とは切り放す事の出來ない關係にあるのだ。自分なんかには、どんな日本語が一番適當してゐるか見當もつかない。飜譯なんか怖しくて手も出ないのに――と他人(ひと)事ながら不安になつて來た時、始まりますと給仕の人が注意してくれた。

見物席の電氣の消えた時、急ぎ足で入つて來て、自分達の隣に座つた洋裝の人があつた。小山內氏だつた。挨拶をする暇も無く幕があいて、あかるい舞臺の電光(あかり)の中に、自分の期待をうらぎつて烈しい滅幻(ディスイルウジオン)覺の場景(シイン)が無遠慮に展開され始めた。

兎に角坪內氏もホオニマン一座の演じた此の戯曲を見たに違ひない。何故ならば皮相的には舞臺面から小道具衣裳迄彼とこれと大差が無いからである。自分は特に皮相的と云つた。それは卓

子や椅子の置場が彼に等いといふ意味で、しかもその精神は遂に摑んでゐないといふのである。
たゞ幕があいた丈でも既に全體に氣の拔けた無神經な感じのする事を禁じ得なかつた。
自分は坪内氏がホオニマンの舞臺と違つた舞臺を組立てても決して異存は無い。若しそこに此の戯曲を活かす爲の用意が行き渡つてゐるならば、簡單な紹介や模倣よりもその獨創的な舞臺を取り度い。しかし今度は舞臺監督は、彼地で見たまゝの舞臺をそのまゝ見せ度い腹だつたらうと思ふ。それならば戯曲中の人物の衣裳小道具よりも寧ろ此の戯曲そのものを、最も原作に忠實にその儘見せるやうに注意しなければならない。
先づ幕のあいた瞬間の自分は舞臺が廣過ると思つた。舞臺の廣狹は上演される戯曲の性質によつて決定されなければならない。隣に坐つて居るので直ぐ引合に出し度くなる久保田氏の「暮れがた」を有樂座で見た時以來、巧緻の極致に達した氏の戯曲は到底劇場の舞臺に於て演ず可きものでなく、あれは日本風のお座敷で障子を通して來る柔かい晝の光の中で、全く聲を張らずに演ず可きものだと思つた。若し雪もよひの空でゞもあつたら一層よからうと云つて作者久保田氏に笑はれた事もあつた。「ナンの悲劇」のやうな戯曲も、もつと狹い舞臺で演ぜられなければならないと思ふ。さうして此の空虛に廣い舞臺が無名會の「夜の潮」そのものを象徴してゐるやうに既に

豫感されたのである。舞臺が廣過ぎますねとさゝやくと、小山内氏は默つてうなづいた。

入江の水が見えませんねと自分は追掛けて又さゝやいた。夜の潮のさして來る、野の一端にどんより湛へた入江の水が、玻璃窓の外の背景をなしてゐたボストンで見た時の記憶をたどつたのである。

曾て文壇に自然主義の運動が起つた時、その派の若い批評家は硯友社の代表した一時代の文學を皮相寫實と呼んだ。その批評のあたれるや否やは暫く措き、無名會の「夜の潮」を評するにこれ以上適當な言葉は無い。まことに皮相寫實である。

自分は此の戯曲を殘忍凄慘なる特異の抒情詩だと思ふ。人物の描寫に於ては極めて客觀的に寫實的な手法を用ゐながら、一篇の戯曲としては主觀的色彩の濃い抒情詩である。其處に此の戯曲の特徴もあれば面白さもあるのである。

人物はすべて獨立の存在を持ち各自の性格に從つて成長しなくてはならない。しかしその人々は作者によつて生まれたのであつて、路傍で拾ひあげられたのではない。だからその人々は各自に性格は發展させながらも、自然に作者の持つてゐる色彩の調子を出す要素として働くのである。この戯曲の精神を解せずに演ずる結果が皮相寫實としてあらはれたのであらう。

扨て舞臺ではミセス・パアゲタアと娘のジエニイが徹頭徹尾詩人の感情を無視して皮相寫實を目標とし、しかもその方向に於ても水平線上には出る事も出來ない、下手よりももつと惡い癖のある技藝を見せ始めた。

自分の氣にかゝつた會話の飜譯についての自分の問題はその儘に殘された。何故なら、譯者の選んだ言葉は不滿足だつたが、前にも云つた通り、それならどんな調子の日本語でなければならないか自分には矢張り見當がつかなかつた。たゞ、もつともつと非道い言葉でなくては駄目だと思ふ。同時にその會話の飜譯に、坪内氏の苦心のあとの少しもあらはれて居ない事が自分を不愉快にした。

さう云ふ無神經は此の飜譯劇の全體を貫いて居る。人間はすべて手輕に類型的に解釋されてゐる。パアゲタアの女房は意地の惡い女である、娘はこまつちやくれたおちやつぴいである、ナンはいぢめられる哀れな身の上の娘である、と簡單に筋書的に、生きた命の通つてゐる、戲曲の發展とともに性格の發展を持ち、その爲に更に新しい事件の紛糾をみる有機的關係を全然閑却して居るのだ。かう云ふ風に藝術の作品を無慚に取扱ふ無神經な人間は心配が無くて幸ひであらう、とあらずもがなの冷嘲も勢ひ心に浮んで來る。

先づ小作人の女房のナンに對する憎惡は、今吾々の目の前に幕のあいた瞬間が示す一定の時に於て、既にその以前から持越しの根強いものである事は疑ひもない。しかしその娘ジェニイはその時決してナンを憎んではゐなかつた。前田筆子といふお伽芝居の桃太郎にでもしたら面白さうな女優の演じたやうな、いたづらつ子らしい云ひつけぐちに母を怒らせ、おだてるやうな端敵役(はがたき)では無い。ナンの衣服のかくしから母親が取出した手紙を村の若者ディックから來たものだと云ふ時も、それが告口(つげぐち)の目的でするよりも、ただ單に眞實ディックの手蹟だからディックからのだと云つたまでゞなければいけない。從つて又母親がナンの衣服を汚れた桶の中に投げ入れるのを見ては、母親の振舞ひにはらはらして心からナンを氣の毒に思ふ心持でなければならない。

ジェニイが小賢しい意地惡でなくてこそ、母親がナンの父親は絞罪に處されたのだと物語るところが活きて來るのだ。意外な事實を聞かされて、娘がいかにも娘らしい好奇心と驚きから、立入つてナンの身の上を聞き度がる、そこに作者の描いた人間の心持の活きて働く微妙さが細(こま)やかな技巧で示されてゐる。

ふとした粗相から娘が父親の祕藏の大杯(マッグ)を床に落して割つてしまひ、泣き聲を出して悲しむのを母親はかばつて二階にやつてしまふ、直ぐ後に父親が入つて來る。あの數分間には親と子の間

の温い情愛が溢れるやうな氣持がする。ところが此の日の舞臺に於ては、始めから概念的に善人と惡人を區別してゐる爲、少しもさういふ自然の心持が出て來ないのであつた。

パアゲタアのやうな、つまらない、大杯の一つにさへ、長い間親しんで來たと云ふ丈で、誇と情愛を感じ、それを失ふ寂しさに怒り震へるやうな男は英吉利人の一特性を示してゐて面白い、こんな事に迄その地方色の強く出て來る藝術の細かい味ひに自分の心は屢々つながれる。

間も無く女主人公ナンの出になつて、香川玉枝と云ふ女優を見た。これが若い女優なのかと疑はれる程弛んだ、表情の無い顏で、子供を澤山產んだ女のやうに身體にしまりの無いのが不愉快だつた。少し耳に響き過る聲もメヱスフイイルドの感觸を害しさうに思はれる。しかしそれでもパアゲタアの女房になつた田中勝代などと云ふのに比べると、まだしも癖の無いのが取柄だ。これは帝國劇場のやうなところにゐた期間の長短にもよるのであらう。

直ぐに女房との對話になつて、折角優しい心掛けで手助けをしようとしても、爲る事なす事が叱られる種となり、涙の他には言葉も出ないやうな心持にナンは堪へようとする、殘忍な壓迫に作者が此の戲曲の背面に置いた陰慘な心持から見る人も胸苦しく、同情の涙が流れてくれゝば助かるのにその涙さへ出ないやうな重苦しさを感じる場面である。しかし戲曲の理解が大ざつぱで、

ただ概念にばかりたよつた結果、此の夜の舞臺に於ては、女房もナンも其の凄い光景迄到る事が出來なかつた。女房は始めから簡單に惡人ときめられ、ナンは始めから簡單に善人ときめられてゐる爲、それが屢々古い芝居の折檻場のやうに若い綺麗な娘が意地惡の婆アに虐待されると云つたやうな對照色取りの面白さを主にしたものになつてしまつた。玉枝のナンは非道いめにあふ事を始めから覺悟し、非道いめにあふかはりには見物の同情を引いて報いられようとする根性をかくす事が出來なかつた。

從つてナンの持つてゐる堅意地が少しも出て來ないで、只管物哀れになりたがるのであつた。これは東西國民性の相違で、自意識の強い、駄目と知つても當然主張すべき事は主張する彼等とは反對に、吾々、殊に日本の女のあきらめやすく境遇に身を任せては、せめて涙にやるせない救濟を求める心根が、どうしても邪魔をするのかも知れない。

その哀れさは新派の芝居の悲劇の女主人公に共通な哀れさである。その爲に二人の女が云ひつのつて、ナンは聲も震へながら、或は聲も出ない程感情は昂進して來て、涙を堅意地に押かくしながら歎き怒つて相手を詰るところ、遂には唯一つの父の遺品なる自分の衣服を引裂かうとする女房に抗ひ、衣服の襟のちぎれたのを見て思はず知らず卓子の上の刃物を手にして相手を見詰る

ところ、さうしてその刃物を叔父に取上げられ、二言三言捨ぜりふを云ひはしたが堪へ切れずに泣くところ、泣きながら亡き父にかこつところ、さう云ふ哀れを通り越して、殘酷を極めた身動きも出來ないナンがちつとも浮んで來なかつた。

しかし、それもこれも若い役者達には無理な注文であらう。此の人々が曲りなりにも努力してゐる事は充分認められる。不幸にしてゐる事が出來なかつたのであらう。日本の新劇團の中で拔群の成績を擧げた自由劇場の如きも役者に敎養があるからでもあるが、主として頭目市川左團次の人物と、戲曲上演者としては歐羅巴の眞中に出しても恥しくない小山內薰氏の功に歸さねばならぬ。

これは全然舞臺監督の責任であるが、一體に「夜の潮」は原作に比して綺麗ごとに過ぎた。その會話はもつともつと非道い言葉でなければならないと前に云つたが、單に會話ばかりでなく、あらゆる點に於てもつと思ひ切つて汚ならしく不見目で目もあてられないやうでなくてはいけない。女房とナンの爭ひの間に食物や衣服の事迄出て來るが、あそこなぞは如何にナンが、或は此の戲曲そのものが、單に外面的狀況のみならず、心身の奥底から不見目なものである事を強く感ぜしめるところである。それが單に爭ひの方にばかり重きを置いて、その爭ひの背後の暗い生涯と無

關係なもののやうに取扱はれてしまつたのは、偏に淺い心入れの結果である。

それから、少し長い臺詞になると聲を張上げて演說調になりたがる惡い癖が、所謂新劇團にはついて廻つてゐる。西洋の近代劇はすべて社會問題の宣傳だと思ひ違へてゐるのかもしれない。今朝の或新聞に、「夜の潮」は戀愛は何よりも強い事を主張した戲曲だと書いてあつたのを見て、かう云ふ批評家に紹介されては無名會が可哀さうだとも思つたが、舞臺の上の實演を見ると多少さう云ふ誤解を招くのも無理で無いと思はれる節がある、まさか坪内氏はそんな風には考へてゐやあしまいけれど。

續いて此の戲曲の中で自分の最も好きな場面になる。それはパアゲタアの仲裁で喧嘩も止み、ナンがすすり泣きながらも手助けに林檎を切つてゐる、物語を描いた油繪のやうな場面に、何も知らずにジエニイが入つて來る。ナンが暫く退場すると、母親は娘に、今宵ディックが來たらナンと二人のそぶりに注意しろと云ひつけて出て行く。さうして再び入つて來たナンとジエニイが舞臺に殘つて、娘らしい會話のやりとりになるその少時が原作では堪らなくいい。

ナンはまだ涙干かず泣いて居る。ジエニイはそれを慰めて、お前の目は涙で赤くなつてゐるから洗ふといいと云ふ、お母さんはなかなか氣むづかしい人だけれど、決して惡氣で云ふのでは無

いと云ふ。

自分は此の時のジエニイには少しもやましいところは無く、心から人間の溫い情が湧いて來て、ナンを哀れむ心が深くなつてゐるのだとしか考へられない。それは直ぐに他の刺戟ではかなく打破られる程のものではあらうけれど、若い娘の常に何物にか青春の熱情を寄せ度い心が此時この一人の胸に潮のやうに漲つてゐたのだと思ふ。原作を讀んで此の一節に來ると、人間の持つてゐるいゝ心が此處に強く溢れてゐるのを感じて胸も轟く。さうして更にそれが續いて起るジエニイの輕い嫉妬(ねたみ)や、後に來るナンの運命の暗さを一層明かにするものであると考へる。だから無名會の筋書が語るやうに、ジエニイはパアゲタアの女房と「一緒になつてナンを追出さうと計る」娘だとは思はない。成程ジエニイはナンの悲劇をかもす重大な要素に違ひない。又事件の進捗につれて、ナンを憎みも厭ひもする感情が心の閾を越えもしよう。けれども彼女には意識的にナンを謀計(はかりごと)に陷し入れようとする深い陰謀(たくみ)はなかつた。始めから惡人の系統に此の娘を入れてしまつたのは手取早(てつとりばや)過ぎて淺はかである。人が事件を生み、事件が人を生み、事件が人を生み、人が事件を生む複雜な交互作用を全然無視してゐるのである。

遮莫(さもあらばあれ)、ナンは今むすぼれた心に情の露を受けて活々(いき／＼)と蘇(よみがへ)り、ジエニイに對しては少しの隔て

も感じなくなつて、心の内に祕めたあらゆる事を打明けて悔いない心に驅られてゐる。親切で優しくて可愛らしいお前を見ると何もかも話してしまひ度いと進んで云ふと、ジェニイも今は全く子供らしい無邪氣な氣になつて、他人も自分を綺麗だとほめてくれるなどと答へて、互に抱合ひもしかねない心持になるところである。

ナンがジェニイにいい人の有無を訊ねると、いい人？　私はまだ誰も無いと答へる。まだないのかと繰返して訊ねると、誰といつて特別の人は無いと云ふ、此の邊の會話は技巧の自然を極めながら、その時その人を明瞭に彷彿させる。

その時ナンはジェニイを抱いて接吻し、さうして自分の胸に想ふ人はディックだと云ひ切るので、豫てさうとは知りながらもジェニイの心には今更押へ切れぬ輕い嫉妬が湧いて來て、今がたナンに對して持つた心持を忘れ、ナンの立去るのを待ちかねて次の間の母を呼んで告口するのである。その微妙に動く心持を推察する事が出來ないで、ただ無闇にお家騷動めかしたのが無名會の「夜の潮」であつた。

いづれにしても自分の期待した震へる程いい幕切れがただ筋を賣るありふれた芝居の序幕に類したのは殘念な事だつた。

二幕目のディックとナンの戀語りは隨分演難いだらうと豫想された。頻々と出る外國文學の飜譯を見ても、男女色模樣の場面には必ず吹き出し度いやうな文句が續出する。小說だつたか戲曲だつたか、誰の作を誰が譯したのかそれも忘れてしまつたが、兎に角男が女の手を取つて息もはずみながら云ふ言葉に、「私が貴方をおもふと云ふ事は、許される事だと考へても差支へ無いでせうか」といふのがあつた。一體に舞臺以外の實際に於て男女の色模樣に西洋のやうな芝居がかりの型が完成してゐない爲か、控へ目をいいとする吾々の目にも耳にも、それが日本人の口から出る時、日本人の身振りで見せられる時、どうしても滑稽に思はれる。此の一座の人々は單に洋服を着たばかりで、身のこなしの研究が屆いてゐない爲、一層をかしくなつたのだ。敢てナンに扮した人ばかりでなく、女房も娘も仕出しの末に到る迄、女はすべてしよぼしよぼした內股の歩きつきが、裾の廣い洋服にうつりが惡くみつともなかつた。

世間話から次第におもひを述べ、しまひには女の手を取つて無理にも接吻しようとする。女は自分の父は絞罪に處された人に嫌はれる身の上であると打明けないでは氣が濟まないので、それを拒む氣も一方にありながら、遂には自分からも接吻を要求する、あゝいふ風に四圍の面倒を考慮に入れない一瞬迄烈しくのぼり詰めて行く經過は、少なくとも現在吾々は持つてゐない心持だ。

此時見物が笑つたのは笑ふ見物にはもつと技巧的な口説文句しか想像出來なかつたのであらう。同じ理由から、沈み切つた身の上ながら、しかも強情に已れを信じる堅意地なナンの戀が燃えて來るところを、香川玉枝は優しい哀れを專一に心掛けた。身の上にからまる陰影が、此の色彩の濃い場面にも、まつはりついてゐる凄さが全く浮ばなかつた。

それから、これは坪内氏に限つた事ではないが、人名はその儘呼捨てにする方がいいと思ふ。デイツクがナンちやんナンちやんと呼ぶのはいかにも耳障りだつた。曾て文藝協會でイプセンの「人形の家」をやつた時、今は死んだ土肥春曙氏がノラさんノラさんと呼ぶ、そのノラが野良犬の野良の良に思ひ切つて抑揚をつけた發音だつた事なども思ひ出された。

此の場に出て來る仕出しの男女の中に、たつた一人身體についた洋服を着た姿のいい人を發見した。珍しく洋裝の似合ふ綺麗な人だと思つてその人に視線を誘はれた。人の背後になるのでよく見えない。あれは西洋人ですかと聞くと、エエと久保田氏はうなづいた。はたの女達がづんぐりした外科病院の看護婦のやうなのばかりなので一層際立つたのでもあらうが、黑ずんだ靑天鵞絨の服が、人々のうすつぺらな夏着の間にあたりを拂つたものであつた。しかもその人は目の前のナンの悲劇を他所に、無邪氣に芝居ごつこをしてゐるやうにニコニコしてゐた。これは舞臺監

督の惡い洒落の一例だとは思つたが、それでも腹は立たなかつた。あまりに醜惡な他の女優を見る不快さに對して、此の人は一服の清涼劑だつたからである。倫敦邊の大店(ストオア)の賣子にでもからかつてゐるやうな輕い心持が湧いて來る。かうしたいたづらを坪内氏はよろこぶ人らしい。

三幕目のあいた時のナンは既に潮の底に横たはつた心に涙も涸れ盡した骸(むくろ)に等しい。人生の慘苦の一切を一身に荷(にな)つた一少女には一筋の希望も惠まれなかつた。絶望の極に達したナンの心を玉枝にはうかゞひ知る事が出來なかつた。玉枝のナンはなほ機會さへあれば人の袖に縋らうとする心弱い女に過ぎなかつた。

思ひも掛けぬ浮氣なデイツクが、先刻(さつき)は自分の友として抱きしめて接吻したジヱニイと、人々の前で婚約の手を結び合ふのを見て、男を詰(なじ)る怒りに震ふナンはまだしもであるが、三幕目のジヱニイがガツフアアに勸める病死した羊の肉のパイを、強ゐて迫つてジヱニイに喰べさせ、ジヱニイを恨み詰り呪ふ凄慘を極めたところは、自分などの心弱いセンテイメンタリストには到底想ひも及ばず、描いて描けない特異の詩境である。自分はこれ程凄い藝術の作品を他に多く知らず、これ程の殘虐を冷々と眺めて作中に些かも同情を加へなかつた作者の態度を比類少ないものだと思ふ。

此の全體としての思想に於て強い主觀的色彩、換言すれば作者の好む色合ひで塗りつぶした詩を想ひつゝ、しかも個々の人物をあるがまゝに客觀的に描き出した、それが不思議に調和して特異の一戯曲となつたのである。

此の陰鬱な息も出來ない胸苦しさを覺える詩境の暗靜を破つて役人と牧師のをかしみになる。此處丈は作者も筆が滑り過ぎた。それを演じる方も亦、こゝが技倆の見せ場だとばかりに、やかましくはしやいでしまつた。萬事控へ目に控へ目にと心掛けたホオニマンの一座さへをかしみになつた。要するに原作の不備なのであらう。

扨て最後に最も難物だと思つたのは、此の會の統領と目される東儀鐵笛のガツフアアである。數十年前の過ぎ去つた日に死んだ戀人の面影を今も忘れず、その面影を偲ぶ事ばかりに生きてゐるやうな老樂師は、ナンの悲劇を描き出す背景である、背景の色は暗慘たる夜の潮の灰色でなければならない。ホオニマンの一座の、潮の底から出て來た水浸しの人間でも獸でもないやうな感じのした、彼の不見目な姿を忘れない。彼の言葉には深い意味があるのか、或はたゞうは言に等しいものであるか、誰にもわからないのでなければならない。彼は彼自身の幻想をつぶやいてゐるに過ぎないのだ。

鐵笛のは小利巧な非似豫言者に類した。自分の神祕めかした言葉に誘はれてナンは死にゝ行くのだと、結果を豫測しながら滔々としやべつてゐた。彼はガツフアアの幻を語る言葉がナンの死の背景をなし、ナンの死を暗示すれば足る事を忘れて、自分自身が表面に現はれなければ承知しなかつた。彼の出現によつて舞臺は陰慘にならず陽氣になつた。彼は一つ一つの言葉の表面の意味から、自分は神祕を語つてゐるのだと考へてゐたかもしれない。しかし舞臺上の結果から云へば彼は此の戯曲を通俗にし、散文化した連中の中の巨魁であつた。

失望し切つた自分の目の前に幕は下りた。食事前だと云ふ小山内氏と一緒に食堂に行つて、自分達は珈琲を飲みながら話をした。椅子を並べてゐながら、自分は久保田氏に對して合はせる顔が無いやうな氣がした。あれ程自分が昂奮していゝ芝居だいゝ芝居だと云つたのが羞しくてしかたが無い。自分などよりもずつと細かいところ迄芝居のわかる相手だから一層氣がさすのであつた。

自分は平氣を裝つて小山内氏と外國の芝居の話などをしてゐたが、心の中では坪内士行氏にだまかされたやうな氣がした。自分が全く氏を識らずに眞面目な戯曲の研究者だと思ひ、買ひかぶつてゐた罪を棚にあげて、自分の作つた不愉快に惱んだ。矢張り Typhoon の仕出しに出る柄だ

など、心の中で當りちらした。

後にまだオツトオ・エルンストの戯曲を巖谷小波山人が飜案した「村夫子」と云ふ喜劇があつて、その原作は小山内氏にきくと面白いものだと云ふ事だつたが、又だまされるに違ひないし、元來他人の作品を飜案するなどとは失禮だと思つて見ない事にした。

歸りませう歸りませうと自分は皆を促して戸外に出た。これから帝國劇場に行くと云ふ小山内氏に別れて二人つきりになると、愈々自分は久保田氏に面目ないやうな氣がした。

なんだか癪に障つたから、足下の小石を思ふさま蹴飛してやつたら、堀割の水に落ちてとぼんとした音を立てたが、小く波紋を描いて沈んでしまつた。

霜月の、友だちに別れともない心寂しい夜であつた。(大正六年一月二十日稿了)

食卓の人々

今年二月亞米利加へ行つた若い友達から、つい此間繪葉書が來た。マサチユセツ州ケムブリツヂの公園に今も枯れない有名な楡の大樹の色刷の寫眞は、私には殊のほかなつかしいものである。曾ては私も同じ繪葉書に、感傷的な旅の歌などを書いて方々に送つた事がある。西暦壹千七百拾五年七月三日、ヂヨオヂ・ワシントンがはじめて亞米利加軍の總指揮官として劍を執つたのが其の楡の樹の下だといはれてゐる。其の邊は私の散歩區域だつた。學校のゆきかへりに、幾度その樹下を過ぎたか。昨日の事のやうに思はれるけれど、指を折つて見ると十五年の昔だ。いたづらに年をとつた自分を顧みて感慨なきを得ない。

しかも其の繪葉書には意外な事が書いてあつた。

——前略——

先日或人の家に招かれて行きました席上で、あなたを知つてゐるといふお婆さんと中年の

紳士に逢ひました。私は拙い言葉であなたの近狀を話し、二人はあなたの學生時代の事をかはるがはる聞かせてくれました。何時も食卓をともにされた方々だささうです。惜い事には名前を忘れてしまひました。否、正直に申せば、紹介された時聽取る事が出來なかつたのです。何故聞返さなかつたかと只今では後悔してゐますが、聞返すのは失禮では無いかと其の時は考へたのです。私の例の引込思案でした。不惡。

——後略——

讀終つた時、私の想像には澤山の人の姿がラッシュ・アワアの停車場の景色の樣に浮んで來た。誰だらう。葉書の事だから略したのかもしれないが、私にとつてはその人の顏の特徴か、身振の癖でも書添てくれたならと口惜く思はれる。何時も食卓を共にしたといふのだから、オックスフオオド街十六番館に住んで居た人には違ひ無いのだが……

さう氣がつくと、雪白の卓布に覆はれた長方形の食卓を圍んで談笑する人々の姿と共に、十五年前の自分が、既に古くなつて斑點の出た映畫の樣に、明滅しながら目の前にあらはれて來た。

私が亞米利加へ行つたのは壹千九百拾貳年の秋である。土地の面積に比して人間の數の少ないひろびろとした丘や野原は一面に黃葉して、甘酸い香が浮動してゐた。その香からナショナル・

リイダアの紙の匂ひを思ひ出した。私は、くさりかけた果物を好んで喰べるが、その香は直に亞米利加の落葉の頃の追憶に誘つて行く。

一週間紐育を見物して、私はケムブリッヂに行つた。その町に在るハアヴアアド大學に學ぶのが私の當面の目的であつた。ウエンデル街十九番地のデネシヤといふ家の二階の一室を借りた。寡婦と、息子と、娘と、親戚の婆さんが貧しく暮らしてゐて、私の外に數人の止宿人がゐた。

其の邊のならひで、デネシヤの家では一切食事をさせてくれないのには弱つた。巴里や紐育のやうに、一歩おもてへ出れば、ぴんからきり迄あり過る程飲食店のある繁華なところならば、外で食事をするのもかへつて面白いが、ケムブリッヂと來ては、大學前の大通に數軒ある丈で、學校の裏手にあたる私の宿の近邊はしもたやばかりで日用品を賣る店も無い位だから、珈琲を飲むうちさへ見當らなかつた。その上に私の學資は極めて乏しかつた。とてもやりきれない一定額を、月々紐育の日本人經營の某商店から送つて呉れた。その金額は、日本をたつ前に、亞米利加じこみの二三の先輩が、先づ此の位なら大丈夫だといふ意味できめてくれたのである。その人達の渡米したのは何れも十餘年前で、當時の物價は標準にはならない筈なのだが、若い者には成るべく金を持たせない方がよいといふ親切も手傳つたのだらうし、又昔と今の違ひをはつきり認める事

はむづかしいから、その人々は何の懸念も無く進言したのであらう。父は勿論滿足して、在紐育三十餘年といふ人に息子の學資監督を依賴したのである。

亞米利加へ着くと直に、私はそれ丈の金では不足だといふ事を知つた。當時の私は、本を購ふ事と芝居を見る外には何の贅澤も求めなかつた。生來身につける物などはどんなに粗末でも平氣だ。痩我慢も強い方だ。けれども、その定額では苦しかつた。それで紐育の監督者に增額を申出たが、何の同情も無くはねつけられた。恰も私より一足先に日本へ歸つた或富豪の息子が、在米中同じ人の監督の下にあつて、氣前よく金をつかひ散らしたところ、後になつて日本の親から苦情を云つて來たといふ事件があつたさうだ。もとよりその富豪などゝは財力に於て比較にならないのだし、旁々つましくやらせようといふ監督者の肚だつたに違ひ無いが、いましむるに聖書と論語を引き、儉約の德を諄々と說かれた。

そんなら、遠方ながら父に對し、條理を盡して增額を迫る外は無いと思ひ、長文の手紙を認め、あまりに貧しい暮らしをしてゐては、短時日を有效に勉學の爲めに利用する事が出來ないと申送つたが、待に待つた返事は、在紐育の先輩の言にきけといふ一言だつた。

さういふ懷都合だから、學校の事は二の次にして、何とかして安く喰ふ事を考へなければなら

なかつた。學生の食堂では滿員の理由で斷られた。爲方が無くて、大學前の飲食店へ三度々々通ふ事にした。最初は何もわからないので、稍大きい家に入り、人並に肉汁から魚と順を追つて註文したが、忽ち月末迄續かない事を知つて、次にはクイツク・ランチなどゝいふ看板の出てゐる家の常客となつた。給仕人はゐない。註文したものと洋刀肉叉を兩手に受取つて、空席を見つけて腰かける。電車の乘替切符のやうなのに値段が書いてあつて、それに鋏を入れて貰ひ、食事が濟んで歸る時に、出口で支拂ふのである。主要なる肉類の料理は四五種類しかない。それさへ贅澤だと思つて、サンドウィツチ、ドオナツツ、林檎のパイなどで腹をふくらせ、珈琲か紅茶を飲んで濟ませる事もあるのである。安いもの安いものとねらつて註文するので、肉が肉のまゝの形を保つてゐる料理は口にする事が出來なかつた。昨日の主要品を挽肉にしたり叩いたりして、まるめて煮たやうな物を選ばなければならなかつた。粗食のなさけなさは身に沁みて、或晩生血のしたゝるビイフ・ステエキの夢を見た時は、夜半寢臺の中で涙ぐんだ。

その上に、大學前迄行くのは隨分遠かつた。學校の授業の早い時や、日曜の朝などは大概食を拔いた。天氣の日はまだしも我慢出來るが、雪の深い頃はかなはなかつた。零度以下で耳が凍つてちぎれたなどゝいふ噂の聞かれる土地だ。吹雪の中を、たつた一片のトオストと一杯の珈琲の

爲めに、滑る足下を氣にしながら遠く迄行くのは馬鹿々々しかつた。
オツクスフオオド街十六番館は最初から私の目を引いた。芝生に圍まれたニュウイングランド風の質素な木造家屋の入口に「食堂」といふ札がかゝつて居たからである。恐らくは學校の食堂よりも高いのだらうと思つて、私は扉を叩く勇氣が無かつたのだ。けれども、その家なら學校と下宿との中間にあつて萬事便利だから、支拂の心配さへ無いならばと、遂に意を決して訊ねて見た。呼鈴を押すと、肥つた女中が出て來た。
私は日本から來た學生だが、食事をさせて貰ふ事は出來ないだらうかときくと、一度丈なら斷るが毎日來るならよろしいと云ふ。いくらだときくと、一週間五弗五拾仙だといふ、胸算用をして一寸躊躇したが、結局その家の客となつた。
極端な猪首が、他人の首を持つて來てすげたやうな形で、そのくせ透き通るやうに色の白い赤毛の女中は、大變親切に扱つてくれた。日本人は柄がちひさいので一般に子供扱ひされるが、私もたかだか小學生か中學生位に見られたらしい。幼い者をいたはる樣な態度だつた。
食堂は二つあつて、廣い方には學生が二十人ばかり賑かに話しながら喰べてゐた。女中は其處をのぞいたが、滿員と見てとつて、奥の方の室へ案內した。此の方は稍狹く、長方形の食卓に十

人分の椅子が置いてあつた。その一つに私の席をとつてくれた。九人の目が一時に私にそゝがれた。年をとつた女が四人まじつて居た。私は默禮して席に着き、氣まり惡く麵麭を嚙つてゐた。顏色の違ふ事、言葉の不自由な事から起るひけめが、舌に來る胡椒よりも強く感じられた。

あなたは何時日本から來ましたかと、隣席の人が物靜かに訊いた。二言三言話してゐたが、私には聞きとれない事が多く頓馬な返事ばかりした。後々迄此の人の言葉はきゝとりにくかつたが、それは舌が長過るからだとわかつた。

一汁一皿に菓子と果物と珈琲といふ粗末な食事ではあるが、大學前のランチオンよりは遙かにゆたかで、私の食に對する不安は稍救はれた。その日から足かけ三年、私はその家で三度の食事をした。

亞米利加の朝の食事は濃厚である。吾々の食堂でさへ、オオトミルかコオン・フレエクスの後には、一週間に二度位ビイフ・ステエキが出た。さうでない時は玉子か魚の料理で、外に果物と珈琲がつきものだつた。麵麭と珈琲で濟ます佛蘭西風の朝飯に比して非常な相違である。晝は朝よりも粗末で、大概は冷肉だつた。夜は肉汁の次に一皿出るのだが、何時も二品用意してあつて、その中で好きな方を選ぶ事になつてゐた。料理の變化は少なく、毎週殆んど規則正しく循環して

來るのであつた。たとへば月曜がビイフ・ステエキか蒸魚のどつちかを選ぶ事とすると、火曜は蒸魚とロオスト・ビイフ、水曜がロオスト・ビイフと燒魚、木曜が燒魚とコロツケといふ風で、次の週も亦月曜はビイフ・ステエキと蒸魚のとりあはせとなるのである。金曜日には必ず魚を喰べ、土曜日にはボストン・ビインスと稱して豆の煮たのが定式だつた。口の惡い學生が、ボストンの名物はボストン・ビインスと足の太い娘だと私の耳にさゝやいた。

食卓を共にする人は左の顏觸だつた。

ミス・ライアン	幼稚園の先生
ミス・ウイルスン	女子體操學校の先生
ミセス・カアペンタア	大學の事務員
ミセス・ハンコツク	未亡人
ハンコツク	未亡人の一人息子
ダツヂ	大學工科助手
セイヤア	大學圖書館事務員
失名	學生甲

失名　　　　學生乙

此の中で、名を忘れた二人の學生の外は、みんな十六番館に室を借りて住んでゐる人だつた。

ライアンは幼稚園の先生で、白髪のお婆さんだつた。十六番館に一番長く居るので、自ら幅を利かせてゐた。食卓の上手（かみて）、宴會ならば主人の坐る場所に着いて、十六七の娘のやうなきん／＼響く聲でさかんに喋（しやべ）つた。特徴のあるその聲は、生れつき咽喉（のど）が弱く、樂に聲の出ないのを無理に調子を張る爲めらしかつた。冬の寒い頃、咽喉に濕布をしてゐる事が多かつた。體の弱い爲めに結婚しなかつたのでは無いかと思はれるところがあつた。

あの人は胸に病氣があるから用心しなければいけないと、ふだんはいかにも親しさうに口をきくハンコツクのお婆さんが眉をひそめ、身震ひして見せて私に注意した。

幼兒を扱ひ馴れ、それが癖になつてしまつたゝめ、ライアンが人に接する時は、大人が子供に向ふ時の殊更努めたやさしさを示した。殊に私のやうに、年が若く柄がちひさくて子供らしく見え、且言葉の不自由な異國人に對しては、恰も幼稚園の生徒ででもあるやうに、猫撫聲で話した。機嫌上戸で、神經質で、不圖した事にも自分の神經に惱まされ、席にゐたゝまれなくなるやうな事もあつた。

ボストン附近の人につきものゝ、自分達はニユウイングランドの人間だといふほこりが強く、他の地方から來た者に對して、內心侮蔑の芽生を育てゝゐる癖は免れなかつた。酒と烟草の害を說く事に熱心で、私にもそれをたしなむかときくから、烟草は稀にふかすばかりだが酒は好む、ケムブリツヂが禁酒地なので困つてゐると正直に答へたら、ちよつちよつと舌打をして、鼻目鏡の上に皺を寄せ、日本では子供の時から飮むかなどゝ、それが未開國の風習かといひ度さうな様子だつた。

烟草好きのダツヂが、食後は必ず樂む烟管(パイプ)に燐寸(マッチ)を擦ると、忽ち烟を手で拂ひながら、席を立つて二階へ上つてしまつた。

ウイルスンは四人の中では一番若かつたが、それでも四十は越えてゐた。近くの女子體操學校の先生で、私の宿の娘ルースもその生徒だつた。これがライアンと向ひあつた下座の首席を占めてゐた。がつしりと肥つて、何代か前に黑人の血がまじつてゞもゐさうた濁つた顏色をしてゐた。眼の廻(まはり)に深い皺がうす汚なく幾重にも刻まれ、鼻梁(はなすぢ)の太い鼻、肉の厚い唇、二重あご、いかり肩、背部には贅肉がつき過ぎてゐた。ライアンとは反對にふとい聲で、小言を云ふやうな話振だつた。私は此女の隣に席を與へられたのだが、最初のうちは口をきいて吳れなかつた。不愛想で、日本

人などには何の興味も持つてゐなかつた。後に私が教子のルースの家に居る事を知つてから、少しは愛想もよくなつたが、人前だからといつて特に努める氣を全然持合せない女だつた。それでも何となく人を威壓して、食卓の談話の中心は、ライアンか此女だつた。尤も機嫌のよくない時は、始から終迄一言も口をきかなかつた。

カアペンタアは、ライアンと同年配で、善良そのもの丶様な人だつた。學校で如何いふ仕事をしてゐるのか知らないが、亞米利加で一番知識階級のかたまつて居るといふほこりを持ち、男も女も何か磨のかゝつた理窟を弄ばなくては幅の利かない土地柄に似ず、此人は全く無學らしかつた。その爲めに他の連中に一目置き、かへつて相手にされない傾向を助長した。仲間はづれの形となつてゐる爲め、毛色の變つた私には親しく口をきいた。殊に他の連中のゐない時は、中村歌右衛門や尾上菊三郎型の、頰邊の下の方のふくらんだ顏中を笑にして話した。兩親も兄弟姉妹もゐる日本を離れて、こんな遠方へ出てさぞかし寂しいだらうとか、よく大學の講義がわかつて感心だとか、まるつきり十七八の子供扱ひだつた。

ずつと前に、オザキと呼ぶ日本の學生を知つてゐたが、その人が日本人の友達と電話で話をしてゐるのを聞いて、母音の多い言葉を大層美しいと思つた。何でもいゝから日本語で話してごら

んなさいなど丶眞顔でいつた。

私がタウシツグ教授の經濟原論の講義を聽いてゐて、その助手によつて行はれる試驗に出る時などは、どうして試驗が受けられるのだらうと不思議がつてゐた。はつきり口には出さなかつたが、私の會話の下手なのから推して、本もろくには讀めまい、講義は勿論わかるまい、答案は書けないだらうと心配してくれたのである。

答案の戻つて來る頃には、點數はどうだつたとうるさく訊いて私を閉口させた。最初の試驗には、八十點から九十點の間だつたと思ふが、Bといふ點だつた。善良なる此の御婆さんはすつかり喜んで、我が事のやうに他の連中に吹聽して、一層私を惱ました。經濟原論は曲りなりにも一度日本で卒業して來たのだと說明しても承知しなかつた。日本の經濟學と亞米利加の經濟學とは、ひとつにならないと思つてゐるらしかつた。

日本といふ國は何處にあるのか、地圖で探したが見つからなかつたなど丶云つた。その時は傍からハンコツクが口を出して、日本は日清戰爭前迄は支那の屬國だつたのではないかと質問した。

日數も餘程たつてからだが、すつかり馴染になつて、カアペンタアと私と二人丈が食卓にゐた事があつた。その時、どういふきつかけからか身の上話を始め、夫に死なれた不幸をなげき、い

かにその夫が自分を深く愛したか、いかに夫がよき人で、すべての人に愛されたかを繰返して話してゐるうちに、次第に言葉に情熱が籠り、感に迫つて微かに聲に震へを帶びて來たと思ふと、はらはらと落涙した。

ハンコツク老夫人は一番の年長で、ちひさくしなびた御婆さんだつた。亞米利加の女の中にも、こんなにきやしやな人がゐるのかと驚かれる程かぼそかつた。その癖、目も鼻も、殊にちひさい唇も、まるみをもつた顎も、うすい耳朶も、まるで小娘のやうに若々しかつた。顏色は蒼白く、それが暑い日にはぽうつと紅くなつた。子供のする御伽芝居の御婆さんのやうに可愛らしかつた。

一人息子のヂャツクは瓢簞面で、市川荒次郎によく似て居た。少々甘ちやんで、新聞に出る位の社會の出來事さへ知らず、年中流行唄をうたつたり、舞踏の眞似をしたりしてみんなを笑はせてゐたが、それでも女學校の音樂の教師をしてゐるといふ事だつた。いつたいに惡ふざけを輕蔑する此の地方の氣分の爲めか、或は此處に集まる人が氣むづかしいのか、折角ふざけても相手にされない事もあつた。こんな人間に音樂がわかるのかしらと私は常に不思議に思つてゐた。

けれども、此親子の仲のいゝのには感心した。母親は息子の甘ちやんたる事を認めずに、たゞたゞ善良無邪氣なる若者で、且音樂の天才だと思ひ込んでゐた。ヂャツクは六歳の時に既に完全

に洋琴を弾いたと度々私に話してきかせた。

ハンコックとカアペンタアとは割合に仲よしで、カアペンタアは自分に子供の無いのをなげき、しきりにハンコックを羨しがつて居た。此の二人は、自分達よりも確かに學問も識見もあり、おまけに氣の強いライアンとウイルスンに對して、消極的の同盟を形づくつてゐた。結婚した事の無い女は物事に同情が無いなどゝひそひそ話してゐる事もあつた。

ダツヂは工科の助手だつた。傲慢な男で、家柄のいゝといふのが自慢だつた。脊は高くなく、骨太に堅く肥つた赤ら顔の、亞米利加人には珍しく笑はない男だつた。何事も思ふまゝに振舞つて周圍を顧みなかつた。外の者は遠慮するのに、平氣でパイプをふかして烟草嫌のライアンを悩ました。外の者がたしなめても頓着しなかつた。此の男は最初、日本人の事をヂヤツプ、ヂヤツプといふので、それは輕蔑の意を含むものと思ふがどうかと詰問してやつたら、自分はさうは思はない、簡單明瞭で此の方が便利だ、しかし君がいやがるなら今後は改めてもいゝと答へた。

ダツヂは私の宿にゐる二人の工科の助手をたづねて來て、私の部屋にも寄つて行つた。日本の茶道具と浮世繪がほしいのだが、十弗位で取寄せてくれないかと云つた。そんなら日本へ頼んでやらうと云ふと、もうひとつついでに頼み度い、ヨシワラの繪が欲(ほし)いといふ。枕繪の事である。

彼の友達で曾て日本へ行つた男の持つてゐるのを見て、奇拔な構圖に感服し、自分も是非一本を求め度いといふのであつた。これはうちに賴むわけにはいかないから、後日日本へ歸つたら買つて送つてやると約束した。但し私は此の約束を今も忘れないのだが、一二友人に買入の事を賴んで置いて、しかも未だに約を果さない。

セイヤアは最初の日に私に口をきいた男で、圖書館に勤めてゐた。父は田舍の牧師だといふ事で、此の人にも牧師臭いところがあつた。胸のうすい、ひよろひよろした體で、白子のやうに頭髮も皮膚も白かつた。前にも書いた通り舌が長過ぎて、口をきく時に無益に大きく唇を動かさなければならないのであつた。食堂第一の讀書家で、一同から何でも知つてゐる人と見られてゐた。但し何を專門に學ばうといふのでは無く、何事にもまんべんなく興味があるらしかつた。圖書館に勤めてゐるのも、勉強が出來るといふばかりで無く、いろいろの種類の本の部類分をしたり、探し出したりするのが面白いのであつたらしい。人が政治を談じれば直に相手になり、人が演劇を論じれば自分も負けてゐない。繪畫音樂スポオツ、何でも一說を出し、且又各種の話材を充分に持つて居た。牧師のやうに技巧的に低い調子で話した。步く時も壯年者らしくなく、擦足のやうに靜かだつた。

此の人は話をして一番面白かつた。先方でも私を子供でないと見てとつて、いろいろ質問した。或時は、圖書館にある日本の本で如何なる部類に屬するかわからないのがあるから見てくれと云つて持つて來た。誰が寄贈したものか、水戸常磐公園圖誌といふ本だつた。

浮世繪なども少しは實物を見た事があつて、その制作の方法を質問された。話の中で屢々ハイロシイジエといふ人名を口にするのが私にはちつともわからなかつたが、書かして見たら Hiroshige とつゞつた。

いゝ人だつたが、齒が惡いのか蓄膿症か、口中の臭いのには辟易した。

名を忘れた學生甲は、法律を學んでゐた。父は辯護士で、自分もその職をつぐのだと云つてゐた。私が宿から食堂へ通つて來る途にある學生寄宿舍にゐて、一緒に歸る時に寄つて行けと勸められ、數次（しばしば）その部屋に遊びに行つた。良家の坊ちやんで、亞米利加人らしくない內氣で、話をする時自然と顏が紅くなるやうな人柄だつた。十六番館の食堂には餘り長くゐなかつた。私が名を忘れたのもその爲めであらう。

學生乙は紐育の銀行家の息子で、ひどく贅澤な我儘者だつた。こんな食堂の飯が喰へるものかといふやうに、肉片などには手も觸れず、麵麭と野菜ばかり喰べてさつさと歸つて行つた。自分

は野菜が好きだ、一切野菜丈にしようかと思ふ、日本人は本來菜食主義だと聞いて羨しいと思つてゐるがほんとかなど丶云つた。

その頃ボストンの新聞に、世界的有名な人で菜食主義者だといふのが列記してあつた。それが話のきつかけだつたと思ふ。新聞の記事は嘘らしいと思ふが、大體次のやうな事を書いてゐたのである。

題は「有名なる菜食主義者」といふので、サラ・ベルナアル、マダム・レヂヤン、クレオ・ド・メロオド、バアナアド・ショオ、アウギュスト・ロダン、メエテルリンク夫人などの名もあつた。

何故に人が菜食主義になるかといふと、宗教上の見解から來るもの、健康の爲めのもの、容姿を美しくしようとするもの、嗜好、纖細なる神經等を數へる事が出來る。現在菜食主義者は日にまし殖えて行く。英吉利の如き肉食國中殊に肉を多く喰ふ國でさへ、著しい勢で菜食主義が擴まりつゝある。英國特有の僂麻窒斯には肉食がよくなくて菜食がよいといふ醫家の說が發表されたからである。

多分、現今世界で一番有名な菜食論者は、禁酒禁烟をも勵行するバアナアド・ショオであらう。

彼は肉類の味を好まないばかりで無く、虐殺される四足獸の死骸を喰ふのだと想像すると、不潔野蠻非藝術的なる事に堪へ難くなるといふのである。それ故野菜果物穀類を常食とし、時には僅かに三本のバナ、と冷水ですませる事もある。しかも丈高く、筋骨たくましく、血色よく、清澄なる眼光をもち、若々しく力の漲る歩きぶりである。

サラ・ベルナアルは、傾きかゝる齡と共に首や腰に贅肉がつき過ぎ、昔の美しい姿を失ふ事を怖れて菜食主義となつた。それ以來姿態の美は衰へずして寧ろ若返り、頭腦は明晰となり、神經は安靜になつたと聞く。此の人は鷄卵さへ喰べない。それは形こそ違へ生物に外ならないからである。

レヂャンも年と共に、むかし巴里の人氣を集めた役々を演じるのに不似合なほど肥つたので、之も菜食主義となつたのである。此の人は頗るつきの贅澤やで、殊に食事は善美を盡したものだつたが、藝術の爲めにはかへられないと云つて斷然肉食を廢したのである。

巴里のオペラの踊子として有名なクレオ・ド・メロオドは、適度のまるみを帶びたすんなりしたからだつきで、殊にちひさい顏と細い首が踊子として申分なく、幾多の畫家の描くところとなつたが、近年次第に肉がつき過ぎて來た。舞臺に於ても昔日の如く輕快でなくなり、畫家もも て

はやさなくなり、ブウルヴアアルの繪葉書の賣行も惡くなつた。昨日(きのふ)にひきかへて流行兒でなくなつた。突然彼女は身をかくして、行方がわからなくなつた。永い間死んでしまつたかのやうに人々の目に觸れなかつた。しかし、再び彼女が現はれた時は、又もとの通り若々しく、嫋々たる姿となつて來た。巴里の人氣は以前に倍した。彼女は菜食主義を實行したのである。

ロダンは肉類を口にしない時の方が意の儘に仕事が出來ると知つてから菜食主義となつた。

メエテルリンク夫人の菜食は思想を深くし、心の動きをこまやかにし、叡智は澄みわたると云つてゐる。

その外セルビアの皇太后、ギリシヤの皇女、亞米利加の學者政治家、支那の外交家などの名前と、その菜食主義となつた理由が書いてあつた。

食卓の話題にはもつて來いだつた。バアナアド・ショオは兎に角として、外の連中が菜食主義だとは一寸受取れなかつた。新聞が大げさに話を面白くしたのだらうと思つたが、無駄話好の亞米利加人の事だから、めいめいの意見ものべ立てた。私だつて野菜は好きだけれど、そればかり喰べるやうな贅澤は出來ないといふ女もあつた。

紐育の銀行家の息子は、その後間も無く此の食堂に來なくなつた。彼は小柄ではあつたが男ら

しい美青年であつた。一昨日は女の友達と何處其處へ自動車をドライブしたとか、昨日は誰某の家の舞踏會へ招かれたとか、さういふ種類の話ばかりしてゐるので餘り好かれてゐなかつたが、金持の息子だといふ事で、一種の尊敬も受けてゐた。體操學校の先生ウイルスンは、外の者には不愛想だつたが、此の若者に對しては、自分の教子の中の美しいのを紹介してやるなど丶云つてゐた。

食卓の給仕をするのは、廣い方の食堂は苦學生で、吾々の方は女中エセルだつた。西洋人には珍しい獅子鼻で、此の上も無くふきりやうな女だつた。何處の田舍から來たのか、字も讀めないやうな人間だつたが、性質は極めて善良だつた。

十六番館の主人ゲエヂは、日燒のした顏に皺の多い、百姓らしい風采のぢいさんだつた。朝、市場に食料品の註文に行く外には用が無く、暑い時はポオチに搖椅子を出し、寒い時は室内で、パイプを口から離さなかつた。天氣がいゝとか惡いとかいふ事の外には會話にも興味が無いらしく、全く餘生を後生大事にしてゐる丈の人だつた。

ゲエヂ夫人はぶくぶく肥りの大女で、年中笑顏を見せてゐたが、心臟が弱くて時々寢込んだ。一人息子のヂヨオヂは跛だつた。畫家になるのだと云つて始終繪を描いてゐたが、ほんたうの

修業をした事が無く、ひどく通俗な審美眼しか持つてゐないので、看板繪の域を出なかつた。亞米利加人らしく、一人前の畫家になつて紐育へ出て金をためるといふ事を何よりの希望としてゐた。兩親は此の息子を可愛がり、描いた繪を人々に見せて自慢した。行末ひとかどの畫家になると信じてゐた。

その外に一人、臺所で料理をする主婦の手傳をしたり、拭掃除をする年增女がゐたが、これは分を守つて、人前には出て來なかつた。

私の生活は軌道の上を走つてゐた。朝起きて着物を換へると、直に十六番館へ行く。おきまりの朝飯を喰べて、授業があれば學校へ行き、無ければ宿に歸つて机にむかふ。正午になると又十六番館へ行く。おきまりの晝飯を喰べて、授業があれば學校へ行き、無ければ宿に歸つて机にむかふ。夕方になると又十六番館へ行く。おきまりの晩飯を喰べて宿に歸つて机にむかふ。

それが一年を通じて殆んど變らなかつた。雨の降る日などは、宿を出る足も心も重かつた。どんな土砂降でも、傘をさゝない風習だから、帽子のつばからしたゝり落る雨に顏を打たれ、レディ・メヱドの體に合はない外套を海豹の肌のやうにづぶ濡にしてかよつた。

膝を沒する雪の上を橇が通つて氷砂糖の堅さになつた時は、道を横切る足下も危なく、冷い風

に刺戟されて涙が出て來た。別に悲しい事も無いのだが、涙を止めようとする心の底に故郷の景色が浮びやすかつた。

十六番館の扉口で雫を拂ひ、雪を落して、人工的にあたゝめられた室內に入ると、俄に身內に血が通つて、質素な食事ながら「家」を感じた。

其處で食事をするやうになつて間も無い時だつたが、晝飯の時にライアンに案內を受けた。その日の午後、二階のライアンの部屋でお茶の會をするから來いといふのであつた。先方では、同じ食卓の人を呼んで、毛色の變つたの丈を除外するのも面白くないと思つたのだらうが、馴染のうすい私はその厚意を喜んで受けた。

裏の空地に面した二階の一室で、寢臺、衣裳戶棚、机、本箱などのごちやごちや並んでゐるところへ、同宿の者の外にライアンの同僚だといふ女が二人加つて、身動きも出來ない位だつた。女達は階下(した)から借りて來た椅子に腰かけ、男は寢臺を利用したり壁に倚りかゝつたまゝでゐるのもあつた。酒精洋燈(アルコオルランプ)で湯を沸かし、レモンを浮かべた紅茶と、粗末なビスケツトやキヤンデイ類を勸めて、客よりも主人が、いかにも嬉しさうに喋つてゐた。

十二月、耶蘇降誕祭には、私の食卓に女の人達からのささやかな贈物が載せてあつた。私も心

ばかりのしるしをした。生憎の大雪だつたが、家々の窓には蠟燭がともしつらねられ、橇の鈴の音も何時もよりも冴えて響くやうに思はれた。

此の國の春は短かかつた。香料のやうにこまやかな雨、ソオダ水のやうにさはやかな雨が晴れるとむうつと蒸せる土の臭ひがして、見てゐるうちに芝生は緑になり、連翹が咲き、サフランが咲く。並木の楡、柏、橡、楓は一齊に萌出す。女の肌は薄い雪白の絹につつまれてゐるばかりで、踵の高い靴が石だたみを踏む音も、際立つて速くなる。吾々の食卓にも、色の深い、香の強い切花が盛られる。

私の宿から十六番館へ行く途中の、雜木林をぬけると、白い石造の宗教學校を遠くに望む廣い草原があつた。草は日本のよりも柔かく、手足を襲ふ小蟲も少なかつた。私は食後直に宿へ歸らずに、短い春を惜みながら、緑の中にぶつ倒れてゐる事が多かつた。

日本の晩春は、深い哀れをまのあたりに見せて、靜かにものうく移つて行くが、亞米利加の春は性急である。吾々の心が自然とひとつに融けて、散る花にも觸れて傷むやうな事はない。忽ち急行列車の勢ひで、幅廣い夏の天下になる。

學校が休みになると、學生の充滿してゐた町も俄に人氣が無くなつて森閑とする。夕立が蟻の

群を洗ひ流した後のやうにさつぱりと、町の幅が廣くなる。十六番館も、暫くは人の出入が少なくなる。ハンコツク母子は海邊へ避暑に行き、カアペンタアはメインの田舍の妹の家に行つてしまつた。吾々の食卓も入齒の落ちた形になつた。

けれども、大學の夏期講習が始まると、各地から聽講生が集まつて來る。その半分以上は女だつた。十六番館でも、夏中留守になる人の部屋に新顏を迎へた。中部から來たといふ親子と、西部から來たといふ若い女が、吾々の食卓へつらなる事になつた。母親も娘もひどくはで好みで、着物の型から身につける一切の色彩が、一脈の粗野な趣を添へながら力強く新鮮だつた。金持の未亡人で、學校教師をしてゐる一人娘が、講習會に出席するのにくつついて來て、此の地方を見物しようといふのであつた。娘は、二十三四位、丈も幅も共に大きく、むき出しの腕は眞白だつたが、顏の血色の勝れていゝ、髮も眼も漆黑な女だつた。大きな眼鏡をかけ、鼻は低い方だつたが、眞紅な唇のきつい線と口尻の黑子がはつきりと顏の特徴をつくつて、後期印象派の肖像畫にでもありさうな近代的の魅力があつた。何時も食堂へあらはれる時は、稍々濃厚な化粧をして來た。何處から見ても學校の先生をしてゐる樣子は無く、カウ・ボオイとかけ落をする地主の娘の風姿だつた。

西部から來たといふ女は二十五六の、黄色人種に近い皮膚を持つ人だつた。希臘の彫刻の女の顔で、整ひ過ぎてあま味が足りなかつた。亞米利加の女には珍しく無口で、食卓のおざなりの冗談などには、決して笑顔を見せなかつた。著しく特殊の皮膚の色の爲めか、輕快な心持を持たぬ爲めか、始終身邊に陰影があつた。これも田舍の女學校の先生だと云ふ事であつた。みなりも質素で、一時代遲れた型のものを身につけてゐた。

若い女があらはれたので、食卓は俄かに活氣づいた。二人の學生と、ヂヤツク・ハンコツクはゐなかつたから、ダツヂとセイヤアの舞臺だつた。御婆さんばかり相手にしてゐる平生とはうつて變つて、聲も態度も緊張してゐた。無愛想極まるダツヂも、牧師臭いセイヤアも、見榮も外聞も無く媚びた。二人とも、最初は社交的な中部から來た娘をめあてにしてゐたが、ダツヂは間も無く西部から來た女の方に方向を轉じた。

僕はあゝいふ浮氣つぽい女は嫌だ、家庭的の女が好きなのだと、一をおとしめ、他をほめて、あけすけな口をきいた。彼は、妻になる女を見つけたら、學校をやめて、收入のいゝ會社に勤めると、常々憚らず云つてゐる程あつて、一日も早く相手を見出し度かつたらしい。

兎に角男達にとつては、夏期講習會の開かれる事は一の希望だつた。ダツヂとセイヤアは、去

年の講習會に出席した女、一昨年の講習會に出席した女の事なども思ひ出して、互に噂しあつた。
今年こそは、といふ期待は無理も無いのであつた。
ライアンとウイルスンにとつては、新來の客は面白くなかつた。長い間一緒にゐる若い男達が、曾て一度も自分達には示さなかつた優しい態度を執るのを見ては愉快ではない。その人々のゐない時には、棘のあるかげ口をきいた。
矢張ニュウイングランドの人達とは違ふ、ニュウイングランドの女は、着物は質素でもその心のまことが光つてゐるなど〻、年甲斐も無くライアンが昂奮すると、ウイルスンも調子を合せて、お〻あの若い娘さんの衣裳の好みは如何でせう、私が若しあ〻いふ色彩の物を身につけたら、きつと頭痛がして堪へられないに違ひ無いなど〻可愛くない事をいふのであつた。
二人の男はそんな事には頓着しなかつた。恰も春と秋の或期間に於ける犬の如く、活潑に又憂鬱に、絶えずめあての人の姿と、その幻影を追つてゐた。
日本のやうに、世話好の仲人が巧妙に組合はせて呉れる便利な風習が無いので、戀愛にもとづく自由結婚といふ美名のもとに、醜くあへぎ悶えなければならないのである。私は、一概に日本の結婚を野蠻だと思つてゐる外國人に、外國の結婚も決して自由にしてよき選擇の行はれない事

を屢々指摘した。昔の王様の如く、天下の美女を集めて勝手によりどり出來るやうな結構な身分ならばいざしらず、さうで無い限りは、ゆきあたりばつたりぶつかつた男女が、いつしよになるのが事實である。私はまのあたりに、結婚し度くても相手が無くて困つてゐる幾多の男女を見て、我國の仲人制度の極めて穩健の美風なる事をおもつた。

夏も終に近づいたが、ダッヂもセイヤアも努力の甲斐なく、講習會はおしまひになつて、めあての人もちりぢりに此の地を退散した。氣短かのダッヂは、西部から來た女に結婚を申込んで斷られたといふ噂だつた。本人は、あの女は心臓を持つてゐないなどゝ、惡口を云つてゐた。

新學期の始まる頃になると、町には又學生が出水のやうに四方から姿をあらはし、十六番館も賑かになつた。吾々の食卓には、三人の新顔が加つた。

ミス・プラット　　女學校の先生

ホウス　　雜誌「青年の友」記者

レドファン　　宗教學校學生

此の中で、前の二人は十六番館に部屋を借りた人で、後の一人は、私同樣、他所から食事丈しに來るのであつた。

ミス・プラットの年齢は想像がつかなかつた。頭髮も眉毛も眞白だが、顏は若々しくはり切つて、血色もよく、割合に短いスカアトを着け、踵の高い靴を穿いて、元氣よく足を運んだ。その白髮の爲めに、一寸見には五十以上に見えるが、たかだか四十になるかならない年配らしかつた。眞靑な瞳の艶々と濡れてゐる眼は、西洋人には珍しく眼尻が釣上り、鼻は際立つて高く、それがソオセエヂのやうに何處迄も同じ太さで延びてゐた。負ん氣を示す堅く一文字を引いた口から、男性的の聲が角張つて出て來た。些か月並ではあるが、天狗のお面によく似てゐた。何事にも意見を持つてゐて、且他人を自說に服させなくては承知の出來ない根性が強かつた。

例の通り、ニユウイングランドの傳統的精神を傳へ守つてゐると確信してゐるライアンをはじめとして、女達は此の侵入者の論爭癖を嫌つた。

チヤアルス・ホウスは頑丈な體軀を持つ、元氣のいゝ靑年記者だつた。廣い額、高い鼻、堅く結んだ口、すべてが正直な性格を表示してゐた。あまりに正直で、それが時には強情の形をとる爲め、瞬間的には面白くなく思はれる事もあるが、一般に誰からも好かれる人間だつた。

レドフアンはホウスの學校友達で、宗教學校の學生には違ひないのだが、別段神學に深い興味を持つのでも無く、將來牧師にならうと考へてゐるわけでも無かつた。うまい仕事も無いから、

もう少しの間學生々活をしてゐた方がいゝ。それには月謝のいらない宗教學校が一番よからうといふ程度の呑氣な人物だつた。強度の近視眼で、短く太い鼻の尖は上を向き、おまけに猫背といふ頗る風采のあがらない男だつたが、少しも毒の無い好人物で、みんなに愛された。

正直一圖で、曖昧な事を嫌ふホウスにとつて、なるやうにしかならないと悠長に構へてゐるレドフアンの態度は、時にじれつたくて堪らないものであつた。度々いひあひをしたが、仲のいゝ事は無類だつた。レドフアンはホウスの子供つぽい眞正直を好み、ホウスはレドフアンの悠々迫らない心境を、内心ひそかによしとしてゐた。

その頃、ハアヴアアドの學生將棋倶樂部から、日本の將棋を知つてゐるなら教へてくれと賴まれて二三度出かけた事があつた。亞米利加の學生間には西洋將棋がさかんに行はれ、エール對ハアヴアアドの對校試合も催された。

將棋を教へに行つた事を食卓で話すと、ホウスはひどく乘氣になつて、自分にも教へてくれといふ。早速私の宿へ伴つて、紙片で駒をつくり、一般規則を教へると、もと〳〵西洋將棋の素養があるので、直にのみこみ、生來の一本氣で夢中になつてしまつた。それがきつかけになつて、私と彼とは大の仲よしになつた。

間も無くホウスは、「日本の将棋に就て」と題する一文を「青年の友」に載せた。

又、秋が廻つて來た。落葉樹の多い町の景色は、晴れた日の空に金粉を撒くやうにかゞやかしかつた。それが時雨にうたれて腐れ、果實の香を漂はせるのであつた。

不意に、ダッヂは十六番館を引拂つて郊外に一戸を構へた。案内をうけてたづねて見ると、さきに私が頼まれて日本から取寄せた錦繪をべたいちめんに壁に掲げた客間で、同じく渡來した茶器をつかつて、私の母が心を添へた緑茶に砂糖と牛乳を加へて出した。かねての望み通り妻を迎へる事になつたので、學校をやめて瓦斯會社の技師長に就任したのであつた。どういふ徑路で、相手を捉へたか、私はきゝもらした。

私はその前の年に、第一著作集「處女作」と、第二著作集「その春の頃」を出し、ひきつゞき「三田文學」と「スバル」に時々作品を載せて貰つてゐたが、私が小説作家だといふ事は、同じ大學に學ぶ日本人にも知らせなかつた。知られる事を好まなかつた。それは私のはづかしがりである。私には文壇生活は無かつたと云つて差支ないが、處女作を發表してからの文學生活も既に十六年に及んでゐるのに、未だに人が私の前で、私の作品に言及すると、ゐたゝまれない氣がして爲方が無い。人にほこる丈の作品が無いからでもあらうが、ひとつは性分である。

ところが、誰から傳はつたのか、私が小説作家だと知つた一日本人が、私の食卓の者に之を喋つた。それから後、人々の私に對する興味が深くなり、著しく態度があらたまつた。殊にその日本人が、素人一流の大袈裟で、曾て私の作品なんか讀んだ事も無いのに、無責任にほめ立てたのである。忽ち四方から、長篇小説か短篇か、どういふ題材を取扱ふか、本の賣行はどうだとか、さまざまの質問がふりかゝつて來た。こんな小僧々々した若者に、小説なんかが作れるのかしら、日本人のいふ小説といふのは、歐羅巴や亞米利加でいふ小説とは違ふのでは無いだらうかと考へ迷ふ顔色を、露骨に見せてゐる者が多かつた。

私はすつかり參つてしまつて、食事が濟むとそこそこに退散しようとした。すると後から聲をかけて、天狗の御面のプラツトが追かけて來た。一寸二階の自分の部屋迄來てくれないかといふのである。

狹い部屋に膝をつき合せて腰かけると、プラツトは傍の書棚から一册の本をぬき出して、これは自分の書いた探偵小説だが、紀念の爲めにやるから讀んで批評をしてくれといふ。私は愈々閉口して、探偵小説には餘り興味を持たないと相手の心持などには頓着なく答へたが、どうしても承知しないので、その一册を貰つて歸つた。ありふれた人殺しの小説で、どの一頁にも興味を感

じる事が出來なかつた。本は今も私の本箱にあるが、二度と讀む氣はしない。

その後間も無く、ホウスは少年向の短篇小説を「青年の友」に載せた。彼はかねて小説作家たらんとこゝろざしてゐたのだと云つて、處女作の發表に昂奮してゐた。

犬を愛する青年が、山に銃獵に行き、誤つて泥沼におつこちる。もがけばもがく程からだは沈んで行く。犬は主人を救はうとするけれども、力が及ばない。日が暮れて星の夜となる。結局犬は主人を殘して村へかけつけ、村人を引張つて來る。朝、しらじらとあけ行く山頂の空に小鳥の聲しきりなる頃、來援の手に主人は救はれるといふ筋だ。むかし「少年世界」で讀んだ話にもかういふのがあつた。少年に讀ませるのだといふ事を、徹頭徹尾念頭に置いた型通りの御話である。私には面白くなかつた。

しかし、ホウスの目的は話の筋には無い。細かい自然描寫を行つて、想像力の豐富な少年の心を秋の山野につれて行かうといふのだ。正統派に屬する健康な文章に自信を持つてゐた。彼は、破格の文章を少年雜誌に載せるのはよくない、何事にも染み易い年少者には、正しき修辭法以外の惡癖をつけ度くないと云つてゐた。私は些か顏が赤くなつた。我が日本の文壇では、正しい文章は卽ち古しといふ誤つた先入觀念がはびこつてゐる。わざとひねつたり、わざと訛つたりして、

それが新しいと信じる悪傾向がある。そんな新しさは一時の事で、忽ち腐つてしまふに違ひ無いのだ。私は少年雜誌編輯者としてのホウスの心懸に贊成した。

ホウスはナサニエル・ホオソンを最も崇拜してゐた。手取早くかたづける亞米利加特有の「小說作法」とか「如何にして小說を作るべきか」といふやうな本を、一生懸命になつて讀んでゐたが、その後短篇作家として認められたといふ噂をきいた。

私のケムブリツヂ生活も、一日々々とおちつきを見出して、二度目の正月を迎へた。金の乏しい事丈は辛かつたが、次第に馴染の深い人も殖えて來た。一生此の地で暮らしてもいゝやうな氣も起きて來た。けれども、私には歐羅巴へ行き度い氣持が更に強かつた。

亞米利加の短い春は、舞踏をするやうに又廻つて來た。私の好なライラックの花が、家々の垣根に強烈な香を立て、窓に吹入る風迄も匂ふ頃の學校町には別れともなかつたが、夏の始に、思ひ切つて紐育へ向つて出立した。

宿の御婆さんは深く歎いた。娘のルウスが學校を卒業したら、もう一度加奈陀へ行き、其處の女學校の體操教師になる筈だから、自分も一緒に行く積りだが、二度と逢ふ機會はあるまい、お前には外に申分は無いが、いくら勸めても基督教徒にならないのが氣がかりである。自分達は死

んでから天國に行かれるが、基督教徒で無い者は同じところへは行かれないと、涙を流して口說いた。

十六番館の人達も、それぐ\別れを惜んだ。女は、老も若きも區別無く涙といふ武器を持つてゐる。傲頑なる體操教師ウイルスンを例外として、みんな涙の餞別をくれた。主婦ゲヱヂは、自分と息子ヂョオヂの寫眞を記念にくれた。

私は一夏を紐育で過した。不意に起つた歐羅巴の大戰爭の爲めに、見合せた方がよいといふ人もあつたが、巴里も陷落する惧れはないと見込がついたので、もう一度フオオル・リヴアを夜船で下り、秋のケムブリツヂを訪れた。

一週間、十六番館のホウスの部屋に同居して、又しても涙の餞別を受けた。

それつきり私は亞米利加をたつたのである。

最初のうちこそ時折たよりもしてゐたが、さるものは日々にうとく、遂にクリスマス狀さへ出さなくなつた。

中で、一番長く文通してゐたホウスは、私が巴里にゐる頃に結婚したが、間も無く亞米利加が獨逸に對して宣戰を布告すると、直に義勇兵として銃劍を執つた。戰地へは行つたか行かないか

知らないが、正直一圖の彼は、最もよき兵士であつたであらう。

私は大正五年に日本へ歸り、現在も勤めて居る會社に職を求めたが、その翌年の秋、突然レドファンが會社の玄關に姿をあらはした。上を向いた低い鼻は笑の皺の中に消えてしまひさうな上機嫌で、固く握手をかはした。彼は何等の計畫も無く、日本に何か仕事があるなら幸ひだといふ位の呑氣な考でやつて來たのであつた。ホテルへ着いて、私の名を云つて調べて貰ひ、やうやく此處にたづねて來たのだと云つた。

東京には二週間ばかりゐたが、すつかり日本が氣に入つてしまつた。日本の酒もうまい、喰べる物は鰻も天婦羅も刺身も結構、就中鳥鍋は何よりの好物になつた。鍋を買つて歸つて、たつた一人の母親と食卓で樂むのだと云つて居た。何事にも拘泥しない性質だから、旅人だか、永年日本馴れた人間だかわからなかつた。料理屋の大廣間で、お酌といつしよに踊もをどつた。

彼は十六番館の消息をもたらした。古い顏ぶれの食卓は今も大體變りは無いが、ミス・プラットは先年避暑地で變死した。畫家にならうといふ跛のヂョオヂが、或る山間の溪川の邊に天幕を張つて寫生をしてゐるところへたづねて行き、探偵小説の作者もしばらく共に住んでゐたが、一日高い絶壁の上から墜落して死んだ。それが自殺か、過失か判明しないといふ事だつた。

ホウスはしきりに雜誌に短篇小說を書いてゐる。既に男の子の親になつたといふ事だつた。レドフアンは日光と京都を見物するといつてゐたが、それから如何いふ旅程をとつたのか私は知らなかつた。呑氣な男で、決して葉書一枚さへ寄越さなかつた。

間も無く、私は勤務先の命に依つて大阪の支店詰となつた。數箇月後、はじめて京阪の春に接した頃、又不意にレドフアンがあらはれた。彼は一度亞米利加へ歸り、今度こそは日本で仕事を見つけようと計畫して再び渡來したのであつた。私は會社の仕事が忙しかつたので、次の日曜日に京都のホテルで落合ふ約束をして別れた。しかし、その日曜日に私が都ホテルをたづねると、その客は昨日勘定を濟ませて立つた、多分奈良へ行つたのだらうといふ帳場の話であつた。相も變らぬ風來山人に、私は腹も立たなかつた。奈良へ行つたのなら、又大阪へ立寄るに違ひ無いと思つて心待ちにしてゐたが、それつきり彼の消息は無くて、既に十年たつた。恐らくは、日本にいゝ仕事を見出さず、亞米利加へ歸つたのであらう。

月日は素晴しい勢で過ぎて行く。我が食卓の人々も、中には御婆さんが多かつたから、夙に死んだのもあるであらう。私は、はからずも若い友達から來た繪葉書に誘はれて、むかしの人の面影を描いて見た。そして、友達には次のやうに返事を認めた。

拜復、ワシントンの楡の木の繪葉書なつかしく存候　小生を記憶するといふお婆さんと中年の紳士が誰なるか是非とも知り度あの人か此の人かと其後のべつに想ひ迷ひ居候　就而雜誌「三田文學」九月號に「食卓の人々」と題する一文を寄稿致候に付不日出市の上は御送り可致候間御一讀被下度其の人々の中の誰と誰に御逢ひなされしか御一報被下候はゞ此の上も無きよろこびに候　（大正十五年八月三日）

後記

本書に收錄した作品は、長篇小說「倫敦の宿」及び作者自ら隨筆と呼ぶ「伊太利亞の女優」他五篇である。悉く先生が大正三年から大正五年までの外遊中に取材された作品である。元來、先生の隨筆は「貝殼追放」に總括すべきではないかといふ意見も出たが、旣に單行本「貝殼追放」の刊行された以後に於ても、これらの作品に「隨筆」の文字を冠し、他の著作集にも收錄されてゐる事實に鑑み、殊に「隨筆」といふ項目をそのまゝ保存する事に、編纂實行委員會に於て決定したのである。

「倫敦の宿」

第一部「英京雜記」は大正十年一月號卽ち復活前の「三田文學」(第十二卷・第一號)から大正十一年六月號まで連載されたものである。大正十一年四月號所載の原稿末尾に「英京雜記は完結の積りでしたが家內に取込が出來て意を果す事が出來ませんでした讀者と編輯擔當者に御詫び致します。作者」と附記されてあるが、續いて二ヶ月後に完結を見た。後、外遊の收穫たる作品集「葡萄酒」(大正十一年十月十八日・東光閣書店發行)に收錄されてゐる。

第二部「都塵」は復活後の昭和七年一月號「三田文學」(第七卷・第一號)から昭和八年四月號まで連載された。

これより先、昭和七年七月長男優藏君出生父となられた先生は、同八年二月明治生命保險株式會社取締役に選ばれ總務主事を兼務し、社務愈々繁忙を極めた中に、書き進められたものである。先生の四十七歳の春であつた。

長篇小說「倫敦の宿」(昭和十年五月二十一日・中央公論社)上梓の砌り、「英京雜記」を第一部とし「都塵」を第二部として一卷とされた。

「伊太利亞の女優」

大正三年十月號「三田文學」に發表。先生留學中に取材した作品集「亞米利加紀念帖」(大正九年七月五日・國文堂書店社發行)に收錄。

「ロバアトソン一世一代」

大正三年十一月號「三田文學」に發表。前記「亞米利加紀念帖」に收錄。

「ファンニイの處女作」

大正四年十月號「三田文學」に發表。「亞米利加紀念帖」に收錄。

「久しぶりに芝居を見るの記」

大正六年一月號「三田文學」に「觀劇雜感」の題名で發表。前揭の題名は傍題で、「亞米利加紀念帖」に收錄の

際、改題されたものである。

「無名會の「夜の潮」」

大正六年二月號「三田文學」に同じく「觀劇雜感」の題名で、前掲を傍題として發表。「亞米利加紀念帖」に收錄。

「食卓の人々」

大正十五年九月號復活「三田文學」(第一卷・第六號)に發表。創作集「月光集」(昭和四年十一月五日・大岡山書店發行)に收錄。

「倫敦の宿」の校訂は原稿を原據とし、その他の作品は掲載雜誌及び單行本を照合した。送假名、措辭の不統一は敢て補正せず、當時の先生の慣用された原形を再現するに努めた。

校正には八木三郎、荻野忠治郎、平松幹夫三君の助力を得た。(和木淸三郎)

東京府規格外許可　巳資紙児第一五四號

昭和十六年十月十五日印刷
昭和十六年十月二十日發行

水上瀧太郎全集　六卷

會費參圓

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

精興社印刷　長澤製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます。お取替致します



